

□定例会 94/02/03 (金) 6:30~8:30PM 於: 建設実務専門学校 (池袋) 601教室
TEL: 03-3590-6311 (笹村)

「左官仕上の可能性」——実践現場からの提言——

講師: 高橋 昌巳 (シティ環境建築設計主宰)

設計者の立場で土物の左官の可能性を実践を通した事例を元にお話しいただけると思います。

「左官教室」に常連の執筆記事は左官への思い入れがよく伝わってくると同時にここまで左官の世界に踏み込んでいる設計者がいたことに驚く。

(世話人: 宮越喜彦)



*** 参考資料 建築知識9412「新・左官仕上げ百科」 日本壁仕上げ編執筆
*** 会費: 1,000円 (年会員以外) *** 出欠を事務局まで TELお願いします。

「集合を意識して造る戸建ての家は」

講師：宮脇檀

どうしたら良い家ができるだろうか。

一生懸命やっても良い家は出来ない。ライトの言葉に「あなたの家族が良い家族だったから、良い家になった」というのがある。良いファミリーでなければ絶対に良い家にはならない。

また、家は一件ではどうしようもない。周りの環境が悪い時に設計者の腕でカバーさせようとしても限界がある。限界に挑戦してみる面白さはあるが限界は限界であり、絶対に日の当たらない所ではやはり何をやっても日は当たらない。明るい家はできたが、日の当たる家はできなかつた。やはり、家は一件ではどうしようもなく、環境という事を一緒に考えていく必要がある。

◎環境をつくる

環境は造られたものである。事実、日本の国土の98%の木は全部我々の先祖が植えた木であり、そういう意味でいくとこの辺りにある木、あの山、全部我々の先祖が手を加えていったものであり、環境というものは造り上げて行きたるものである。

そこで、最初に木を沢山植え、子どもの遊び場を造り、環境とセットで売ったのが大規模な団地である。そして、その次に出て来たのが、建て売りの戸建て住宅。そこで私達も環境をつくる事を考え始めた。まず、最初に考えた事は、[向こう三軒両隣] 6件をちゃんと一緒に配慮する。せめて、向こう三軒ということをカバーし、どんどんその規模を拡大して行かなければ、家というのは良くならないということに気が付いた。

◎デザインサーベイ

日本中の美しい街や集落を見て驚き、こういう美しい街を作りたいと思う。しかし、文献を調べてもあるのは、ヨーロッパの文献ばかり。都市計画をする時に参考にするのは、日本中どこであろうとコルビジェ。

「日本にはこんなに美しい都市があるのにそれは一切ほつといて、どうしてヨーロッパの近代都市計画で日本の街をつくるのだろうか？」それが分からず、日本の街を調べてみようと思ったのがデザインサーベイである。これは、設計をする為の作業であり、美しいと思う街をまず探し、街全体の平面図、立面図、断面図を作成。美しさの訳を探っていく。例えば、倉敷の街は道の先に全部突き当たりがあり、アイストップになっている等。11年で12カ所。その中で分かった事が住宅地を造る時に役立っており、現在の日本の住宅地はかなり問題がある事が分かってきた。

!! !! 黒板をおおいに使いながら、
問題点についての講義が展開 !! !!

◎住宅地をパースで探る

家が出来るまでのプロセスでパースを書いてみた。道路、電柱（いやだけれどしょうがない）、家、外構。すると、電柱がここにあれば良いな、家は軒高を揃えたほうが良いのかな。塀を書いてみると生け垣の中から必ずガレージの屋根等、変なものが出て来る。これらを引っ込めるることはできないか！そこで、道路から最低60cmできれば90～150cmは何か建てさせるのを一切を止めさせて、中間領域（セミパブリック）に。セミパブリックという概念を出して、個人の領域と公の領域両方からデザイン。中間領域には生け垣、シンボルツリーを植え、街路樹の立ち並ぶ美しい緑の道をつくる。さらに、その道を曲げて行く。こうやって敷地の中に木を一本植えていくことによって街路樹ができ、街はだんだん良くなって行った。

◎シークエンス（絵になる風景）

デザインサーベイをした時に気付いた事。集落の美しさは、XとYがきれいに混じっていることである。また、総二階だと圧迫感があるが、

下屋がつくと緩和される。いろんな下屋の付け方をしていくと、かなりいろんな風景が出来てくる。

良い住宅環境とは、美しく、楽しい住宅地である。「美しい」というのは揃うことであり、「楽しい」というのは乱である。何を揃え、何を揃えないかが、日本の住宅地の設計のかなり重要な要素である。

そこで、揃える要素。屋根瓦の色は無彩色、勾配は4～6寸。門灯の高さ。外壁は明度と彩度を指定し、その幅の中で選択。乱の要素。どちらでも良い要素。

私自身まだ結論は出していないが、何を揃え何を揃えないかの境界をどこかに引いて、バランスを取らないと良いものは出てこないのではないか。

◎住宅地をつくる5要素

①造成・・・造成が悪いとまず住宅地は悪い。

②施設・・・施設というと近所に大きなスーパーがあるか、近所に良い病院があるか、良い公園があるかということや、または公共処理施設等がある。これらの施設のなかでただ一つ、我々がふれる事ができるのが電柱。電柱は何とか地下に埋設したいが、埋設するにはコストがかかる為、なかなか無くならない。そこで、電柱引き込みポールを使って4件に1本、二階の家で隠れる高さの低いポールを立て、表からは見え無いように引いて行く。ただし、この場合は管理用道路が60cm必要。また、トランスがついていると車が下まで来れる道が必要である。コモンを持つような場合だと、コモンに一本引き込みポールを立て、そこから埋設していく方法がある。

③道路と周辺・・・直線の道路を曲げたり、道路の表面処理をどうするか。ハンプを付ける等。

④宅地・・・宅地というのは、ここに敷地があって、家がある。この中

にあるものがかなり景観を造っている。カーポートの屋根、物置、洗濯物、ごみ。こういうものがかなり景観を決定している。

⑤住宅・・・何よりも住宅が一番大事で、住宅が良くなれば街は良くなる。イタリア等は外構が良くなくても、木等一本も無くても街が美しい。住宅のデザインの質を高める事である。

+アルファ⑥ソフト（協定や規約）・・・美しくしたものを、なんとか長く維持して行かなければならない。協定や規約の要項はできるならば我々設計者からの押しつけでは無く、住民につくってもらう。様々な規約や、緑化協定、駐車場協定や管理規定等、ソフトまで付けるとこの住宅地はかなり長い間まで建っている。

日本の住宅地が悪いのは、皆悪い住宅地をつくろうと思っているのではなく、皆良い住宅地を知らないだけである。

ここまでやればなかなか良い住宅地ができる。そしてまた、ここまでやらなければいけない。単体の敷地で、単体の住宅ではできない事ではあるが、こういう事ができるということを知り、住宅を設計してゆくとかなり違うと思う。これからは集合を意識して、単体の建物を建てる参考にして頂きたいと思う。

（文責：田島美沙子）

昨年12月8日、松本さんのお世話で、飯田橋の翁菴美術館2階で忘年会が開かれました。吉田先生の個展を先に見てからきた人が多かったようです。約20名、皆、元気そう。今年もどうにか、たくましく闘ってきた人々。まず宮越さんから、酒がまわらないうちにと一年間の報告等が始まり、料理とお酒はちょいとお預け。会費については、定例会の聴講料が500円というのは今時安すぎるのではと岡部さんから意見が出された。また、世話人会だけでなく総会という形で皆が意見を出せる場を設けたらどうかという意見も。会報の作製と発送について…これまで宮越さんや松井さんの事務所の負担が大きかったようです。一部の人の負担が大きいというのは問題で、皆で分担して行くべきということになりました。また、いつも講演会のテープ起こしとまとめを江原幸彦さんがしてくれていますが、これもたいへんな労力です。会のおいしいところだけつまみ食いということは改めるべきですね。次に機関誌の話題になり、「益子さん聞き立て階段で足踏みしているんじゃないかな」などと誰かが言ったが、とうとう益子さん現れず。鈴木さんと吉塚さんも自由学園保存の集まりで来られず。機関誌発行については一時盛り上がった時期もありましたが、これも一部の人に頼っていたのでは話題にならぬ。で、焦らず作るという事になったのでしたっけ？

それからそもそも生活文化同人の活動方針というものについて、はっきりと定義づけをしようという課題が以前からあり、益子さんがたたき台のメモを用意してくれたこともありましたよね。その後私などは、あうんの呼吸というか、わざわざ言葉にしなくても何となく分かり合えるというあいまいな感覚に甘えてきました。この場でも、会の主旨を今一度はっきりさせるべきという意見と、はっきりさせるとかえって弊害もあるのではという反対の意見とが近くで聞こえました。ただ、対外的にこの会を紹介する場合、自分の勝手な説明だけではいけない、この会が単なる親睦会ではなく外へ大いに発信する性格であるのなら、だれにでも分かりやすい言葉を用いて皆の合意をまとめおきたいとも思いますが、皆さんはどう思われますか。

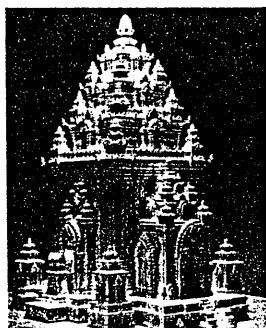
話変わって、飛び入りで忘年会に参加された三澤康彦さんがこの場で新規会員になりました。（一同拍手）。三澤さんは関西在住の建築家で、奥様とMs建築設計事務所を主宰。最近、徳島の林業家和田さんのグループと施工グループと組んでの木造住宅作りを進めています。いろいろな所で顔見知りの人も多い。今後ともよろしく。

お知らせ チャンパ王国の遺跡と文化展

1995年1月12日～1月28日（日曜休み）

ベトナム中部から南部を中心とした古代チャンパ王国は、カンボジアのアンコール、インドネシアのボロブドゥールと並ぶ、東南アジアの古代王朝であり、ヒンドゥー・仏教文化の香り高い寺院遺跡、彫刻を残している。ベトナムは長く戦乱にあったことにより、これまでアンコール、ボロブドゥールと比べてほとんど世界に知られることがありませんでした。このため、遺跡は荒れるにまかせているのが実情です。今回の企画は、世界で初めてこの古代チャンパ王国の遺跡の本格的な紹介と教育のための協力をうつたえるものです。

約100枚の写真・説明パネル、2つの遺跡模型、現在少数民族となるチム族の民族衣装や織物、はた織り機などを中心に展示されます。



主催

実行委員会事務局
財団法人トヨタ財団

交通のご案内

会場：赤坂ツインタワー1F
国際交流フォーラム（旧ラフォーレ赤坂）
港区赤坂2-17-22 電話 03-5562-3891

現代建築や日本の歴史的建築などの展示模型を主に手掛けている私たちにも、アジアのレンガ造の模型は初めてであり、3月、急遽所員とともにベトナムに飛んだ。ミソン遺跡およびチャム彫刻博物館では精巧かつ優美な彫刻建築に感動し、「さて、これらの模型をどのように作ろうか」と現実問題に迷方に暮れた。帰国後、今も現役の師匠、木口雅章先生（83才）に相談にいくと、貴重な文化遺産の模型を作るのなら、石膏模型が相応しいのではと勧められた。

建築模型は現在、機械加工ができるプラスチック製が主流だが、万博以前は手作業の石膏製が一般的だった。陰影だけで表現される石膏模型は時代の要請もなく忘れ去られようとしている。石膏の挽きもの（ブリキで断面形状を雰型に製作し、板に流した石膏をその型板で挽き、形作る手法）は石膏模型の基本であるが、現在日本ではこの技術を持った人はほとんどいない。今回、その第一人者である先生が挽きものを挽いて下さることで私も心強かった。ベトナムの遺跡保存への協力から始まった模型製作が、結果として石膏模型の技術伝承にもつながることになったのは、製作者として嬉しい限りである。

享月

二

豪斤

星月

1994年(平成6年)12月2日

金曜日



建築家
事務所が
事務局を引き
受けた。
長い間、木

國産材、とりわけ杉の木で
の家づくりにこだわる大阪の
建築家と徳島県の林業者のグ
ループが手を結び、「徳島・
木の家づくり協会」を結成し
た。供給ネットワークは、生
産者グループが徳島県林業ク
ラブ青年部(十一人)、設計
者グループが近畿圏の八建築
事務所、施工グループが徳島
側二社と近畿側五社で構成さ
れ、大阪府吹田市の三澤康彦
・文子さん夫婦

妻のM's建築
設計事務所が
事務局を引き
受けた。
長い間、木

購入する杉材を見に出かけ、
六十年生の九十本を決めた。
木材だけの費用は、建築費の
うち約五百七十万円といふ。
「木を育てた人やつくりてく
れる大工さんとも親しくなる
など、つくり手の顔が見えて
安心できる。来年五月の完成
が待ち遠しい」と期待する。

会社員は今年春から三回、
徳島県海部郡海南町の山林へ
工した後、同
県の施工グル
ープが近畿圏
など現地に持
つて行って組み上げ、その後
の工事を近畿圏の施工グル
ープに引き継ぐといふ流れ方
式で家づくりを進める仕組
み。

事務局の三澤康彦さんは
「建築費の目標は坪(三・三
平方メートル)当たり六十五万円。
日本の杉で、日本の大工さん
に伝承されてきた技術で家を

住まい手が実際に山林へ出かけ、使う木材を確かめて購入する。さらに、生産者
の林業家と設計者の建築家、施工者の建築業者の三者がスクランブルを組んで木造住宅
づくりをしようという試みが神戸、京都両市内でも始まった。ネットワークをつく
り、国産材を使っての木造住宅づくりは各地にすでにあるが、住まい手自身が使
木を現地で確かめて家を建てるのは珍しい。

同協会が名付けた「TOTOウ
ッドハウス」(TOTOは徳島と
杉の略)で建築が始まつた二
戸のうち、このほど神戸市西
区で棟上げされた住宅は、会
社員(四〇)が注文した。約二百
四十平方メートルの敷地に、二階建
て延べ床面積約百三十平方
メートル。外構や内装家具などを含
めた総建築費は約四千五百万円。

三澤さんは「丹精込めて育てた杉が
どのように使われるのか、最
後まで見届けて責任を持った
い」と話していた。

同協会の工法の大きな特徴
は、短時間で乾燥させた杉で
はなく、伐採した木に枝葉を
付けたまま、山の斜面に一
三方月間放置して乾燥させて
加工する「薪枯らし材」を使
ひなど。これだと木の肌の色
や良さも強さをより生か
せるという。

育てる人に作る人 「顔が見えて安心」

購入する杉材を見に出かけ、
六十年生の九十本を決めた。
木材だけの費用は、建築費の
うち約五百七十万円といふ。

「木を育てた人やつくりてく
れる大工さんとも親しくなる
など、つくり手の顔が見えて
安心できる。来年五月の完成
が待ち遠しい」と期待する。

伐採され枝葉を付けたまま山
の斜面で乾燥される杉の木!!

三澤さん提供)

・和田さんに材をお願いした住宅が日吉にこれから建設が始まる。

昨年の猛暑のせいで、乾燥状態は良すぎるくらいのこと。(木住研・宮越)

ミヤガン　そのハ　江原久紀

新年明けましておめでとうござります。

師走の過かしも乗り切り、新年となりまし

たぬ。12月中の現場は、みなさんもござんじの

伊香保温泉の伊香保にさよこまして……外界

とお異なり、寒いことに、たら寒いこと、一番寒

い日の朝、ミヤガン屋はおけに水を入れておく

人ですか。この水が10分位氷、たんたんがらび

クリです。それだけではなく砂の上、面かか

り水、こしまり、ミヤガルかささらなく、一

ヶ所穴を開けてかまくらを作り方法で砂をつか

い、ネタであるモルタルをコネ子ぬけです。

ニニシカヌ人は「モルタルは水でぬよ」とい

うことで、「じゃお氷子でしょ」とうです。氷

ま人云々、もういう時は、物未防凍料という

のを入れてネタをミネルと、あり不思議、たゞ

方ハマイナス5度まではネタは氷ですが、塗れ

ます。もちろん陸か乾くまでも氷りません。

ごみが二の前、ネタがコテ板の上で固しまつ。

仕事にならず三時をすませたらしいです。

冬の仕事は大変です。

とまうわけひ新年早々のまいさつをと、軽く書きなましとまうわけで

今年セニヤガニ カニバル を

今日コテ板を新しく作りました
下かニムカシ、ほいでした
かまつして使つて行こうかな

単位：円

第1回 大平建築宿 会計報告

94年 生活文化同人 会計報告

<入金総額> 1,150,000

1 参加費 1,150,000

A 日程 大人 $10,000 \times 68^{\text{人}}$ 680,000

子供 $6,000 \times 1^{\text{人}}$ 6,000

B 日程 大人 $8,000 \times 55^{\text{人}}$ 440,000

日帰り $3,000 \times 8^{\text{人}}$ 24,000

<支出総額> 1,146,334

1 宿泊関係費 937,150

a) 宿泊費 A $4,000 \times 63^{\text{人}}$ 252,000

B $2,000 \times 58^{\text{人}}$ 116,000

b) 燃料費 10,000

c) 飲食費 549,594

d) その他 9,556

2 事務関係費 209,184

a) 事務費 196,586

b) 資料代 7,448

c) 機材レンタル料 5,150

<残 金> 3,666

<収入総額> 869,364

1 前年繰越金 398,290

2 94年収入 471,074

a) 会費 $7,000 \times 31^{\text{人}}$ 217,000

$2,000 \times 8^{\text{人}}$ 16,000

b) 聴講費 47,500

c) 大平建築宿繰入金 3,666

d) かんぱ 181,758

e) その他 5,150

<支出総額> 273,958

1 講師料 116,800

2 通信費 98,342

3 資料代 4,500

4 備品 23,490

5 その他 30,826

<残 金> 595,406

* 残金 3,666円は生活文化同人費に

繰り入れる。

会計 : 小林一元建築設計室 (江原)

■講演会

東京都銘木青年会 2月定例会

『建具について』（仮題）

廣瀬謙二先生

・日時：平成7年2月23日（木） PM6:30集合 7:00開講

・場所：ティアラこうとう大会議室（江東区住吉2-28-36 TEL. 3635-5500）
都営新宿線・住吉駅下車5分

・協賛：東京木材青年クラブ、東京材商青年協議会、新樹会

*特別参加ができます。参加費1,000円位です。（情報：長谷川）

■世話人会報告 12/8 飯田橋「翁蕎麦」にて

1. 定例会々費の変更

95年会費について11月号にお知らせした同人年会員以外の定例会々費を
1,000円／回に1月から変更訂正いたします。

2. 会費未納の方は会費の納入をお願いいたします。

会費未納でも本号（1月号）までは昨年の会員の方に送付いたします。

1. 年会員（会費 7,000 円／年）

2. 会報購読年会員（会費 2,000 円／年）

*会費納入は郵便局にて以下口座にお振り込みお願いします。

総合口座 10010-54101181

生活文化同人代表吉田桂二

*不明な点は事務局にお問い合わせください。

3. 第2回大平建築宿事務局を早期に開設して内容の充実をはかる。事務局への積極的な参加をお願いします。同人事務局までご連絡下さい。

■同人活動

松井郁夫 建築知識12月号：左官仕上げ事例「陽明堂」

□編集局通信

・景気回復を身边に感ずることもなく、新しい1年が始まった。猪の勢いのごとく右上がりの年にしたいと思ったのもつかの間。本号作成中に神戸に大地震が発生した。惨状に驚愕している。ロスとは違い、対岸の出来事でない身近な問題として再認識した方も多いことだろう。被災された方には心よりお見舞い申し上げます。

・編集局が昨年末に移転しました。原稿は下記へお間違えなく。

・会報原稿、企画宜しくお願いします。

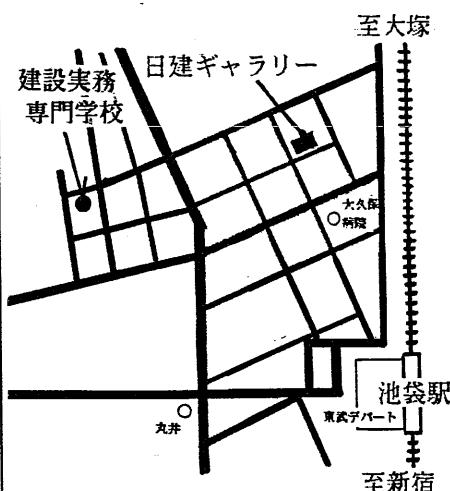
毎号原稿締切：奇数月5日

会報編集局：〒202 保谷市ひばりが丘1-4-25

メゾン・アルプ201

木住研 宮越喜彦

TEL/FAX 0424-25-1333



定例会々場案内図

事務局：〒151 東京都渋谷区代々木4-19-14 ニューハイツ切り通し202号
ATELIER ゆう内 （鈴木久子・吉塚幸雄）
TEL 03-3376-0392 FAX 03-3374-1102

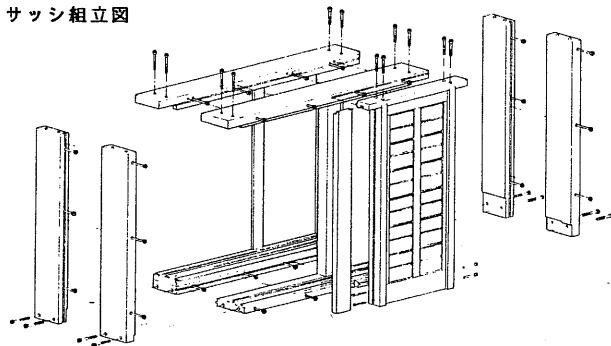
□定例会 95/04/03 (月) 6:30~8:30PM 於: 建設実務専門学校 (池袋) 601教室
TEL:03-3986-3239 (大倉)

「建具にかける情熱」

—加茂サッシ・開発までのいきさつと今後の展望—

講師: 田辺貞一 (加茂建具協同組合理事長)

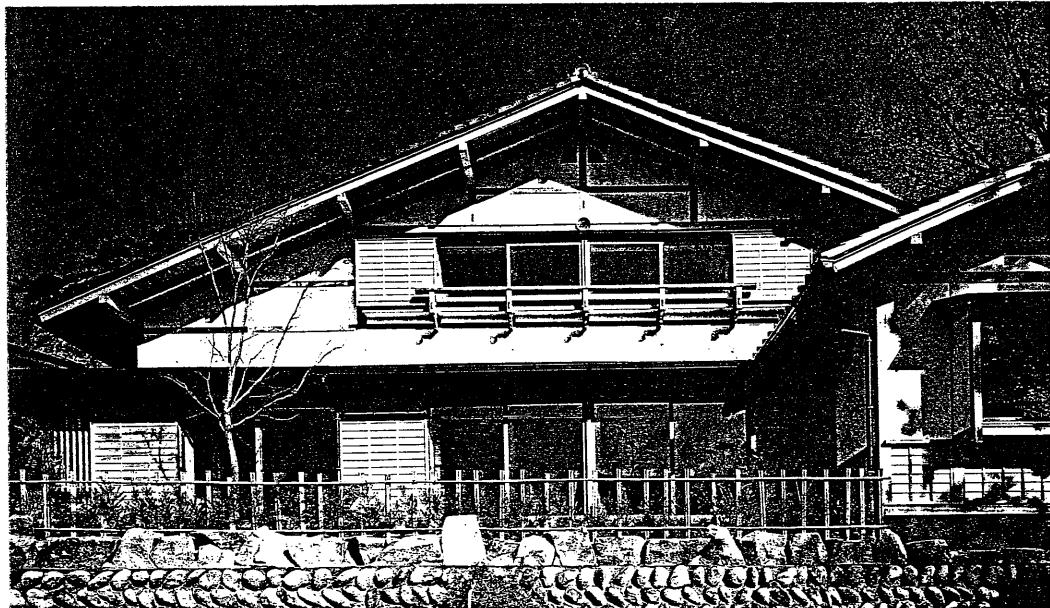
全開サッシ組立図



新潟県加茂市は伝統的な木工のまち。建具産地としても古くから有名だが、先細りの傾向の中で職人の生き残りをかけて開発した製品が、木製建具「加茂サッシ」。

今回は「加茂サッシ」の話を中心に修業時代の話やこんな設計者は困るといった話など、面白いお話を伺えると思います。

(世話人: 松本昌義)



*** 会費: 1,000円 (年会員以外) *** 出欠を事務局まで TELお願いします。

講師 高橋 昌巳

(シティ環境建築設計)

『時間的な軸で考えたときの今の建築づくり、家づくりとは』

1 土佐漆喰というローカルな材料や技術を現代に活かす

高知県室戸周辺の民家は、毎年台風がとおり、下から横から雨が降るので外壁は土佐漆喰に水切り瓦が何段も入っている。そして土佐市周辺では外壁だけでなく、塀にも土佐漆喰が使われていたり、鉄筋コンクリートの外壁にも塗られたりと関東の商品的住宅を見慣れた目で見ると「ここまで手をかけた住宅が作られている」ということが新鮮で驚きを感じる。

下見板張りのような『鎧仕上げ』というのも土佐漆喰を使った標準的な納まりだ。この納まりの良いところは、水が各段で切れ、クラックが入るとしても各鎧の水平方向に入るのことだ。この部分は伝統的に『ワラすさ』や漆喰が濃く入り、丈夫に作られていて、「デザイン的にもスマートで現代風だ」ということで「土佐漆喰を使う大壁の外壁ではスタンダードではないか」と思い、東京都練馬区の現場で土佐漆喰鎧仕上げをやって見る。

〈土佐漆喰鎧仕上げ〉

下塗り：構造用合板+ラスモルタル

中塗り：土佐漆喰の『はんだ』（土佐漆喰と中塗り土を半々に合わせたもの）

仕上げ：土佐漆喰鎧仕上げ

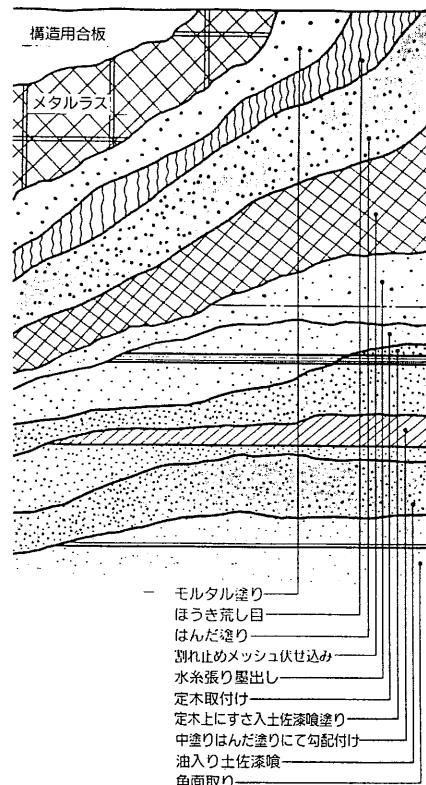
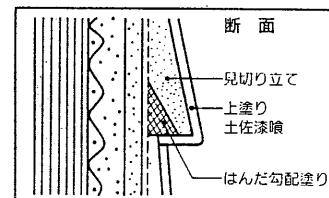
- ・下塗り ラスモルタルの上に軽量モルタル
ポイントーラスモルタルと軽量モルタル
の間に『ほうきびき』をする

・中塗り～仕上げ

- ① ピッチを決めスミをだし、『定木』をおこす
- ② 『定木』の上に土佐漆喰に『わらを混ぜたもの』を三角形に練り付ける

(工程のなかで一番大切な作業)

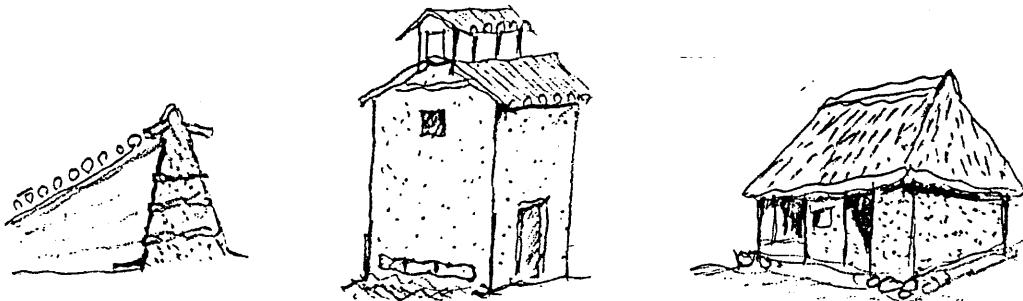
- ③ ひとつ上の段の『定木』にむけて斜めに中塗りをする
(『はんだ』を塗る)
- ④ 中塗りが終わると『定木』をはずす
(上塗りの下地のできあがり)
- ⑤ 仕上げの土佐漆喰を塗る
(このときは金コテ仕上げ)



2 地場の色土を地域の色彩作りにいかす

愛媛県北条市で住宅を設計することになる。農村型の集落がまとまりをもった美しさを保っている環境の中で、「東京の人間に愛媛県で何ができるか」と感じ、「まずは愛媛県の、地域の特色を見極めないと手も足もでないで、地元の人達（職人さんたち）の協力の得られないだろうし、仲間にも入れないのでないか」と、県内を歩いてみた。

切り通しの黄土や赤土の色、鮮やかな山吹色の土塀、経年変化による味わい深い壁、独特的の形態のタバコの乾燥小屋、北側以外塗り込められた民家、内子町の薄黄色の町並み、崩れ掛けた漆喰の中からのぞく色鮮やかな中塗りなど見ていくうちに、「地域に蓄積された色彩を建物に活かせないものだろうか」と思い、建主と共に地場の色土を再現することにした。



〈左官の仕上げ材料を作る〉

- ① 採土所に行って原土を取りにいく
(今回は黄土、赤土)
- ② シートの上に原土をひろげ、天日乾燥させる
(水にとける程の粉になるまで何日も干す)
- ③ 石臼で乾燥させた材料（色土）をひく
(今はほとんど行わないが、この作業をすると粒子が細かくなり、塗りやすくなる)
- ④ ふるいで粒子をそろえる
- ⑤ ③④を繰り返す
- ⑥ 各種砂、『すさ』、『糊』を様々な配合で混ぜ、塗り見本を作る (1か月程様子を見る)
- ⑦ 調べた配合比率どうりの材料を水と練り、壁に塗る



普段、街中で仕事をしていると「工程の美しさを愛する」ということは時間がなくできないが、「建物を造る1つ1つの過程それぞれに色々な思が含まれ、一瞬一瞬がきれいだ」ということを感じられたのが、この建物に携わっていて、とても幸せなことだった。10年位たって、どのように『経年変化』しているか楽しみだ。

3 土蔵や土壁の家の機能を家造りに活かす

関東の土『荒木田土』を使って川越市にて土壁の住宅を建ててみる。

- ・『荒木田土』と『ワラすさ』を捏ねて『ねかせておけ』というのは、土は変化しないが『ワラすさ』が変化して、塗りやすくなるという意味なのではないか
- ・『荒木田土』の色（灰色）をみて、地域性を愛媛県の土の色と比べて感じる
- ・小舞の搔き方にも関東と関西で貫の位置が違う
- ・小舞のピッチは指に入る範囲
- ・両面真壁にする場合、貫の厚さが問題
- ・貫側は塗り厚が薄いので、『ワラ』や『シュロ』をブリッジに掛けて、割れないように補強するなど、幾つか失敗もしながら現場で学んだ。

超過密住宅地において、「機械にあまり頼らず健康的な生活をしたい」ということで、川越市と練馬区の住宅で『置き屋根形式』の住宅を建ててみる。化粧野地板の上に『杉皮』をのせ、『泥止めの棟』を打ち、『荒木田土』をのせた。耐火を考えると問題はないが、『荒木田土』では重すぎると感じた。後日の実験で、瓦と野地板の表面温度は『荒木田土』天端と野地板間の空気層の厚み（今回は5mm程度）で1~2度違い、同厚のスタイロフォームと同等以上の断熱効果が確認できた。土間では、健康的で調湿もできるように『にがり』と『山砂』を1:1の割合で混ぜ合せ、『叩き』としてみた。

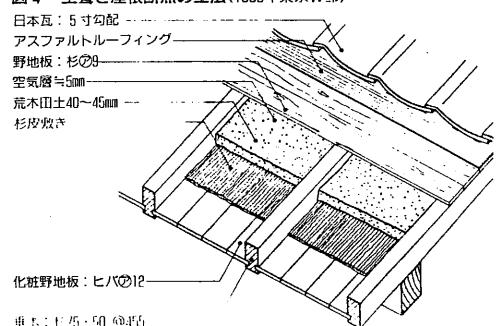
今でも何軒かの住宅で温度と湿度を記録し調査している。土佐漆喰で仕上げる現場も4月頃にあり、『土葺き』も、もう少し成果を上げ、現代の生活スタイルに活かす方法として、完成の方向へ持っていくたい。「土壁の家や土蔵は本当に涼しいのか」まだ追求は続く。

参考図書 『建築知識』 1994. 12

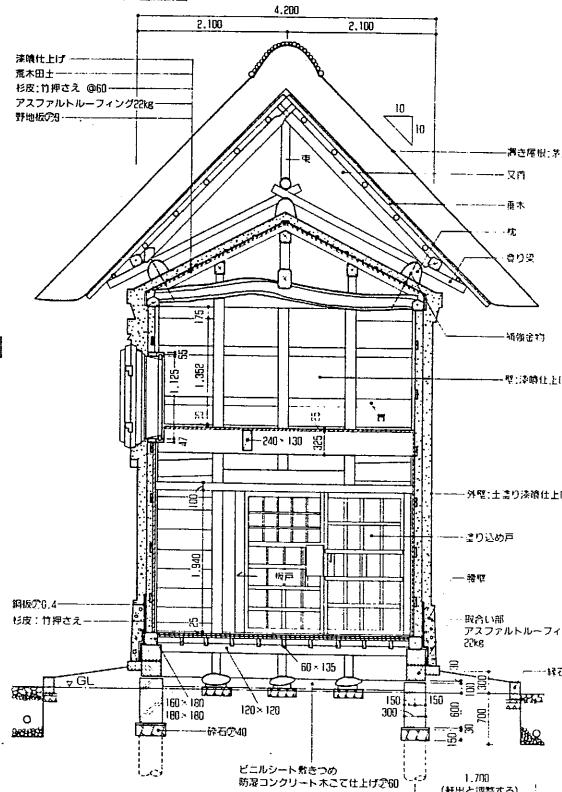
まとめ 江原由紀子
江原 久紀

土葺き屋根工法

図4 土葺き屋根断熱の工法(1993年東京W部)



置き屋根形式の土蔵断面



COMINET LIVE

Communication Network for Live

阪神・淡路大震災の被災状況調査の様子を松井郁夫建築設計事務所発行の COMINET・LIVE より転載させてもらいました。

ドキュメント

2月17日(金)アカンサス建築工房の益子氏より、(財)日本ナショナルトラスト(以下ナショトラ)の震災調査参加に誘われる。震災直後より被災地に入るのならばボランティアでと考えていたが、歴史的な町並みや、古い民家の被害状況も気になる。

2月18日(土)ナショトラの山本さんより正式に要請あり。スケジュール送られる。午後、木造フォラムの講習会にて東大の坂本教授より震災状況の報告を聞く。「伝統工法をとるか安全性をとるか?」の問い合わせ有り。結論じみた話はまだ早いし、二元論でもない。

2月19日(日)建築知識編集室の「震災関連緊急座談会」傍聴。耐震設計の技術と伝統工法の耐震性が話題になる。被災地での伝統工法の耐震解析が必要との印象を持つ。座談会出席者、稻山正弘氏の理論が大変参考になった。

2月21日(火)早朝、東京発。メンバー千葉大の福川裕一先生とナショトラの山本玲子さんと、私の三人。益子氏は都合で参加できなかった。新幹線の中で被災地の訪問スケジュール打合わせ。昨日までの話しが気を重くしている。「日本の伝統工法は地震に弱いのか?在来工法はどんな被害を受けているのだろうか。」大阪着。ホテルに荷物を置いて出発。

阪急電鉄宝塚線にて売布神社に向かう。最初の訪問地は小浜。車中、青いシートをかぶった家々が見える。瓦が落ちている。売布神社駅前に着いてまもなく半壊した家に出くわす。屋根が落ちている。戦前か戦後間もない建物。中国自動車道の高架下では応急工事をしている。危険。谷深い川を渡ったあたりから古い町並みが現れる。のっけから古い民家がやられている。屋根が落ちて半壊。家人は避難している模様。隣に健全

な民家あり。最近改修した様子。壁にひび割れ程度。しばらく進むと全壊の家あり。片付けている。途中「町並を守る会」発行の絵葉書を売る店で話を聞く。かつて、地元で町並運動の活動が盛んだったと言う、最近では宝塚市が保存に力をいれ始めた矢先だった。残念。この町で被害を受けているのは、古い民家ばかり。傾いて残っている家も数件。門前町の中心、豪摶寺も被害にあって、山門全壊。本堂傾斜したまま。新しい資料館は、改修したところは無事。古い建物は全壊。国道に下りて気が付いた、震災前の小浜は坂の上の別世界だったにちがいない。宝塚から伊丹へ。

JR伊丹駅前は不思議な街。城の石垣の向こうに再開発ビルが建つ。その足元に酒蔵の古い町が続く。ここでも、古い町家に被害あり瓦が落ちたり壁が落ちたり。小西酒造の酒蔵長寿蔵は、外部から見たところ無事。重文、岡田家軸部傾斜、西面壁崩落、屋根瓦落下、工事中。公開前の準備中であったと言う。

JR尼崎から車で築地町へ、築地は埋立地に開けた城下町。町の中心、初島神社に着いて驚いた。道路はうねり、電柱は傾き、神社の鳥居も今にも倒れそうだ。特に境内はすごい、拝殿は屋根を残してぺしゃんこに崩壊。本殿は地盤ごと陥没、傾斜。地面が掘れている。本殿を囲っていた板塀は、基礎から外れて30センチ程飛んでいる。境内にある石碑や社は、前後左右に規則性もなく傾いている。平衡感覚をなくしそう。町の中の建物は、古いものも新しいものも同じように被害にあっている。やはり埋立地のせいだろうか、うねった道路のいたるところに砂の塊がある。液状化現象であろう。不思議と全壊した建物はなかった。

続いて寺町まで歩いた。寺町は最近、舗装をきれいにした様子。塀の一部がすっかりなくなっている寺あり。重文、長遠寺多宝塔が心配であったが、見た目には漆喰壁の亀裂くらいの被害にしか見えない。築地町に比べれば寺町は被害が少ない。予定していた調査地はここまでだったが、福川先生の提案で、神戸の被災地ま

で足を延ばしてみる。夕闇のなか、阪神電鉄に乗って御影まで。車内から、たそがれ時の被災地が見える。青いシートが川を渡り西に行くごとに、増えていく。芦屋を過ぎて青木あたりから、二階が一階を押しつぶしてペしやんこになった家が現れた。ウッと息を呑んだが、電車の中の地元の人達は平静、こちらは、ただ目を凝らすばかり。電車は御影駅まで、ここから先は、バスで行くか、他の路線に乗り換えるため全員が降りる。私たちも降りて阪急電鉄まで歩く。地元の人達が黙々と歩く中、薄暗い住宅街に家の灯が見える。TVや新聞で何度も見た光景が闇の中に見える。倒壊して道路まであふれた家々、傾いたビル等。三人とも言葉をなくしてホテルに戻る。

2月22日(水)今日は大阪のナショトラのメンバーの方達と灘、三宮周辺、北野を調べる事になっている。大阪駅でナショトラの米山氏と合流。西宮で明石高専の八木氏に合流。魚崎で大阪BOXの岡田氏、会員の増田氏、住田さんに合流。徒步で駅前の商店街を抜けで灘五郷の酒蔵群を見る。途中商店街のアーケイド内に倒壊した店舗あり。花が添えられていた。合掌。被害を受けている住宅街の中も歩く。来る前の講習会で見た建物の被害状況に似た建物に出会う。なるほど、東京で言われている被災建物の構造上の欠陥、筋違がない、基礎が無筋であるものが、被害を受けている。しかも老朽化した建物が多い。

酒蔵の被害も深刻で、大きな木造の蔵で、歴史のあるものはほとんど残っていないという。私たちが目にしたのは後かたづけのすんだ場内に並べられた酒樽だった。白鹿酒造博物館のレンガ蔵も被害が大きかった。第二阪神国道沿いの新しいレンガ蔵は、全壊、跡形もない。壁の厚みが、50センチもあったのに。その裏のレンガ蔵は更に古いと思われるが屋根が落ちて半壊。レンガの壁は残っている。足元を見ると深く石の基礎が見える。その奥には洋風の迎賓館が倒れないで建っている。白いバルコニーの御影石の柱がずれてい

る程度。一見華奢にみえる洋館だが、残ってよかった。付近には塗込めの邸宅や、中規模の蔵も残っている。昼食を神戸の都市計画事務所、コープランでとる事になって御影駅前でパンを買い出し。車で灘区楠丘町へ、途中、石屋川公園でテント村を横切る。目的地の辻に、コープランの天川さんが出迎え。辻で車が止まった途端に驚いた。辻は坂の上で回りがよく見える。目指す事務所の建物は坂の途中に見えるが、回りの家々はべたっと、つぶれて瓦礫が路上に覆い被さっている。コンクリートの事務所だけが残った様に見える。とりあえず事務所の中へ。昼食をとりながら天川さんから、当時の模様を聞く。この辻りが特に被害が大きく残っている家は二三割ではないか。代表の小林氏は来客中で忙しそう。神戸市の再建復興計画「まちづくりニュース」を見せてもらう。震災の教訓を生かし、生活文化に根差した、人間味のあふれる計画である事を望む。もう一度被災した町に出て、六甲、王子公園、灘経由で三の宮の神戸市役所を目指す。

JR三の宮の駅舎は一見被害が無いように見える。外に出るとデパートや業務ビルがひび割れて壁が落ちている。市役所旧館は、つぶれている六階部分の外から荷物の搬出が行われていた。超高層の新館が無事なのと対照的な光景である。新館の玄関ホールに入ってきた言葉を失った。狭いホールに一杯段ボールの垣根が出来ていて、中には人がいる。赤ん坊が泣いている。すぐそばを役所の関係者が忙しく通り過ぎる。ここは、被災地なのだと思い知らされる。住宅局復興計画室の浜田氏をたずねた。氏は、長く文化財の修復にかかわってこられ、今回の震災には心をいためておられる。復興計画室の仕事で忙しい氏は「復興には安全性と文化性の両方が大切」と言う。神戸が神戸らしく復興するには、歴史の記憶を抜きには考えられないという事だろう。貴重な話をいただき、旧居留地に向かう、途中被害にあったビルを揚げたらきりがない、一番ショックを受けたのは昨年改修を終えたばかりの十五

番館の全壊現場である。木造の洋館建築が今は基礎を残すのみに片付けられていた。石の列柱が美しかったと言う第一觀銀のビルは全壊。モダニズムの建物が多い旧居留地にあってひときわ引き立っていたという。八木氏に案内されて、設計事務所にお邪魔する。ここでも代表の有村さんから、神戸復興にかける意気込みや貴重な意見をいただく。一同、車で北野に移動。

北野は異人館の街、ウロコ壁の家と、風見鶏の家が心配であった。いつもは賑やかであろう丘の上の観光地もほとんどの店が閉めている。盜難予防の貼り紙が目につく。ウロコ壁の家は、足場が掛かっていてよく見えない。風見鶏の家を外から見た。庭にレンガの煙突らしきもの、屋根は一部シートが掛けっていた。両方人気がなく、中には入れなかった。夜ホテルで打ち合わせ。被災した教え子、久保さんにも会う。元氣で、西宮市役所に出向中、被災時の話を聞く。悲惨。

2月23日(木)大阪で、ナショトヲ理事長山岡氏と合流。貝塚市に直行。社会教育課の前田氏の案内で、回船問屋「広海家」視察。台所の小屋組の素晴らしい町家。母屋、屋根瓦一部落下、軸部傾斜、壁ひび割れ。蔵、壁土崩落、修理中。奥様によれば、これを機会に母屋の寄贈を考えていらしやるとのこと。その足で貝塚市を訪ね、市長に面会。支援方針を聞く。

関西空港から船で淡路島。津名経由、江井市役所教育委員会へ担当の方と、回船問屋「住田家」を視察。

「住田家」は、港に面して建つ回船問屋の遺構を良く残している。港と建物の一体感が素晴らしい。しかし、被災状況は深刻である。脇門全壊、母屋、台所屋根崩落、奥座敷屋根、天井崩落、壁亀裂多数。塩蔵半壊。茶室軸部傾斜。納屋、礎石陥没のため軸部破損傾斜、危険。その他の蔵階段石割れる。荷捌き庭地割れ。

見れなかつた部分も含めて再度調査の必要あり。全面修復にはかなりの費用が掛かると思われる。最後に江井の港が見下ろせる丘の上に登って、調査団一同、歴史文化復興の大切さを確認して、淡路を後にした。

松井 郁夫

押入の裏位のものだ。押入の裏は筋かいも入れるし、ポートもしめられる。然しそんなことで家は耐震にはなりません。頭痛骨で慢性胃弱が治るものか。

しない方がよいのだ。

私の借りてる家が地震で壁が落ちたり割れたりした。家を直すのに私は次の方法を大屋さんに語った。

柱の一列に通つて主要な仕切りの線を通じて廊下を打通しになるだけ建物の全幅に亘つてその長押上の小壁の部分を少し削り取つた上床板で張りつめる。削るのは壁をあまり出張らぬ様にする為、削らぬなら削らなくともよい。柱は削る為ためにそれほど弱められないと、そして弱められても一面の板張が夫を補つて余りある。米松材の長いもの程よい。柱の頭は一様にそれで堅められる。それから又床下で同じ事をする小壁はその上に塗り上げるか、紙で張るか何れでもよい。

こうすると長押の上には柱も、床も見えない。一聯の小壁になる。(欄間のあいてる所は、その上と下とに前述の方法をする)

一体、日本間を見苦しくするのは長押上の柱の部分と鶴居を吊つてる束である。あの為めに日本間は大へんせよこましく、うるさく落ちつかなく、下品になつてゐる。それがなくなると同じ部屋が見違える様によくなつて上品になる。半信半疑で始めた大屋さんもその効果に驚いてる程。(國參照) それから、同じ様な方法で、床下で柱の根をつないで堅める。

この方法は、日本建築の群立した柱この立体的に群立した柱を単に二つの柱への間の四角形に区切つた平面として考へ、その安定不安定によつて建築の構造を律せんとする(先月号佐藤博士所説)のが押も誤解である)をその頭脚の二部で、一聯に全体として堅める。個々の柱はその頭脚を押さえられて、動かなくなる。丁度、箱に近いものになる。立体

的にかたまる。これを垂めることは容易な力で出来ることでない。垂まなくなるのだ。

一休屋根が重いから潰れるといふのは、振動を強くするといふ事もあるが、その為に柱が多小歪んだ時、その垂直の荷重に堪えられなくなる為めであるから、垂みが無くなれば潰れられないのだ。(屋根は重いなら重いでかまわぬと私は地震後十月号にいこう等)

その上に、施工の方法が簡単である。柱の正面に釘付けにするのだから手軽で確実である。(數本の釘はつねに一本のかすがい又はポートより強くして確実である)

そして、この固められた柱の中央は即ち吹き通しだ。そこに障子を入れるとよい。襖にするもよい。硝子戸にするもよい。雨戸にするもよい。さもなくば壁にする。その壁も襖や障子を入れると同じ考え方にして、徒らに強める工夫をしない方がよい。壁を強めようと押さえて置くがよい。

そして、柱其自身が一体に堅まつて居れば、桁は只その上に屋根を載せて安座して居て差支ない。

接合部が弱いというのは柱が各自独立して居る時の心配で、一体となつて居る柱にはその心配はあり得ない。従つて一般に唱えられる頬杖や、堤やの桁と柱との連絡を目的としたものは全然その必要を見ないばかりか此等より遙かに確実で安全である。そして従つてボートもなくてすむ。ここで始めて一貫した日本建築の構造論が成立すると云うべきである。手軽で、従つて経済的で、丈夫で確実で、建築が有機的になって善いものになる。その上に頬杖ポート筋かい等が自然消滅する。一挙両得、三得、四得でもあるのだ。

因だ、地震でゆるんだり曲つたりした家を修理することを、元の様にすることゝ思うて居るが、あれは一番いけない。

私が原稿をかいてる。見あやまられそうな字をつくろつて見ると却つて分らなくなる。それは誰でも日常経験してゐる所で建築の修理にも同じ事がある。仕事に無理があつて能率が上らない。そんな時は別な方面から別な方法を運らし確実に固める方法を探るのが一番肝要である。

修理を機として思はぬ改良を成就し得るものである。建築の修理といふことにも、單なる、復旧埋め合せ膏薬貼りでなしに、立派な有り難い建設的な意義があるのを見発見せらるゝであろう。

それは單なる建築上の發見でなしに、直ちに人生上の發見である。そういう意味で貴女方の曲つた家を眺めて考えて頂きたい。

こゝに述べた事は日本建築の實際としての一面に對して、その方法を考えたばかりだ。今は、見渡す所バラック、そのバラックを御覧下さい。

法外な頬杖や、鉛やポートや筋かいが、乱用されてる。困つたものだ。バラックにすらこんな風であるから、本建築になつたらどんな事をするだろう。

私が、震後の建築が、必ず悪くなることを今日断言して居るのは理由なくしてではない。建物がまるで阿古屋みたいに頬杖貰めポート貢、筋かい貢、ありとある所謂耐震實に遇つて、それでうまく白状するかというくつとも白状して與れない。

建物だつて阿古屋だ。自然に、樂に、素直につくつて行けばよいのだ。そしたら安くて、丈夫で、而も正しい美しいものが仕上るので。

筋かいボート不適当

灘美の地震のあった後、世間は一齊に耐震構造に腐心したらしい。帝大の建築学教室には、その時分出来たものか、如何かは知らぬが耐震構造というものの模型があった。それは、いかな景況も破れそうもない格子に組んだ建物であった。——耐震として適不適はとにかく耐阿古屋だけは首肯されそうな。

然し吾々は景清程の悪七兵衛でもなく、従つて、景清程不幸でもなかつた。(尤も、西洋建築それに特に此頃の利いた風の文化住宅などといふ類はまず牢であるが)そこで入れられたものは、筋かいとポートの家だ。これほど不都合なものもない。

然し地震に恐れを為してゐる人達はこんな風に納得した。「一体日本の家は開けひろげ過ぎる。壁にしよう。こゝに筋かいだ、あそこにポートだ。これで安心して寝られる」と。所が六月はまだよい、七月になった、八月が来た。寝られる家が寝られないのだ、蒸し暑いのだ。

地震のはとぼりのある中は我慢もした。然し一年とたち二年となつて、筋かいとポートはだん／＼形をひそめた。日本建築元の木阿弥、そして大正十二年九月の一日前、あの地震た。

世間は、またうろたえた。そしてそこでもこゝでも耐震構造の御談義だ。所で何といふかと思えば、博士から棟梁、出入の大工さんまで筋かいだ。ポートだと同じことをいうておる。地震だけ進歩して、世間はちっとも進歩して居ない。御説に従つてまた数年暑苦しめ目を辛抱するか。そしてまたやめて仕舞うか。

所で、そのやめるといふのは、実際、地震のはとぼりのなくなつた健忘性のためではない、事実、これは日本建築に不適当な方法なのだ。やめるしかないのだ。

その不適当な理由はどうか。

一体、日本建築は、説明するまでもない屋根と柱の家だ。開け放しの吹き抜けだ。その柱と柱との間に障子がはまつて居り、雨戸が入つて居り、襖が入つて居り、硝子戸が立つております。そして偶々薄い壁が思い出した位ついてる。

筋かいといふのはこの思い出した程しかない壁の所にしかつけられないのだ。それで日本全体が強まりつこはない、筋かいを用いるというのが無理だ。

「それでも少なくともそこだけは強くなるではないか」と、その通り。然し建物の一部分だけが強いといふ事は、却つてよくない。世話に所謂「不釣り合いは不縁のもと」で、

不均衡は不健全である。外の部分が弱められるか、強い打撃を受けるかに終る。車やの脚は少しも健康のしるしちゃない。

そしてよし、何程かの効力があるとしても、筋かいを入れるという事は簡単の様で而倒な方法である。特に新築の場合でなければ壁をすっかり落さなければならぬ。落した上で、柱に切りこまなければならぬ。柱と柱との間でする仕事故厄介である。そして両方の柱だけは何とか堅めるが、その隣りは少しも強まらない。其上地震になると、この筋かいが薄い日本壁の中で暴れる西洋建築では間柱が沢山あってそれに「一針づけになるから暴れようがない」。それに西洋建築には筋かいの役目をして居るものが沢山あって、わざ／＼するまでもない。そして壁土をふるい落す。丸で前門の虎に対する後門の狼だ。そこで柱と柱の間なれば、針金で十文字にしめつけ塗りこめた方が寧ろこの心配がなくてよい。

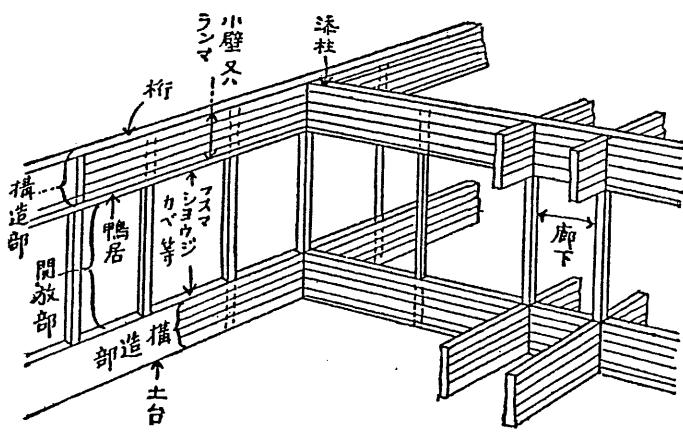
それから筋かいは、四十五度の場合に最も有効になる。鴨居上の狭い所にひしやげた筋かいを入れるのは手数だけで、効力は少しもない。

地震当時の間に合せに所賺わず十文字に筋かいを打つた家がよくある。あれは、柱の外面から打つので、一面に何所でもやつてのだからあれば簡単で

却て堅まりはよい。あれが正式に出来ればよいのだが、とても出来ない相談である。

要するに日本建築の本性と根本的に適着を持つて居るのだ。如何しても、何か別な方法を発見しなければならない。容易で、丈夫で、そして善くなる様だ。

それから桁と柱との離き目を強めるために、煙を四十五度に入れポートでしめるという。一体日本建築の何所にそれをしろというのか。日本建築では、相憎みんな、小壁か欄間かになって居て、この力学的第一頁に書いてある様なことは遺憾ながら実行出来ないので、出来るのは、あつてもせいく



図は大体の骨組を示す。床は取りのけてあるものと見做す。

阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）の報告

阪神大震災の発生から早くも2カ月が過ぎた。被災された人にはどんな時間が経過しているのだろう。まだ人としての生活を営むことができないこの無念さと憤りが伝えられる。

地震が起きた時はたまたま京都に滞在していた。速報では京都が最も大きい震度5を示し、神戸は何も表示されていなかった。震源が神戸に近いところであるとのみ、伝えた。その日の午後に東灘区に住む弟を訪ねる予定だった。その弟と、発生から9時間後によく連絡がとれ、住んでいるRC造のマンションは傾いた程度の損傷で、本人は全く無事でいるのが確認できたので一安心した。しかし、帰途につく間に小耳に挟む情報では犠牲者の数が一桁ずつ増えていくので、微熱気味であったことも手伝い、あまり現実感がなかった。

刻々伝えるテレビの映像は木造住宅の崩壊の凄まじさを人々に印象づけた。かつて見ことのある建物の崩壊の写真とは様子が全く違っていた。

このままではもう神戸に木造住宅は建たないだろうと思った。そして、在来木造の危機がくるという予感がした。

北海道南西沖地震で奥尻島が津波の被害にあったときに何もしなかった後ろめたさもあり、とにかく、現地を見てみないとこのあとに何の行動も起こせないと思い、2週間後に救援物資を背負い、神戸に向かった。弟に現地の様子を聞き、時間の許す限り廻った。実際に被害の様子を目当たりすると言葉を失い、唯々夢であってほしいと願うばかりだ。崩れた家に供えられた花や永眠を知らせる張り紙を目にした。

5千を越す尊い命はその家とその街をつくった社会に反省を求め、多くのことを訴えかけていると思う。

今なお20万人以上の人々が避難所生活を強いられ、毎回同じメニューの冷たい食事をしている。ボランティアの数も減り、炊き出しも十分に行われていない。機会あるごとに募金を行い、向こう5年間は援助を継続する必要があるだろう。

被災した人も生活のために仕事を再開しているが、現地ではとりあえず日常の生活を維持していくものしか売れないらしい。語弊があるかもしれないが、復旧の妨げにならない方法で、現地の被害の実態を体験しながらお金を落とすことをしてもいいと思う。

継続的に阪神大震災にかかわりながら、これから間近に迫る震災に備え、家づくり町づくりをしたいと考えている。

以下に東灘区、芦屋市を2日間廻って思ったことを列挙するので参考にしてほしい。

〈木造について〉

- ・崩壊している民家は、81年の法改正で必要軸組量の強化、基礎の強化が図られる以前のものがほとんどであり、とくに戦後まもなく建てられたとみられる壁の少ない家の倒壊が目立つ。1階が潰れ、2階がそのままの姿で残っているものが多い。倒壊している家々のなかにプレハブ、3階建、ツーバイフォーの建物が無傷に近い状態で残っているのが印象的である。
- ・木造2階建の共同住宅は梁間方向に潰れたものが多い。
- ・基礎は無筋コンクリート、レンガ積み、ブロック積みのものがあり、それらは折れたり、砕けたりしている。
- ・布基礎を外周だけにまわしているもので不等沈下を起こし、折れている場合がある。布基礎で囲う面積をなるべく小さくする方がいい。

- ・土台はアンカーボルトで固定していないもの、腐朽しているもの、枘で砕かれているものが見られた。水廻りの基礎は立ち上げ、防湿に心掛ける。
- ・耐力壁が不足しているために応力が通し柱に集中し、胴差の下端のレベルで折れている場合が多い。管柱と同寸の四隅の通し柱は耐力はなく、納まりとしてあるので、耐力を期待する場合にはもっと太くし、四隅以外にも設ける必要があるのではないか。
- ・柱の根枘が短く、土台から抜けている場合が多い。土台と柱は込み栓で緊結するか、金物で緊結する。カスガイより金物の方が効く。
- ・土台は耐久性のある樹種を用い、土台、柱を定期的に点検できるようにする。真壁構法はその意味でも有効である。
- ・筋違は三つ割のものは圧縮力がかかり折れている。引張り力がかかったところは釘が抜けている。筋違は圧縮に効かせ、逆目釘かスクリュウ釘またはプレートで固定する方がよいのではないか。釘は剪断力で効く。
- ・軸組のつくりかた、耐力壁のとりかたなどの工夫により、応力を集中させないようにする。
- ・外壁のモルタルは剥落している場合が多く、ラスの固定には今後改善が必要である。地震のときにはモルタルが剥落し、木摺に火が燃え移る。
- ・ラスカット合板にモルタルをつけただけでは剥落する。
- ・小屋組だけが崩壊している場合があり、小屋組も筋違、貫などで固定する。
- ・屋根は土葺きの瓦葺きがほとんどで、ずれや落下がみられる。トントン葺きの場合は部屋のなかに瓦が落ちている。瓦を細かいピッチで銅線で固定する必要がある。
- ・同じ場所に建っていた社寺建築で銅板葺きのものは残り、瓦葺きのものは潰れている。
- ・瓦葺きの門で水平、鉛直方向ともにアングルで補強してあったものは残っている。
 - 〈その他の構造物について〉
- ・既存のコンクリートブロック造、組積造の塀は倒壊防止の補強をし、新設は禁止する。
- ・R C 造の塀は基礎から直接鉄筋を通して、後付けアンカーによる方法はとらない。鉄筋の腐食に対して配慮する。
- ・石灯籠、玉垣、石造の鳥居は倒壊するので、補強する必要がある。
- ・トランクをのせた電柱の倒壊に気をつける。
- ・耐火建築物のフラッシュオーバーによる延焼に対する検討が必要である。
 - 〈防災準備について〉
- ・家具は必ず固定する。特に冷蔵庫、テレビの転倒に備える。開き戸の固定にはヨット用の止め金具を使う。
- ・ガラスに飛散防止フィルムを貼る。
- ・震災時を想定し、ライフラインの確保をする。
- ・既存の木造住宅について、各自治体でだしている耐震診断マニュアルに従い診断し、必要であれば補強する。
- ・増築をするときには必ず壁量を計算し、構造を強化する。

『大地動乱の時代』石橋克彦著で予告されているように東海大地震を控え、いまもっとも憂慮されるのは既存の建物の耐震性をいかに向上させるかということだろう。また一方で今度の地震で残った古建築がかなりあり、壊れたものばかりでなく、残ったものも研究し、基準法に反映されるとよいと思う。足元を固定したがために倒壊したと思えるもののがいくつかあり、後藤一雄先生の説の「足元を固定せずに跳びあるく」木造の免震効果を期待することもできると思う。これを機会に木構造の研究が進み、さらに発展することを願う。

■ 40日後の被災地を見て

宮越喜彦

年が明け1月17日早朝の兵庫県南部地震の発生は、建築に携わる自分にとって過去に経験したことのない大きなショックだった。多くの建築物の倒壊、大規模な火災の発生、それによって多くの尊い命が奪われ、現在でも被災された多くの市民が避難生活を続けることを余儀なくされている。住宅地では建物の倒壊が古い瓦葺きの木造住宅に集中していたため、一時、木造住宅いじめのような報道がなされ、大工・工務店を中心に大きな打撃を受けているとも聞く。木造に关心を寄せる設計者や研究者も地震発生直後には危機感がおそったことと思う。震災から2ヶ月が経過した今、なぜ多くの木造住宅が倒壊したのか、その様子は断片的には伝わってきている。しかし、まだ状況調査程度の報告がなされているにとどまり、詳細な調査からの研究報告はこれからである。

震災後40日目の時に急に岡山へ行く都合ができ、JR神戸線経由で行くことになった。新大阪から西へ、尼崎の手前あたりから屋根に補修用の青いビニールシートの家がぱつぱつと目に付き始め、芦屋に近づくにつれその数が増え、横倒しや倒壊した建物がほとんどと思われるような状況に変わっていく。住吉～灘駅間が不通。バスが折り返し運転中で2駅間を移動。住吉駅からバス停まで歩く間でも今にも倒れそうなビルの際を通らなければならないなど危険な状況が無数にあった。5～6kmぐらいの距離を40分ほどかかってしまう。阪神高速の下を通ったが、破壊した橋脚の補強、補修作業が進められていた。道路際に10棟程度の住宅展示場が目に入る。1棟だけが足場を組み緑の養生シートで被われていた。被災を受けたのかは分からないが、他のものは無傷のように見えた。灘から三宮、神戸へ、オフィス街のビルも相当な被害を受けているが、高層ビルのカーテンウォールが無傷であるのが印象的であった。神戸線は火災で多くの住宅に被害を出した長田地区の真ん中を通っている。窓の両側に広がる赤茶けた光景は何とも表現しえないものであった。西は明石、加古川を過ぎたあたりから屋根のビニールシートがなくなって、今まで見た世界と別の世界に抜け出た感じがした。

帰りは不通の灘～住吉間を歩くことにした。この地域は震度7の被害を受けたところで、未だに震災当時のままという状況もまだ多く見受けられ、復興に多くの時間を要すと思われた。自分の見た限りでは倒壊したり、半壊した木造住宅は古いものが多く、関西地方ではごく一般的の瓦を土葺き工法で葺いたトアーヘビーな構造のものがことごとく倒れていように思われた。土台や柱の腐朽しているものも多かったようだ。ただ、既に多く指摘されているように、明らかに構造上の配慮を欠いているものがまだ多少建物の様子のわかる半壊程度の類似の建物を見ても感じられた。重い頭を揺すられたときにそれに耐えるだけの軸組みにねばりを持たせる構造にならないもののが多かったようだ。そういう建物が多かったそもそもに一般に阪神地方には地震がないといった考えがあったことも、構造的な配慮を希薄にしていたのだろうか。特に古い木造住宅に顕著に現れていたと思う。そういう中で、比較的新しい住宅メーカーの建物や3階建てがほとんど無傷で残っていた。朝日新聞（1/26夕刊1面）「プレハブ軽さで激震しのぐ」の記事に配慮の無さは感じたが客観的な状況は必ずしもはずれていない。（必ずしもプレハブだけが残った訳ではないが）

どういったものが倒れ、どういったものが残ったかについては調査報告を待たなければならない。工法に關係なく構造的に配慮された建物が結果的に少ない被害で助かっているのは間違いない（壁量だけの議論でなく）。ただ、今は構造的な部分に目が行きがちであるが、耐久性や保全の考え方、快適な住環境など今まで良質な木造住宅を考えて議論されてきたことを前提とし、あやふやにしてきた部分を明確にしていく作業がこれから必要となるだろう。

■ 「(仮称) これからの木造住宅を考える会」の発足

1. 17 阪神・淡路大震災では R C, S 造ばかりでなく木造住宅にも多くの被害が出ました。亡くなられた多くの方々にはご冥福をお祈りし、未だに被災の状況下にある方々にはお見舞い申し上げます。この木造住宅の被害に対して、木造住宅に関わりの多い方には、マスメディアを通じての報道などから、これからの木造住宅の行方に憂いを持たれていることが多いと思います。

現地調査を行った伝統技法研究会の伊郷さん・大平さんが構造家の増田一真さんに相談され、木造に関わるいくつかのグループが個々に活動するよりも共通認識を持つ仲間がネットワークし「これからの木造住宅」を考えていこうということを提案されました。

今まであやふやな部分を残しながら木造を捉えていたことも多かったのではないかでしょうか。この震災を期にそういったあやふやな部分を正確に認識する必要性が求められるのではないかでしょうか。一方向の見方では木造の持つ可能性もその一部分しか認識できないでしょう。幅広く、奥深い木造を多角的に捉えるためには、日頃木造を真剣に考えている方々にいろいろな角度からの提言、助言、参加をいただきそれをもとに「これからの木造住宅」を考えていくことが必要であると思います。そこで上記会を発足し活動していくことになりました。同人の有志も参加しています。積極的な提言、助言、参加が求められると思います。まずは、状況の把握と整理が必要と考えています。木造住宅を真剣に考えている同人の方にも積極的に参加していただければと思います。いわゆる勉強会で終わるわけには行かない状況であると認識しています。

(文責: 宮越喜彦)

* 問い合わせは宮越まで

■ 同人活動

建築知識 3月号から連載開始 “木造住宅「私家版」仕様書”

私家版仕様書研究会（松井・小林・宮越共同執筆）

各自の持っている木造に対する考え方、ネタ、ノウハウ等を、まずは最初のたたき台として提示し、広く読者からたたいてもらうことでこれからの木造住宅の目指す方向性を探ろうという企画です。そんなにネタを持っているわけではないし、今までやってきた範囲をそんなに超えることもできない。いわゆる「私の……です。」としか言えないし、教科書的なものをを目指すつもりもありません。（もちろん参考書は買い込んでいるが）昨年後半から準備をすすめました。

阪神大震災のマスコミ報道で木造住宅には逆風感があります。自らも含めて木造住宅をちゃんと理解していきたいし、参加者にも理解してもらいたいという思いです。同人の方々もぜひご参加ください。

ワークショップの手法を用いて展開したいと思っています。現在は、誌面を通じての投げ掛けを、F A X、手紙とパソコン通信による方法でどういったキャッチボールができるのかを検討しています。相手の顔が見えない中でどこまでできますか、新しい試みでもあり、毎回試行錯誤の連続になりそうです。何回かの投げ掛けに対しての読者の応答を誌面にオープンな形で提示します。それがまた、たたき台になるものと考えます。活字のメディアとは異なるパソコン通信がどこまで有効かも期待しています。

3月号、第1回「架構」（担当：松井）にはすでに、強烈な読者からの応答での松井さんも苦戦中。

以降、「基礎（宮越）」、「床組（小林）」……と続きます。

シヤ ガン その九 江原 久紀

背(裏)



を押す二つである。二の押
しが重要。

更は私、三月一日をも、乙シャガン思習ハ一年加

たちました。暑夏、暖かいと言われてこの冬、
しかし寒いのなんの、乙。一年振り返れば失敗は數

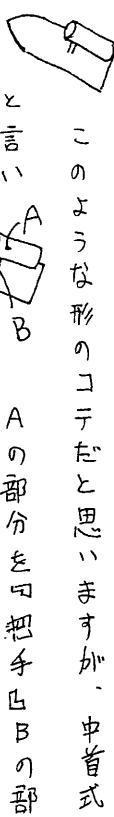
知れず、成功は田まあそんせヒニヒコト……昔レ
の人はよく言、たゞのび、「失敗は……」二年田ニの

人葉まだまた好きヒヒられとうひす。 と言つかけ

乙、今回も初心に振るPnt 2「コテの持ち方」で行こ
うがと??

みなさんもよく知、乙のシヤガンのコテとは、

このよろな形のコテだと聞いてますが、中首式

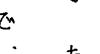


Aの部分を「把手」とBの部

分を「柄束」 C と言うらしい。このB「柄束」

の部分を人指し指と中指の間に挟み、中指は
図の黒い所第一関節と第二関節の間に柄束を
押し、人指し指は第一関節中指側ヒヤリ柄束を押
す。乙、一番大切なのは、この「台」と言われる

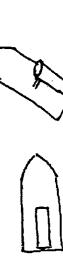
所を、中首第二関節の甲の部分で柄束の根本・台の



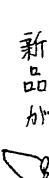
手、柄束のが、ハハハに伝へ、乙来るネタや。平らに
塗れヒミカ等の情報を読み取る? 大事な大事なヒ
ヒナのあります。が、しかし流れこならぬハト「親指
ハト」 乙圖のハト 黒い部分、第一関節人指「指
側」で把手を押すのである。ハコまで押す。押す。ヒ
ハトには来ましたが、把手の部分は鉄棒の時のよう
に握つ乙はダメにして、乙の四點を基礎に手のひら
を浮かせて、ミ、ヒ包んでやります。

ハトは具合で何年もコテを使うヒコテが変形して

ハトは具合で何年もコテを使うヒコテが変形して
形してしまハ手モ



新品が
ハトと台(コテの背)



の様な形に変

形してしまハ手モ
ハトに當たる所に立派
です。ええ私ですか。タコは出来ましたよ!
立派ではありませトか。機会があれば左官職人の
手を見て見るとおもしろいかもしませんね!!

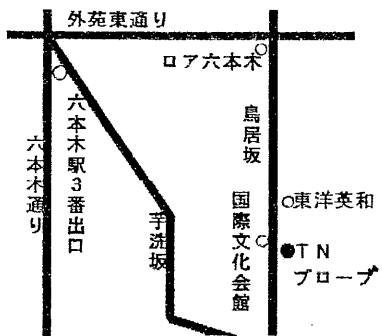
所を、中首第二関節の甲の部分で柄束の根本・台の

「初(に)原(はら)」 お来しみた!

心地よい街へチャールズ皇太子の描く水彩画と環境観～展

街と自然がつくりだす風景に愛情溢れるまなざしをもつ、チャールズ皇太子。風土と伝統に培われた環境に、皇太子は「人と自然の理想的なあり方」を描きだします。英国で高い評価を受けている水彩画と、建築・街・環境への提言を併せて展示し、皇太子の考える心地よい街への理想を探ります。

皇太子が自ら選んだ水彩画40点を一挙公開いたします。



歴史のある閑静な屋敷町にあるTN Probeというギャラリーは、大林組のメセナによるものです。チャールズ皇太子の環境に対する提言は、だいぶ前にNHKのドキュメンタリードラマでやっていましたね。イギリスの風土をこよなく愛する皇太子による小品ながら心温まる水彩画も楽しめます。

倒壊建造物の撤去処分においても、今、大きな問題が起きています。量に加えて、分別がなされていないことが大変な事態となっています。このような緊急時にはゴミの分別どころではないですから、せめて、平常時にこそ、各分野において、もう少しでも、分別、リサイクルの努力がなされていたなら、ゴミ処分能力の余力が全国的にあって、緊急時の分担も可能であったのではないかと思います。日頃の環境対策の怠りを反省する大事な時です。

……十川百合子

めの型枠や合板の使用をやめ、代替型枠や間伐材を使用を進めるなどの施策で進めよう申し入れている。

1995年3月16日(木)-4月15日(土)

11:00-19:30 (最終入場 19:00)

日曜休館 入場無料

会場 TN Probe

主催 心地よい街展実行委員会

後援 英国大使館

ブリティッシュ・カウンシル

協賛 株式会社大林組

ユナイテッドディスティラーズ ジャパン株式会社

リブトン ジャパン株式会社 (日本リバーグループ)

ローバー ジャパン株式会社

協力 ブリティッシュ・エアウエイズ

日本通運株式会社

六本木プリンスホテル

企画 プリンス・オブ・ウェールズ・オフィス

プリンス・オブ・ウェールズ建築専門学校

TN Probe

朝日新聞 1995年3月16日

阪神大震災で焼失・倒壊した約十七万九千戸の住宅の復旧に必要な木材量は八十八万立方㍍以上にのぼることが、十五日までに兵庫県の調べで明らかになつた。南洋材の取扱商社などはすでに輸入を増やす動きを見せており、国際相場の急騰を恐れる業者が

「収穫需要に便乗して、輸入増をはかるのは許せない」と関係団体に申し入れた。兵庫県林務課によると、焼失家屋は全・半焼合せで約七千四百戸。倒壊は全

千四百戸。これらを復旧するために必要な木材量を、従来の木造非木造家屋に試算したところ、少なくとも八十八万立方㍍になった。これは輸入製材も含めた兵庫県内の年間木材流通量に匹敵する。

業界紙の「日刊木材新聞」

88万立方㍍以上に 環境団体、輸入増を警戒



政府なども二〇〇〇年に向けて丸太輸出を打ち出し、熱帯材の輸入削減に向かっている時に、輸入を増やすことは許されないと警戒。辻垣正彦代表は「パブア諸島の森を守る会(東京、ニアヌーオニニアとソロモン)民活動家らでつくる「パブアニア」の見出しで自重をよびかける声を紹介している。一方、熱帯林研究者や市

■阪神・淡路大震災へ義援金の提案

阪神・淡路大震災の被災地では、ようやく都市復興に向けての活気が伝わってきました。しかし未だ、震災時と変わらぬ状況もまだまだあります。同人として今、何かできることをしたいと思います。まずは、昨年の会計報告内のカンパ分を義援金として送金することを提案します。ただ、日本赤十字社など大きな受け皿はありますが、確実に長期戦になる状況の中、町づくりに向けて手弁当で頑張る設計者や文化財の復旧に向けての活動、その他各分野のボランティアなどへの協力も重要であると考えます。

特に、生活文化同人には建築に関わる人が多く、既にこの震災に関わっている方やこれから関わる方もいるかと思います。同人または、同人有志として何らかの直接、間接の協力ができることがあれば協力することを考えたいと思います。情報をご提供下さい。

(宮越喜彦)

*どこへ協力するかは4月の世話人会で決めさせていただきたいと思います。同人には送金の必要性の有無、または送り先への提案など事務局までご意見をお寄せ下さい。
(事務局)

吉田 桂二様
大平宿設計会議様

拝啓 梅のつぼみもはこび始めいよいよ春の気配がただよってきましたが、貴殿におかれましては益々御清栄のことと拝察申上げます。

早速ではございますが、突然のお手紙お許し下さい。

私達「家づくりの会」では、建築雑誌「住宅建築」にて「町場技術探検隊」という連載記事に様々な研究テーマを設けて、その発表を行なっております。連載もこの3月で30回目になり、今年より年一回特別企画として「家づくり賞」という賞を設けることに致しました。

賞は「家づくり空間賞」「家づくり運動賞」「家づくり論文賞」「家づくり新人賞」「家づくり大賞」の5部門に分かれています。

選考の結果、1994年5月号「住宅建築」誌上に掲載されました「大平宿の保存と再生」に《家づくり運動賞》を送らせていただきましたことを致しました。

私どものような未熟な者の集まりである会が賞を作り、皆様方にお送りすることは、なんともおこがましく失礼なことは思いますが、別紙のような主旨でお送りしたいと思いますので、どうぞ御覧願下さいます。尚且てお受け取り下さいますようお願い申し上げます。後日、記念品をお送りしたいと思います。又機会がございましたら私達の会にて貴殿の建築についてのお話などを伺うことができましたなら、幸いに存じます。

尚、選考の経過及び結果は3月号「住宅建築」誌の「町場技術探検隊」欄で発表の予定ですので、ご一読いただければ存じます。

時間柄御仕事忙しい中お読み頂いたこと、感謝申し上げます。

専門ながら、普段御挨拶申し上げます。

1995年2月25日

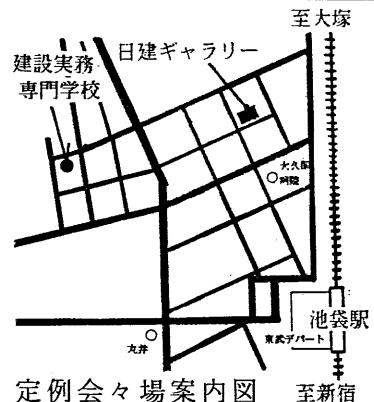
家づくりの会
代表 県 東京区北千住

□編集局通信

- 報道を通じ震災の惨状を知るにつれて、建築にたずさわる者としての無力感を感じた。さらに、目の当たりにその状況を見たとき一瞬感情が停止してしまった。40日過ぎての状況はほとんど変わらない状況のように思われた。公共性の高い部分では復興に向けた対策もとられているようだが、個人レベルでは、一日でも早い状況好転の兆しが示されなければ状況は悪くなる一方となろう。承認された都市計画案はそうなっているのだろうか。
- 会報原稿、企画宜しくお願ひします。

毎号原稿締切：奇数月5日

会報編集局：〒202 保谷市ひばりが丘1-4-25
メゾン・アルプ201
木住研 宮越喜彦
TEL/FAX 0424-25-1333



定例会々場案内図

事務局：〒151 東京都渋谷区代々木4-19-14

ATELIER ゆう 内

ニューハイツ切り通し202号

(鈴木久子・吉塚幸雄)

TEL 03-3376-0392 FAX 03-3374-1102

□定例会 95/05/26 (金) 6:30~8:30PM 於:建設実務専門学校(池袋)601教室
TEL:03-3986-3239 (大倉)

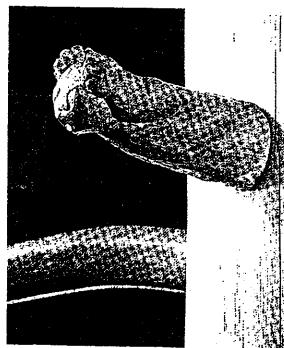
「実践建築」の試み —共同から交感・共有へ—

講師:高橋和俊(高橋木造建築研究所代表・大工)



設計と大工の両方の立場に身を置き、つくるという実践の視点から建築形態のトータルなありようを模索している。

(世話人:小林一元)



*** 高橋さんに一般的なことでも、具体的なことでも聞きたいことがある方は、メモを用意して会の始まる前に、事務局にもお出しいただければ、対話がより展開しやすいと思います。もちろん、お話の中身への質問も歓迎です。

*** 参考文献 棟梁に学ぶ家 図解木造伝統工法 基本と実践 (彰国社)

*高橋さんはこのアーバンプロジェクトに参加されました。

住宅建築9503 [幼年自然山の家]

*** 会費:1,000円(年会員以外) *** 出欠を事務局までTELお願いします。

『建具にかける情熱』

－ 加茂サッシ・開発までのいきさつと今後の展望

今回の講演は、加茂建具協同組合理事長の田辺熊一さんを講師にむかえ世話人松本氏による質問形式で行われた。最初は障子・フラッシュ戸の制作工程の説明から。

障子の工程：木取り加工－勝手付け－木の選定－墨付け－柄取り－穴掘り－サクリー爪欠き－面取り－骨加工－額加工－縁材の鉋仕上げ－紙付け取り－腰板加工－組立－目違い取り－紙付けの目違い取りで終わる。

フラッシュ戸の工程：木取り－木削り－框、棧の加工－組立－接着プレス－裁断－大手はり－アンダーカット及額ヌキー額入プレス－欄間ガラリ入れ－金具加工で終わる。

これらの工程の中で特に大事と言われているのが木の選定である。この選定を誤るとせっかくの製品が曲がってしまうので、熟練された職人の目によって選定される。

以後質問に対する回答という形で進められた。

Q 1 建具の材料の含水率測定は、どんな方法で行っているのか？

含水率計という機械を使用して抜き取り検査をしています。100本中5～6本抜き取り、含水率が12～13%のものを合格としています。最近のものは人工乾燥ですが、20年前までは天日乾燥でした。天乾の場合は8%まで落ちますが、それでは逆に狂いがでます。12～13%が一番狂いませんね。私の場合は、長年のカンで持ってみると軽さで分かります。含水率が16%ぐらいあると、ひやっとしますね。

Q 2 国産材は建具材料として使いやすいか？

私どもは国産材を使用したいのですが、なかなか材料が揃わないのが現状です。秋田杉などはほとんどいいものが無くなりました。いい柾目の赤身のものを頼みますと一石(0.28m³)で70～80万円します。これだと框一本がたいへんな金額になってしまい、やってられません。私どもは地元の材料でやりたいのですが、適当なものは枯渇状態ですね。杉などは建具に使う場合最低でも80年はたったものでないとダメですね。ドサメ(目の粗いもの)ですと強度がなく早く腐ります。100年ぐらいのものが欲しいのですがほとんど有りません。その他の材料としては、青森のヒバがいいです。ヒバは水や風に強いため新潟ではいい材料として使われていますが、東京方面では棺桶材料と言われ嫌われます。地方によって材料の使われ方に違いがありますね。

Q 3 建具材料に節があつてはいけないのか？

内部建具は節がありますとお客様が嫌がります。また、建具の材料は

細いものですから節がありますと曲がってしまいます。節から曲がると言ふのが原則ですね。横節・流節の場合は確実に曲がりますからやはり節は危険なんです。ですから木取り段階から職人は特に注意してやっています。

Q 4 建具コストはどのようにきまるのか？

まず材料の立米計算をします。それに歩留まりを考慮して工賃加えます。工賃の内訳は、機械の償却費、工場経費、管理費（寸法取りなど）です。これらを合算してさらに10%ぐらいの利益を加えたものが建具コストとなります。

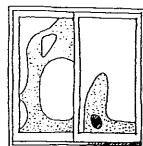
Q 5 加茂サッシを開発しようとした経緯は

昭和54年くらいから不景気になりいい仕事が減ってしまいました。56年に地場産業振興促進事業で県から補助金を戴き、不況対策として新商品開発に着手することにしました。1年間いろいろ考えた末、やるなら木製サッシだと思いつくりあげたのが加茂サッシです。そして、59年3月発表し販売を始めました。新聞・テレビ取り上げられはしましたがこの時はそれで終わってしまいました。その後、資金が足りず性能試験が出来ないでいたのですが、平成2年に「地域資源等活用型起業化事業」の補助金1千万円で、助成試験センター（草加試験場）において、強度性能・気密性能・水密性能・断熱性能の試験を実施しました。そこで十分な性能と強度を持つことが認定されたのです。現在では全国の設計の方々からの問い合わせもあり、世に認められつつあります。

性能試験結果表

区分 試験体	試験項目	試験結果	
		結果	基準
KS-58-60-A	耐圧性	風圧 200kg/m ² 召し合せ框のたわみ 19.7mm (L=90)	
	気密性	3.4m ³ /h・m ² JIS 8等級クリア	
	水密性	15kg/m ² 漏水なし	
KZ-58-50-AL	耐圧性	風圧 240kg/m ² 召し合せ框のたわみ 21.5mm (L=83)	
	気密性	3.7m ³ /h・m ² JIS 8等級クリア	
	水密性	15kg/m ² 漏水なし	
KS-58-75-A(4)	耐圧性	風圧 収し合せ框=160kg/m ² 14.8mm (L=127) 突き合せ框=160kg/m ² 17.6mm (L=100)	
	気密性	7.8m ³ /h・m ² JIS 8等級クリア	
	水密性	10kg/m ² 漏水なし	

注：全自動製造機試験室、当社
開発部室にて行なった
試験結果
試験条件
風圧 240kg/m²
温度 L=20以下
気密性 L=7.8m³
水密性 25kg/m²

区分 試験体	試験項目	試験結果																
		結果	基準															
KS-58-60-A	断熱性★試験条件 (室内20°C 50%RH) (外気0°C)	熱貫流率 4.8Kcal/m ² ・h・°C																
	結露状況	<ul style="list-style-type: none"> ○ くもりなし ◎ くもり ● くもあ ✖ くもあり 																
KS-58-60-A と扇子の2重戸	温度降下 (この条件における ガラス表面の結露温度 一重式 10.2°C 二重式 8.0°C)		<table border="1"> <tr> <td>時間</td> <td>0</td> <td>10</td> <td>20</td> <td>30</td> </tr> <tr> <td>内気</td> <td>21.2</td> <td>16.1</td> <td>11.2</td> <td>6.1</td> </tr> <tr> <td>外気</td> <td>0.3</td> <td>0.3</td> <td>0.3</td> <td>0.3</td> </tr> </table>	時間	0	10	20	30	内気	21.2	16.1	11.2	6.1	外気	0.3	0.3	0.3	0.3
時間	0	10	20	30														
内気	21.2	16.1	11.2	6.1														
外気	0.3	0.3	0.3	0.3														
結露状況	<ul style="list-style-type: none"> ○ くもりなし ◎ くもり ● くもあ ✖ くもあり 																	
	温度降下 (この条件における ガラス表面の結露温度 一重式 10.2°C 二重式 8.0°C)		<table border="1"> <tr> <td>時間</td> <td>0</td> <td>10</td> <td>20</td> <td>30</td> </tr> <tr> <td>内気</td> <td>21.2</td> <td>16.1</td> <td>11.2</td> <td>6.1</td> </tr> <tr> <td>外気</td> <td>0.3</td> <td>0.3</td> <td>0.3</td> <td>0.3</td> </tr> </table>	時間	0	10	20	30	内気	21.2	16.1	11.2	6.1	外気	0.3	0.3	0.3	0.3
時間	0	10	20	30														
内気	21.2	16.1	11.2	6.1														
外気	0.3	0.3	0.3	0.3														
結露状況	<ul style="list-style-type: none"> ○ くもりなし ◎ くもり ● くもあ ✖ くもあり 																	

Q 6 なぜ加茂サッシは引違い戸を選択したのか？

日本古来の建具の形を考えた場合、引違い戸が基本なんです。建具屋的な考え方からまず引違い戸で開発を始めました。現在でも全国で木製引違い戸をやっているのは2社ほどですが、本格的に木製引違い戸だけをやっているのは加茂サッシだけだと思います。

Q 7 加茂サッシの大きな特徴としてノックダウン方式を採用した理由は？

もともと加茂建具組合は関東圏で仕事をしておりました。組み上がった製品を関東以外の遠方に運びますと費用が高くついてしまいます。それよりも部材と部品を現場に持って行き組立た方が安く済みます。それと、以前私どもがミサワホームに建具を納めておりました時に、厳しい検査をクリアするため寸法は非常に精密に仕上げなければいけないということを身につけました。このことも加茂サッシが現場でのノックダウン方式を可能にした理由です。

Q 8 アルミサッシが住宅に広まった理由としてガラス屋のルートで販売し、さらにノックダウン方式であったためと言われているが、加茂サッシもそれを狙ったのか？

最初は建具屋さんに使ってほしいと思ってました。ガラス屋さんのルートですとアルミサッシのような値崩れがおきる心配がありましたのでガラス屋さんには期待していませんでした。よく工務店の方から誰に加茂サッシの取り付けをさせたらよいのかと質問されます。枠は大工さんが取り付け、ガラスはガラス屋さんか建具屋さんに入れもらうよう頼んでおります。

Q 9 防火型加茂サッシについて教えてください

引違い木製サッシを乙種防火戸に認定していただく為に、最初は助日本住宅・木材技術センターで予備検査を行いました。これに合格しましたので県から補助金をもらい本試験を行い、これにも合格しました。施行錯誤のうえ分かったのですが、防火サッシというのは発泡材が重要なんです。これを使用しないと絶対に火がはいります。現在使用している発泡材はオーストリア製でたいへん高価な物なので、これをなんとか安く購入することを検討中です。

1995.4.（まとめ 新井 聰）

お問合わせ先 加茂建具協同組合

〒959-13 新潟県加茂市寿町16番6号

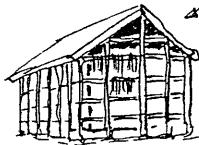
TEL 0256(52)0893 FAX 0256(52)5208

■長野県 白馬の民家・集落を訪ねる旅 金田正夫

沢渡集落

茅葺き民家が今もかなり残る。

各戸には土蔵があって木も雪固いの木組みおおう。
冬になると縮ひらぶがけた山の木。(ぐれ)



棟の煙出しも茅の状態
でみるこなしてできる

降幡さんが再生して民家
と目をはるような美しい姿で
迎えてくれる。

姫川源流

地中より湧き出た水のこと:

かる姫川をつくろ。

福寿草、水芭蕉、咲

きこう



沢渡集落



1995.4.29~30 日本ナショナルトラスト民家町並み
サーカルの主催で行われた白馬の民家・集落を
訪ねる旅の概要をまとめました。

- 金田 -

内山集落



便所 <伊藤家>

大正9年竣工。当時2階を表堂に使う。
今は民宿を営む。周辺には今も健在。

明治より前には算じられていた伊藤
セツイが軒廻りにつくられた。

屋の大きさは 26.9m × 5.8m。江戸時代
ではない。

大先集落 <山岸豊弘家> 第100年位

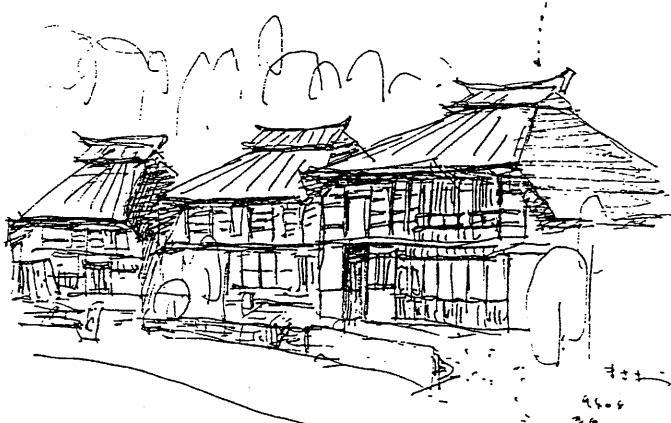
四方せんべいは伊藤家と同じ



青鬼集落

- 千年の歴史を刻む青鬼神社のある集落。
- 村民手で4km程の水源から山沿いに水
- を引いた上汐(せぎ)をつくろ。山の斜面
- (=水田)広がる。100年以上の建物も残
- 存。当時の半数に当る12棟のみごとな景観
- をつくりている。馬屋や家の中に取り込
- まっている。

< 降幡家 >



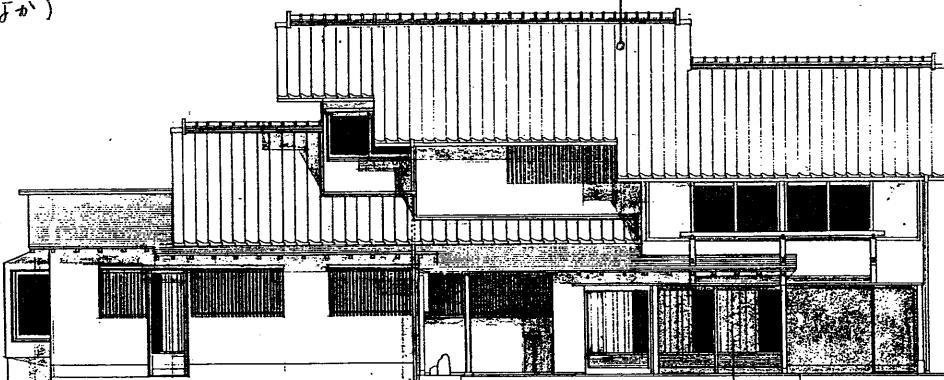
奈良住協主催 [居住新時代の木造住宅] 実施設計競技 現状とこれから
長谷川順持 (住まいと町設計代表)

優れた職人の手と地場の材木が組み合わされば、私達は負けない。そう思っていた無垢な技術者集団が、奈良という地にふさわしい新しい家づくりのコンセプトとカタチを求めコンペを行った。私という設計者が選出され第1棟目 [山の辺の家] 第2棟目 [ウッディーハウスIN奈良] として現場は進行していた。本年の4月中には2棟とも完工し奈良桜井の地に堂々と旗揚げをする予定であった。しかし、1月末に起きた阪神の大地震。震度4程度の余震が十数度奈良をもみまつた。建物に被害はなかったものの、軸組工法が主たる仕事である奈良住協には、別の意味での問題が行く手を阻んでいる。

奈良、山の辺の家

(桑井、はいじよか)

4つのレベルからなるスキップフロアが
ラセン的につながる。互いに勾配の
屋根がこれを おおう。



自由土間 (じゆうどま)
げんかん、カーポート、家族空間
を一体的につなげる土間空間



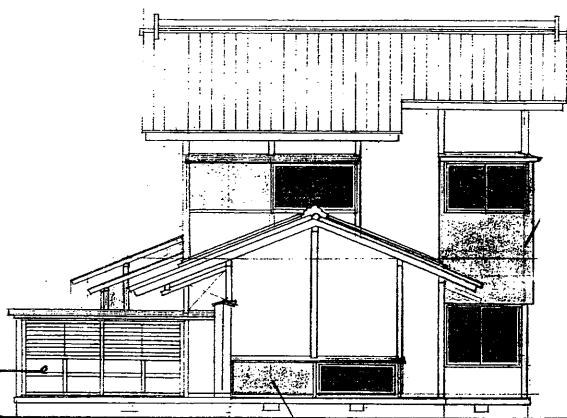
パネル工法は強く軸組工法は弱いといった2項対立は不毛ではなかろうか。それぞれの特性を適確にわかりやすく庶民に伝える時が到来したと言える。6月半ばには両現場とも完工し広く地域の人々に見て戴くことになる。また2棟目は県からの補助金をいただいていることもあり、行政あるいはマスコミとの対話もこの2棟の住宅を通じて持たれることとなる。そのときには皆様に知恵と知識をお借りしたいと思っている。

次頁は昨年末に奈良住協が中心となって行われた【木造住宅コンペサミット】で採択された提言。紙数に限度があるのでアピールのみ掲載します。行間を読んで下さい。

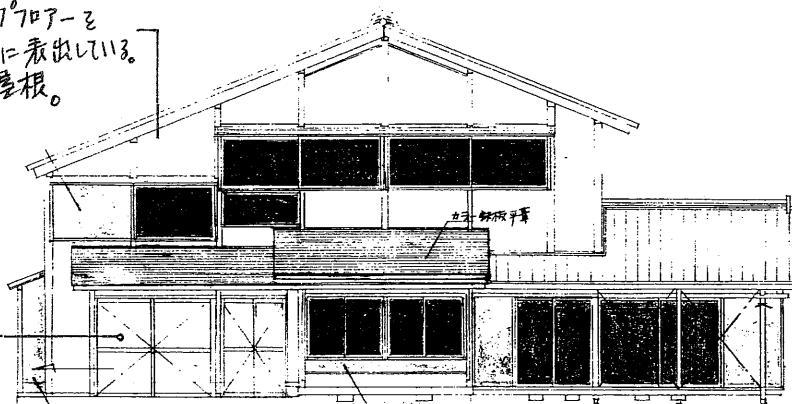
ツリデーハウス in 奈良

(桜井、知恵の郷)

可動するハイ
町がどの家よりも、ランドスケープ
の共有をはかる装置



3つのスキップフロアを
3のままである。
4寸均配の屋根。



アッピール

「木造住宅設計コンペサミット」に集った私たち（宮崎県住宅供給公社、高知県住宅供給公社、美濃の家21研究会、奈良住宅建設関連事業協同組合）は、秋晴れの一日、奈良県桜井市で腹蔵なく意見を交換し、課題を把握し今後の方向を展望しました。

討議の中で私たちは「木造住宅」の振興は日本の気候風土に適した住宅の供給ということだけではなく、地場資材である国内産木材の活用による地域経済の振興さらには地域の文化と結びついた技術の活用、再生による地域の活性化という「地域おこし」に重要な役割を果すことを確認しました。しかし、伝統的技術、構法に支えられている「木造住宅」は今日の国民の住宅要求との整合のこともあり、「木造住宅」振興の意義にもかかわらずその衰退につながっていることに深い憂慮をいだいています。

このとき、私たちの行った「木造住宅設計コンペ」では間取り、構法、工法について深い検討がされた多くの優れた提案がありました。これらの提案が伝統的技術を主とする多くの地場建築業者によって活用されるとき、「木造住宅」振興の道筋が明らかになってくると考えます。それだけに今後とも「木造住宅設計コンペ」が次々と行われることが望まれるということで意見の一致がみられたが、「木造住宅設計コンペ」を行うことは決して容易ではありません。私たちは「木造住宅設計コンペ」が各地で行えるためには、次の3点の支援が重要であると考えます。

- ① 「木造住宅」について十分な学識をもつ審査委員の紹介
- ② 全国または地域に「コンペ」の実施を周知する方法
- ③ 賞金を含む「コンペ」に係る諸費用の支弁方策

また、入選作品が現実の住宅となり、「木造住宅」の振興に役立っていくためには、細部にわたる検討、PRのためのモデル住宅の建築が望されます。このことも大変なエネルギーを必要とします。ここに国や県の支援が求められます。

今日の討議をとおして、私たちは「木造住宅」の振興と「木材住宅設計コンペ」の隆盛のために、さまざまな困難はありますが力を合わせていくことを決意しております。さらにこの動きを広げていくために他の地域の方々とも手を結んでいくことを考えております。そのため、「木造住宅設計コンペ」を実施し、関心ある方々ともネットワークをつくり、常時情報交換ができる相互に支援しうる体制をつくるよう力を注いでいきます。

全国の皆様のご支援をお願いします。

1994年11月22日

「木造住宅設計コンペサミット」

参加者一同

『住まいの伝統技術』評

益子 駿

C.アレグザンダー氏が本書を手にしたらきっと会心の笑みを浮かべることだろう。本書はかつて日本中の各地域に生息生息と息づいていた伝統民家の生活技術に対するるハーフランゲージの嬉しいアーロジである。

デザインサイバーの時代を経て、さらに踏み込んだコトハ ディテールに着目した筆者たちの炯眼に敬意を表したい。もちろん本書に採集された内容については各人の研究分野に伴う興味の対象が反映している、往時の民族に使用された建築材料などはモルタル多彩なわけだ、いづれこれらは体系化され将来的にも適用可能な伝統技術といふ基盤となる。

またこれた足腰のいかりて確かな技術マニアたちが一般化して、今日のプロジェクト、ツクツク方式と同様に普及するに至った時、木造にこだわる設計者や職人たちがどのよき判断基準で自分たちの現場仕事を形造ってゆくのか。本書はその壁紙膜を拡張するために役立つ本だと言える。

安藤邦広・乾尚彦・山下浩一著
非業資料研究社

定価 3900円

同人紹介

ひかげ よしたか
日影良孝

○プロフィール

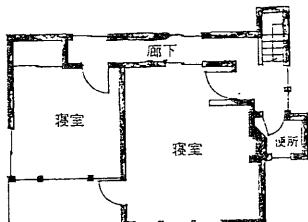
1962年岩手県生まれ

民家の移築・再生の設計をおこなっていきながら、民家から学んだことを、現代の建築にも生かしていけたらと考えています。

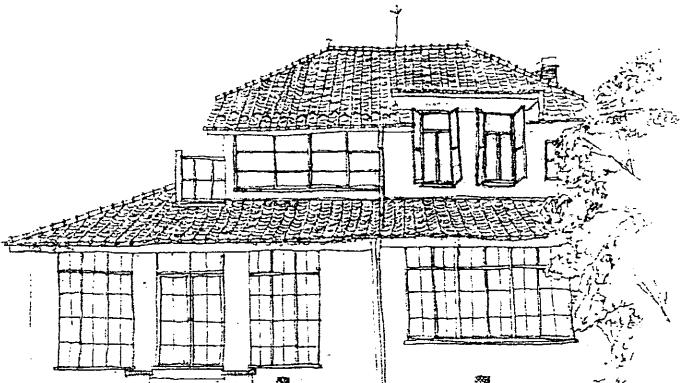
○自己紹介の内容は、2年半続けてきたニューハウスの連載から、その一部を抜粋することにいたしました……お読みください。

—日本国文化意識

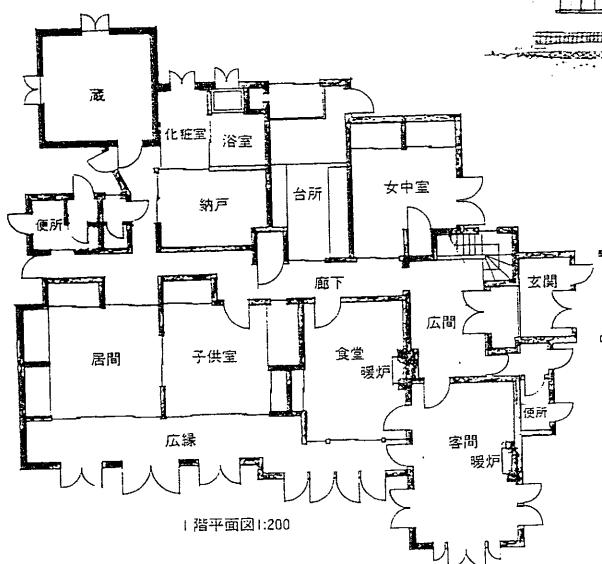
…国の構造が民家を滅ぼす



2階平面図



南側の外観
南にはこうとしたせ生の庭が広がりました。



I階平面図 1:200

日本国は狂っている。

文化に対する意識など微塵もなく、他

国では当たり前なことである「文化遺産の
継承」など頭の片隅にもないらしい。

確実に日本は衰退している。

※

昨年の11月21日、友人からの電話。

「目黒雅叙園が見える場所に昭和初期の洋館が建っている。その洋館が12月初旬には取り壊されてしまう。救う手立てはないものかどうか。急な話だがとりあえず見て欲しい。」

僕は目黒駅を降り、アンセルム教会の通りを南に向かう。細い袋小路を右に曲がり突き当りまで進む。と突然大きな赤茶色の屋根が目の前に飛び込んできた。瓦屋根が途中から急に勾配を変え、空

に向かい「牛の目窓」のような明り取り

が東側に開いていた。玄関には美しいス

テンドグラスが嵌められ、客間と食堂には暖炉が設けられていた。サンルームに

もなりそうな広い縁側が南に面し、各部

屋は中廊下を中心に展開されていた。

建築当時の画面も大切に保管されており、図中には「目黒町益田家御子息の家」が武年四月と書かれていた。

益田様とは、三井財閥の形成に尽くし

た財界の大開拓者益田孝のことであり、もともとこの家は益田家御子息の家だつたと家主は話していた。

※

半世紀を越えて生き残ってきた洋館が取り壊される……我が国の近代建築史上、十分価値があるだろう遺構が壊されてしまう。だれの手で……国の手で……なぜ取り壊さなくてはいけないのだろうか。

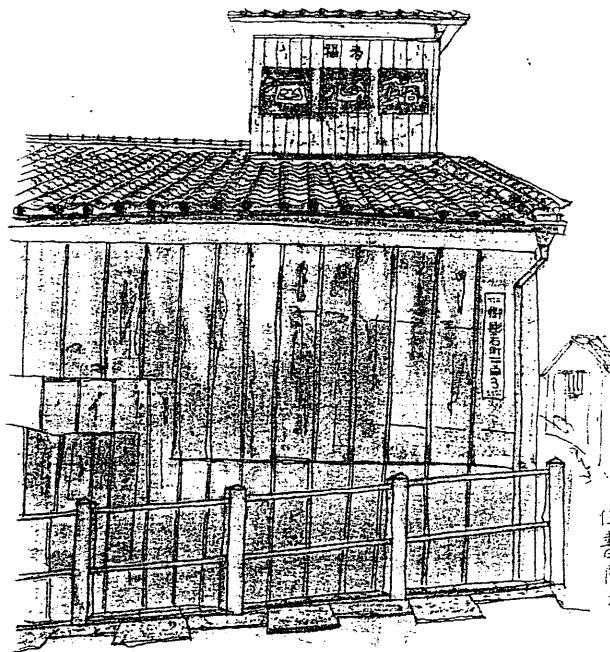
相続税の物納、その条件は年内に家を解体し、さら地にすること。年内にさら地にできなければ延滞金が発生する。家が文化財に匹敵するものであつても例外ではない。

僕は税務担当の役人にこの家の価値をやや惜熱的に話す。しかし彼は冷めた目で無表情に「お気持ちは十分分かりますが、すでに決定されたことなので……」と語尾を濁す。

※

電話を受けてから解体前までの10日間、あらゆる人に相談し、移築できる受け皿を探してまわった。が精一杯の努力もむなしく洋館はきれいさっぱり壊され、今は影もかたちもなくなってしまった。要するに、日本国への文化はこうして確実に失われていくのだ。

神戸……小さな旅の思い出、そして地震



左写真は御影石町と
書かれていた。震災で
陥れ大変な地域
被害の大きかった地域
である。

僕は今、三枚の写真を見ながら旅の記憶をたどっている。

一枚は芦屋市山手町に建つ旧山邑邸。今世紀最高の建築家、フレンク・ロイド・ライト設計による

大谷石張りの家。

一枚は北野町に建つ異人館。屋根の上の風見鶏が神戸港に向かって鳴いている。

そしてもう一枚は、御影石町の酒蔵。黒い板壁と屋根から煙出しのように空き出た小屋根のプロポーションに惹かれた。思えば、この旅の最大の目的は灘の酒蔵を見てまわることであった。

いやいやそうじやなかつた。

菊正、白鶴、澤の鶴……。

造りたての酒を無料で試飲できるという情報を聞きつけ、2泊3日で酒を飲みに行つただけじやなかつたのか。

たしか、4年前の3月だった。

春の陽気のなか、何軒も何軒も酒の試飲をして歩いていた。そう、僕は昼間から酔つぱらっていた。

足元がふらついていた。目の前がぐらぐら揺れていた。それでも僕は美味しい酒を求めて歩いていた。

酒を買ひもしない薄汚い酔っぱらいの青年に、灘の人達は嫌な顔一つせずに酒を勧めてくれた。さすがの僕も心苦しい気持ちになり、最後に通り着いた「酒心館」と書かれた酒蔵で、小さな酒を2本買

った。この時、酒の説明をしてくれたのは和服を着た人情味あふれる若い女性だった。僕はリュックサックに酒を入れ、カメラを出し振り向き、この酒蔵を撮り、この場所を離れた。

※

そして忘れかけたこのちっぽけな旅の思い出が、1月17日の大震災で蘇つた。町は、心も、体も、生命まで深い傷を負つた。テレビの画面に映る瓦礫の風景は、この現実からは遠い世界のようにも見えた。子供の遺品を探し出すうと、崩れた家を掘り起こしていく母の姿を見ると、悲しみという言葉を通り越して何もいえなくなつた。

僕が酒に酔い、ふらふらと歩いた路地はまだあるだろうか。「美味しい、美味しい」といつたら、試飲のお代わりを三杯もくれたおばさんは無事なのだろうか。(酒心館)と書かれた酒蔵の屋根は落ちていないだろうか。僕の好きな建築の一つ「旧山邑邸」の石の造形は崩れずに元の姿のままでいるのだろうか。異人館の風見鶏は、まだ元気に神戸港に向かつて鳴いているのだろうか……。

確かめる術もない僕は、ただただ三枚の写真を見ながら、歩いた道を記憶のなかでたどり続けることができなかつた。

米国のティンバーフレーム工法についてーその1ー

(有) 宮坂建築事務所 宮坂 公啓

「木造の伝統工法の現代的な利用に関しては、日本は米国に比べておよそ10年遅れている。」と、この同人誌の紙面を借りて皆さんを挑発してみたい。

米国の木造と言えば、ツーバイフォー。ツーバイフォーと言えば「たたき大工」、という図式でしか米国の大工をとらえていない諸兄が多ければ、この際考え方を改めて頂いた方が良い。...などと偉そうに言うこの私も、91年の湾岸戦争が起きた1月に初めてティンバーフレームを見る時まではそう思っていた。この数年間の彼らとの交流から、私なりに日米における木造の伝統工法の現代的な利用状況を比較すると次のようになる。

	日本	米国
木造伝統工法の内容	・7世紀頃に現れた社寺建築工法と16～17世紀に現われた農家、町家の建築工法	・14～15世紀にドイツ、16～17世紀に英國に現れ、1630年以降米国ニューアングラント地域に持ち込まれた農家、町家の建築工法
構造形式	・真壁軸組	・真壁軸組および外壁大壁内壁軸組現し
使用樹種	・針葉樹；桧、松、杉など ・広葉樹；櫻、栗など	・針葉樹；ダグラスファーなど ・広葉樹；オーク および両者の古材利用 ^{*2}
現代への利用	・'85の「国産材ハウス」以降、民家型住宅及び体育館、小学校、かんざし工法による博物館、ホテル等	・'74年「家具のような家」以降、事務所、ショッピングセンター、住宅等
活動団体	・木造建築フォラム ・生活文化同人 ・各地の大工小集団など	・Timber Framers Guild of North America (非営利団体；会員約900人。ユニオンではない)
活動状況	・研究集会が中心で各団体の横の繋がりが乏しい	・米国各州に点在するGuildのメンバーの連携は良く、伝統工法の普及と教育を実践
次世代の養成	・文化遺産の保守に追われる現代への利用、応用を実践する人材は少ない。大工技能養成はその途に着いた所	・文化遺産の保全と現代的利用は平行して実践され、特に大工技能短期養成Workshopは盛ん(3～4回／月平均・全国)

こうして比較してみると、近世以降の住宅の木造工法に関しては東西とも現れた時期がほぼ同じである、という事におそらく皆さんも意外に思われるであろう。もちろん、寝殿造りを比較にいれれば「日本の方が伝統が古い。」と言うことになる。だが、重要なのは現代の先進工業国の人々の住まいの構造や居住性の質の基盤が出来たのは、高々3～400年前であり、その質が近代において一旦定着したにも拘らず現代に到るにつれ悪化し、今や環境にまで及ぼうとしているという事が共通していることである。

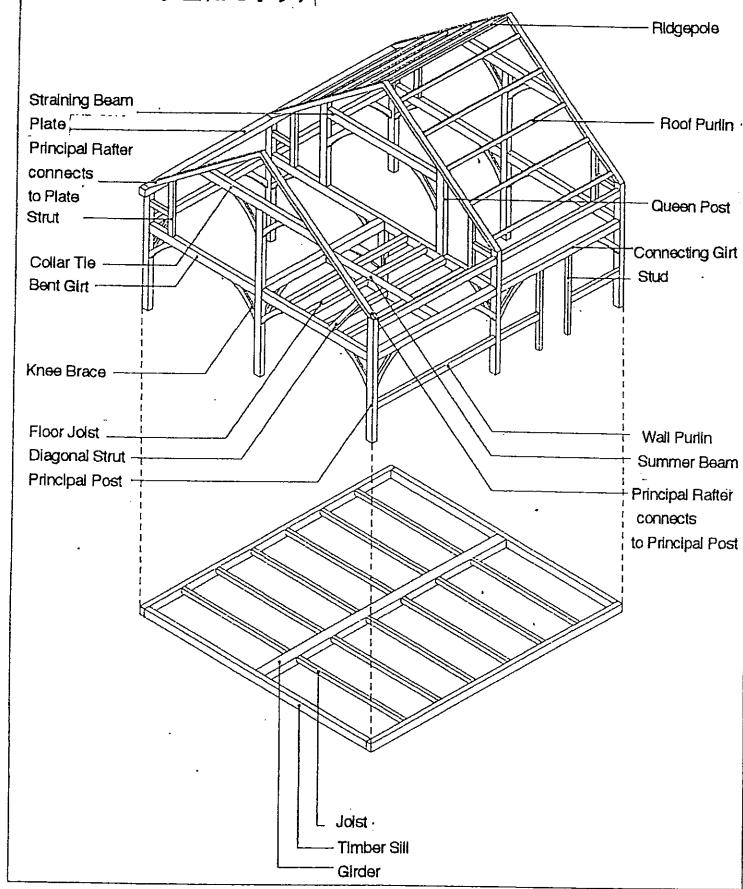
日本の木造伝統工法の復活は「いえづくり85；国産材ハウス」以降顕著になったと言えるだろうが、その端緒となつたのは伐期が近づく国産材の需要開発であった。

一方、米国の場合はどうであったか。20年前にティンバーフレームの会社を設立したTedd Bensonの場合、当初ツーバイフォーを手掛けたが嫌気がさし、コロラドからニューハンプシャーに移りアーリーアメリカン調の家具を造り始め、納品先で「この家具のような住宅を造れないか」と頼まれたのがきっかけで、彼は木造伝統工法の復活に取り掛かった。8年前からBensonの所で仕事をしているBrungraberは木造伝統工法の構造解析で工学博士をとったエンジニアであるが、彼の関心は構造計算されていない古い木造が、なぜ長い風雪に耐えて残ったかであった。また、彼らと一緒に年に一度、西海岸で7日間の大工技能短期養成Workshopを行うLandau夫妻の関心は地域に根付いた風土に合った建物である。

この4人に共通して言えるのは、彼らが伝統的な木造から現代では得られない何らかの質を自分自身で発見し、その現代的利用を仕事を通じて実践しているところである。国産材の需要開発という、言わばつくり手の都合から始めた日本の木造伝統工法の復活のはじまりと、現代における生活の質を向上させる何かを伝統の中に見い出し、その復活に取り組み始めた米国との違いが日本に十年の遅れをとらせたと言えないだろうか。

「現代の最も重大な誤りは、「生産の問題」は解決済みだという思い込みである。」という書き出いで始まるショーマッハの"スマール イズ ビューティフル"^{*3}は、米国の彼らと木造伝統工法の現代への利用の意義を話し合う際、常に共通の価値観となる。（続く）

米国のティンバーフレームに用いられる代表的な部材
(2種類の小屋組を示す)



"The Timber-Frame Home" Tedd Benson著 The Taunton Press 発行より

*1 ; 「木の建築 29号、30号（木造建築研究フォラム）」拙稿参照 *2 ; 1920年頃の製材所や橋の古材がそれらの建て替えに伴い、流通販売されている。*3 ; 同題 小島慶三・酒井つとむ訳、講談社学術文庫より

暖かい日が続くようになりましたが、私たちはひいこしまい全く治りません。大変ですね。と言つておけで、初心にもどろPart3 「基礎的な壁の塗り方」を書きうかと……。

壁の状況は、圓柱柱で一坪程、モルタルか石膏アラスター塗りという仮定で。まず壁を塗る時コテは、横にし下から上へと使う。要

はコテの腹(口)の(図参照)のネタを上に押し上げる様に壁を塗つて行くわけですね！上塗材は異なる様に壁を塗つて行くわけですね！上塗材は異なりますか。この使い方は、壁か下に下へ塗つたネタが下り落ちる)ないための使い方ですね。

2、塗る順序は①となり、上の下り際①から

ヒコテ横に遍るぐらにたりたハネタを振り分け、
ハ様にコテを平らに塗る。その後、自分はコテの尻を使つて平らになし。じ

(コテを出来ただけ壁と平

して平らかひうかを確かめ子れりです。なぜかと言ふと、コテ波かそろうのが凹凸が分かりやすいやけですね。親方などは、なしじはしま可か自分よりヒコテもだコテも少ないので。トホホ……。

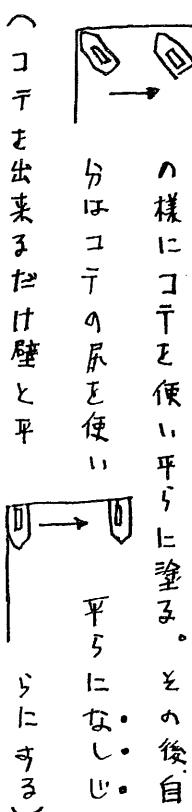
次にキリ際②を上から下までネタを振り分け、コテを波うつ様に便り大まかに平らにし、下から上になしじをする。

この次自分がコテの尻をコテと縦に便つて、なしじする。次は便つか、

③を左下りの要領。します。④を左下りの要領で塗る。次に④を

します。⑤のな

りますが。最後に⑤を、左から下り際のヒコテを振り分け、自分のネタに半分上からかけて、なまべくヒコテを長く塗るのです。ご、右側まで塗れたらコテを下から上になしじをしてわらを抜くのです。おり



新建築家技術者集団 東京支部主催

超100人CAMP! のごあんない

とにかく楽しもう!

カタイコトは抜き!

みんなでアイデアをいっぱいにして手と頭を使って遊ぼう!

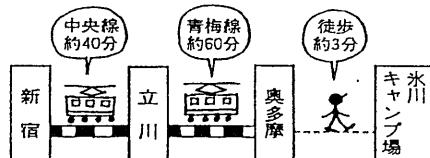
自然の中でこそできることしよう!

まちを離れて おいしい空気をすって

あったかい火をみんなで囲めば腹割って語り合えるよ

仲間をふやして元気をつけよう!

参加者がみんなでつくる集いに!



日時：1995年5月20日(土)～21日(日)

場所：氷川キャンプ場（奥多摩駅下車）

Tel 0428-83-2134

予算1人：7000円

(交通費・酒代は含まれません)

受付時間：PM2:00～

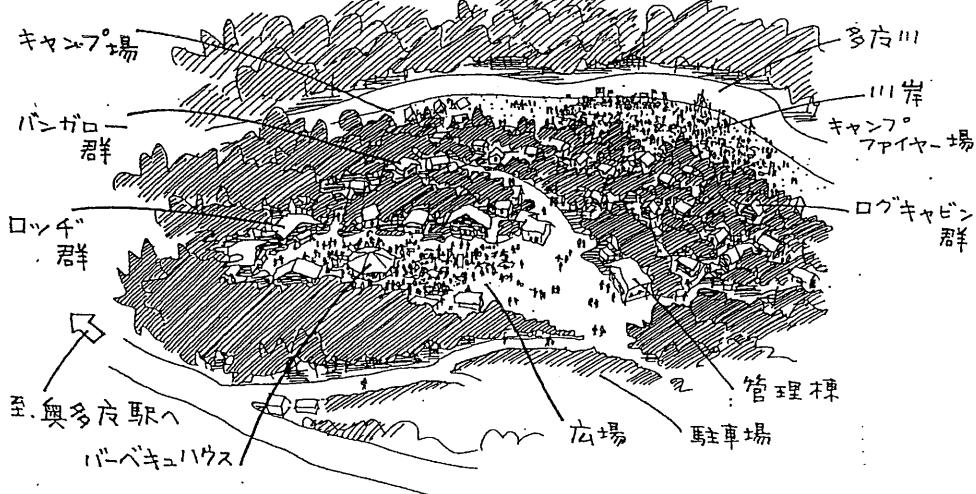
連絡先：象地域設計 木下

03-3601-6841

申込み〆切：5月12日(金)

※車の方は町営氷川駐車場(有料)があります。
普通車1泊500円です。
(台数に限りがありますが…)

氷川キャンプ場全体図



申し込み方法（郵便振込です）

個人の場合・・・氏名、住所、電話番号を記入して下さい。

複数の場合・・・代表者の氏名、住所、電話番号、申込み（参加者）の人数（子ども・大人も記入）を記入して下さい。小学生以下は半額、6才以下は無料です。

振り込み方法

通信欄に「超100人参加」と記入して下さい。
後日、領収書と簡単なアンケート・パンフレットをお送りします。

新建築家技術者集団

〒151 東京都渋谷区代々木2-26-1
第1森野ビル5階一〇
東京3-19465

電話 03-5351-2166

FAX 03-5351-2168

申し込みの締切りは5月12日(金)まで

なおキャンセルは5月12日までに連絡があれば、半額(3500円)返金します。

■お知らせ

中門造り

再生民家訪問日帰りツアーのご案内

主催 J N T 民家・町並みサークル 幹事 大平秀和 ☎03-3791-5771

生活文化同人 幹事 益子 昇 ☎0287-22-2288

南会津、南郷村にあった中門造りの民家を昨年から移築（住宅金融公庫融資新築住宅として）、この4月はじめに入居した野島さんのお宅を訪問して見学し、庭でバーベキューを楽しむツアーです。初夏の那須高原の自然も楽しめます。ご参加の方は人数確認のため幹事までご連絡ください。

南郷村にあった時のこの家は茅葺きの寄棟でしたが、移築後はカラー鉄板一文字葺きの入母屋になりました。平屋建で約50坪、間取りも店舗付住宅に変化しています。（図参照）

●とき 6月24日・正午頃に現地集合、夕方現地解散

●ところ 栃木県那須町高久乙1846-92 野島雅之・千尋 ☎0287-78-3272

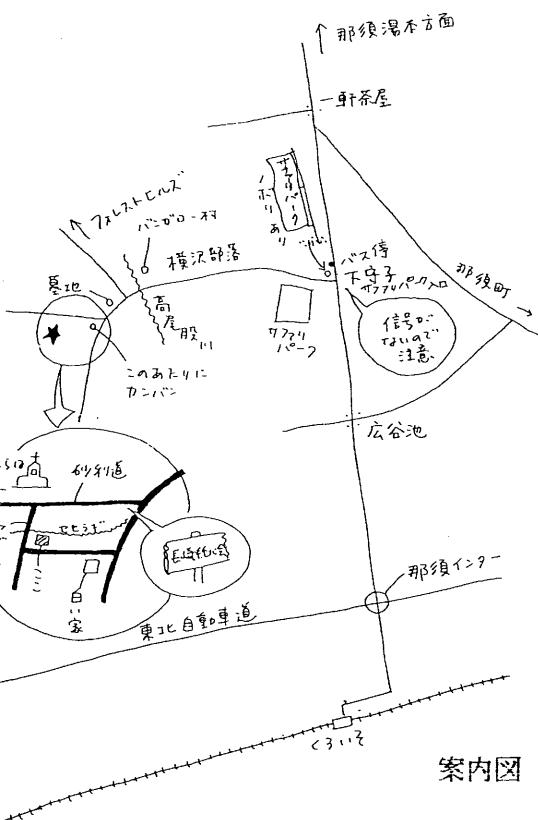
●参加費 一人3000円・子供半額 但し飲物持参のこと

交通ガイド ●JR東北線黒磯駅下車、那須湯本行バス、約15分間隔に運行、

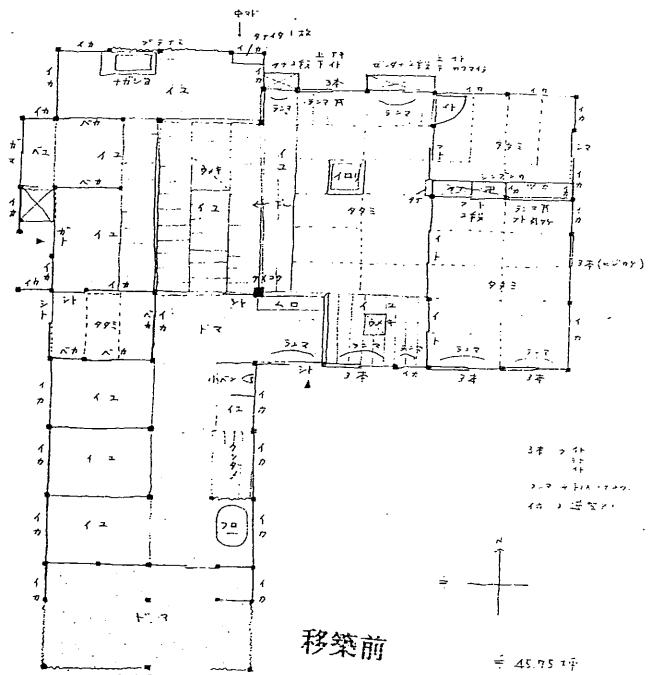
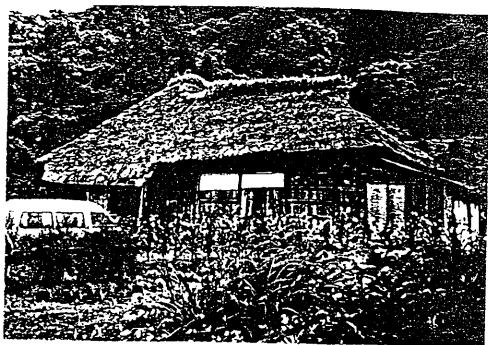
●JR東北新幹線那須塩原駅下車、那須湯本行バス、1時間に
1本運行、10:45 にあります。

●上記バスに乗られた方は下守子・サファリパーク入口で下車、
地図を頼りに徒歩約25分。歩くのが嫌な方はタクシーで、駅
から約20分。

●車でくる場合は東北高速・那須ICから一般道へ



案内図

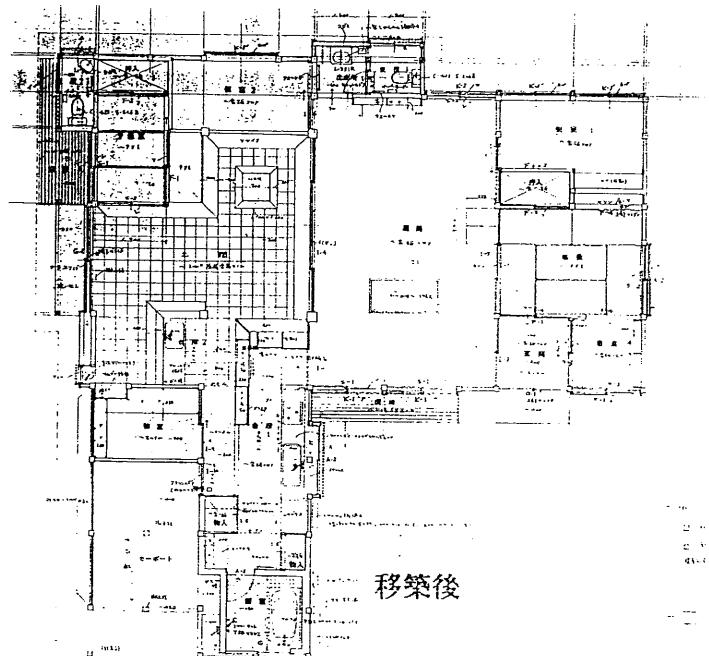


現東北本門堂
金津中門造り
指定年: 1850



設計 吉田桂二

施工 益子 昇



■世話人会報告

4/28 於：中野「喜久」

出席：吉田・益子・松本・安岡・衣袋・江原・宮越・吉塚・鈴木

1. 第2回大平建築宿開催について（以下は予定です。詳細は次号にて）

- ・開催日 9/15(金)～9/17(日) 3泊4日
- ・基調講演テーマ（仮題）「伝統構法のこれからの方針性」
構造家増田一眞氏にお願いする予定。
- ・各分科会案（以下5つの分科会を予定）

	レボータ-	サボータ-
1. 民家をどう見るのか「自然と民家」	荻原れい子氏	日影良孝氏
2. 国産材の問題	松本昌義氏	未定
3. 伝統架構のデザイン	吉田桂二氏	松井郁夫氏
4. 木構法の定量化その実現性	田原氏	益子昇氏
5. 大平の自然を楽しむ	羽場崎清人	未定

*各テーマ、レボータ-、サボータ-ともあくまで予定です。企画や自薦、他薦など下記事務局までご連絡ください。

- ・第2回大平建築宿実行委員会事務局
「住まいと町設計」長谷川順持氏にお願いする TEL:03-3662-6338
- ・実行委員会へは同人の積極的なご参加、ご協力をお願いします。
- ・会計 同人会計とは別に考える 岡部知子氏にお願いする

2. 定例会について

- ・定例会の位置づけ、およびスタイルの再確認
- ・昨年も良い講師を迎える、同人以外の参加も多く盛況だったが、講演会・勉強会だけで終わらせるのではなく、違った活動があってもいいのではないか。
- ・定例会に参加するだけでは、会員同士の交流が少ないので、新年会や忘年会に総会を兼ねて会のことなど話し合う集まりを設けてはどうか。
- ・5月の定例会「伝統技術の復権」第3弾として『飯能の高橋大工聞く』で講師依頼する。世話人小林一元氏。これからの中題は「瓦の話」「林業とのネットワーク」「塗装の話」などを候補として検討。

*同人からの希望も事務局までご連絡下さい。

3. 阪神・淡路大震災への義援金について

94年度会計報告で計上のカンパ収入と、3月定例会で講師をしていただいた加茂サッシの田辺氏がご辞退された謝金のご厚意をプラスして義援金として送らせていただきます。田辺さんありがとうございました。
生活文化同人として、十万円づつ2ヶ所に。送り先は現地でボランティアで頑張る地元の活動団体にしたいと思います。送り先は現地のネットワークをよく知る松井氏と検討。

4. 会報について

- ・会費未納者は早急に振り込みをお願いする。
未納者には、システムとして残念ながら会報が送れない。
- ・5月号会報 原稿編集作成は宮越氏
発送は5/15, 16頃までにアトリエゆうで行う。
- ・1年間に6回の会報であるが、毎回出すには同人各位の協力が必要です。原稿の執筆、情報提供等の依頼書が、FAXで突然送られてくると思いますので宜しくお願ひします。（宮越）
*発送作業の協力も突然TELすることがあるかもしれませんが宜しくお願ひします。

5. 機関誌について

機関誌第1号の発行が遅れていますが、現時点での報告。

- ・「会報」のまとめ、としての役割。定例会のまとめなど
- ・第1回大平建築宿の分科会の報告
- ・印刷はワープロ原稿で簡易印刷程度で気張らずに考える。200部程度。
以上編集局長益子氏が調整。

*同人各位に原稿など依頼の際は宜しくお願ひします。

6. 民家町並みサークル「野島邸見学について」（詳細はP16～17）

ナショナルトラスト民家町並みサークル主催「野島邸見学会」へ同人も連携。

7. 扶桑社「新しい住まいの設計」誌上での企画案

生活文化同人として本誌上で読者との接点を探る企画を実現できそうです。
同人にオープンな分科会的な位置付けになると思います。 詳細はこれから打合せになりますが、今後の展開が楽しみです。 窓口は岡部氏、松本氏。

8. 世話人会について

生活文化同人の活動は、世話人による打合せの中で企画運営を行ってきましたが、世話人ってどうやって決めたの、世話人会にも出席したいなどの声がありました。

もともと、自主的に活動する個人が集まって生活文化同人ができました。基本的には同人は皆対等であり、たまたま自主的に各役割を担っている人が世話人として動いているだけです。ですから、世話人会は基本的にはオープンで、自由に参加していただきたいと思います。ただし、会の運営に対して積極的な意見提案と雑務を含めた作業、行動への協力はお願ひします。

■同人活動

住宅建築5月号

- ・特別企画では木造の再構築をテーマに、同人でもお世話になった安藤邦廣さんの座談
- 増田一眞さんの構法に対する提言
- 三澤康彦さんと仲間の阪神地区復興の活動
- ・人と作品では吉田桂二さん 構造デザイン5題を紹介
- ・キャッチボールでは1月定例会の報告

を掲載

建築知識5月号

特集「木造住宅」構構×デザイン読本

- 吉田桂二さんとその弟子（小林一元さん、松本昌義さん）による構構のデザインから、構造、コストまでを網羅した木造住宅のまとめ
- 連載 木造住宅〔私家版〕仕様書「基礎」：宮越担当
- *本誌とのメディア・ミックスの企画でパソ通NIFTY-Serve建築フォーラム#10会議室でも議論が展開されています。同人各位も、ぜひROMしてください。
- また意見もUPしてください。（宮）

■木住考（これから木造住宅を考える会）の動き 前号で紹介

4/17に世話人会が開かれ、幾つかの分科会が作されました。

- ・阪神大震災における特定地区の被害状況のまとめ、考察
- ・木造に関するデータベースづくり
- ・木造住宅構造計算によって理解し、実践してみる
- ・木造の保全についての研究
- ・木造の生産面からの研究

などを分科会の活動としていこうということを話し合いました。

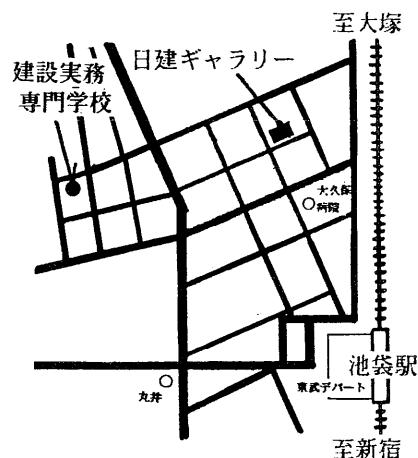
同人の中で参加、協力したいと思われる方は宮越までご連絡ください。

□編集局通信

- ・毎日がインコではなくオウムの報道ばかりの異常な状態が続き、地下鉄、横浜、新宿と狂気な事件が立て続けに起こる。不正融資、急激な円高、政党が拒否され無党派知事の誕生。今年は何年かで起こるようなことが一度に起こっている。しかも今までのルールからは予想できないことの連続で、まさにこれが世紀末の現象なのだろうか。心地よいスカッとしたニュースがほとんどない。野茂の快投。レッズがバルディに勝ったぐらいか。
- ・会報原稿、企画宜しくお願ひします。

毎号原稿締切：奇数月5日

会報編集局：〒202 保谷市ひばりが丘1-4-25
メゾン・アルプ201
木住研 宮越喜彦
TEL/FAX 0424-25-1333



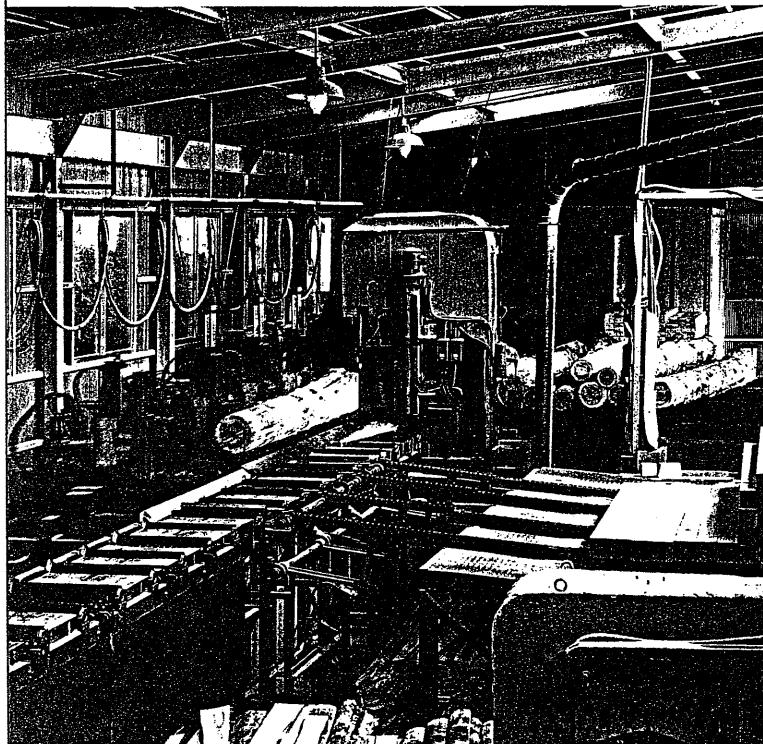
定例会々場案内図

事務局：〒151 東京都渋谷区代々木4-19-14 ニューハイツ切り通し202号
ATELIER ゆう 内 (鈴木久子・吉塚幸雄)
TEL 03-3376-0392 FAX 03-3374-1102

□定例会 95/07/29 (土) 1:00~4:00PM 岡部材木店（飯能）
□2次会 (ハーベキュー) 4:30~6:45PM TEL:0429-77-0101 (岡部)

製材の現場を見る

講師：岡部 隆幸（岡部材木店社長） 世話人：岡部知子



今回は、梅雨も明けたところで緑多い、飯能まで足を延ばします。杉の仕上材の製品化を中心、製材業として試行錯誤し、新たな展開の可能性を見いだしている岡部材木店の製材現場の見学と木の流通など、普段なかなか設計をやっているだけでは見えてこない部分のお話が伺えると思います。

- *定例会々費：1,000円(年会員以外)出欠を事務局まで下記ヒューズしてFAX願います。
- *2次会々費：2,500円 参加者 2次会は用意の都合がありますので必ず連絡（アルコール類の差し入れ大歓迎）してください。
- *交通機関等は裏表紙を参照ください。

-----切り取り-----

*** 参加申し込み（製材の現場を見る） ***

月 日

○定例会： 1. 参加（　名） 2. 不参加

○2次会： 1. 参加（　名） 2. 不参加 *○をつけてください。

お名前：

TEL :

『実践建築の試み』

－共同から交感・共有へ－

講師：高橋俊和（高橋木造建築研究所）

独自のスタイルで木造建築を創る高橋さんに「今なぜ設計施工の立場で仕事をしているのか」、「白川郷の合掌造民家・解体・移築の現場から」の二つのテーマで前半・後半に分けお話をうかがった。

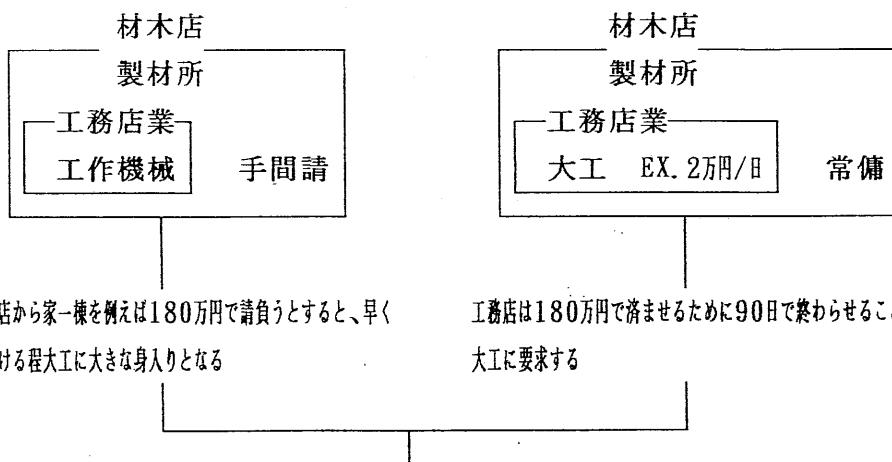
「今なぜ設計施工の立場で仕事をしているのか」

●棟梁に学ぶ家

木造伝統工法を次世代に伝えることを目的として集まった「棟梁に学ぶ家」（代表：深谷基弘 日大芸術学部教授）というグループに参加する。三宅島の伝統的民家を原型とする家を、設計を高橋龍一・深谷基弘両氏が担当、施工は三宅島の棟梁のもと高橋さんら4人が7ヶ月をかけてつくりあげた。この建物は現在日本建築学会の研修所となっており、その建設及びプロセスを記録した「木造伝統工法－基本と実践」（彰国社）の出版にも加わる。ここでの作業で伝統工法を学びとる。この時の三宅島での仕事のやり方は一人の棟梁の指導のもと何人かの弟子が仕事をするというもので、弟子にとってみれば偉大な棟梁のもとはりつけた空気の中での“修業”であった。緊張のあまり夜中に失禁することもあったという。

●トラブルなく早く終わらせることが大工の力量か？

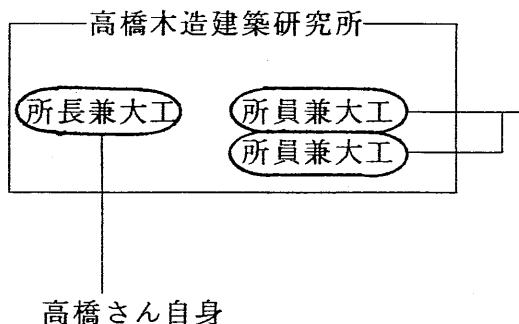
工務店と大工の関係をみてみると、大工には手間請けと常備の大きく分けて二つのパターンがある。



※いづれも大工に要求される力量はトラブルなく早く終わらせることが主となりやすい。

一般に大工は一人前になるのに7~10年程かかると言われるが、大工技術の幅は広く、建売住宅的なものと伝統工法的なものとでは継手仕口の種類や数から工程の進め方、早さ等同じ技術といっても質的に大きな違いがある。今日の大工は千差万別と言ってもよく、どのような仕事を経験しているかでその技量には個性がある。今日の建築請負の一般的なシステムでは必然として〈トラブルなく早く〉が求められるが、効率を追求する技術だけではない、例えば、設計意図の理解や建主・設計者との意見交換、反省や学習といったソフトなものも、大きな意味で大工の技量である。大工に限らず設計者・施工者の個性をも含めた多様な技量が生かされる土壤を、どうすればつくることができるかを実践を通して模索している。

●三人棟梁でチームを組む



職業訓練校で木工を学び基本的な道具類の使い方は分かっているが建築に於ては素人からスタートした二人。うち一人は芝浦工大在学中に訓練校を終え高橋さんのところに来て三年。去年から墨付け～仕上加工までの一通りをこなせるようになった。もう一人は、電気機械技術畠から訓練校を経て四年。

※報酬は三人で分配

一般的には一人の棟梁が頂点に立つピラミッド型で構成されるのが大工のシステムである。これに対し高橋さんのやり方は3人が力を合わせ1人の棟梁の役割を分担するというもの。各自が自分のキャラクターを自覚し、自立した考えによって自由に動くことで各々に見合った役割に納まってゆく流れが生まれてきており、そうした流れがいわゆる“分業”を超えて“共同”に近づいていくことを願っている。現在このスタイルで吉田桂二さん基本設計、小林一元さんが実施設計及び監理をつとめる飯能の家を3人でつくっている。

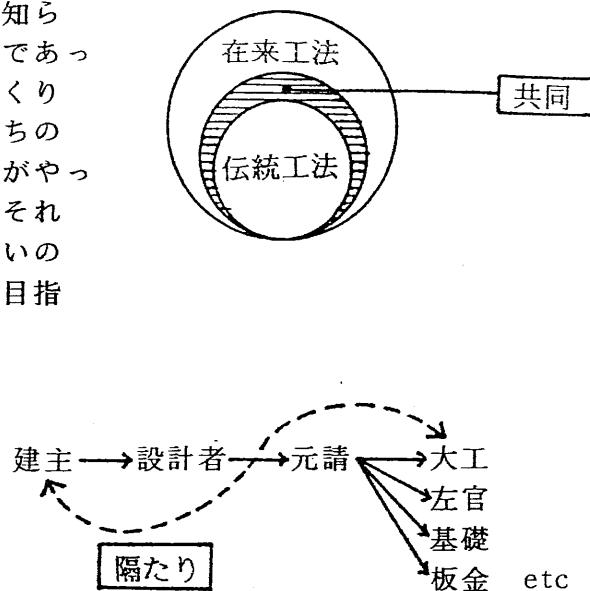
●伝統工法と在来工法

「棟梁に学ぶ家」参加後すぐに大工を始めた高橋さんだが、はじめは仕事がなく写真館の椅子3脚を1脚5千円で請負ったこともあった。材料費もなく廃材を使っての制作であった。そのうち知人のカメラマンのアトリエとしてスタジオをつくる話があがり、オーナーのカメラマン氏と二人で45坪の家をつくりあげた。雑誌「住宅建築」で田中文男さんがつくる筑波の小学校の舞台を見て刺激を受け、通し柱を多用した貫構造でつくりあげた。今にして思えばこのスタジオが自身の作品の中で一番伝統工法

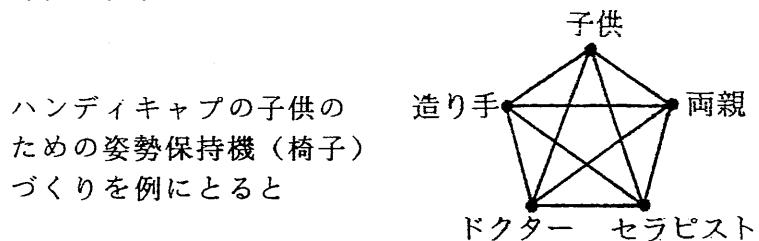
に近いものであった。その後、今はもう独立していった武蔵美を終えた青年と二人で素人であることを恐れずに一年半ほど仕事を続ける。当初は間柱や大引の存在を知らないほど伝統工法に浸りきったやり方であった。制作中に他の大工さんからそのつくり様を感じさせられてしまつたことで自分たちの仕事の片寄りを思い知った。自分たちがやっていることは単に特殊なことなのか、それとも普遍的な要素があるのかという思いの中、熟練工でも宮大工でもない人間が目指す建築とは何かを模索してきた。

●建主とつくり手の関係

一般的な建築の流れは…



高橋さんが家具を造っていた時代に経験したやり方は…



5者が一つのテーブルを囲むように位置し密度の濃い手ごたえのある製作と関係ができた。

この経験を生かし建主の設計と施工への参加（セルフビルド）を積極的に求めるようにした。

●製作者としての7つの共同

総括すると高橋さんの製作者としてのキーワードは「共同」である。これまで述べてきた、①大工仕事の内部のシステムに於ける共同、②伝統工法と在来工法を組み合わせる共同、③建主との共同性、④設計したものが直接施工することの共同、他に⑤施工者内部の共同－左官屋、板金屋etc各々の特色を最大限に生かす。

⑥機械と人間の共同－伝統工法へのプレカット技術の応用。

⑦山及び山に係わる人との共同－山の視点を通して建築を考える。例えば西川杉。この7つの共同を実践して疎外の少ない関係による建築をめざしているのが高橋さんの姿勢である。

「白川郷の合掌造民家解体移築の現場から」

去年高橋さんが関わった解体移築（白川村の技術伝承事業）をドキュメンタリーにまとめたビデオを高橋さんの解説で見る。高橋さんは建売住宅（最新の在来工法）を手間請しながら一方でこの合掌造民家（伝統工法）の再生に携わった。両極の二つの仕事によってその違いがより鮮明になった。建物は3間半×7間の大きさで村では中規模のオーソドックスな間取りのもの。以下がそのおおまかな工程である。

解体→カヤ刈→水盛（荒縄を使用）→石場かち（大黒柱の礎石打には村人が200人集まりこれを打つ）→柱下端のヒカリツケ→側建（ガワタテ＝建前）→貫、小壁入れ→合掌組→大ハガイ、小ハガイ入（屋根構面の筋違い）→ソマによるカヤ葺

この建物は鎌、相欠渡りアゴ、ホゾ、シャチ、込栓による仕口・継手で構成されており、それらには規則的な方向性があることから組み上げる順番が原則的に決まっている。作業順の論理性もその仕口継手から読み取ることができるのである。

※興味のある方はビデオ「白川郷の合掌民家－技術伝承の記録」、出版物として「合掌造り民家はいかに生まれるか」をご覧ください。共に民族文化映像研究所製作。

（☎03-3341-2865）

連絡先 高橋木造建築研究所

〒350-04 埼玉県入間郡毛呂山町西大久保476-2
☎0492-95-3167



1995.6.まとめ 勝見紀子

□定例会参加者の感想など

高田正己 タイムマシンで時間をさかのぼってきたような方が、現実にいらっしゃる事にびっくりしました。在来構法を単に受け入れる事なく、逆に伝統構法のよさを広めていってほしいと思います。
設計施工が分離している現状について、施工を知らない設計者についてどう思われますか？
同人へ：木造の企画は大変参考になります。今後も続けてください。

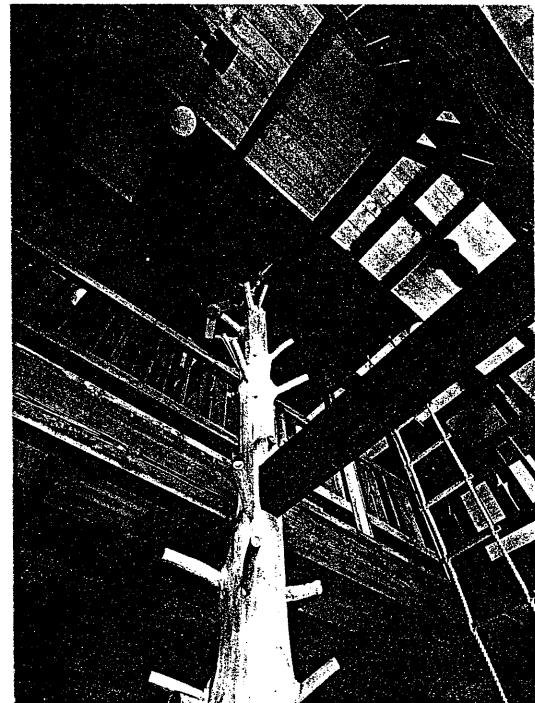
江原幸壱 高橋さんへ、色々をされていますか？特別な理由があるのですか。

森山ゆき（学生） ソーク今は、高橋さんのように新しい大工さんがいらっしゃるのだなあと新鮮な驚きを感じました。まだまだ知らない世界や考え方がありそうなので、たくさん知って、自分の目指す大工の型を求めるよう思います。

体験学習に行きたいです。

北瀬幹哉（学生） 今まで考えていた大工の世界とは違う、新しい？現代の大工像？のようなものがあることがわかり、おもしろかった。
また、実際に見た、合掌造りのことをあれだけ解説していただくと、また見に行きたくなった。
やっぱり奥が深すぎて大学では、分からなすぎる世界だ。
だから、やっぱりおもしろい。

猪鼻義明（学生） 大工という仕事は、ある程度の素人の人達（訓練校等で工具の扱いを受けた人）が集まれば家一軒を建てることができることに大変に驚いた。
機械によるプレカット工法が、もしも全体に渡ってできるならば、大工という仕事がどのように移行していくと思いませんか？



中間三甲男（学生） 初めてこの会に出席しましたが、今まで考えたこともない世界の話を聞くことができ、とても興味を持つことができました。
大工の仕事のこれから課題である伝統構法の伝承に自分も手助けしたいと思います。

・・以上定例会当日に頂いたご意見

■土壁ネットに参加しました

宮越 喜彦

今年1月定例会で話をうかがった土壁の高橋さん（シティ環境設計）が、6/10, 17, 24の毎週土曜日の3回に渡って、土壁の実体験講座を開催。（会報で紹介できなかったのが残念）

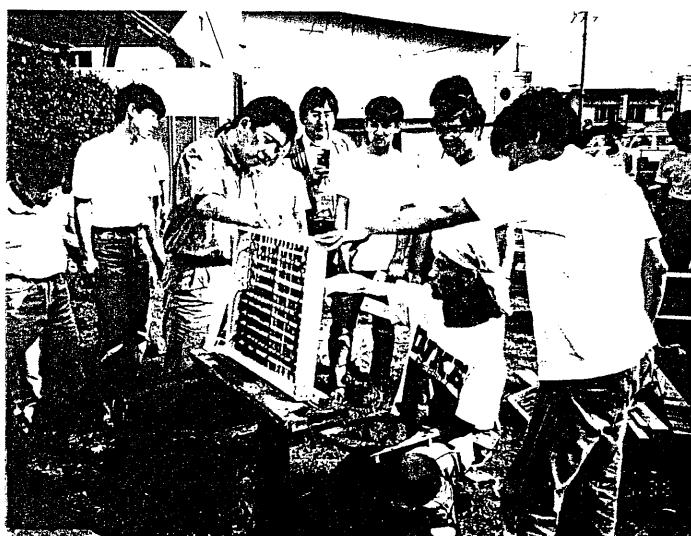
講師は高橋さんと、いつも高橋さんと仕事をされている左官の加藤さん。

初回：荒木田土を実際に塗っている施工現場見学。（残念ながら不参加）

2回目：竹小舞作りと、それに荒木田土塗りの実習

3回目：色土による半田仕上塗りの実習。スライドによる解説。

引き刷り仕上用のコテもスタイルフォームで自分で作る。これが以外と使えるのには驚いた。



ふだん、本などでは土壁とか荒木田などと書いてあるものを読んだり、何度か見学会などにも参加したことはあっても、実際に自分の手で、その粘りや固さや重さなどを感じる機会がなかった。

現在、進行中の現場では、真壁で土塗り壁の仕様であるのだが、正直なところ自分の現場では初体験であるため、今回は貴重な体験をさせてもらった。

毎回30～40人以上の参加があり、大変盛況。また、ほとんどが設計者や学生であったが、手で素材をさわることにみんな飢えているように感じた。

カタログからでは絶対に手に入らないものがそこにあったことに興奮。同時に「土壁」の可能性と奥の深さを多少なりとも感じるきっかけを作ってもらえたことに、この場を借りて、あらためてお礼申し上げると共に、再度の企画をお願いしたい。

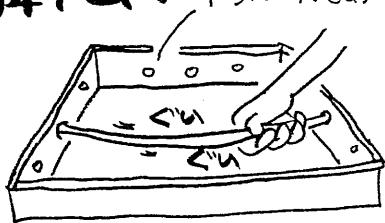
PS/ 終始にこやかに、うれしそうな表情の加藤さんが印象に残っている。

塗り壁…体で考えたこと

学校では教えてくれないこと。

生徒 = カトウ
親方

小舞塗け



ドリいごわとあはる

組
か
な
き
や
す
い
の
よ
う

間渡しが微妙に
長いと入らないから、
たかってみると、矢豆かぎ下り。
何でもモなさそうよこれが
ムズかしい。

森山ゆき



この
持ち方

人さしゆびと
中ゆびで柄を
はさむ。

床のひもは
痛いけど
がんばって
1回1回引張らないと
グラグラうごく。

荒壁塗り

粉りを出すために、土をねかせて、わらさ
を発酵させる。手にとってみると、ふわうん
とあたたかい、いいにあり。



こて木板の上で土をこねる。

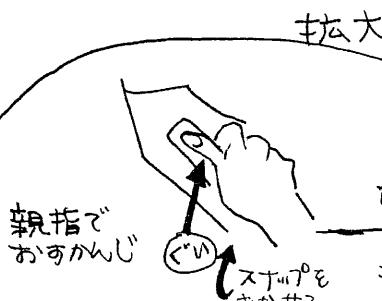
これができるようになるまで3年…。
思った通り すばやくやる。
これができるとちょっとカッコイイ。



江
原
久
紀
さん。



こて板は
中ゆびをのばしてねえ
と塗れる



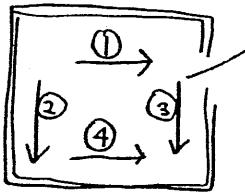
親指で
おさかんじ

スナップを
きかせる

このつけ根あたりをあす。

親方の主張。ちりとんぼやのれんは縮んで固まる土を使う時、ちりのひび割れを防ぐもので、膨張して固まるアラスターの時は使わない。

土と小舞の上に塗る



糸縄の竹が“あらが”
室内側

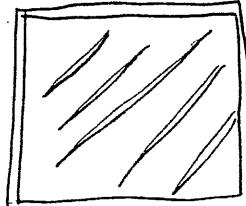
良い仕事

三流しわら

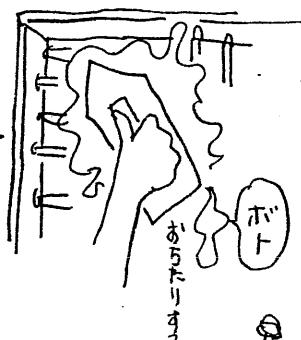
この順番に塗るの“だ”が

梁って内に意表に關係なく(?)
あちこちにたがってしまつたり、
平らにしようとしてあしつけたり、
しまいにはふだ厚いカベになつてしまつ。
豆豉ではわかるんだが……。

実際に自分の手をつけて、
こういう作業をしていると
伝統工法の保存…のよう
な話は置いとして、ただ
単純に、家を建てるというの
は楽しいんだとリツクねきでわかります。



荒カベをねってから
わらをななめにねりこえ。
割れ止めの補強筋に。



力を入れないかぶ
キレイに塗れ
子ような気がした
土の上をあべる
かんじ。



荒カベは1週間では
全然乾かない。
まだ湿っていて色も
黒っぽい。

仕上げ

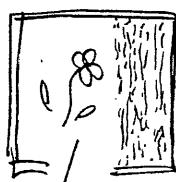


3引3合びすかまるでうんちみたれ。
黄色のカレーとも言える。
これが土の色なんだとよ。

スタイルでつくった
ここで荒く仕上げる



仕上げ
はりつけられ
もう一度塗る
よ。



今日の教訓

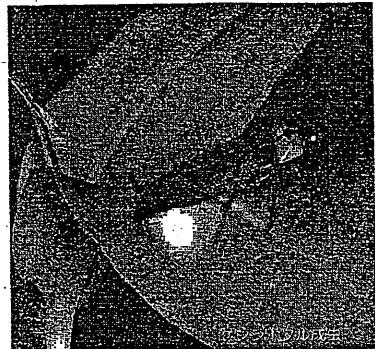
見る見るといじや
大違ひ!!

実際にやってみると
とても楽しい。
またやりたいです。

■同人紹介

島田真弓

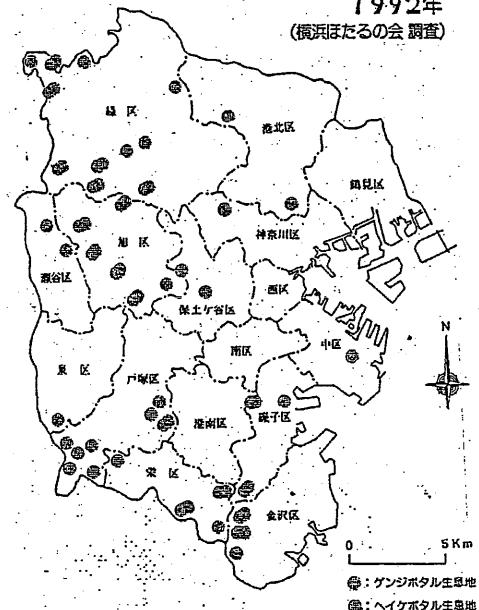
住宅の設計を主にしながら夫と事務所を設けて20年近くになります。3人の子育てをしながらでしたので住・職はいつも一緒でした。建て主との打合せも当方が夫婦で行くものですから相手方もご夫婦で、建物の話から夫婦のかかわりまで話が広がりどちらかというと夫たちの方が辟易していることが多いようです。基本設計も方針が決まれば担当と補助に役割を分けています。ここまでが表の顔で、実際には家事があり子供たちの保護者会や町内会それぞれの趣味やつき合いがあって、時間の取合責任の押しつけは日常茶飯事でした。互いの甘えも出ているので、少しづつ公私とも独立して行こうとしているところです。私にとって表=裏、仕事と趣味の領域の判然としない暮らしが、緊張感がない、設計料をもらうのはおこがましいとお叱りを受けそうですが、すべてが大切でなくてはならない物なのです。



横浜のホタルの生息地

1992年

(横浜ほたるの会 調査)



横浜ほたるの会の御案内

ホタルをもっと知りたい方。

横浜ほたるの会の活動に

参 加 し て み ま せ ん か。

問い合わせ先。

横浜ほたるの会事務局 後藤好正

横浜市緑区三保町1570-1 ハイム三保3-309

Tel. 045(935) 6737

企画・編集 横浜ほたるの会

印 刷 港栄印刷

判然としないものの一つに川とのかかわりがあります。

女性は羊水に漂う胎児を育てるから、というだけではなく水・川・海・蒼い地球に心やすらぐを感じる事が強いのでしょうか？ ですからそれらを汚す物事に対してまず感覚で拒絶し、次になぜなのか考える、そんなパターンで私の場合もきました。

横浜市内に帷子川という二級河川があります。水の汚さでは国内ワースト10に数えられたほどです。その支流の一つに陣ヶ下渓谷があり、ほとりに住み始めて16年になります。人の手の入っていない斜面林を眼下に見おろす位置に自宅兼仕事場があります。くぬぎ・櫻・山法師・山桜・杉などが心地よい風や空気・日陰や日向をもたらしてくれます。

川の流れはそれだけでなく、人の流れももたらしてくれます。上流に住み、湧水が水音をたてるくらいに集まつくるところに源氏螢がいるよ、今年は6月18日が見頃だよ、まだ243頭しか数えられないよと知らせてくれる人たちがいます。螢の生息する場所を調べに畠に立ち入り、地主に怒鳴られ、湧水が枯れないよう、汚さないよう頼みにいったり、螢を楽しむ仲間を増やしたり、そんな事をしながらいつの間にかどなった地主と意気投合した頼もしい女性たちです。

下流の私たちは町内会や螢狩を楽しみそうな人たちとツアーチ組んで、梅雨時のうつとおしさを忘れ息を潜めてオスの呼びかけメスの返答の光を見つめるのです。螢は動きがゆったりしていて、人の髪に留まってしばし休んでいたりします。薄緑色の光を捕まえようとして蛇をつかんでしまった人もいるとか。

川の水質はそこを取り囲む市街化調整区域の下水道の普及率が低く、生活排水が浄化されずに流れ込んでいるので良くないです。わが家のあたりになると魚も見かけずセスジユシリカや水綿・蛭・沢蟹などを見かけます。汚いのです。でも螢の生息を知りセスジユシリカを見ると何とかしなければ、という気持ちになります。やっとこのあたりも生活排水を下水道につなぐか合併処理浄化槽に行なぐかを話し合える段階にきました。

雨水浸透枠設置を公費でやってくれるようになりました。これで幾分水もきれいになり、急激な増水もなくなるでしょう。

生活が螢のテンポに近づいてきているような気がします。また、楽しからずや。

第2回 大平建築宿 開催

おおだいらけんちくじゅく

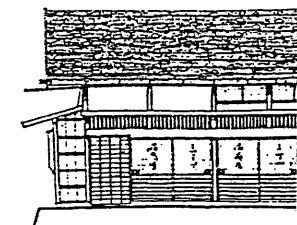
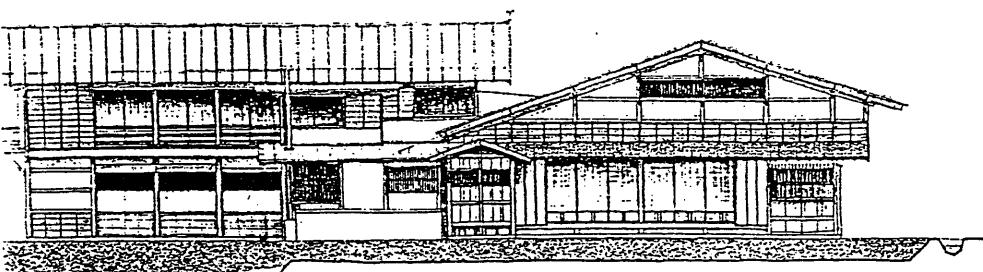
吉田桂二氏を中心に、保存・再生活動が進められてきた「大平宿」
その改修された宿場を舞台に、今年も「大平建築宿」を開催します。
2年目となる今回は、「私たちの生活文化ー過去と未来」を全体テーマ
に掲げ、広く皆さんの参加をお待ちしています。

- 日 程 1995年9月15日(金)~17日(日)
- 場 所 長野県飯田市大平宿(改修した民家に宿泊)
- 参加費 A日程(2泊5食) 15,000円 (小中学生 8,000円)
B日程(1泊3食) 10,000円 (小中学生 5,000円)
※交通費、寝袋レンタル代(1泊 1,000円)は含まず
- 定 員 200名
- 申込方法 申込用紙に必要事項を記入のうえ、事務局まで郵便またはファックスにて送付下さい。
尚、参加費は、申込時に下記口座へ振込をお願いします。
申込みされた方には、後日パンフレットを郵送します。

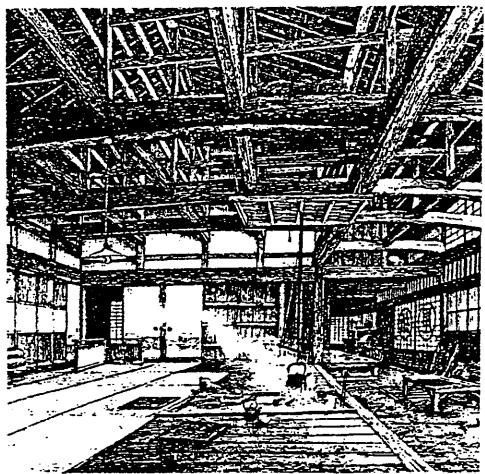
郵便振込み 総合口座 10150 40940391
大平建築宿事務局

- 応募締切 8月10日
- 大平建築宿事務局 〒103 東京都中央区日本橋小網町1-5-305
住まいと町設計内
tel 3662-8470 fax 3662-6477

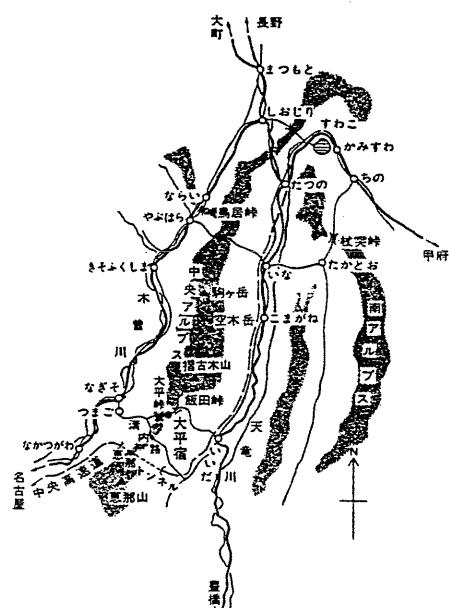
主催	生活文化同人
共催	歴史環境設計会議
後援	日本ナショナルトラスト、建築思潮研究所、建築知識、飯田市役所



■ プログラム



画 吉田桂二



大平宿へのアクセス

- ・自家用車利用
中央高速道路飯田インターより約45分
- ・新宿より高速バス利用
飯田市役所前よりマイクロバス送迎

15日(金)

13:00 現地集合 開宿・宿のガイド

13:30 基調講演

「伝統構法のこれからの方針性」

講師：増田一眞（構造設計家）

インディア：小林一元

16:30 炊事、夕食

19:30 虫の声を聴く懇親会

16日(土)

7:00 起床・朝食・かたづけ

9:00 「大平宿の見方・楽しみ方」

講師：吉田桂二

10:00 大平宿 見学

11:30 昼食

13:00 分科会

1. 民家と私たちの生活文化

レポーター：野島雅之 サポート：日影良孝

2. 輸入材依存と国産材の流通

レポーター：松本昌義 サポート：岡部馨

3. 伝統木造架構のこれからの方針性

レポーター：吉田桂二 サポート：松井郁夫

4. 木構法の定量化その実用性

レポーター：田原賢（予定） サポート：益子昇

5. 大平の自然を楽しむ（トレッキング）

リーダー：羽場崎清人 サブリーダー：岡部知子

16:00 炊事・夕食・片付け

19:30 プレゼンテーションタイム

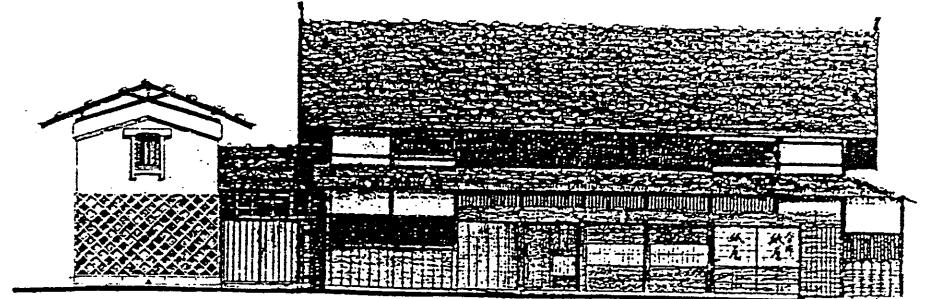
17日(日)

7:00 起床・炊事・片付

9:00 総括会議

11:00 閉宿式、掃除

12:00 解散



1995年 第2回大平建築宿 参加申込書

●参加者 氏名 _____ 年令 _____ 性別 男 女

住所 画

勤務先 画

●家族参加者氏名・年令・性別

●参加日程 (いずれかに○) A (全日程参加)
B・9月15日~16日 C・9月16日~17日

●参加希望分科会 (いずれかに○)

- 1)民家と私たちの生活文化
- 2)輸入材依存と国産材の流通
- 3)伝統木造架構のこれから展開
- 4)木架構の定量化その実用性
- 5)大平の自然を楽しむ(トッキング)

●寝袋 •レンタルします (1泊 1,000円) 2泊 2,000円)
•持参します *支払いは現地にてお願いします

●交通手段 (いずれかに○)

- 自家用車利用 : 東京周辺一飯田一大平
 - 席に余裕があるので誰かを便乗出来ます
 - 席に余裕はありません
- 高速バス利用 : 飯田一大平 •タクシーフリーベル •マイクロバス希望

●参加を申込まれた方は、A日程の場合1万5千円、B日程の場合1万円
を可及的早やかに下記口座へお振込み下さい

郵便振込み 総合口座 10150 40940391 大平建築宿事務局

*参加申込書は郵便またはFAXにて事務局までお送り下さい。

大平建築宿事務局 103 中央区日本橋小網町1-5-305 住まいと町設計内
03-3662-8470 FAX 03-3662-6477

*お振込み後のキャンセルは、原則として致しかねますのでご了承下さい。

やっぱり木造は楽しい!!

掛矢のカーン、カーンという心地よい音はその場の空気を引き締め、高なる心に響いてくる。棟梁は建前の最中、柱一本、込み栓一つに気を配り、無事上棟したときの安堵感はたまらないらしい。

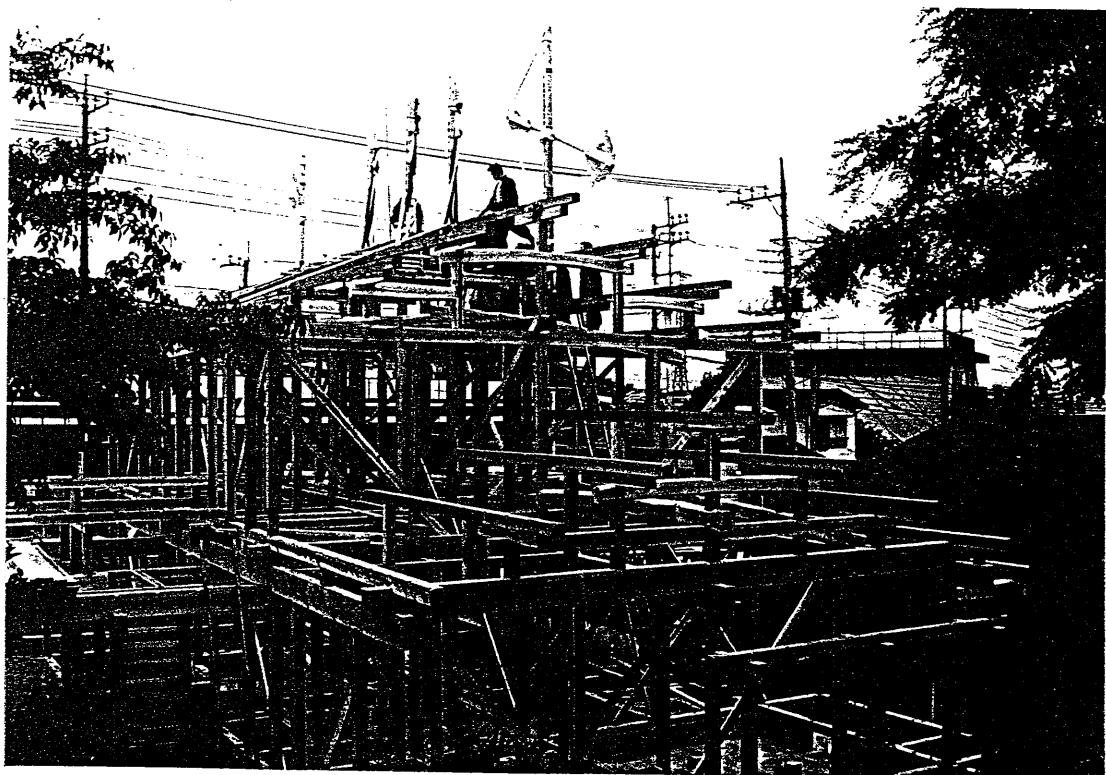
去る5月26日から3日間埼玉県朝霞市で木造2階建の住宅（延べ坪55.5坪）の建前が行われた。同人の会員でもある（有）初雁木材の関根さんの自邸である。同社は昔ながらの施工も請け負う材木屋である。関根さんに材木のいろはを叩き込んだ石澤棟梁をはじめ、付き合いのある大工（新人2名を含む）、助っ人合わせて総勢十数名と鳶8名が各々むだな動きひとつせず見事に建ちあげた。

この建前には丹呂事務所では2回目の「建前学校」（大工有志が各地から集まり建前の実践に参加する。）に長崎、名古屋、長野から若手の大工が参加し、華を添えた。

上棟式には頭の計らいで幣串を掲げ、餅をまき、最後には棟梁送りが行われた。幾度となく聞かれた木遣歌（労働歌）は上棟の喜びを心に焼き付ける。

「文化」をうまく言葉で言いあらわせないけど、この感じ無くしてもいいの？

投稿 江原 幸春



米国のティンバーフレーム工法についてーその2ー

(有) 宮坂建築事務所 宮坂 公啓

北米ティンバーフレーマーズギルド: Timber Framers Guild of North America (北米木骨軸組大工同業組合)には二つの機関誌があるが、毎号必ず目にとまるのがWorkshopと呼ぶティンバーフレームの短期養成学校である。一年間平均すると月に3~4ヶ所、米国のどこかでこの学校が開かれていることになる。この学校はギルドが主催する場合と、会員個人又は会員会社が主催する場合がある。手元のScantlings 5月号(年8回発行)とTimber Framing 6月号(年4回発行)で、その案内記事を拾ってみると次のようになる。

<5月>

- ・7日~20日: モンタナ州、ギルド主催「仕口墨付けとティンバーフレーム入門」
- ・15~20日: ペンシルバニア州、「Cさんに学ぶティンバーフレーム」
- ・同期間: ペンシルバニア州、F社主催「ティンバーフレーム入門」

<6月>

- ・5日: メイン州、F社主催「ティンバーフレームの設計」
- ・6日~10日: 同上、「ティンバーフレーム入門」
- ・10日~18日: オハイオ州、C社主催「ティンバーフレームと納屋の建方上棟」
- ・20日~24日: メイン州、F社主催「ティンバーフレーム上級」

<7月>

- ・3日~8日: メイン州、F社主催「ティンバーフレームの構造」
- ・9日~15日: バーモント州、
「Aさん、Pさん、Wさんに学ぶティンバーフレームの設計と施工の基本」
- ・10日~14日: マサチューセッツ州、
H社主催「ティンバーフレームとさしがねの基本」
- ・17日~21日: 同上、「森林から製材まで」
- ・24日~28日: 同上、「伝統構法」
- ・31日~8月11日: メイン州、ギルド主催「道具の使い方と流木の墨付け」

<8月>

- ・21日~25日: マサチューセッツ州、H社主催「ティンバーフレームの設計」
- ・28日~9月1日: 同上「ティンバーフレームの建方上棟」
- ・21日~9月4日: ニューヨーク州、ギルド主催「フランスの墨付けと伝統構法」

こうしてみるとこのWorkshopの対象は広く、一般建て主からティンバーフレームの技術をこれからおぼえようとする大工およびプロの設計者や大工にまで行き渡っていることが分かる。会社が主催するWorkshopは一般建て主への情報普及と大工の人材発掘の機会となり、ギルドや個人が主催するものは現業の大工や設計者の研修の場となっているようだ。参加費用は2週間続くもので\$300~\$400(授業料、宿泊費、食事代込)と日本では考えられないほど安い。参加費用が安いのはギルドが伝統的な木造の教育と普及を目的とした非営利団体であること、地域の公共施設が殆ど無償で利用できることやボランティア活動が盛んであるところによる所が大きい。非営利活動の役割に対する認識は日本ではまだ不足しており米国に見習わねばなるまい。

次に私が3年前に見学したWorkshopの1週間の講義内容を見てみたい。

B社とT社の共同で行われた講義と実技演習は受講者約30人、インストラクター6人で日曜の夜7時半頃から始まった。内容は最終日の6日後の土曜日夕方までに延床面積約30坪の二階建てのティンバーフレームの墨付け、刻みを行い、上棟まで完成させるというものである。建てる建物はT社が受注したもので、発注者にとっては演習に使うということで、建て方までの大工手間が安くなっていると聞いた。うまい方法だと感心する一方、練習に言わば「真剣」を使う主催者側の意気込みと自信を見た。また、朝は8時から食事の時間をはさんで夜11時までみっちり教える主催者の姿勢と、それに応える受講者の熱心さに米国人の底力を感じた。7日間の授業内容は次の通り。

日程	授業内容
1日目 19:30~ 23:00	・受講者と主催者の自己紹介 ・ティンバーフレームの特徴
2日目 8:00~ 17:00 19:30~ 23:00	・建てる建物の説明 ・軸組と仕口、墨付けと刻みの進め方他 ・木材の選別 ・墨付け演習；図面の読み方、さしがねの使い方 ・たる木と柱の墨付け ・砥ぎ
3日目 8:00~ 17:00 19:30~ 23:00	・図面の読み方とさしがねの使い方 ・構造の設計と仕口 ・樹種の選択 ・材質所への注文の仕方
4日目 8:00~ 17:00 19:30~ 23:00	・手加工に使う道具について・ほぞとほぞ穴の刻み ・方杖のほぞの刻み ・登り梁と柱の取り合い ・基礎の設計 ・板材と伝統的な木材の使い方 ・外壁材、スキンパネルについて
5日目 8:00~ 17:00 19:30~ 23:00	・墨付けと刻み・新しい仕口について ・各部材との取り合いについて ・吹抜け ・パッシブソーラーについて ・配線と配管
6日目 8:00~ 17:00 19:30~ 23:00	・ほぞとほぞ穴の刻み・棟木破風まわり ・面取りとカーヴィング ・平面と架構の設計 ・配置計画 ・外観と様式 ・材料の選択と仕上げ材
7日目 9:00~ 17:00	・刻みの完了と地組みの準備 ・地組の進め方 ・地組のバリエーション ・クレーンを使う建て方 ・配管の施工 ・くさび締め ・軸組の完成について ・建て方の為の地組の準備 ・地組の固め方 ・クレーンを使わない人力による鳥居建て・上棟

最終日の鳥居建てによる建て方を見ていて、思わず浮かんだのは日本語の「普請」であった。普請は本来仏教の言葉で、色々な人間が集まって志しを一つにして何かをやり遂げる事、と聞いたことがある。そのことをT社の社長に伝えると、皆に言ってやってくれと言われ、無我夢中で英語で説明してしまった。右の写真はその時の風景。異国で見た日本の原風景ということになるのであろう。（続く）



新建の100人集会に参加して

おかべ ともこ

20日 11時2tトラックに薪を積み終え氷川キャンプ場へ出発する。
飯能から峠を越え青梅、奥多摩と進むにしたがい切り立つ高い山、深い谷、そこを流れる大きな川が豊かな表情で私を迎えてくれた。そんな自然との対話を楽しむ間もなく目的地の看板が出てきた。家から50分弱。

約束の12時より少々早く着いた。すでに幹事達は準備に入っていた、聞くと前夜から詰めているとのこと、たいしたエネルギーだと驚きながらバンガローに入った。

模造紙に看板を書いている人、そこへ100人の顔を書くんだとペンを走らせていているヒカルさん、現地にあるものより上手に案内図を書き、借りてあるバンガローを図示している厚生さん、枝や葉っぱを拾ってきて案内の表示板を作っている女の子等々皆さんのがんばりあらわす姿勢に感動する。能のない私は手を出す仕事がない。

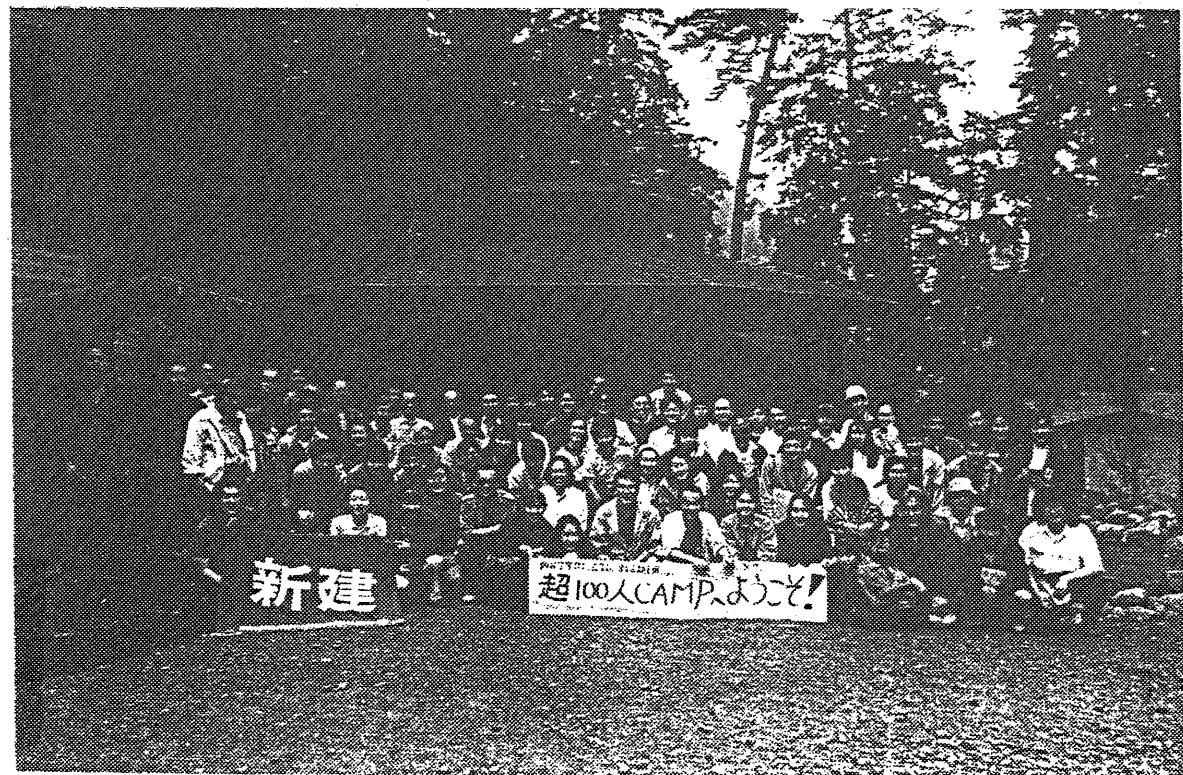
せっかく早く来たのにと見回すと、あったあった入り口近くに積まれた食料の山。只のおばさんはこれしかないと、ニンニク、タマネギ等の皮剥き野菜洗い、これならみんなに負けないと、私も参加しているんだと自己満足しながら野菜にむかって。

他の人の手も入り下ごしらえも終わったので外へ出るとトラック一杯の薪は河原へ運ばれ不揃いな材木たちはキャンプファイア用に上手に高く積み上げられていた。

薄暗くなる頃には今朝築地に並んでいたというカツオもきれいに盛られ、三つずつの鍋と釜に作られたカレーと御飯にこっちがうまいこっちは堅いなどの評を下しながら宴会が始まりだした。

夕日もすっかり山に落ち宴もたけなわの頃、我が会の吉田氏登場そして仕事を終えた松本氏も酒を片手にかけつけた。その二人を待っていたように暗い河原で見えなくなっていた薪に火がつけられ、自然に人々はグラス片手に火を囲み始めた。

新建の高橋氏の挨拶に会の説明からなりゆきなど、続いて吉田氏が会との係わり地震があつて思うことなどが語られた。



寒くなってきた頃「それに好きなテーマのバンガローに行って下さい。」と声がかけられたが、燃える火を囲んでのおしゃべりは続いた。バンガローには3つほどテーマが用意されていたが、「震災と会の思い出のスライド」そして「若手、先輩、学生が語る」の2つだけとなってしまった。

いよいよ寒くなってくるとそれぞれ興味のある所にもぐりこんだ。

私たちは後者のテーマのところに参加したが、テーマもお酒と時間がすすむと変わっていき、何とも書きようがないが巾広く展開した？。

にぎやかな声を近くに聞きながら私は早く寝てしまったが残った人の中には寝る間をおしんで朝までトークという元気な人達もいたという。

翌朝眠い目を擦りながら外へ行くと昨夜の残り物はすっかりお化粧直しされ豪華な立食パーティーが始まっていた。後は全員集合で記念写真、片づけ後はそれぞれが別れを告げ自由解散。

小学生の遠足の作文のような報告だがこれが100人キャンプの2日間でした。

これに参加することによって自分の決めた仕事そして立場というものを一生懸命考えている若い人たちに接することができたことはよかった。

そしてその子たちが2日間を普段あまり生活の中にはない自然の中で過ごしたということは、楽しかっただろうし自分にとっても仕事の上でも何かプラスになるだろう。

その子達が火をおこす時見せたあのぎこちなさ。

ゴミを燃すことさえなく、かまどや七輪なんてましてや使うことのない今を生活している人には無理のことだが。火をおこして御飯を炊き、星空を見上げて夜を感じ、友と語り合う機会は貴重だったろう。山の中に住んでいる者には、耳をすませた時山から聞こえてくる音が鳥であったり蝉であったり季節によって違うこと、山の色が四季によって変わること、なんでもない毎年の流れだが、ショーウィンドウの飾り付けや暑さ寒さでしか季節を感じられなくなったり人には、たまの一日季節を体感することは、本を一冊読むより価値があるのではないか。

そして一つ希望するとしたら（今回のキャンプはきちんとしていたが）帰る時には山や川を元の通りにしてゴミ等持ち帰るべきものは持ち帰ってほしい。地元の人や、山や川に遊んだ後始末を押し付けることに

ならないように、そうでないと自然や地元の人達が又来る事に対して拒否することになってくると思うから。

山々が木々が私たちに与えてくれる恩恵を感じ、それらが元気を保っていられるにはどうしたらいいのかも考えていかなければいけないと思う。

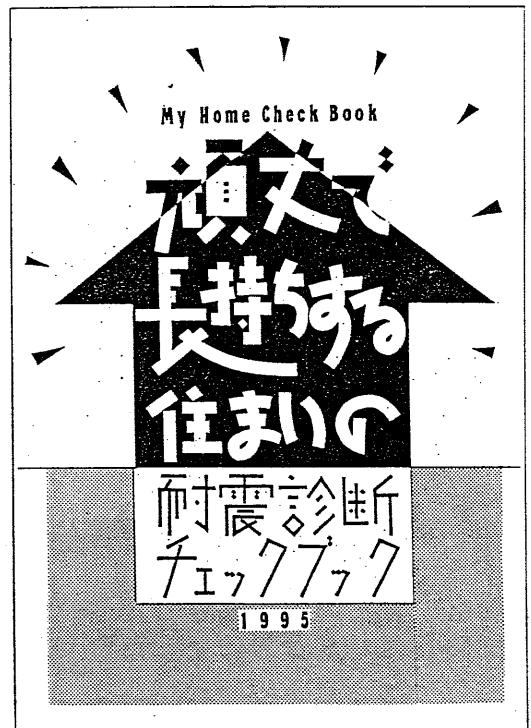
家作りは町作りといわれているが、大きく地球作りであってもほしい。

そして来年もこのキャンプにはトラックに薪を積んで参加したいと思っています



by 山本厚生

■ 「頑丈で長持ちする住まいの耐震診断チェックブック」(5/27発行)



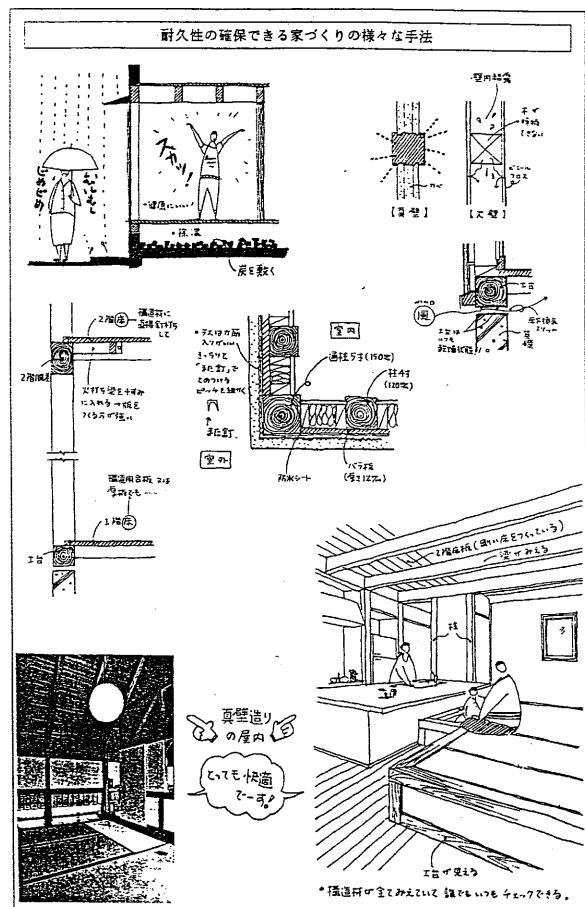
阪神大震災の被害報告から、木造住宅の被害調査分析、それでは、あなたのマイホームは大丈夫か。そして、事例の分析。それではまずどう考えたらよいかのヒントを、イラスト入りで、専門家以外にもわかりやすく解説されている。けして、構造のみの観点からばかりではなく、よりよい生活を前提としている提案になっているところが、そのイラストや写真から伝わってくる。

編集メンバーは、現地で被災者に対してのボランティア活動を行いながら、そして、一刻も早く、一般市民に対して、何らかの木造住宅の指針の提示をしようと昼夜、极限状態の中でまとめられたと聞く。むしろ自身も被災されてしまった方もいて、その作業は、まことに壮絶であったと思われる。初版は、即売り切れで、いかに多くの人々が一番欲していたものであったのかが分かる。

東京では、やな事件が続発しているとはいえ、関西での記憶を薄れさせるには、まだまだ、あまりにも早すぎる。

相模湾沖での地震が気になる昨今、この一冊の指針は我々がこれから抱える問題そのものなのだ。

(宮 越)



【「頑丈で長持ちする住まいの耐震診断チェックブック」編集メンバー】

◎ 藤田 宜紀(藤田宜紀建築設計事務所)

◎ 三澤 康彦・三澤文子(Ms建築設計事務所)

◎ 田原 賢(田原建築設計事務所)

◎ 村上 雅英(近畿大学)

◎ 土井 正(大阪市立大学)

◎ 山中 隆三(ARCHI-STUDIO)

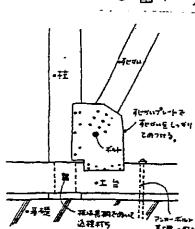
◎ 富本 亨(アレス(株)建築設計事務所)

◎ その他 本当に多くの皆さん。

【問い合わせ】

「木の家づくり協会」

tel. 06-831-2654



去る6月14日に、池袋芸術劇場で、第1回シンポジウムが行われた。

「壊れる」ことをテーマに、都市防災の専門家で神戸大学教授の室崎益輝先生と、構造家の増田一眞先生を迎えてお話を伺った。会場には100名近くも詰めかけ、会場からの意見に対しても、お答えいただくななど活発な会であった。（詳細は木住考NEWS VOL.2）次回シンポジウムは、「腐る」ことをテーマに関東学院大学教授の肱黒弘三先生の話を伺う。

- ・日時：7/25 6:30PM 於：池袋芸術劇場 中会議室 会費：¥2,000
- ・木住考事務局へFAXで申し込み FAX:03-5996-1370（松井建築設計事務所）

○以下木住考でゼミや分科会が始まります。参加される方は、各担当幹事まで。

連続ゼミ「木構法の変革」

講師 増田一眞 幹事 酒井行夫

木構法をもっと深く知るために、講師に増田一眞氏を迎え一年間にわたる連続公開ゼミを開く事にしました。

この機会を有効に活用し、参加されることを期待しています。
なお連続ゼミ「木構法の変革」の内容は出版を予定しています。

第1回	日本木造技術史	第2回	地業・基礎・土台
第3回	木材の素材特性	第4回	木造の継手仕口
第5回	構造の釣合原理	第6回	部材応力と強度
第7回	架構計画と剛性	第8回	架構の基本形態
第9回	合成部材の設計	第10回	壁面構成の手法
第11回	床組の可能性	第12回	小屋組の構成法

日時： 第1回 7月14日（以後月1回） 18:30～21:00

場所： 池袋芸術劇場 中会議室 定員： 80名

会費： ¥24,000円（¥2,000／回） 全納原則（半納可）

会費は、当日徴収します。

申込： D E N 設計工房 （酒井） F A X 044-977-8594

木造構造計算演習分科会

幹事 高橋 昌巳

目的：木造住宅の構造設計は階数2以下の場合、所要壁率確保のチェックのみです。現状では、木構造自体がまだ完全に体系化され、構造理論も確立している訳ではないようですが、現在行われている基準を基に、木造の構造に取り組んで見たいと思います。

- 方法：
1. 木造2階建の構造計算書をテキストにして、力流れと計算の方法を理解する。
 2. 参加者の設計例を持ちより、各自が構造解析を試みる。
 3. 構造計算になじみの薄い人でもわかる実践型の手引書をつくる。

申込：シティ環境建築設計（高橋） F A X 03-3978-0340

木造住宅のQOL調査分科会

幹事 宮坂公啓

基本骨子：阪神大震災における倒壊した木造住宅の主な原因をまとめると次のようになります。

1. 工事施工不良
2. 老朽家屋のメンテナンス不備
3. 建築主、設計者、工事施工者の耐震設計知識の不足

この分科会では上記3つの具体例を調査報告や阪神地域の設計者、施工者からの情報により再確認するとともに、安心して住める住宅の質（Quality of Life）とは何かについて公正な情報を調査検討し、今後の阪神地域および我が国の地震に備えた住まいづくりの指針になるものをまとめます。

方法：月1回程度のゼミ（参加者同志の情報交換と討議、まとめ）合計12回程度を予定している。

- 1～3 阪神大震災の木造住宅の崩壊原因の再確認
- 4～6 住宅構法別耐震性と居住性の比較
- 7～9 安心して住める住宅の質とは？
- 10～12 まとめ

申込：（有）宮坂建築事務所（宮坂） F A X 03-3228-4695

データ収集分科会

幹事 宮越喜彦・江原幸壹

目標：大学、各研究機関へも協力を仰ぎ、今我々が、必要としている情報提供および、情報交換を活発に行うことで、実質的な木造のレベルアップを目指します。

- 活動：
1. 既存データの収集・分類
 2. 実務レベルで必要データ作成のための研究
 3. 木造に関する既存文献目録のデータのデジタル化
- ・O C R活用。
- ・T X Tデータ形式、または、データベースなどで、オープンなデータとして一般に公開する事を検討中です。

申込：木住研（宮越） F A X 0424-25-1333

……以上木住考NEWSより転載

Letter from istambul.

早熟の天才詩人アルチュール・ランボオ（1854～91）が、その放浪生活の果てに辿り着いたキプロス島（トロードスのイギリス領事館別荘建築工事に関わりました）を訪ね、またブルーノ・タウト（1880～1938）が晩年の創作意欲を投じたアンカラ（アンカラ大学他）からイスタンブール（オルタキヨイの自邸）の街々をこの眼で確かめることができたのは何よりの歓びでした。

二人ともそれぞれフランスをドイツを追われるように出奔し、異郷の土地に魂の安らぎを求めながらそれでも母国の幻影に終生懊惱したエトランゼでした。またそれだからこそ彼らの生涯は美しく、今日でも光彩を放っているのです。



建築家シナン（1492～1588）の、天上の光と風をその内部空間に優しく包み込んだようなモスクのドームはあまりにも莊厳で、言葉もありません。

この地上に時の流れ以外に永遠などという存在は無いものと合点していた私のような者をも彼の建築（ブルーモスク他）が悠久へと導いてくれました。人間が労働することの慈しみと悲しみをこれほど痛感させてくれる建築がかつてあったでしょうか。少なくとも私のこれまでの旅の途上では、今回のイスタンブールの古建築たちが初めてでした。

光を奪え！ イスタンブールよ、東と西を越えて更なる都市の時代を構築すべく！

W・モリスへの道を歩みつつ

アカンサス建築工房……益子 昇

1995. 6

梅雨に入、こしまい毎日雨が降、こりる様に思えます日々です。気が付けば、毎日ぬれぬれになつて、こりるようと思えるのは良のせい?

(今外部なんですが) と言うことにして!! 今回は引継ぎの説明不足の由なしで、より具体的に、書けるのかな?

まずなしじですが「梨地」と書くをうび、読んでもうん梨地は平らにコテを引きするわけです。かく以前書いた様にコテの心に力がもちらんと伝わる、さなくては塗った壁にコテがくりこんだりかくためと、平滑に仕上げるためにします。この平滑かむつかしく、梨地はコテと壁とを真・平らにしすまない! ひきずる様にコテを運ぶのですが、かく、壁の一部が凹だとコテ痕は平行になりますが、その間に穴みたいにな(因で言う黒い所) 物が出来るやけます。なぜかみの? 凸と思うでしょう。



壁を塗つて升ないヒンヒ采ないひしようか、ユテが壁と真・平らになると壁表面にネタの水分が蒸され、ユテが当たった所は水っぽくなりコテの当たりな所へ穴になつてしまふ所) は梨地する前と変わらず、一旦ひめかるのです。もちろん梨地は平らにユテを引きするわけです。かく以前書いた様にコテの心に力がもちらんと伝わる、さなくては塗った壁にコテがくりこんだりかく凸だつたりするし、そこも引、かかります。左の見極めは、ユテ痕にたまるのがしそうかね? 自分はこうしてますか、ちばみに親方、子方はユテをくいこませる様なことをしてしませんし、最初から平滑に塗れれば梨地をしてもユテ痕は出ないのです。

ちばみに梨地はあくまで梨地がコテ磨きのよ

■世話人会報告 6/15於:中野「喜久」出席者:7名 生活文化同人事務局

1. 第2回大平建築宿について

フローラムが最終決定され、本格的に準備がスタート。(フローラム、参加申込書は別頁参照)

(1) 実行委員会……事務局 「住まいと町設計」 中央区日本橋小網町 1-5-305
TEL:03-3662-6338 FAX:03-3662-6477

委員長 長谷川順持 ホーター 内藤敬介

委員 用具用品責任者:新井 聰 交通運輸責任者:江原久紀

食料調理 " : 大平茂男、奥村茂実 寝具燃料 " : 田島美沙子

会計 " : 岡部知子、石引弘子 紙屋会場 " : 藤谷智史

涉外 " : 斎藤 彰

(2) 今後のスケジュール

・チラシ作成(6月中) 募集(応募締め切り8月末)

・次回世話人会 8/19(土) 7:00PM 於:中野「喜久」

大平建築宿実行委員、同人世話人及び有志の方全員の出席とする。

2. 阪神淡路大震災への義援金について

現地ボランティアとして、積極的に活動しておられる下記2グループに10万円ずつ送金させていただきましたことに決まりました。(すでに送金済みです)

①関西ボランティアの木構造住宅研究所(代表:藤田昌弘) Msの三澤氏も参加

②阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク事務局

連絡先: 〒657 兵庫県神戸市灘区楠丘町 2-5-20

まちづくり(株) コープラン 小林郁雄

3. 7月定例会は「製材現場を見る」をテーマとして、飯能で開催。(詳細は表紙)

■定例会々場交通機関案内

行き 西武池袋線

国際興業バス

帰り

バス停唐竹橋 → 飯能 → 池袋

池袋 → 飯能 → バス停唐竹橋

16:01 発

11:30 発 → 12:14 着 12:25発 → 12:55 着

18:56

*飯能駅北口②のバス停:湯の沢・名栗車庫・名郷行きバス

19:41

バス¥430、タクシー約¥3000

*飯能まで池袋からレッドアロー(乗車券390+特400)で45分。急行で60分。

□編集局通信

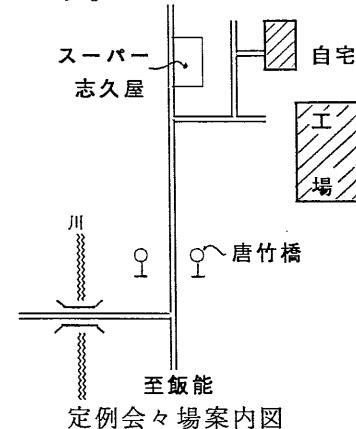
- あいかわらずオウム報道がニュースのトップ。梅雨のうっとおしさもあって、すっきりしない毎日。一昨年ほどではないと言うが、あまり暑くない夏になるらしい。去年のようなことは、勘弁いただきたいが、夏はビールのうまい暑さが良い。(といいながら年中だが)ひと夏ごとにウェストがきつくなるのにはちょっと閉口。飯能でのバー・becueが楽しみ。
- 会報原稿、企画宜しくお願ひします。EメールでもOK
- 毎号原稿締切:奇数月5日
- 会報編集局:

保谷市ひばりが丘1-4-25 メゾン・アルフ 201(〒202)

木住研 宮越喜彦 TEL/FAX 0424-25-1333

CQE02654 @niftyserve.or.jp

*バス停から約3分 100m程度
で進行方向右に立看板が見え
ます。至名栗



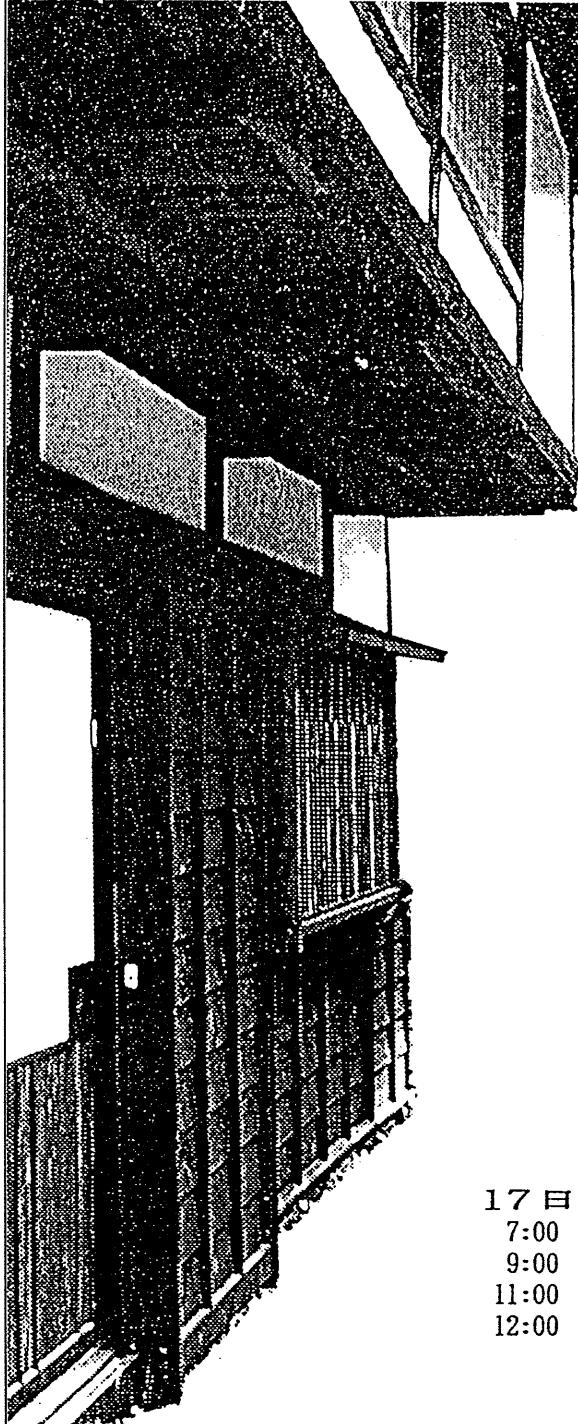
定例会々場案内図

事務局: 〒151 東京都渋谷区代々木4-19-14 ニューハイツ切り通し202号
ATELIER ゆう内 (鈴木久子・吉塚幸雄)
TEL 03-3376-0392 FAX 03-3374-1102

第2回 大平建築宿

おおだいらけんちくじゅく

■ プログラム



15日(金)

- 13:00 現地集合 開宿・宿のガイド
13:30 基調講演
「伝統構法のこれからの方針」
講師：増田一眞（構造設計家）
インタビュア：小林一元
16:30 欣事、夕食
19:30 虫の声を聴く懇親会

16日(土)

- 7:00 起床・朝食・かたづけ
9:00 「大平宿の見方・楽しみ方」
講師：吉田桂二
10:00 大平宿見学
11:30 昼食
13:00 分科会
1.民家と私たちの生活文化
レポーター：野島雅之 サポート：日影良孝
2.輸入材依存と国産材の流通
レポーター：松本昌義 サポート：岡部馨
3.伝統木造架構のこれから展開
レポーター：吉田桂二 サポート：高橋俊和
4.木構法の定量化その実用性
レポーター：田原賢（院） サポート：益子昇
5.大平の自然を楽しむ（トレッキング）
リーダー：羽場崎清人 サブリーダー：岡部知子
16:00 欣事・夕食・片付け
19:30 プレゼンテーションタイム

17日(日)

- 7:00 起床・欣事・片付
9:00 総括会議
11:00 閉宿式、掃除
12:00 解散

第2回大平建築宿開催せまる！

第2回大平建築宿の開催がいよいよせまつきました。すでに、全国から参加申し込みをいただいております。前号に続き、お知らせします。

1. すでに申込み期限は過ぎていますが、引き続き参加応募を受け付けています。「大平」をより多くの方々に体験していただきましょう。申込用紙記入のうえ、事務局までファックスにてお願ひします。
2. 16日夜、「プレゼンテーション・タイム」は、皆さんのが参加してつくる企画です。それぞれが最近テーマとしていること、旅で出会ったこと、新しい活動・・・などについて、お聞かせ下さい。スライドの持参を歓迎します。
3. 高速バス利用の方は各自予約をお願いします。
・予約先 03-5375-2222(東京)／ 0265-24-0007(飯田)

行き 新宿発	— 飯田着	帰り 飯田発	— 新宿着
7:20	11:35	14:00	18:15
(以降 15:00、16:00、17:00			
17:40、18:30 発あり)			

・マイクロバス送迎(飯田市役所前一大平宿)

15日 飯田市役所前発 12:00

17日 大平宿発 12:00(予定)

●大平建築宿事務局

中央区日本橋小網町1-5-305 住まいと町設計内
電話 03-3662-8470 ファックス 03-3662-6338

第2回大平建築宿開催にあたって

吉田 桂二

大平建築宿は、建築を「学」とか「術」としてとらえるのではなく、「実」ととらえての場にしたいと思っています。今年はその第2回、毎年ひらくつもりでいるのですが、その意味は、新しい問題を皆で考えてみようということ、それともうひとつは、この一年にそれぞれが考え行ってきた「実」についてレポートし、皆の実りにしようということがあります。

大平建築宿の内容の企画は、生活文化同人の世話人会や事務局で考え、用意したものですが、それを聞きにくるといった消極的な参加ではなく、自分が考え行ってきたことをこの場で話してみよう、というような積極的な参加を望みたいと思います。

大平建築宿の実りは、内容が計画通りスムーズに終了して得られるものもありますが、誰が何を持ち込んでくるか分からない、そんなものがあればあるほど充実すると思うのです。そうした期待のできる会、期待に心おどらせて参加する会にしてゆきたいものです。

大平は、江戸時代中期に拓かれたに脇・街道の茶屋宿です。残っている家々は、素朴ながら、緩い勾配の板葺石置屋根のシンプルな美しさをもっています。大平建築宿をここで開くことができるのは、集団移住で、無住となったこの村を、ボランティア活動をベースにして守ってきた保存運動の歴史があってのこと、放置しておけば、倒壊してしまった家々を守ってきたからです。大平を造ってきた人達、無住になって以後守ってきた人達、こうした人達に対して私達は、ここで大平建築宿をひらくことができる事を敬意を込めて感謝したいと思います。今年もまた盛会であることを願いつつ、心ある多くの人達が参加されることを期待します。

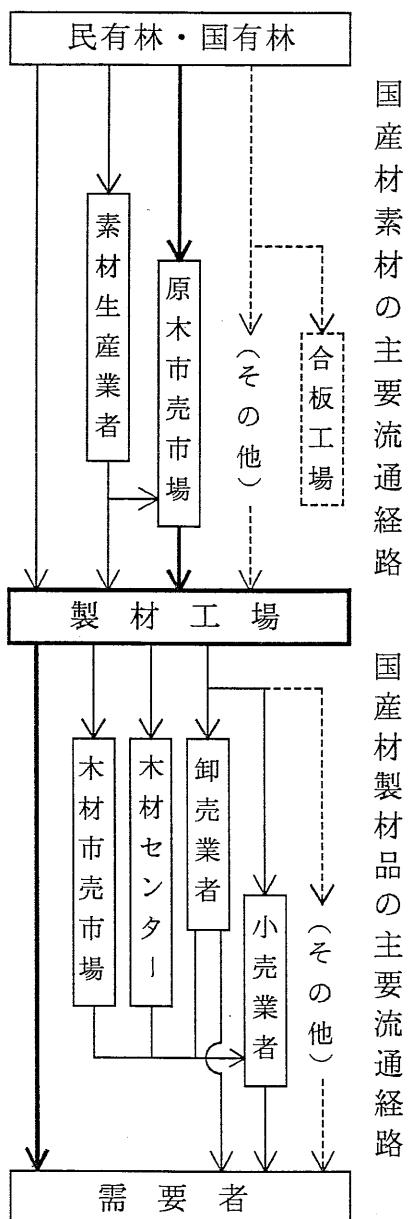
「製材現場を見る」

……顔の見える仕事を……

講 師：岡部隆幸（岡部材木店社長）
世話人：岡部知子

木材の流通の現状

国産材の主要流通経路



岡部材木店は製材業としての思考錯誤の結果、主に内装材としての板材の製品化を中心にして置くことによって、国産材利用の新たな展開の可能性を見い出そうとしている。

原木の製材から内装用板材の製品になるまでの工程の見学に続き、木の流通の話など、普段の設計行為のなかからはなかなか見えてこない辺りの話が多かった。そして今迄の材木屋のように材の売りっぱなしではなく、自ら手をかけた木のゆくえを見守り、その材に係わった人々と顔の見える範囲で情報交換することで、木に対する相互理解が得られ、結局いいものを造り上げていくことにつながるという話は興味深かった。

現在、板材として生産している木の種類はスギ、サワラ、ヒノキ（その他）

その他については、密に各地域の生産者と接点を持ち、その時点で供給可能な材料の情報を常にリサーチしながら取り引きしている。

通常年数がたっている木が高価であるが、板材では節があるかないかでその評価が決まり、需要に対応した価格設定が行われる。



〈西川材〉

飯能周辺で供給される木は江戸時代より西の川を下ってくる材ということで西川材とよばれている。

柱角のとれる程度に育った木を伐っていくことが多く、柱材の产地としても有名であった。

板材を取る丸太としてはここだけでは足りないため、国内の他の地域より仕入れを行っている。

〈プレカットとの連携プレー〉

今までにあるような大量生産型のプレカット工場ではなく、いわば設計士や大工に対応できる一品生産型プレカット工場（飯能にいる、やはりこだわりを持った面白い材木屋さんが自分でプレカット工場を造ってしまった）との連携を模索している。

大工さんがその工場に行き、下小屋のように使う。機械とコンピューターの得意な部分は、それらにまかせて加工してしまう。

木、建築を熟知したものどうしが木組みや加工を考え、手間を機械がこなすというしくみらしい。

工場同志がネットワークをもつことで、利用者は材料の供給が合理的に得られる。

〈主な既成品〉

- ・寸法 長さ 3800. 6尺. 9尺.
巾 4寸. 5寸. 6寸.
厚さ 15mm. 25mm.
- 厚板材 3800×6寸×38mm

- ・用途 床、壁、天井用板材

- ・実（サネ）の種類

本ザネ：室内に適応

合い決り：自由度があるの
で室外にも適

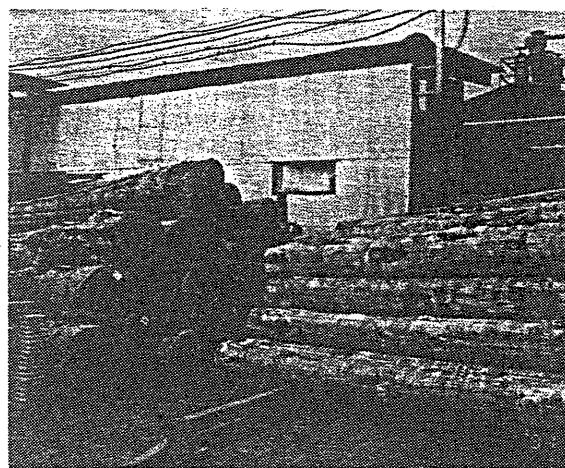
〈38mm 厚材の利用法〉

- ・一枚で床と天井がかねられる。
- ・部屋の間仕切り壁となる。
- ・ドアのかまちとしての利用。
- ・階段材としての利用 等々。

板は厚いというだけでその利用の幅が広がる。もちろんコストも厚ければアップにつながるが、サワラの厚板は、現在お買い得な製品とのお話。（まとめ：石引浩子）

- 製材現場の流れ -

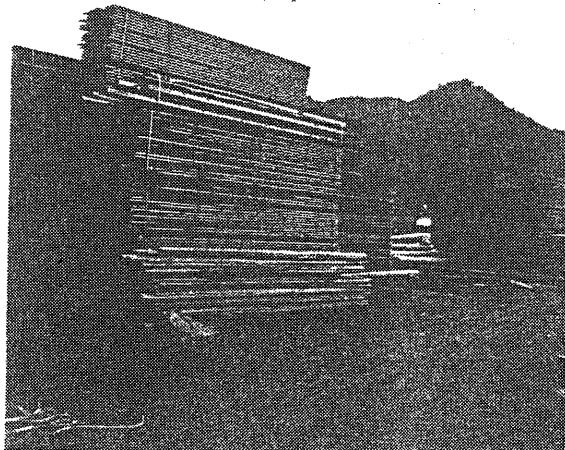
①皮をむいた丸太



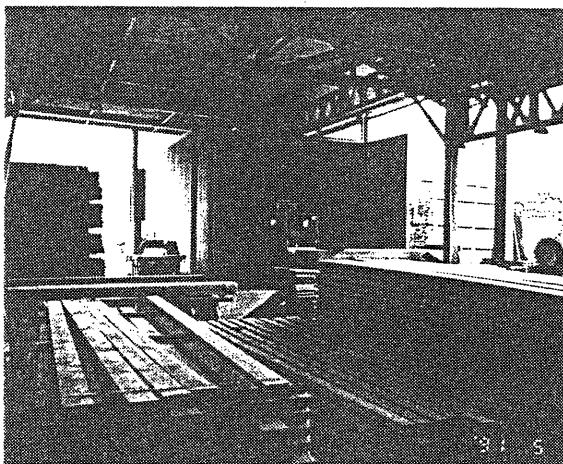
②製材



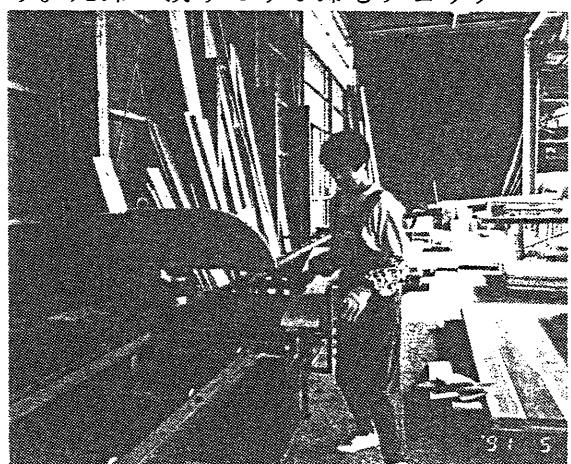
③天然乾燥（3ヶ月以上）



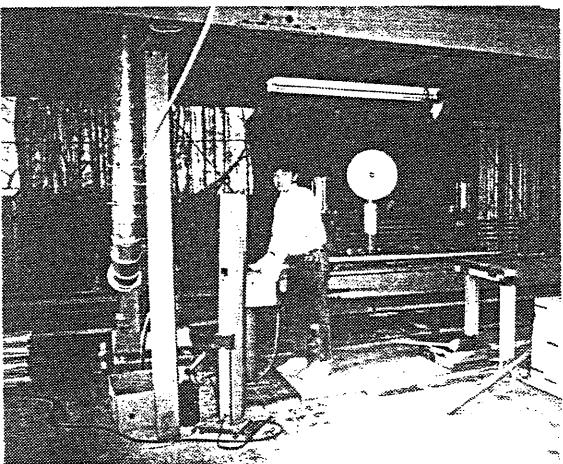
④人工乾燥（含水率10%以下に）



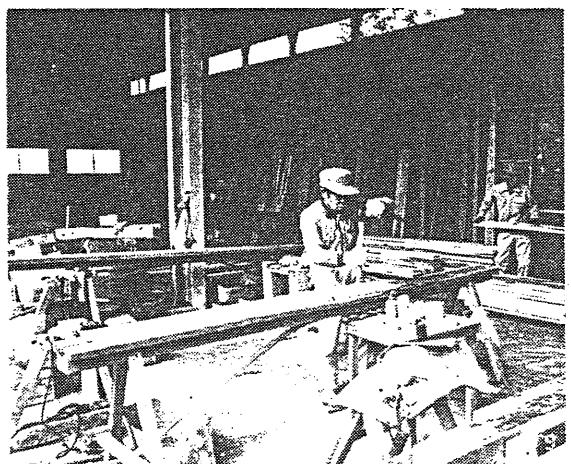
⑤耳摺り後、長さを決めながら板材の仕分け。死節・抜けそうな節もチェック



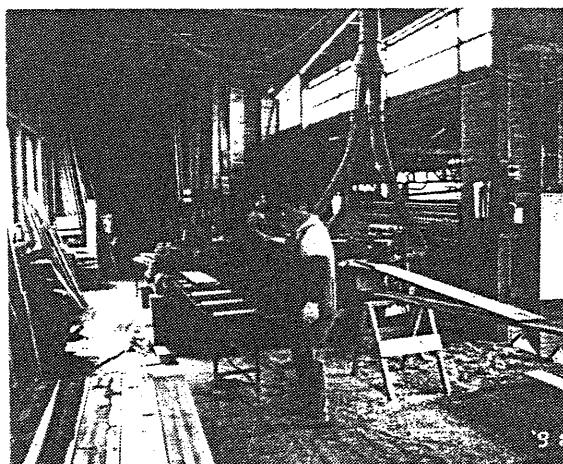
⑥自社開発プレーナーで幅（通り）
を決める



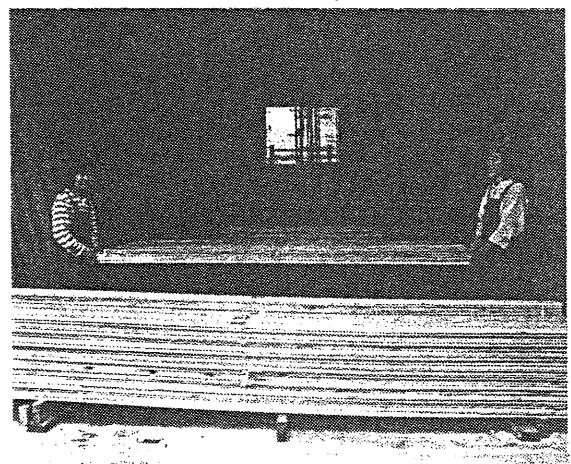
⑦死節・抜けそうな節に穴をあけ檜の枝で
埋木



⑧加工（四面加工・超仕上）
…実や決りをつくる



⑨一枚づつグレード分けした後に結束し出荷する



□ 7月定例会参加者の感想など

若井俊彦 木造住宅を設計するに当たり、使用する木がどういう流通になっているか知ることができた。

宮田信夫 岡部木材店が「こだわり」を持って、製品を作っていることがよくわかるいい会でした。木材が建築の材料、中でも工業製品が多い中で違った位置を持っている。「木材」の特性を忘れた様な「新木材」とでもいうものが、次々新商品として生産されるなかで、この「こだわり」は貴重なことです。

村上優子 離れの階段がとても気に入ってしまいました！作っている時も楽しかったんだろうなと思いました。机もあんなのがなのが自分用に欲しい。

檜とヒバとサワラなど見ただけで材の種類がわかるようになりたいと思いました。（においでおぼえようかと思ったけどくしゃみばっかりでてしまいました。）暑かったけれど、岡部さんが一生懸命に説明して下さったので、とてもおもしろかったです。ときどき吹く風が涼しくてきもちよく、いつもクーラーのきいた部屋にこもりっきりなので新鮮でした。

今回の会報に載っていた「土壁ネット」にも参加したかった。

泉市啓一 突然、一見にてお邪魔させていただき、木を作る現場や生きている木の姿を見られてとても楽しく、かつ参考になりました。

北瀬幹哉 建築の建材（素材）に関する事を、学生はまったくといってよいほどわからないだけに、
(学生) 今回の見学会は初めて見ることばかりで、発見や驚きっぱなしだった。また、素材についてのこだわりも聞けておもしろかった。
学生としては、昔、社会見学といってパン工場などへつれていかれ、パンはこういう過程でできるのだよということがあったように、建築の学生が製材所などを見学することができれば、もっと木造などの建築に興味がわき樂しくなると思いました。

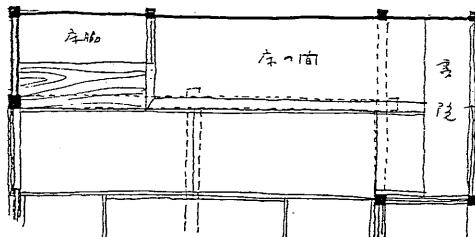
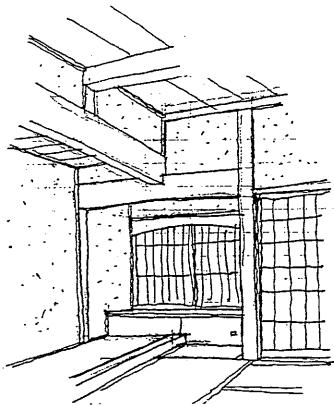
森山ゆき 材木店を実際に見たのは初めてで、それだけでも、材の大きさ、切る時の音など、大迫力でした。木造を真剣に考えて、木の良さを生かすための乾燥の徹底や節を埋める工夫など、とても勉強になりました。当たり前のことかもしれないけれども、それを実行なっさている岡部さんは、とてもまっとうな、格好いい材木屋さんだと思いました。
また、親しみやすい知子さんや、芸術家のカオルさんや、楽しい松本淳くんなど・・・素敵の人々がいて、いいなあと思いました。
仕事が無かった時に鍋敷をつっくて、お祭りの時に売ったり、人にあげたりした苦勞話は大変面白く聞かせて頂きました。それでも自分の道を信じて、軌道に乗ってきて・・・。
すごい！私も頑張ろう。

宮越喜彦 板の内装材へシフトするまでの厳しい時代の話は、初めて聞かせてもらいました。木を扱うことは、まったくきついことだと思います。無駄なく大切に使うように心がけたいと思います。リンゴ型の切り抜きをいただいてきました。
2次会のビールはうまかった。焼き肉の特性タレがこれまたピッリとしていて、養老の滝では味わえない美味しさでした。
8/26NHK朝のニュースの岡部さんは女性レポーターと楽しそうにイスを造っていた。知子さんは不在だったのかしら？

※一部修正してあるものもあります。意図が不十分な場合はご勘弁下さい。

「木造架構の設計手法」 勉強会、女技会で始まる。

講師 吉田桂二氏



差別の手法をつくる床の間へじつけ

今年の4月から隔月で吉田桂二さんに一年間教えていただいています。

そもそもきっかけは、私事ですが昨年初夏、仕事のうえでわからないことを教えていただき桂二さんの事務所をお訪ねしたことから始まります。その時私の図面を見て「女技会のレベルはこんなに低いのか」とあ然とされたそうです。

（私は会の信用を落としてしまった！）そんな人間が設計料をもらって人の家を建てているのはまずいと思われたのでしょうか、その夏の大平建築宿の懇親会の席で、木造の勉強会をやってほしいと会の数人とお願いしたら「いいよ」と気持ちよくひきうけて下さいました。その後お会いするたびに桂二さんのほうからも勉強会に対しての意見をいただき、形が定まってきた。

参加するものは一度も欠席してはならない。宿題は必ず提出すること。講師料はいらない。10人以下ならやらないよ。と言われ、この厳しい条件で何人集まるかという不安もありました。ふたを開けてみたら申し込みは60余名、4月、6月、8月と3回目を終えた今、欠席などの脱落者があり40数名ががんばっています。

授業の内容は、宿題のOHPによる講評、木造架構の勉強、吉田桂二さんの作品のスライドという三部構成で毎回3時間みっちり学んでいます。

年間カリキュラムは以下の通り

4月 架構グリッドプランのオリエンテーションと木造架構の常識。

6月 小屋組のさまざま下って受けることの意味。

8月 寄棟、入母屋、方形を架構デザインでつくる。

10月 軸組、床組の考え方、寸法関係など。

12月 複合架構のオリエンテーション。

2月 複合架構でつくるさまざまな寸法。

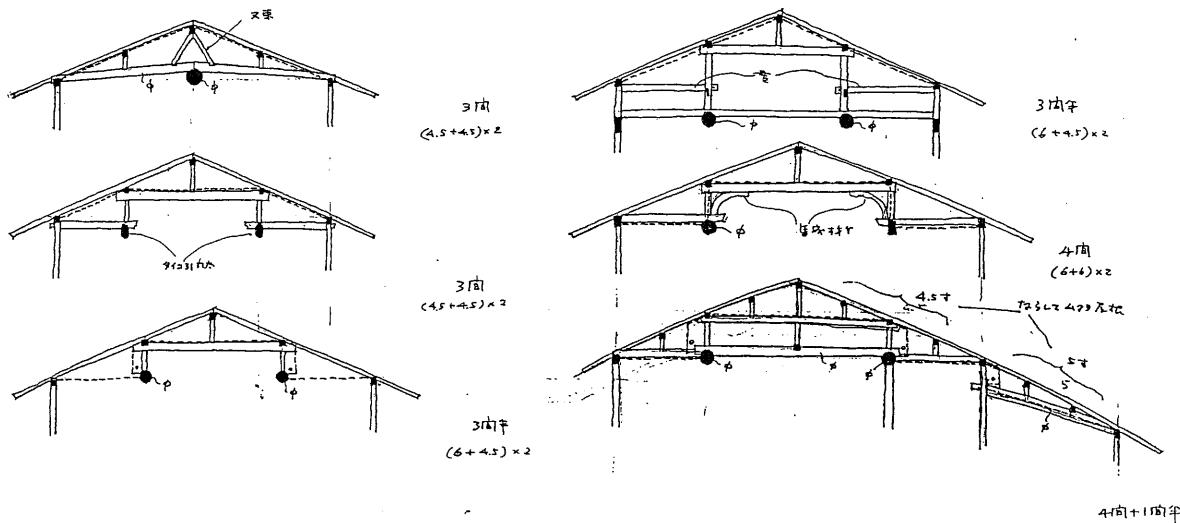
宿題を2回提出したところですが、評価が上下に分かれ中間層が少なくなり、「力の差が出てきたようだね」と桂二さんにいわれました。

女技会には私よりもっと上の人人がたくさんいることがわかつていただけてうれしい限りです。

今まで生活感重視という印象の強かった女技会の中でも、それぞれが仕事を通して目指すものについて語りあえるようになってきました。この勉強会も自分達の技術をお互い高めあえるよい機会になったとおもいます。

一人事務所の私はわからないことひとつのため何日も先に進めないことがあります。だから昨年桂二さんに教えていただき赤の訂正で埋まった図面をかかえて戻ったとき、本当なら恥ずかしいことなのでしょうが、とにかくとてもうれしかったのです。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥とはいうものの、わからないことを教えてもらうのはむづかしいことだと思います。

こんなに多くの参加者が集まつたのも教えてもらいたい思いを皆が抱いていたからでしょう。2月までの授業を大切に楽しみに受けたいと思っています。



注 女性建築技術者の会について（略称 女技会）

ご存じない同人のために少し説明します。

20年前、建築関連の仕事をする女性が集まり会を結成
当事は少数派だった女性も増え、会員は現在約170名
桂二さんに講演をお願いした縁で大平で合宿をしたり
長年にわたって御指導をおねがいしています。
同人の会員もたくさんいます。

西岡まり子

●真夏の天井裏地獄より

－伝統技法研究会の近況報告－ 伊郷吉信

さる8月21日、本郷2丁目の福士邸では、洋館の天井裏の調査が熱っぽく行われていた。天井内に頭を突っ込んだだけで汗が吹き出してくる。体の汗に天井の上に積もった埃がまといつき真っ黒になる。まさしく灼熱の地獄！それでも伝統技法研究会のメンバーはもくもくと作業をこなしてゆく。・・・

福士邸は、旧辻新治男爵邸。明治初期の和洋折衷の洋館と明治後期と思われる洋館がある。（近代建築総覧では明治5年となっていたが・・・？）

東京の地にまだ明治初期の洋館が残っていたとは大発見！これは、ナショナルトラスト見学会下見の折、好奇心から、ちょっとと塀の中を覗いたのが運のつき。早速、伝統技法研究会での調査と相成ったものだ。調査から洋画家、野口弥太郎の生家でもあることも分かった。文化財指定は出来ないものか。

この明治初年の和洋折衷の洋館は、マンション建

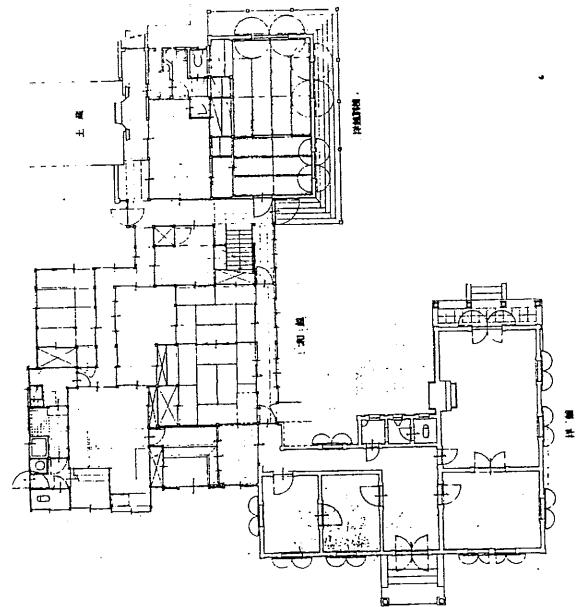
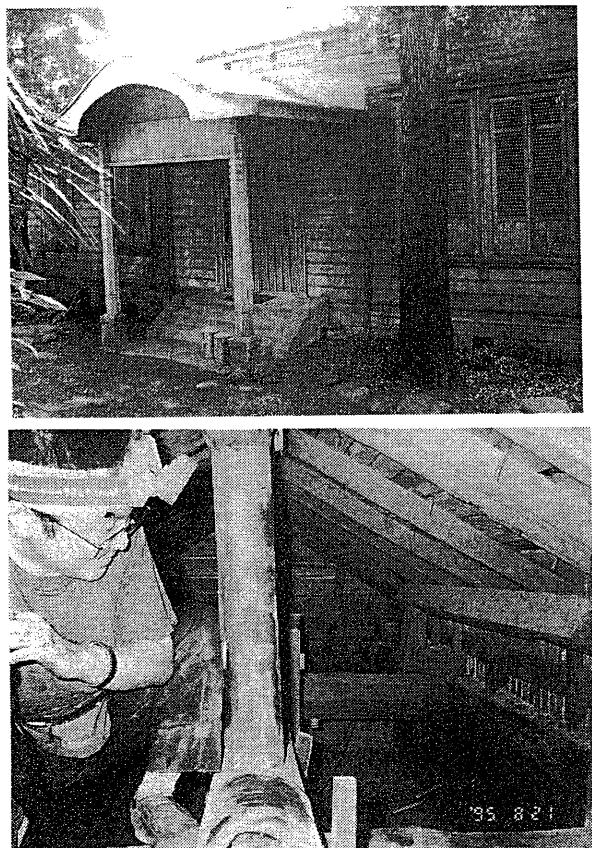
設のため一部、その存続が危ぶまれると聞き、伝統技法研究会では、すぐさま保存へと動き始めた。・・・・・

伝統技法研究会とはどんな会なのかとよく聞かれる。すかさず答えるのは、「保存に対して究めて意識の高い集団なのだ」と・・・。



さて、話はかわり、さる8月22日、千葉県佐倉市、武家屋敷武居家移築のための構造材の解体が始まった。炎天下、梁にさわるだけで焼けたフライパンにさわったように熱い。その梁の上に登り痕跡を丁寧に調べる。頭がふらつく。前日、佐倉では、39°Cの記録的猛暑。それにも、負けず、一心不乱、復元にむけて事実を積み重ねてゆく。

武家屋敷武井家の建築年代は、今のところはっきり判読できないが、居住者は90石前後の小屋敷で



福士邸（旧辻男爵邸）
洋館西面

真夏の天井裏地獄での
調査

福士邸（旧辻男爵邸）
平面図

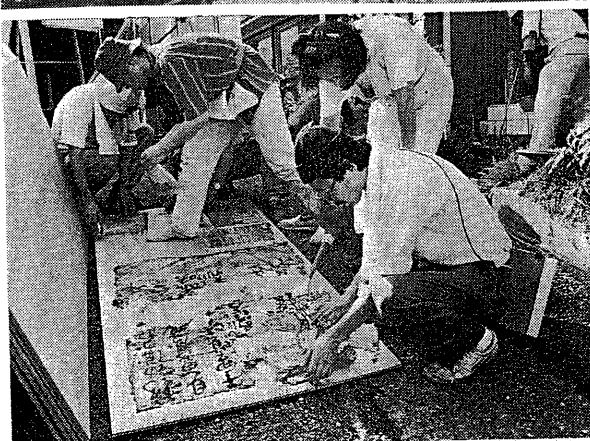
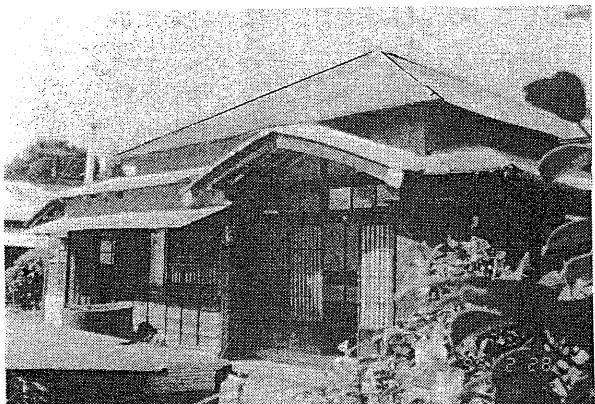
ある。今でこそ、度重なる増改築から最初の形は見えないがあらゆる情報から復元を目指す。

佐倉藩では石高に応じ、広さをはじめ居住に際しての定めが詳細に決められている。これも手掛かりになる。柱に彫られた大工の仕事から新旧を見極め、小屋ばりに残る竹杖から茅葺の屋根の形を推定する。発掘調査から土間の大きさを検証していく。

・・・・

もし伝統技法研究会が評価されるとするなら、事実を探求する姿勢を崩さず民間で調査、修復に携わってきたことだろう。一つ一つの事実を積み重ねて解説してゆく様は、まるで推理小説をひもといてゆくようで楽しい。仲間との推理合戦は病み付きになる。

佐倉の町との関わりは、会の戸張公之助氏が武家屋敷、河原家の復元に携わって以来の長い付き合いになる。去年も藤川本家、新町並調査と続き、今年も秋からは、また新しい調査が予定されている。

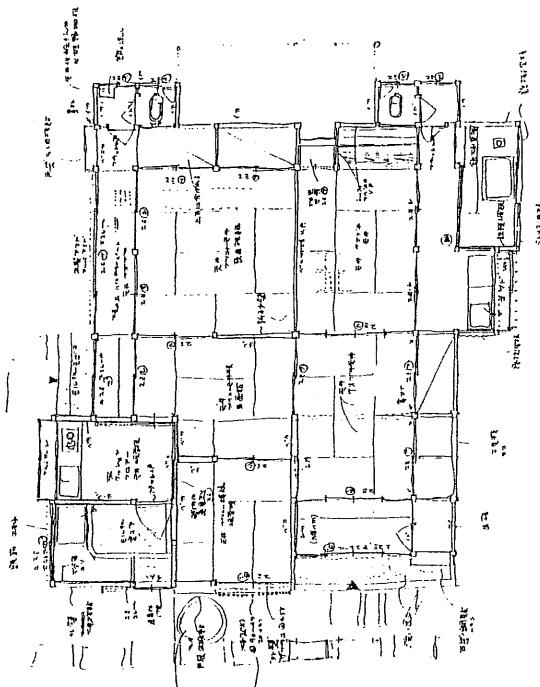


一つの町の歴史ををひもといていくのも、また楽しい作業なのだ。

◇

伝統技法研究会も結成後、足掛け4年目、仲間の古建築に対する見識も高まってきた。幸いなことに今まで、民家、洋館、近代和風、武家屋敷、商家など広範囲な物件と出会い調査に係わることができた。私たちが忘れかけた生活に触れ、過去、日本が通り過ぎてきた歴史のいったんをたどることができたことは大きい。今後、伝統技法研究会がになう役割も大きくなってきた。これまで集めてきたデーター、情報を更に増やし、まとめることも課せられている。町づくりや伝統を生かした建築の設計などにも期待がかかる。伝統技法研究会も新しいステップに向け動きだした感があるこの頃です。・・・・

さて最後に「本当に暑い夏だった！」



解体前の武居家

武居家現況

調査野帖

平面図

壁に塗り込められた古文書を発見、洗う。

米国のティンバーフレーム工法について一その3-

(有)宮坂建築事務所 宮坂 公啓

◇米国における「普請」の事例と「地組み」の効用

前号で紹介した'92年の2月、シアトルのポートタウンゼントにおいてB社とT社の共同で行われたティンバーフレーム・ワークショップ最終日に行なわれた上棟の風景は、私が觀念としては知っていたが、経験として知らなかった「普請」という言葉を改めて私に認識させた。

「ワークショップの皆さん、私はここで皆さんが一つの建物を皆さん之力をあわせて組上げるのを見ることが出来ただけではなく、皆さん一人一人が心を一つにしていくのを見ることが出来た、と言わざるを得ません。普請は元々「志を一つにして共通の目的を達成する」という意味の仏教徒の用語ですが、日本では忘れられつつあるこの言葉をこのワークショップで私は学ぶことができました。「普請」というこの言葉を、皆さんも忘れないで欲しい。」興奮していた私は旅先のこともあるて、大胆にも40~50人の米国人の前で、このようなことを話した。意味は通じたらしく、その夜はB社T社のそれぞれの社長の家族を交えた食事に招待され、東洋と西洋の伝統木造談義は大いに盛り上がった。また、その日を境に私達の交流は深まった。

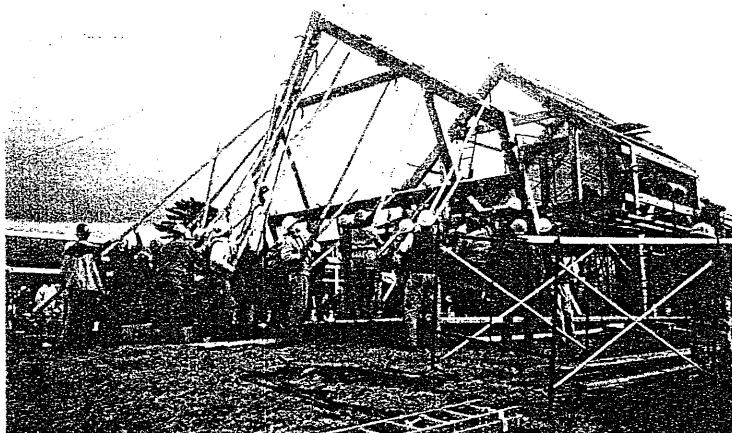
米国で普請という日本の原風景に出会う、などと言うといかにも一旅行者の旅路の風景への思い入れのように聞える。私はそう思って、帰国後もこの印象をまわりの人間に語ることはあまりなかった。第一、普請という言葉がもはや死語に近いわが国で、普請とティンバーフレームの上棟風景を結び付けて話すことはむずかしいし、相手が限られた。机上で分からなかったことが、自分の体験を通じて分かった時ほどうれしいことはない。半年後、B社社長Tedd BensonとT社社長Charles Landauへ、自分の感謝の気持として「木造の継手と仕口：住吉寅七、松井源吾共著」の英語版を贈った。こういう時にこういう本があると有難い。文化交流というと、とかく形式的なものと思われがちで、私自身もそのように思い、その種の交流は苦手であり無縁でもあったが、「知りたい、見たい」と追いかけている内に、いつのまにか自分が異文化交流の中にいることに気が付いた。事実、似ているもの同志を照らし合わせていると、片方だけ見ていては分からなかった事が、相互比較することで両者間の共通項が見えたり、あるいはそれぞのの独自性が見え、対象への興味が更に深まり、次第にその本質に近づく場合がある。

さらに数ヶ月経ち、私の旅路での印象が単に私の思い入れでないことを示す二つの事例に触れることが出来た。一つはギルドが二軒の家を現場で三日間で建てた記録であり、もう一つはB社が中心となって行なった学校の教室の建て替えの記録である。この二つに共通しているのは約400人規模のボランティアがティンバーフレーム工法による地組みと人手によって棟上げをしたことと、その計画および実施活動はBensonの指揮の下に行なわれたことだ。

現場作業三日間で二軒の家を建てたのは'89年の夏のことで、首都ワシントンの北隣、ペンシルバニア州で行われた地元のボランティア団体：Habitat for Humanityとギルドとの合同プロジェクトである。記録はビデオに収められており、'93年の6月に行なわれたギルドの第9回国際会議の会場でもとめた。Habitat for Humanityのふだんの活動は住宅困窮者への住宅の斡旋で、いわば「非営利不動産屋活動」。ビデオに登場する「家に困っている人」の住まいは、日本人の我々からみればどこが困っているのか分

からないほど普通の家であった。だが、プロジェクトの意図は居住環境の質に居住者の所得差が影響しないようにするという Habitat for Humanity の活動理念に基づいている。見方によっては「町中のやや狭いアパートに住む家族」が、ボランティアによって建てられた「郊外の庭付き一戸建て」に引っ越す、というようにも見えるが、この理念は米国の生活の質の高さと、町づくりにおける重要な基本を示唆しているように思えた。一戸約 40 坪の軸組部材は、原寸の施工図が米国各地に点在するギルド会員に配られることで会員一人一人がその刻みに参加出来る。小さな部材を刻んだ者は手で、また、大きな部材を刻んだ者はトラックで部材を現場へ運び、建て方に参加していた。

ここで注目すべきは一戸約 40 坪の木造住宅 2 戸の建設がボランティアによるプロとアマチュア混成の約 400 人以上の人間によって行なわれていることであり、これを可能にしているのは建設方法が伝統的な木造工法と、工業化工法の巧みな併用によっていることがある。つまり、基礎工事、軸組の刻み及び設備工事の配線配管はプロの手で、地組み、建て方および現場での外装、内装工事はプロ、アマ混成で行われた。工業化工法に用いる主要部材はスキンパネルとよぶ外壁および屋根に用いる大型断熱兼用構造材（巾 120 cm × 長さ 600 cm、厚さは 100 ~ 150 cm；（北海道以外の湿度の高い日本での使用は無理があると私は思う。））である。だが、なんといってもこれだけの人数を一致団結させているのは、彼らが Raising と呼ぶ棟上げの手法によるところが大きい。地組みの平面寸法は通常、高さ方向は土台下端より 2 階棟木天端まで、水平方向は建物の梁間または桁行寸法と大きい。したがって、地組みした軸組は相当な重量となり、クレーンを使わずに人手で持ち上げる時に軸組が垂直に建つ手前で各接合部はきしみの音を発し、思わず固唾をのむ。だが、その瞬間、すくと建つその姿は圧巻である。彼らの軸組の断面寸法の大きさは、どうやら風圧や柱間寸法だけから決まっているのではなく、この建て方手法からも決まっているように思う。『組んだ軸組の強度を空中で一度テストすることになる地組みの方法は、耐震的な木造を設計する上で有効な方法の一つです。なぜなら、阪神大震災で起きた地震の揺れはまるで、ざるにすぐわれたドジョウがざるの中で放り上げられた状態に近かったということが調査の結果分かったからです。』木造建築研究フォラムの今年の総会で京都大学講師西澤英和さんの報告を聞いた時、私はティンバーフレームの地組みのもう一つの効用を理解した。（続く）



学校の教室の建て替えの上棟日の風景: Timber Framing No.33 Sep.1994より転載

Photo: Tafi Brown

連続ゼミ 「木構法の変革」に参加して

吉塚 幸雄

今回の連続ゼミ「木構法の変革」は、第一回日本木造技術史、第二回基礎、地業、基盤を終え、定員80名のところ110名を超える参加者があり、盛況のうちにスタートした。

主催者側として、出席者のイスの数が足りるか、毎回心配しているところであるが、今のところ欠席者とのバランスがどれ、ひと安心のこと。

参加者の顔触れは、設計事務所、構造事務所の方々を始め、役所に勤務されている人、工務店や木材業を営む方々など、各分野への確かな広がりと、新たなネットワークができるつつある様に思われる。

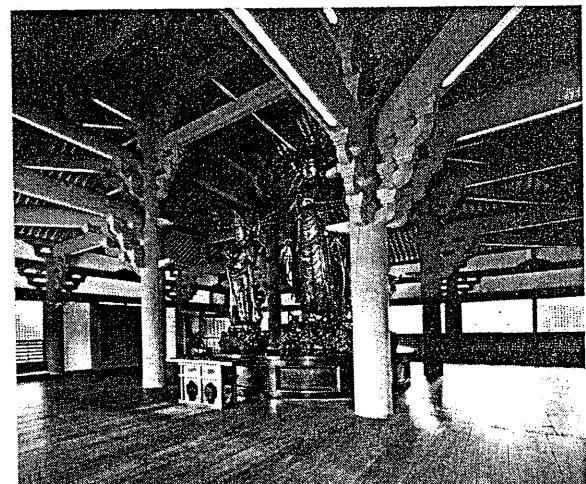
今回のゼミでは、毎回非常に充実したテキストが用意され、それを基に話が進行する。さらに、構造設計に対してかなり苦手意識のある私にとって、いきなり力学から話が始まるのではなく、日本木造技術史つまり世界に誇る木造文化の歴史からスタートしたことで、今までと違った構造設計に対する認識が生まれつつあるという気がする。

毎回用意して下さるテキストを何回も読み返す必要があるだろうし、今後設計していく上でどのような関わり方が生まれてくるか、私の問題意識如何である。

この連続ゼミは、来年の6月まで続く。

付記

昨年の定例会であったろうか、廣瀬鎌二さんが、重源がつくった浄土寺浄土堂をスライドで紹介して下さったが、その時の印象はかなり強烈であった。今回のゼミの中でも、彼の天竺様の様々な建物が紹介され、重源といかなる人物か、気になる存在となつた。



浄土寺浄土堂

9/1（防災の日）第三回シンポジウムが池袋東京芸術劇場にて72名の参加を得て開かれました。

「阪神大震災・木造住宅調査報告会—木造住宅の耐震性について」をテーマに関西より木構造住宅研究所のメンバー

藤田宣紀（藤田宣紀建築設計事務所）さん

土井 正（大阪市立大学講師）さん

村上雅英（近畿大学理工学部建築学科講師）さん

三澤文子（Ms建築設計事務所）さん

田原 賢（田原建築設計事務所）さん

5名の皆さんをお迎えして、震災による木造住宅の被災状況の詳細な調査報告と現在の状況の報告をしていただきました。

当日は、皆さんの作られた「頑丈で長持ちする住まいの耐震診断チェックブック」もテキストとして使われました。（前号で紹介）

今回の震災による木造住宅の被災状況をまさにその場で体験された方からの直接のお話で、1.17を再び確認させられました。

- ・東灘西部地区の約2,000棟の全数調査報告。
- ・建築年数、建築規模と被害状況との関係
- ・工法の変遷と被害状況との関係。
- ・法46条の筋違いの評価をどう考えるか。壁量。柱脚部の現状と考え方。
- ・蟻害のある建物はすべて大きな被害を受けている。
- ・現在2×4や輸入住宅が増加。
- ・新築されている軸組工法の住宅が、必ずしも震災を教訓としているものも見受けられる。
- ・地元の杉材を使った仮設住宅などなどの報告でした。

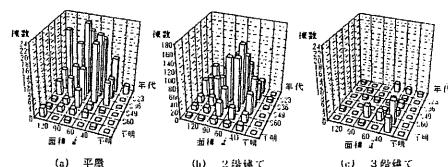


図-3 在来軸組構法による戸建て住宅の建築年代と建築面積の分布

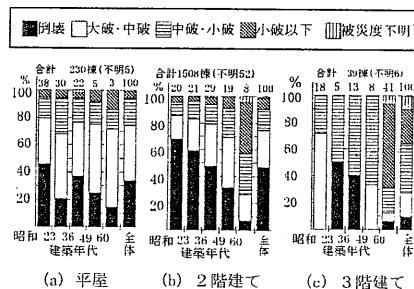


図-4 在来軸組構法による戸建て木造住宅の階数毎の建築年代と被害程度の分布

震災から7ヶ月以上経過しましたが、まだまだ大変な状況は変わってはいません。それぞれの方の思いが大きいためにしかたのないことでしたが、最後は時間が足らずに押せ押せになってしまいました。

会場から多数の質問も寄せられ、それに対する応答も充実したものとなりました。できれば、もう少し今の話が聞きたかったと思いましたが、新たな機会を設けていただきたいと思います。

今回のシンポをきっかけに木構研と木住考の連携も期待されます。

※関連情報 木造建築研究フォラム研究集会が10/28(土)和歌山にて開催。

「解法的かつ耐震的な木造住宅つくるための方法」をテーマに、有志グループによる構法提案とそれらに対しての問題点の抽出を行ながら、これから木造住宅への可能性を探る。同人有志の参加も乞う。

演劇人と二人展をします

長谷川順持（同人世話人）

事務所を開いて半年少々立ちました。ほとんど趣味のようにバタバタしてますと、やはりバタバタとポン友の劇作家が飛び込んできたと思って下さい。かなり彼も売れてきてお忙しの毎日。それでも「なにかいっしょにやろう」と彼。その表情見れば、創造を食べていれば飯もいらない風だけど、いっぽう私はご飯が大好きです。「お前とやりたいんだあ」そんなセリフ言われたものだから、とたんにスケッチ始めます。

さて、与えられたスペースはいわゆるギャラリーです。真っ白な箱。ギャラリーってなんだろうあたりから始めなければならないようです。んで、以下わたしのコンセプト。

1. ギャラリーとは〔見に行く場所〕という感覚から〔自分も使える場所〕なのだと感じてくれればなあ。
2. だからできるだけお金をかけてません。
3. 河原の石と（これは河原にもどします）縄と（これは事務所で梱包用に使います）紙で（自分のアパートのショウジ紙に再生利用）構成。できるだけゴミは出しません。（一部所員の本棚に変身）
4. そして、演劇人二瓶氏のつくるパフォーマンスと映像に戦い的ハーモニーラ致しまス。

表現手段は違うけれど〔人と人の交流の場〕をカタチにする仕事の二人。お時間調整の上おいでください。午後4時以降はいるつもりです。（いなかつたらすいません）以下、プログラムとふたりのプロフィールなど記します。

■二瓶龍彦■

劇作家、演出家。

TOTAL THEATRE 二瓶館、主宰。

演劇を等身大の人との出会いの場としてとらえ、野外、魔映画館、プラネタリウム、寺院等、劇場の枠を越え、且つ演劇の枠さえ越えて様々なアーティストとともに、コミュニケーションの新しい在り方を追及。

91年、92年「カイロ国際実演劇祭」に、日本から初めて招請を受ける。

モダンダンスの台本・演出も手がける。95年よりソロパフォーマー波瀬満子のステージを共同演出。

新聞、雑誌に演劇論等を多数発表。

その他、実験文芸誌の創刊など、多面的な活動を展開。

現在、ホロコーストを扱った作品でワールドツアーの準備中。

■長谷川順持■

町

一級建築士。住まいと街設計（有）代表
インテラクティブをコンセプトに、生活空間を間とし
てとらえ、生活者主体の空間づくりを設計理念とする。
建築設計と共に教育・講演活動を展開。

「街に住む」をテーマに自らの住まう地域で文化活動
に参画する。

*「居住新時代の木造住宅」奈良住協実施設計競技

グランプリ 建設大臣賞受賞

食

*「地域に根差す教育施設」日本建築学界設計競技
関東エリア一等入選

*国際建築アカデミーインターナショナルフォーラム

フォーラム賞（共同作品）

【著書】「見知らぬ町の見知らぬ住まい」（共著）

「間取りの達人」（共著出版予定）

以上彭国社

GALLERY SURGE
〒101 東京都千代田区岩本町2-7-13

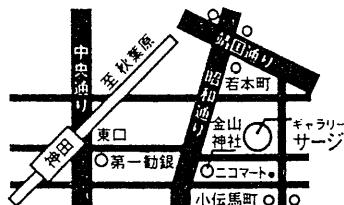
渡辺ビル1F

Watanabe Bldg., 1F

2-7-13 Iwamoto-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 101

TEL 03-3861-2581

FAX 03-3861-2582



■PERFORMANCE■

祈りの終わりから～遠い國の人への手紙

9/11【月】▶14【木】7:00pm/15【金】▶16【土】4:00pm

◎作・演出・構成／二瓶龍彦

◎音楽／唐沢豊光◎照明、衣装／小山切雅夫+二瓶龍彦

◎CAST／須田真己・小澤恵美子・松下アユミ・RYUSA

夏も終わりには、出来ましたか、振返つて見るに現場が伊香保と言ふ高冷地、たせいか、暑さは身に沁みず昨年の様に熱射病等にならず普段通りに仕事をしました。友人の大工曰く、今年はおちいせぐら小屋裏の断熱入山は地獄と、こうしゃねぐら山だとうべく、平地の現場の方々すみません。でもヒールはつまいで取れづらづらめで今回、鏡モニ上塗、示壁聚樂へ現代風(ひ行)こなれ。

なぜ現代風と言うに既製品の示壁を塗るから云して、本業は瓦工、ミシニスバタ(ウラボト)砂、のり(コマツ)のまた(セキ)で水でぬるのですか、今一般的には既製品の袋を破り、付属品のリーメントース?セキでぬるんで、これがたれたりテに集中してたれたりコテ板が斜めになつてしまひ、エタを床に全部落した経験も數回……モノタレを塗る時は今までたまに……あくなされてもこつかりまして、ネタの丁度良いかたを一度で出さなくてはダメ(ハラ)が出来てしまひます。まじょう、今回一人まですません。

1. 第2回大平建築宿 (今回の会報で最終募集)

- 申込状況報告…8/19現在約80名。当日は100名前後と推測。

……まだ申し込みをされていない方は、大平建築宿事務局までお問い合わせください。

- 宿泊棟6棟…藤屋・△おおくらや・下紙屋・からまつや・満寿屋・おおくらや

- ・第3分科会「伝統木造架構のこれから」(イエ-タ-吉田桂二さん)のサ-タ-を5月の定例会で講師をしていただいた大工・高橋俊和さんに最終決定。

……吉田さん設計、高橋さん施工の住宅も完成間近。ふたりの掛け合いが楽しみ!

2. 11月定例会について (11月10日(金)を予定)

テーマは「和紙の話」を予定しています。世話人、住建・植久さん。

3. 総会兼忘年会

岡部さんより提案のあった総会の日時を決めました。

12/15(金) 飯田橋セントラルプラザ会議室 の予定。詳細は次回会報にて。

4. 内子町のHOPE計画の報告

「HOPE(Housing with Proper Environment)計画」(建設省)は、その地域の住環境および現状分析をしながら、その地域にふさわしい住環境整備の計画をするプロジェクトです。

今回、内子町では吉田桂二さんが幹事をして、大江健三郎氏の生家のある大瀬で、具体的な計画を進めることになりました。内容は、今ある町屋の改修、新しい町屋の提案などを核とした住環境の創造だそうです。

町屋の間取りなど事前調査も必要になるでしょう。同人の有志が参加することも考えられています。

□編集局通信

- とうとう今年は、気象庁始まって以来の暑さになってしまった。去年より暑かったらしいが、水不足の心配がないぐらい雨も降った。むしろ、雨の被害が深刻だった。天変地異や凶悪犯罪、とんでもないことが続けざまに起こる。レッズが6点も取って首位になったことは、つかの間の夢であったが、まだこれから…福田は得点王になれるか!

- 秋の大平宿。昨年に引き続き盛り上がりそうだ。今年は、参加できず残念(;;;)。

- 会報原稿、企画宜しくお願ひします。

毎号原稿締切:奇数月5日 Eメールも可
会報編集局:

〒202 保谷市ひばりが丘1-4-25 メゾン・アルプ201
木住研 宮越喜彦 TEL/FAX 0424-25-1333
CQE02654 @niftyserve.or.jp

5. 次回世話人会は

10/6(金) 7:00PM

於: 中野・喜久

多数の参加と活発な
議論・提案をお願い
します。



事務局: 〒151 東京都渋谷区代々木4-19-14 ニューハイツ切り通し202号
ATELIERゆう内 (鈴木久子・吉塚幸雄)
TEL 03-3376-0392 FAX 03-3374-1102

□定例会 95/11/16 (木) 6:30~8:30PM 建設実務専門学校（池袋）601教室
TEL:03-3986-3239(大倉)

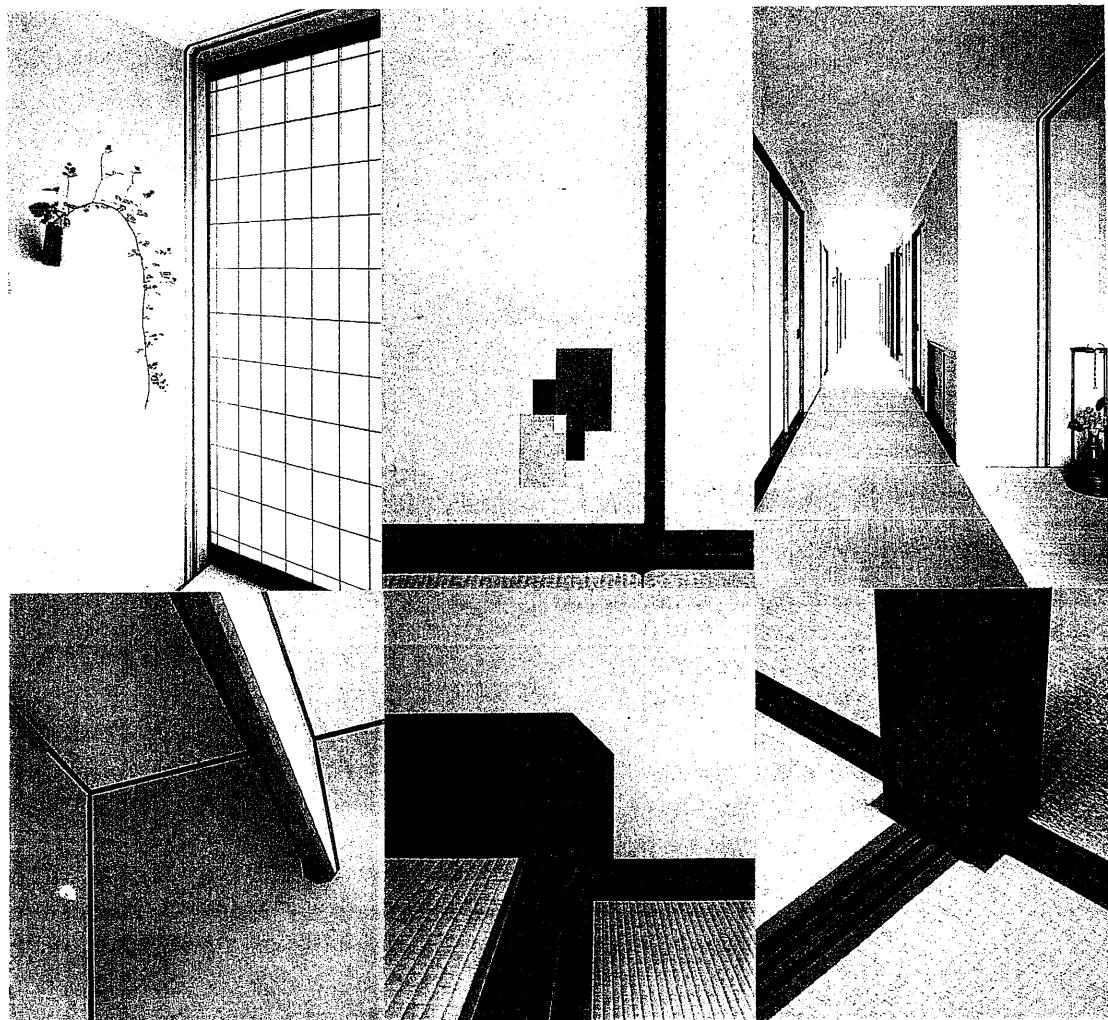
和紙・五色が彩る空間－西ノ内・紙漉屋の家から和紙を語る

床・天井がすべて和紙貼り

タタミの縁も紙布である。

そのやわらかな空間を聞く。

講師：中村昌平（建築家）／世話人：植久哲男



写真：本木誠一

第2回大平建築宿を終えて



台風の影響による雨に見舞われながらも、今年もまた100人を超える多くの方々の参加と協力のもと、盛大かつ有意義に建築宿を終えることができた。

今回は、「私たちの生活文化ー過去と未来」をテーマに掲げての開催であったが、大平をひとつの原点としながら、より未来へ向けた木造建築のありかたを探ることができたように思う。増田先生や吉田先生をはじめとした分科会のリポーターの方々の実践を通しての話は、実に貴重で、大いに元気と勇気を与えてくれるものであった。

それぞれが試行錯誤しながらも、何かを「私たち」にしていく。そして、それを、「大平建築宿」の場において大いに互いに交換し合い、パワーとしていく。これからも建築宿はもっともっとおもしろくなるにちがいない。

そして、「大平」はいつでも力強く、やさしく私たちを迎え入れてくれるだろう。

大平建築宿事務局 内藤 敬介

●参加された方々からの感想やスケッチをご紹介します

古 来からの技法、また建築そのものにひかれ、それらを取り込む事に真剣になっている人達の存在を知り、出会えた事は、自分にとって大きな励みとなりました。建築の世界の中では少数派ではありますが、またその手法も確立かれていらないながらも、みんな試行錯誤しながらやっているんだという言葉が印象に残っています。

次回も是非参加させて頂きたいと思いますが、参加者の皆さんのお実際の取り組み方や、考え方なども聞く機会がもっとあればと思います。

増田 拓史

かつての宿場町が、今、大勢の人達の努力で復元されて、静かにたたずんでいる。それが、夏の間、多数の合宿や旅行先として利用され、交歓学習の場として活かされている明らかに限られた予算だと見てとれる工夫の様子と活かされ方に、妙に感激して幸せな気持ちのひとときでした。

昨年の様子を聞いていたので、是非今年こそと思いつつ、しかし雑務に追われて、でも思い切って参加して楽しい経験をさせていただきました。ありがとうございました。

設備の整わない昔の暮らしを味わえるのもお役を引き受けた方々のおかげですね。食べることの大変さとありがたさを再認識したひとときもありました。もっと全員参加を徹底して持ち寄りをしてよかったかも。多少ひもじいのも面白かったです。

木村 真理子

今年ありがとうございました。

私にとって大平は、「風景」を考える場にしようと考えておりました。自分のことばとしてまだまだまとまっていますが現時点の総括として『藁にもどせという意味ではなく、一つの事象について多層性を意識することが大切だろう。美しい山の写真には写っていないなくても、そこには下草を刈る人も、ゴミを拾う人もいる。そうした相対化をほどこしてこそ、風景はあらわれるのではないか』（柳田国男）という引用文で御勘弁下さい。そしてこのことばは、第1回建築宿での『美しさとは記憶である』（吉田桂二）ということばとどこか似ているのではと感じはじめております。

来年も宜しくお願ひ申し上げます。

盛口 正昭（景観模型工房）

大平建築宿に2回目の参加となりました。

前回同様、二人の子連れ参加でした。建築も何もわからない私が、建築宿に参加しようと思うのは、日本人が昔から住み、文化をつくってきた集落がそのまま残っている大平に郷愁の念をもつからです。都会育ちのこどもたちが、日本のふるさとをこの大平で心に残してくれるならとてもうれしいです。

つい最近までにぎやかな集落であった大平。たった30年程の間に、大平だけでなく、日本全体の生活様式がこんなにかわってしまうものなのでしょうか。

大平の一日は、朝のかまどの煙に始まり、いろいろを囲む夜長の集いに終わる。ここ的生活は、日本人の生活の原点です。

最後に、大平宿に参加された女性の方の元気のこと。気持ちよかったです。そのパワーをみならって、私も元気のいい、楽しい女になろう！

盛口 尚子

9月16、17日は台風が接近し、一日中雨。

最終日の早朝、旧大平小学校の周りを散策。

人の姿を期待したが、沈黙以外のなんの反応も無し。



私は初めての大平で、たいへん有意義な2泊3日でした。このような場を与えてくださった吉田先生を始め世話をの方々や大平の自然に感謝しています。

来年はまた新たな気持ちで参加できるように、この1年を頑張りたいと思います。

15.9.17.
大平宿（旧小学校）

95年10月20日

森本照明

米と水と火に学んだ二泊三日

「牛に引かれて善光寺参り」ではないけれど、「アトリエゆう」の鈴木久子さんと吉塚幸雄さんに誘われ大平へと出掛けた次第。連休突入のその日、雨の新宿西口は居並ぶ大型バスの間をぬっての発車7時。ラジオからは中央道渋滞の情報が聞こえてくる中、その情報通りに車の速度計の針は0に近付き、もう諏訪湖が見えるかと思う頃やっと八王子の文字を目にする。この先どうなることかと思いはじめのも無理はないが、いやいや事故に遭遇せずに無事飯田で蕎麦を食う事だけを思いつつ、走るに連れて雨足弱くなりやがて雲の切れ間より時折覗く晴間に、近付く台風気にもならず、あきらめか居直りかの境もつかず。そうこうしているうちに30km近い渋滞の罠から抜け出したのをこれ幸いと、車を急がせ諏訪湖もあっという間の眺めとなる。平日ならばもう昼休みも終わったという時間、かの大平では建築宿の開宿の時既に過ぎているものの、こうなったら心おちつけ腹ごしらえが肝心と、車中後ろの席での居眠りの夢にも出て来た飯田の蕎麦をやっとの思いで口にした。腹の皮突っ張り、瞼の皮が緩む心地良さ、太古からの人の常。基調講演始まるころにやってくる眠気と戦う事思い、胸突き八丁通り過ぎ、やっと着いた大平。

というような訳で、大平での2泊3日がスタートした。講演、分科会はなかなか興味深いものがあって、今後が期待されるところである。また、懇親会、その後の宿での語り合いも好メンバーのお陰か随分と有意義なものであったと言える。しかしながら言っても最高の時間は子供のころを思い出しての飯炊きに興じ、炊きたての飯を大家族(?)でいたいたことに尽きる。いろんな集まりが回を経ることに求心的になって仲良しグループに変身して行く中、少なくともこの集まりには内に籠ることなく遠心的に外に展びて殻を壊す生き物に成長してほしいと生意気ながら願っている。来年もまた米と土・木・火・水・風に学びたいと思う今日この頃。

井上 祐一

(自由学園明日館の保存を考える会会員)

単

なる木造を普及させるためのフォーラムだろう。ぐらいの気持ちで参加しました。その手の講義なら、こちらの方でもよくありましたから。しかしながら、ここでは木造のまったく違うことばかりのお話でした。木造についてはなにも知らないことが多く、すべてのお話しが新鮮でした。さらに、日頃疑問に思っていたことを。ズバリ回答をいただいた気持ちでした。(疑問というのは、たとえば、軸組工法はツーバイフォーより構造的に劣っているのだろうか?仕口というのは当てにはならないので、金物でしっかり繋結しなければならないのだろうか?日本の工法はなぜ否定されているのだろうか。このまま伝統的な架構を失い、日本的な生活を失い、お箸も使わなくなり、日本語もろくに話せなくなり、日本人はこれでよいのか?などなど。また、私は両親が建設会社を営んでいるのでその手伝いをしているのですが、祖父の代からいる大工さんによくこぼされるのです。「住金の仕様通りに造らなければいけないって、ボルトで孔をボコボコ空ければ、(耐力の)もつものももたなくなるよ。」)

伝統構法という構法があったんだ。驚きと感激でした。

まだまだ、思うところはいっぱいあります。しかし、ここで学ばせていただいたことを、帰って実践に移せるか、というと、やはり私には出来ないです。そんな現実に還ると、とても落胆してしまいます。「今の私にできることってなにかしら?」今、それが課題です。

橋本佳代子



～大平建築宿に参加して～

□勝見紀子（連合設計社市谷建築事務所）

出掛ける数日前、受け取ったプログラムをめくっていると最後のページ参加者の部屋割リストの私の名前の前に黒い四角マークが付いているのに気づく。おおくらやの食事担当責任者？。家でいつも食事を作らないと文句を言われているこの私がよりによって食事担当者とは！。せめて清掃担当者だったらよかったですのに。材料を前に右往左往する自分が姿が目に浮かぶ。という半ば恨めしい気持ちで2年ぶりに訪れる事になる大平宿。飯田からの峠越えではあたりに霧が立ち込めており、身を乗り出しハンドルにかじりつきながらの運転だった。それでも大平宿に近付くにつれ霧は晴れ、快晴とは言えないまでも上々の天気。まず水道屋のこじんまりとした併まいが目に入る。地下の風呂場が売り物の水道屋、今回このお風呂は焚かれるのだろうかと思いつながら車を駐車場へ。去年の第一回に引きつづき駐車場係をおおせ付かっているというシャガンの江原君が退屈そうに入り口の石の上に座っていた。

11時半現在到着している人はまだ少ない。カメラ片手に一軒一軒を見上げながら街道を歩く二三の人とすれ違いながらおおくらやに荷物を置きに行った。通り沿いの引き戸をガラッと開けると中は真っ暗。誰もいない中に足を踏み入れると古民家を訪れたときに最初に嗅ぐ例のにおいに満ち満ちていた。一瞬、ナカノマから襖を開けて誰かが出て来そうな気がするが思い過ごし。街道側から面格子を通して土間に差し込む薄明かりで目が慣れてくると内部の様子が見えてくる。町屋によくみられる通り土間とは違い大平の土間は前土間形式。ここおおくらやもその典型で、六間間口の前土間とイロリのあるヒロマが通りに面し一体の空間になっており、横広がりのボリュームを感じさせる。私の気掛かりの台所もこの前土間の一隅に位置しており土足で使うタイプのもの。二つのカマドと大きめのナガシ。他にもイロリで煮炊きができるし、道を挟んだイドッカワでは野菜が洗える。ここが三日間20余名分の食事作り（もちろん私一人で作るわけではありませんが）の奮闘の場となるわけ。

12時すぎ、からまつやの前に机を持ち出し受付開始。いつものメンバー、久しぶりの顔、初めての顔、続々と人がやってくる。しかし連休の初日とあって、高速バスが渋滞にあっているらしく、吉田桂二さんはじめたくさんの人達の到着が遅れている。1時開始予定が2時にずれこんでの第2回大平建築宿開宿式となった。基調講演は構造設計家増田一真先生の『伝統工法のこれからの方針』。理論に裏付けられた木構造の美を実現されている様子をスライド写真と架構パースで紹介された。参加者は、自分の仕事との接点を見いだした人、初めて伝統工法というものに触れ一般の在来工法とは区別されるこの世界を知った人等いろいろであったと思う。

講演のあとはいよいよ夕食作り。大平鍋と称する味噌仕立てのいわゆるごった煮がメインディッシュ。食材調達部隊が揃えてくれた材料をそれぞれの宿に持ち帰り、薪割りからはじめイロリとカマドの火おこし、米磨ぎ、野菜の皮むきなど全員がなんらかの役割を担い一時間以上かけての作業。20数名分のご飯はいったい米を何合炊けばよいのやらわからず計量カップも無いしで悩んだり、薪の火おこしが思ったほどうまくいかず火加減の調節がこれまたむずかしいときて、皆で悪戦苦闘した。それでもなんとか作り終え、殆どが初対面のメンバーが20数名卓を囲んで食べ始め自己紹介を終えたころには皆の間に妙な連帯感が生まれていたと思う。おおくらやの投宿者は設計事務所勤務、大手ゼネコン設計部、大学教授、大工さん、インテリアデザイナー、家具作家、ステンドグラス作家、模型作家、学生さんと様々で大平建築宿の層の厚さに感心した。

2日目、私は第二分科会の『輸入材依存と国産材の問題』に参加。話の内容もさることながらレポーターの松本さんとサポートーの岡部さんとの掛け合い漫才のようなやりとりがおかしく“樹種当てクイズ”という企画のときは皆大いに盛り上がった。この日も夜は下紙屋に集まっての懇親会。部屋一杯にいくつもの話の輪ができるであちらこちらで酒盛り。隅の方では眠くなった人が寝袋に潜り込み寝ているという光景が夜中の3時過まで繰り広げられた。

3日目の朝、閉宿式で再び皆が下紙屋に集まる。吉田桂二さんの「去年より一層まとまりのある会になったとおもう」の言葉に皆の顔も満足げであった。これから1年各々が自分の場所で力を振るい、1年後またこの大平宿に集い、自分がやってきたことや目指すものを語り合い、また次の年の糧にするという繋がりが今後も続いていくことを願い大平宿を後にした。

大平建築塾に参加して

「テレビないんだよね。」と言う小三の娘を誘い、大平に行ったのはこれで2回目。2年前と今年では娘の色々な意識にも違いがみられ、母親としては面白く、そしてうれしくそれを見た。寒くてもスイッチ一つで暖かくならない、普段入らないボッタソ便所、寒いお風呂、ガラスのないガラス戸。一つ一つに驚き、面白みを感じた。大勢で食事をし、お風呂にはいり、皆で並んでねむった3日間。学校を一日休ませちゃったけど、後悔はない。来年はもっと大平を楽しませてやりたいと思う私。他のお母さんもそう思ったと思う。

今回子連れで来なかつた人も「次は」と思う集まりになればうれしい。

今回は岡部の弟も参加、木の話をさせていただいた。きっと木の見える家で育っていないだろうなと思われるような若者たちも、木材というものに感心をもつているということがわかって嬉しく思えた。

建築塾解散後は10名ぐらいで、妻籠と奈良井を廻った。そして、妻籠の民家の材木がサワラである事がわかつた。ここが建てられた頃、平民は桧を使用してはいけなかつたらしい。それで木目が似てゐるのでそれを使用したのか、この辺に沢山あつたからなのか、確かめた訳ではないからわからないが。

サワラといえば見た目にきれいなので、内装材としてウチの商品にもあるが、構造材まで全部サワラというのは今の時代あまり聞かない。

それは、サワラが軟らかいからだと思うが、しかし、それなりに太さを持たせれば当然強度は増すわけだからサワラの家だって、長い時代を生きられたわけだ。

(サワラは風呂桶にも使ってたぐらい、腐りにくかったから残つたのかも)

そして、それが地域の特色にもなってきたのかなと思う。

それと驚いたのは、雨どいが木でできていたということ。何年もつのかな?と思ったが、木を腐らせない条件の中に「濡れたら、乾くように作る。」というのがあるが、表に出てゐる物だから案外持つたのかもしれない。

屋根の石どめが腐った場合取り換え易い様な工夫もされていた。

昔、家を建てたり、物を作ったりする場合、一番木を頼りにしていた日本。

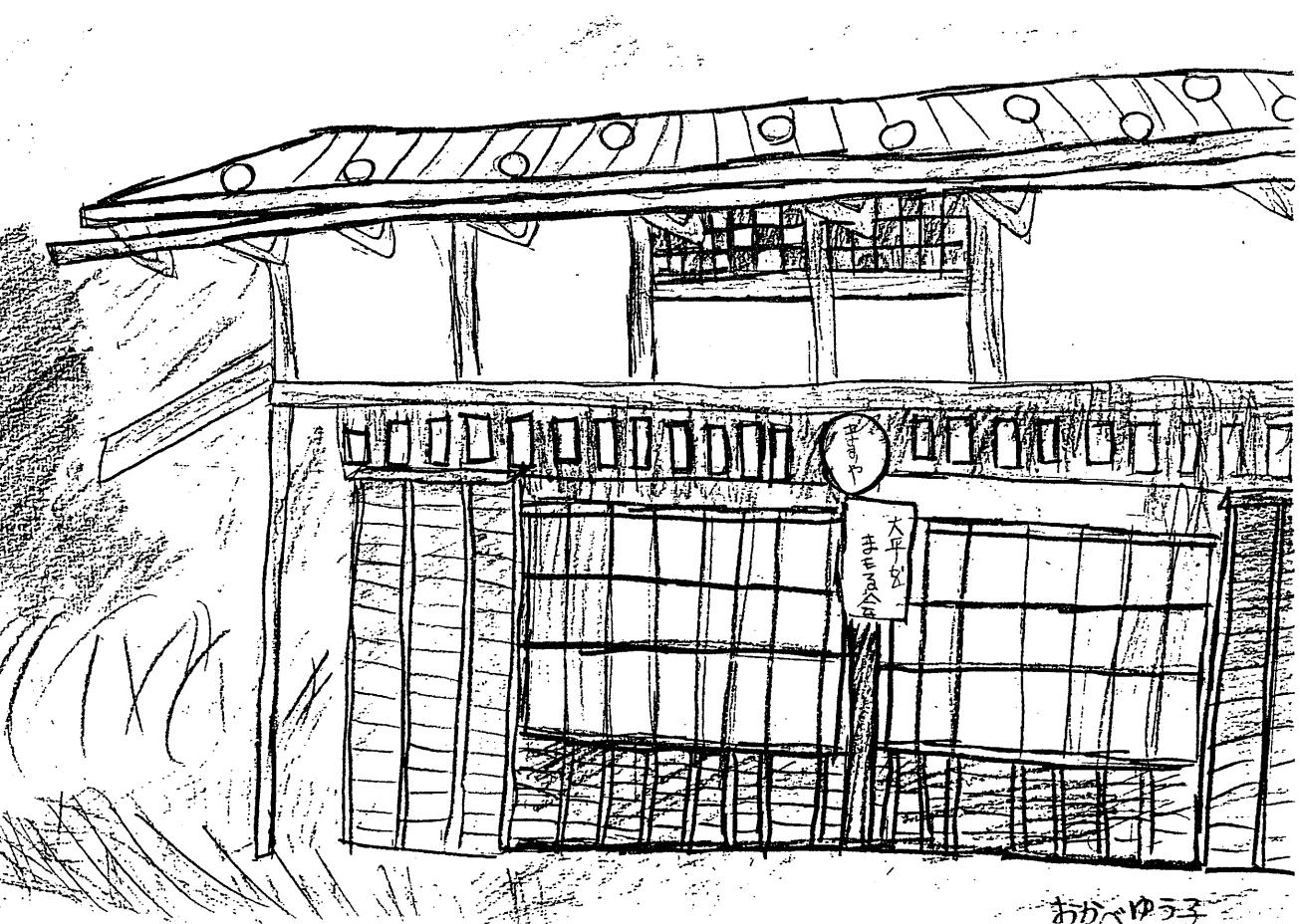
日本は、やはり木の文化なんだなど、つくづく感じられた、大平+有意義な旅ができた。

来年は何が起こるか、起こそうか、どんな出会いがあるか、今年あった人と再会できるか、今から楽しみな岡部一族です。

岡部 知子

みんなで作ったナシおいしかった。
へやの中でしたバレーボールが
たのしかった。

朝すごくさむくて
目がさめた。
でも来年もまた行きたい。
ことし会ったみんなまた
あおうね。



昨年の、第1回大平建築宿に参加できなかった私。「今年こそは！」という思いでおりましたが、それと同時に「福井から大平まで一人で運転して行くのか…。大丈夫かなあ…。」などと小心者の私は結構ビビッていたのであります。（ククッ…情けない。）

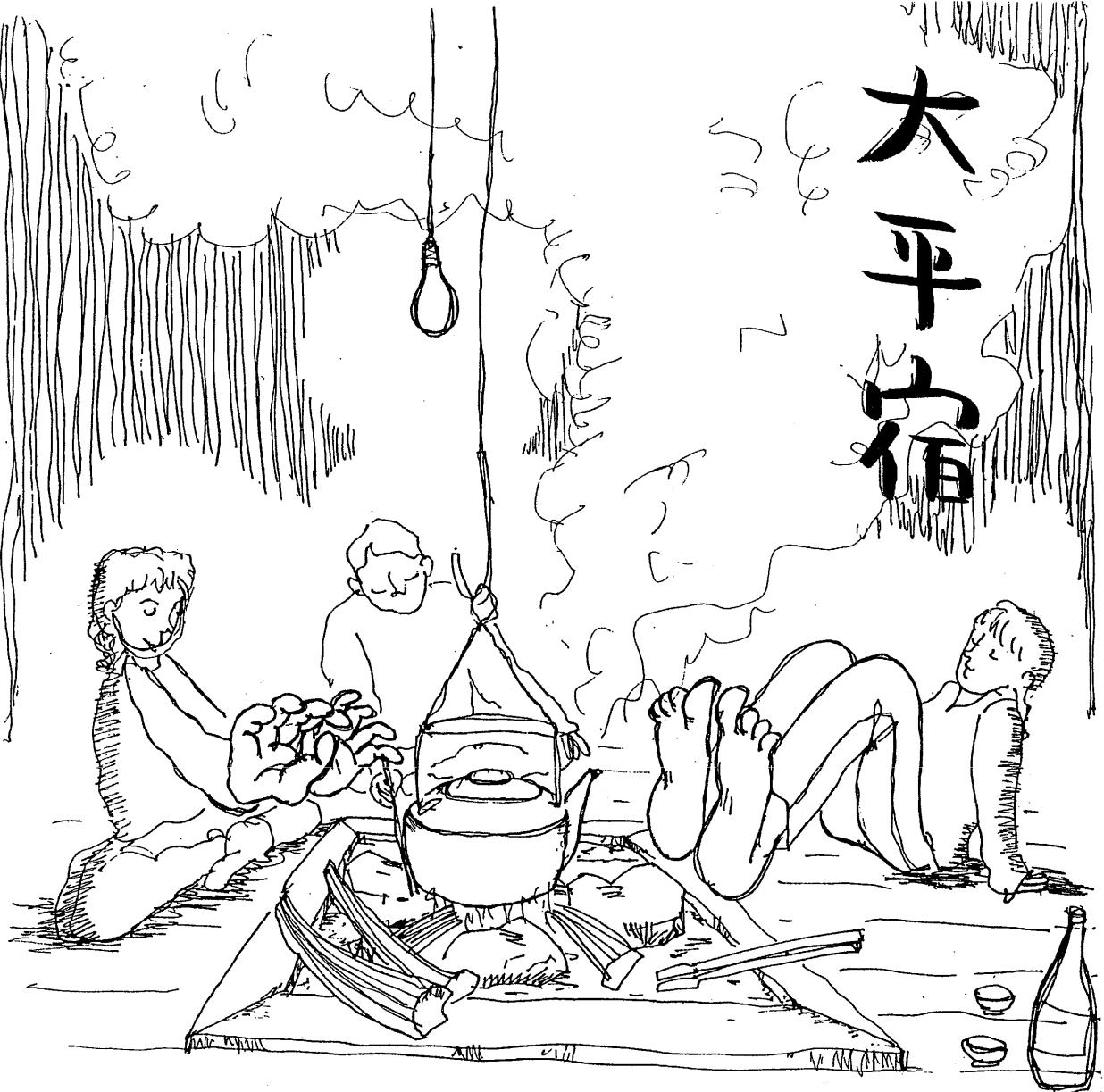
しかし、そんな不安も大平に着いた途端吹っ飛び、「ああ、やっぱり来てよかった！」という喜びでいっぱいでした。久しぶりの大平は小雨混じりでしたが、また、そんな大平も風情があつていいものです。薄暗い家の中から縁側を通して見る外の景色が、私は一番好きで、いくら見ても飽きません。天井の高さ、部屋の広さ、つながり、縁側、軒の高さ…、様々なスケール感の良さなのでしょうか、しっとりと身体に馴染むような感覚を覚えつつ今の生活を思い、何かとても大切なものを我々は失ってしまったのではないか…と、思わず涙を落すました。時代の流れや、生活の変化にあながち逆らえるものではないけれど、それは必ずしも良いものではない、ということを静かに語りかけてくれる大平宿に、改めて感謝したいと思います。

さて今回は、初日に増田先生の基調公演、二日目は分科会というスケジュールで行われたわけですが、初日は連休の始まりともあり、交通渋滞で皆の到着が遅れるというハプニングがあり、ハラハラする幕開けでした。以前、増田先生には、生活文化同人の定例会でお話しを伺ったことがありました。あまり興味を持てないままに終わってしまったような記憶があり、『構造計算』という言葉を耳にするだけでもドキッ！としてしまう私としてはどんなものだろう…。などと思っていたのですが、スライドを見せていただいていると、伝統構法でありながら実に様々な形態を造り出しておられ、「へえー、木造でこんなことも出来るんだ！」という驚きを覚え、とても新鮮な思いで拝聴することが出来ました。私にとっては思わぬ収穫です。

そして分科会、私は《輸入材依存と国産材の問題》 ポーター：松本さん、ポーター：岡部さん、に参加させていただきました。家が工務店ということもあって、色々な木材を日本全国から引いており、国産材のことや、いろんな名前を見聞きする輸入材のこと強く関心があったからです。しかし、いかんせん盛りだくさんの内容に比べ、時間がなさ過ぎました。松本さんや岡部さんの、色々話したい内容のことや、お気持も痛いほど分かり、とても残念でしたが、またの機会に持ち越しです。こうして最初の走りに終わりましたが、有意義な分科会であったと私は思っています。

最後になりましたが、事務局をはじめ、スタッフの皆様に感謝致します。来年も是非参加したいと思います。

太平山宿



民家の夜は寒い。

あつたかいから

ついつい体がいっこね。

冷えた足のウラや

手のひらとかさす。

ああいき気持ち。

いつも人の輪ができていて、

じゆう

話がはずんだり、

だまつていてせじー、と

いろりの火を見ていたり、

それだけで満たされた

気分で

すごくシンプルにな辛せ

だなあ。

「プロジェクト歴回顧録」

伊藤秀夫

■南郷村の記憶

南郷村には、古い町並みを歩きはじめた頃約6、7年前会津高原を中心に伊南、南郷、只見、会津下郷など見て回ったことがあった。館岩村の中門造り民家集落、下郷町大内宿の民家集落など茅葺き民家の景観は有名であるが、周辺にはまだ茅葺き民家が有りその多さに驚いた。また大内宿では、伝建地区補助事業としての修復工事もたまたま見ることが出来き、そのため民家の形だけでなく、屋根、壁、床などの構造にも興味を持つことになった私にとって、記憶に残る地方となった。

「民家移築改修に参加しませんか」の吉田先生の誘いに、ことわる理由は何もなかった。

■実測 H5-9/4

民家の調査など初めてである私の役割は、立面寸法Y軸の調査である。調査の方法を事前に受ける。サスの位置・軸を取る（外部、内部）・高さの採寸はバカ棒を利用・梁寸法を採寸など・・・後は行動するのみ寸法取りをしながら、大黒柱、恵比寿柱、サス、鼻栓等の納まりを確認する。室内や小屋裏を動き回っていると民家は確かに暗そうだ、建具は3本溝、上部は格子に直接和紙張りである。開口部やプランを見ていると風通しは良さそうである、やはり日本の建築は夏を旨としているのかと埃にまみれながらふと考えた。

■解体 H6-6/4

クレーンを使用して始めにヤネの茅を剥がし、小屋組を解体、そして軸組みの解体は手作業により慎重に行う。木造の良さはその「修復の良さ」にあるという、仕口と継手は解体後再び組み立てることが出来る、柱や梁も悪い部分を補修して再使用できるのである。

環境問題がとりざされている中、木造の「修復の良さ」は見直されなければいけないことに気がついた

■久米蔵塗り H6-9/15

塗装と言えば、OS・OP・EP・・久米蔵塗りと言う塗装は知らなかった。それもそのはず、昔は塗装業者の仕事ではなく左官材料で大工仕事であったとのこと、素人はどうしても厚く塗りがちなので色むらが出て困った。しかも、自分で塗った梁や柱がどこの場所に取りつくのかも心配であった。（竣工して一安心）柿渋と松煙とベンガラの自然材料で作る久米蔵は、木の素材になじみ木の質感を消さないような塗装であると思う。オイルステインとは一味違う古色仕上げ技法を体で学んだよう気がする。

■上棟式 H6-10/25

再び使用される古材、補修された部材、そして取り替えられた新しい材料が現場で組み立てられていく。柱や梁の仕口継ぎ手、楔や栓の締めつけに細心の注意をしながら作業を進める大工さん、しかし古材と新材はすんなりとは納まってくれない100年の歳月を経ても木は生きているのである。

100年の歳月を越えて古材と新材が重なり合いつなぎ合う様子を見ていると、親から子へ子から孫へこれから住み続けられる証ではないかと思う。又、会津で見たときよりも大きく見え、仕口、継ぎ手、貫で固められた骨太の軸組みは、人に安心感を与えていたようであった。

■現場に通う H6-11/26・12/24・H7-2/26

11/26：上棟から1ヶ月屋根下地工事及び外部軸組工事が行われていた。

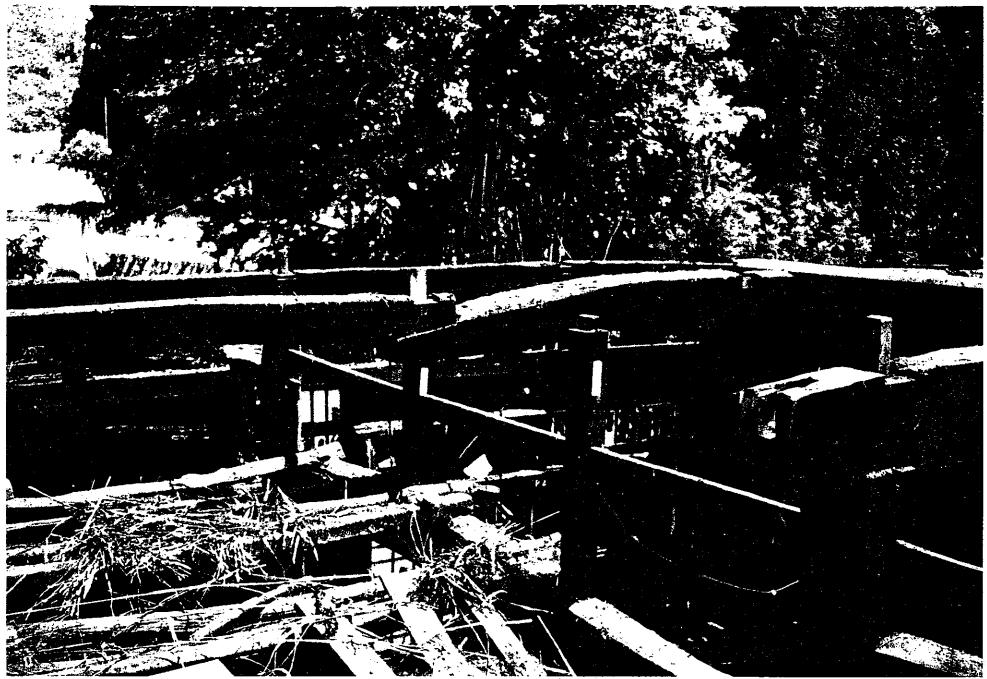
12/24：屋根工事がほぼ完了し内外部仕上げ下地工事が行われていた。

2/26：内部床・壁仕上げ工事が行われていた。

屋根ウレタンボード、コンパネ下地カラー鉄板平葺き仕上げ、壁モルタル下地しつくい塗り、床栗フローリング張り、軸組から仕上げの下地材まで見学できたことは私にとって木造を勉強するいい機会となった。大工さんには納まりや工程を聞いたり、電気屋さんはFケーブルの配線見えないようにするため苦労していた。そして、現場にあった設計図をみて現場とみくらべて見るウン、ウン、ウーン・・・と勝手に納得したりしてやはり現場は楽しい。

■竣工して 「長く住み続けられる家の形」

6月24日完成した野島邸を見学する。実測調査で見たあの壊れそうな民家が良くここまできれいにそして美しくなったものかと感激である。現場によく通ったせいか親しみさえわいてくる。現代の住宅の欠点は目的別の部屋が多く転用性がなく、しかも耐用年数が少ないと感じた。民家の良さは部屋の転用性が大で生活の変化に対応でき長く使用できる事である。しかも、外観はその地域の環境になじんでいる。現代の家づくりは民家の良さを学ぶべきであると思う。野島邸は、昔の石場立て基礎から通風と断熱を考慮した土間コンクリート、採光を取り入れるために棟に取り付けられたトップライト、使いやすいように変更された平面など、暗い・寒い・汚い・不便という民家の欠点を補完し良さを生かして現代に再生したと思う。それは、「長く住み続けられる家の形」ではないか。



解体工事中



上棟



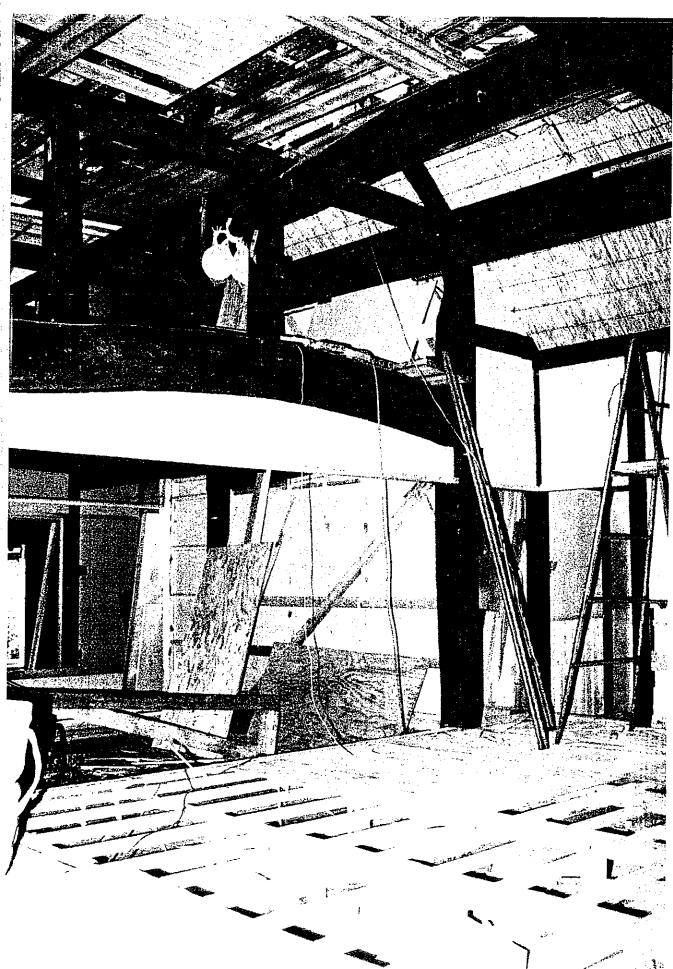
屋根下地及び古材（梁・柱）



竣工



解体前



内装工事中

木造伝統工法 100人に勝つ

奈良住協、耐震実験結果報告

10月29日、奈良県桜井市で、奈良住宅建設関連事業協同組合の主催による木造住宅の耐震実験が行われた。

実験住宅の設計は吉田桂二さん。大きさは2間×3.5間の平屋建である。増田一眞さんのアドバイスもあり、貫構造の壁による面剛性アップ、伝統的継手・仕口による柔軟性アップが図られ、まさに伝統的工法の強さを確かめるべく実験住宅となった。

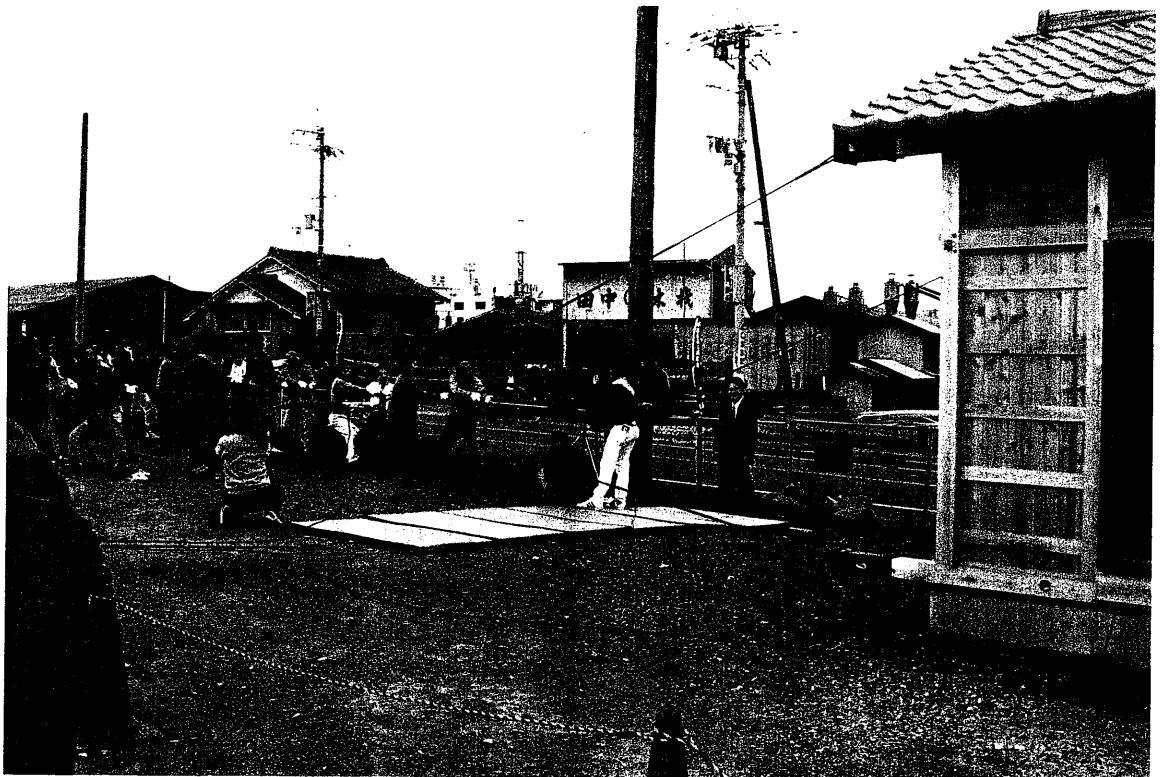
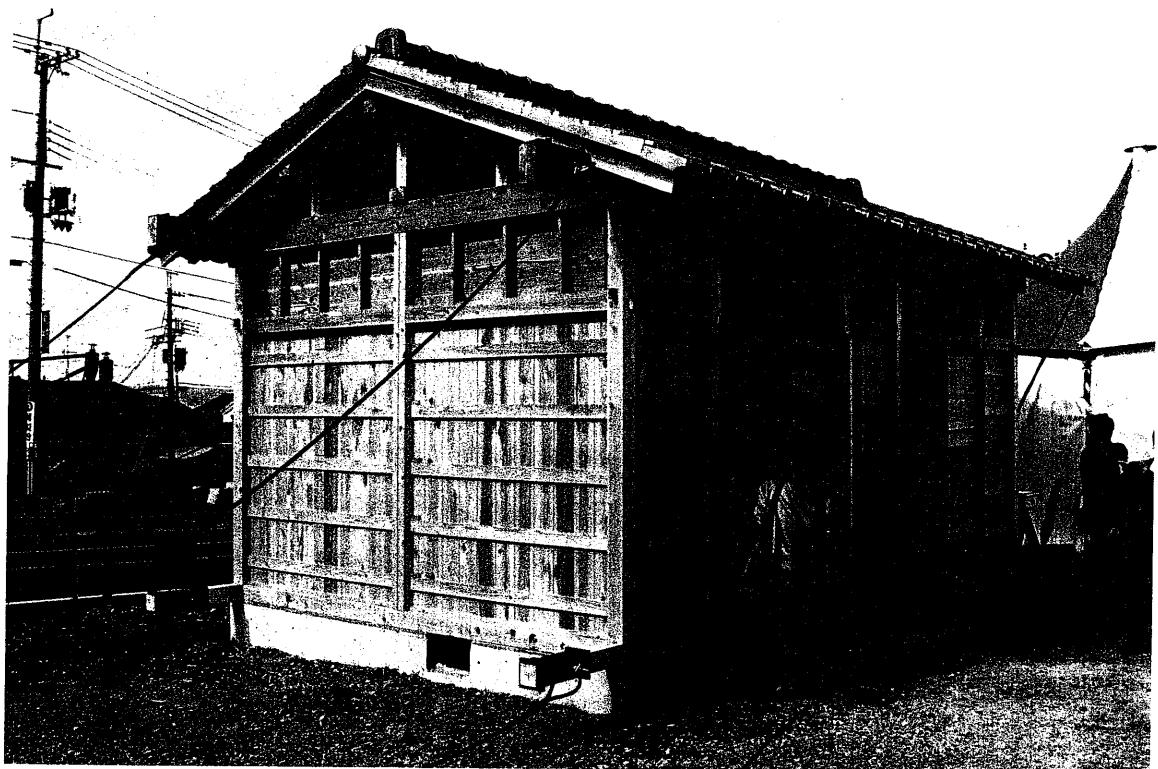
実験は、妻側の土台と桁を左右同時に、綱引の要領で、人力により引っ張るものである。100人で引き、震度7の地震力に相当する4トンの力に耐え得るかどうかが今回の実験の最終目標であった。

50人、80人、100人と引く人間を増やし、その都度、負荷測定器により正確に負荷を測定し、変位については、反対側の妻の桁先端の移動距離を引張(+)、戻り(-)それぞれ測定した。結果は、以下の通りである。

	1回目(50人)	2回目(80人)	3回目(100人)
道路側 負荷	1,010kg	1,610kg	2,260kg
変位	+2.5mm - 0mm	+2.5mm -3.5mm	+6.0mm -5.0mm
駐車場側 負荷	940kg	1,640kg	2,100kg
変位	+2.5mm - 0mm	+3.0mm -3.5mm	+5.5mm -5.5mm
合計 負荷	1,950kg	3,250kg	4,360kg

実験は大成功で、4トンの力に対しても、ほとんど何の影響もないことが確かめられた。実験後、重機などをつかって、さらなる負荷実験をとの声も上がったが、今回は以上の結果をもって終了となった。

(リポート 内藤敬介／住まいと町設計)



宜春亭でのお茶会報告

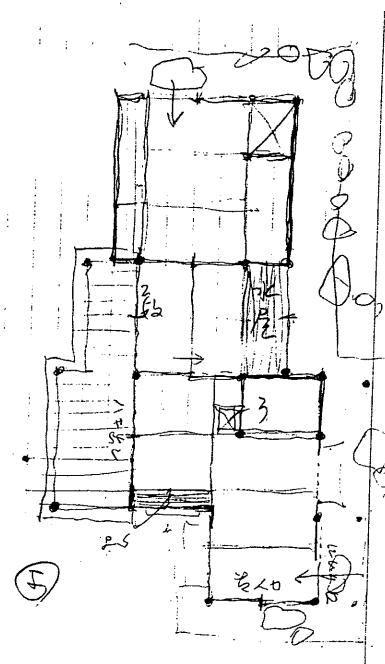
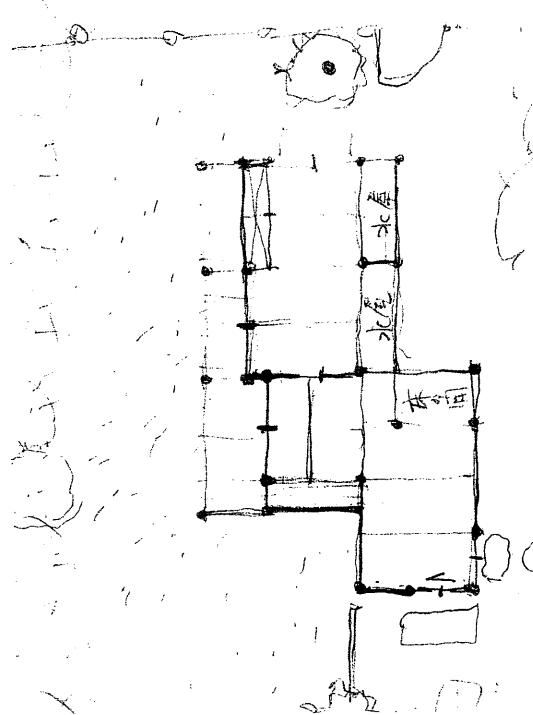
10月22日駒込の六義園・宜春亭で講義付きのお茶会が催された。

午前中は大田民雄先生による勉強会で、茶の湯を確立してきた人たち、そしてその流れのお話。午後は吉田先生みずから出席者全員にお茶をたててくださり、お茶を頂く時の心、基本的な作法、そして茶室の事などお話していただきながら、和氣あいあいの茶会でした。

元はといえば、豊崎さんとの会話で「たまには着物でもきたいネ・・・六義園のお茶室借りられるヨ・・・」と話は展開。ただ人数制限もあるので世話を中心に…、でもどうせするからには中身の濃いものにという提案で、大田先生にお話をしていたこうとなり、昔なら中へ入ることさえ許されなかつた五代将軍の御側用人・柳沢吉保公のお茶室でお茶会というはこびになった。

楽しく予定を終え、例のごとく二次会へ、にぎやかに話がとびかっていると、「宜春亭の間取り皆なに書いてもらおう。」と提案が出て、15分で提出してもらった。一番近かったのは連合の新井氏、吉田氏のものと見比べてほしいが、正解はご自分の足と目で確かめてほしい。

新井 聰





その後、感想を述べてもらった。

- ・お茶は心と言いながら堅苦しい作法のかたまりと思っていたが、おいしいお茶がいただけた。
- ・気持ちのいい緊張感が味わえた。
- ・人と人のつながりを感じた。
- ・「粋」ということ、「数寄屋と数寄屋風」などにこだわっていた人。
- ・そして大田先生のお話の中で「私は堀口捨巳の孫弟子です。」という貴重な言葉が聞けた、大田さんのステージの形ができたんだなと思った。そして講義を聞いていた人達が紹介された本を読みたいと言っていたことが、うれしかった。と延べた某氏の感想が印象的だった。

そして、最後の吉田氏のまとめで「人生の歴史的な位置付けとして、過去の人の話を聞き、未来をどう担う目と心を育てるか…」これはお茶の話だけのことではないな、と思いながら残酒整理をしていた私でした。

大田先生大変な日だったにもかかわらず、ありがとうございました。

おかげ ともこ

石膏模型製作記

十川忠久 十川造形工房

アンコール遺跡やベトナムの遺跡の調査研究をしている友人、重枝豊氏より以前からベトナムの遺跡の復元模型を製作するときには是非頼むと言われていた。その話が具体的に動き出した頃、重枝家で初めて打合せをした。ミーソン遺跡の復元配置模型と、創建時28mの高さを誇るミーソンA1の塔の復元模型をつくりたいとのことだった。そのとき初めて図面を見て、正面、腰が引けた。古い図のコピーで、縮尺が小さく不鮮明なものだったが、紋様、彫刻がぎっしりあり、今まで経験したことのない建築だった。どう断ろうかと思っているのとは逆に重枝氏のベースにはまり、熱意に動かされ引き受けてしまった。「チャンバ王国の遺跡と文化展」と具体名称もわかり、その中で模型を目玉にしたいとのことだった。細かい所まではつくらず、大きさで迫力を出したいと企画側の提案もあったが、はりばて風の展示物は私にはつくれない。私としては、目を近付けると「オッ！」と言われるようなものをつくりたいと提案した。製作期間の制約もあり縮尺は40分の1にしていた

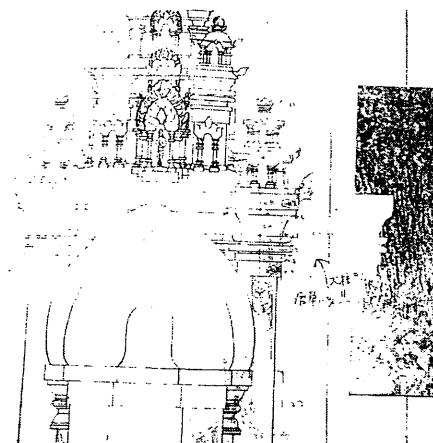
だいたい。製作にかかると、ビンボケ写真のピンがだんだん合ってくるように復元図が次々と上がってきた。図を見て冷や汗をかきながらも、できないとは言えない職人の性。私は20年前、木口雅章先生の門をたたき、木口造型研究所に11年いた。木口先生は石膏模型の第一人者であり、幾多の石膏模型を手掛けてきた。最近の建築模型製作者はかつて石膏模型が主流であったことも知らないと思う。今はアクリル、ABS等のプラスチック、紙製の模型がほとんどである。時の流れの中で、建築のデザインも変化し、石膏よりプラスチック向きの建築が大多数となったように思う。模型も運搬が容易、手離れが良い、着色が容易などでプラスチックが石膏に取って代わった。しかしながら、石膏模型をご存じの諸兄には、石膏素材のすばらしい肌合い、鉛物でありながら、冷たさを感じさせない、えも言われぬ白さ、陰影だけで表現される世界をご理解下さると思う。昨今は模型製作の世界にもコンピュータ制御のレーザーカッティングマシンなどが導入され様相がだいぶ変わってきた。

去る1月12～28日、東京・赤坂ツインタワーで開催された「チャンバ王国の遺跡と文化展」に復元模型を出品しました。その制作過程を建築雑誌「施工」に掲載したものでご紹介します。（十川百合子）

私たちのように、ローテクの機械で模型に思いを入れる時代ではないのかかもしれない。私が入門した昭和51年当時、既に石膏からプラスチックに7～8分方、移行していた。私のかかわった石膏模型は10数基で、助手としてではあったが、日銀各支店、新田の東京駅等を製作した。木口先生の石膏技術の源は建築石膏彫刻であり、建築内部のオーナメント、コーニス等の装飾をつくる技術を模型づくりに応用したものである。繊細な挽き物を挽く技術は古今、右に出る者はいないと思う。70年の経験をもち84歳の現在、今なお現役である。今回の模型製作にあたって木口先生に相談をしたところ、石膏模型がふさわしいだろうと言われた。そして製作に関するアドバイスと一緒に、挽き物の製作も引き受け下さった。これで百人力。

ここにミーソンA1復元模型（縮尺40分の1）製作工程をご紹介する。まずすべての元となるのが挽き物で、壁面、コーニス、装飾は挽き物を加工してつくり出される。コーニス等の断面形状をブリキ板にけがき、ヤスリがけし凹型

の挽き型をつくる。それを木でつくった定規に打ち付ける。挽き台にはガラスが敷かれ、端に直定規が打ち付けてある。この挽き台は先生が約65年間使い続けているもの。ホーローボウルに適量の水を入れ、石膏が均一になるよう振り込んでいく。水と石膏、ひたひた位がちょうど良い。水加減、温度によって硬化速度、強度が変わる。少しの間放置し、なじませる。そしてスプーンなどによりボウルの底から全体を搅拌する。このとき、泡が入らぬように気をつける。搅拌時間によっても硬化速度が変わる。搅拌後、振動を与える、中に隠れている泡を浮かせる。ボウルを回し、浮いた泡を中心を集め、すくい捨てる。この作業も仕上がった挽き物の質に影響する。この石膏をすぐに流すではなく、この後硬化に至るまでの時間を勘案し、周囲の掃除などをして程よい加減になるまでの“間”を取る。ガラスに石膏を流し、挽き型を定規に沿わせ挽く。初めはトロトロだが挽く作業を繰り返すうちに徐々に硬化していく。石膏を少し盛っては挽く、を繰り返していくと徐々に挽き型の断面型になっていく。石膏をとくのは初めのものを含め、3、4回を限度とし、前記作業を繰り返す。挽く回数は20～30回に及ぶ。挽き上がったものは表面がひかり、実質効果のある段差表現0.2mm位をクリアする。また乾燥後、爪ではじくと金属音がする。表面の硬さは、ただ型に流したものとは比較にならない。挽き上がったものは狂わぬよう、吊るして乾燥させる。今回の模型では10枚種の挽き物を製



図面に合わせて挽き型をつくる



木の定規に付けられた挽き型

作した。

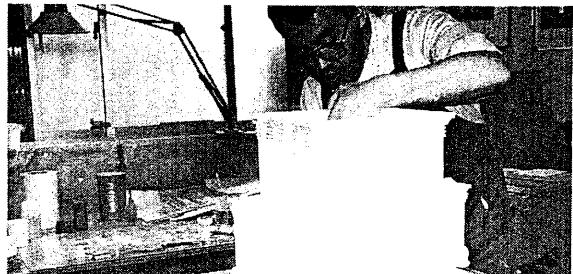
各種彫刻、紋様は原型をつくり、シリコン型を取り、数を抜く。挽きものを留切りして、壁面形状をつくり、型取りした彫刻等を埋め込んでいく。隙間を石膏で穴埋めすると、全く一体に見える。型抜きできる限界まで壁面を組み上げ、部品を付け型取りし抜いていく。必要数型抜きし、乾燥後、留切りをして組み立てる。接着を良くするため留切り面をギザギザに荒らし、セメダインで仮止めする。仮組みした後、スタッフ（麻の纖維）を切って石膏にからませたもの（これを天麩羅という）で裏から本止めする。各段、繰り返し、コーナータワー等後付けするものを残して3層まで組み上げる。基壇部を同様にして組み、模型台に“天麩羅”で止める。基壇部と三層までを本止めする。そのとき、模型台の裏にもぐりこんで模型を仮止めし、本止めするときは模型台ごと90°倒し、裏より作業をした。先

生の経験から全く心配がないと言われたものの、その瞬間は頭がしびれた。10数キロあると思われる塔の模型が横に突き出しているのである。そしてコーナータワー等の部品を取り付け接着する。隙間を水を含ませた小筆に石膏をつけ穴埋めをする。どの作業も根気がいるが、穴埋め作業は特に地味で根気がいる。輸送梱包の都合で開催一週間前に、後付けできる部品を残して納入した。足りない部品をつくり開催前日に現場に乗り込み開催当日の数10分前まで作業し完成した。

初めて模型の図面を見たとき、自信がなく逃げ腰だったのが、何とか完成に至った。立ちはだかっていた壁を乗り越えられた感じがする。このチャンスをつくっていただいた重枝夫妻、関係者の皆様、記録的な猛暑のなか大きな力を貸して下さった木口先生、そして山本氏、児玉君、家内にこの紙面を借りて深く感謝致します。



型取りした壁面をシリコン型から抜く



壁面の組立て



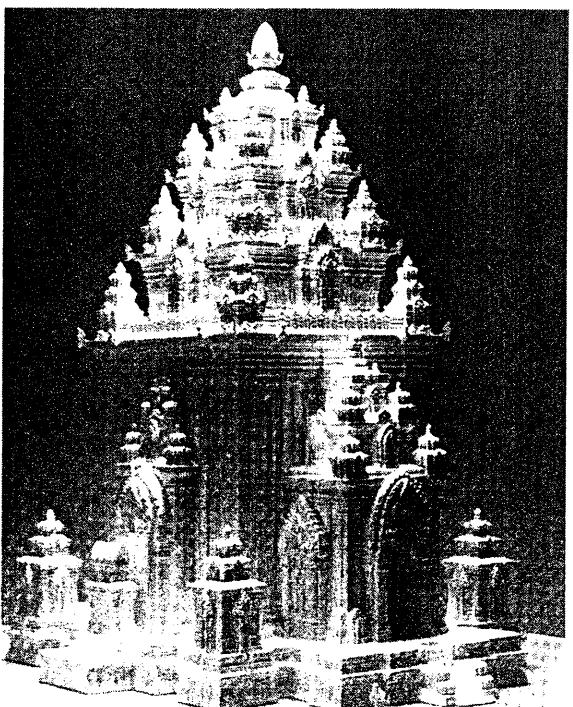
穴埋め作業。細筆を用いて隙間に石膏を置いていく



挽き物を挽く。トロトロ状態の石膏を流しながら挽く



石膏を盛り重ねながら何度も挽く

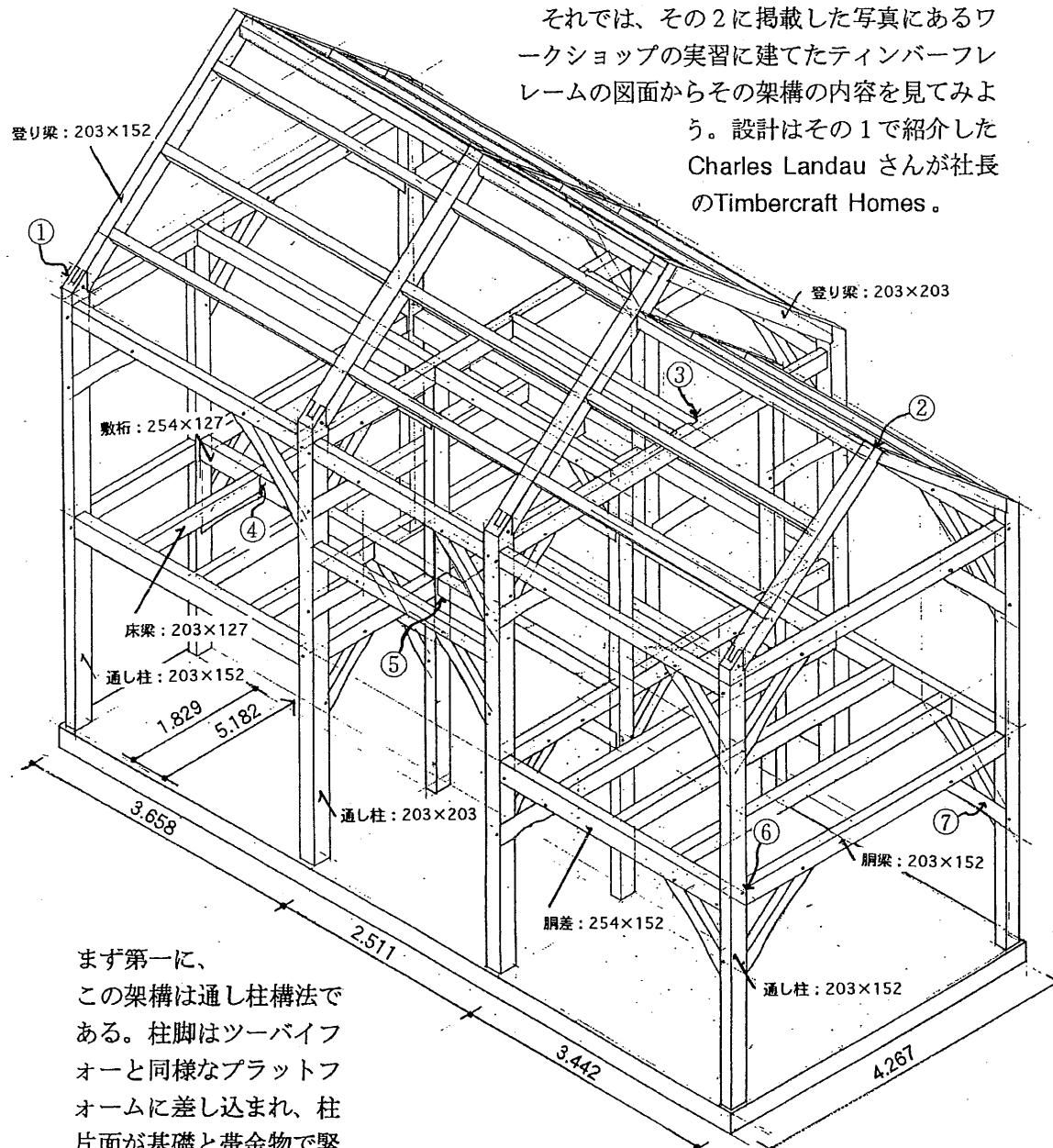


ミーソン H1復元模型（写真 浅田恒徳）

米国のティンバーフレーム工法についてーその4ー

(有) 宮坂建築事務所 宮坂 公啓

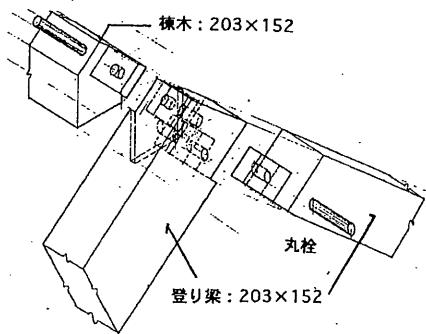
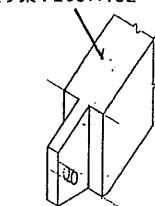
◇ティンバーフレームの架構



まず第一に、
この架構は通し柱構法で
ある。柱脚はツーバイフ
オーと同様なプラットフ
オームに差し込まれ、柱
片面が基礎と帶金物で繋

結される。通し柱と梁、桁の各接合部が方杖によって固められているので架構はラーメンとなり、柱脚はピン接合で済む。柱間寸法は一部4.267である以外は日本の柱間とほ
ぼ同じ。ちなみに1階階高: 2.590、2階階高: 2.768、棟高は約7.800。だが、彼我の大き
きな違いは桁行の各柱通りの垂直構面と、その構成部材断面である。通し柱及び2階
梁、登り梁共に最小203×152、小屋梁228×152。更にこの構面は地組される。(続く)

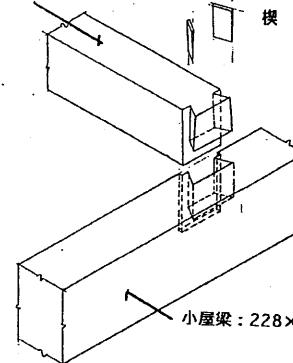
登り梁: 203×152



通し柱: 203×152

② 登り梁合掌部及棟木との仕口

桁: 177×127

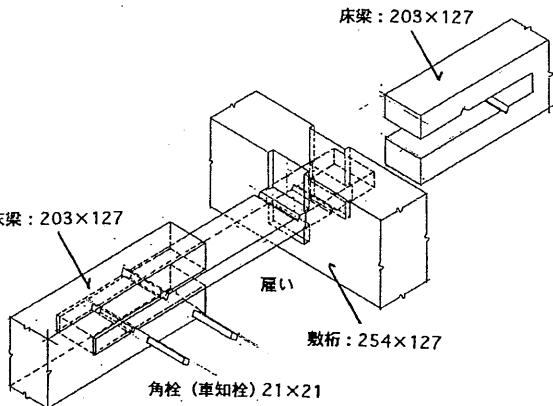


小屋梁: 228×152

③ 小屋梁と桁との仕口

① 通し柱と登り梁の仕口

床梁: 203×127

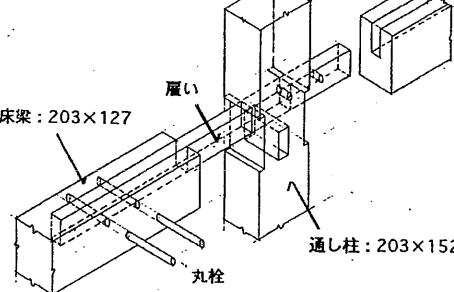


敷桁: 254×127

履い

角栓(車知栓) 21×21

床梁: 203×127



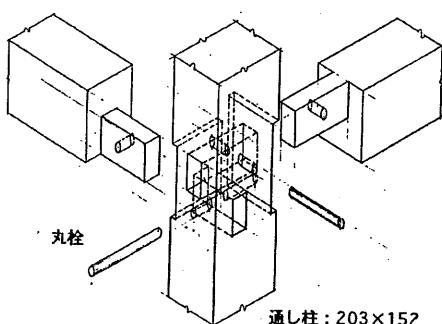
通し柱: 203×152

⑤ 四方差し

④ 床梁と敷桁の仕口

胴差: 254×152

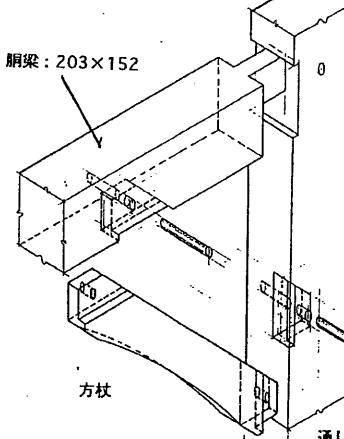
胴梁: 203×152



丸栓

通し柱: 203×152

胴梁: 203×152



通し柱: 203×152

⑥ 通し柱と胴差の仕口

⑦ 方枝の仕口

樹種はダグラスファー

同人紹介

松本昌義

1953年 栃木県生まれ
1982年 芝浦工大建築学科卒業

私は大学を出てからずーと連合設計社市谷建築事務所という長い名前の今の事務所に所属しています。所員は20人程度、今では上から数えた方が早くなってしましました。住宅に始まって、学校、病院、オフィスビル、マンション、工場などなど。構造も木造、鉄骨造、RC造、SRC造と一通りやりました。

私の転機になったのは、茨城県古河市の住宅公社発注による戸建て20戸建売住宅「まくらがの郷」の仕事です。4年ほど前にそのうち2戸の設計と全体の監理を担当しました。古河には約1年の間、監理のために週に2日通いました。この仕事を通じて、ものを共同してつくることの楽しさを改めて経験しましたが、同時に勉強不足も痛感させられました。特に木という素材に関して。はづかしながらそれまでは、四角にばってんをくれれば木の柱、斜線を入れれば化粧材。節とか色は気にもしても、どこから来ようと杉は杉、梁は米松があたりまえ。木の乾燥や流通についての知識も意識もほとんど持ち合わせていませんでした。私に限らず、設計者というものつくりが実際にものをみていない、ものに触れていない現実があると思います。これはダメだと思いました。それからはなるべく外に出るようにしています。今では職人さんや材木屋さんなど、設計以外の方々とのお付き合いも増えました。ただ、根っから不器用である上にサラリーマンという身の不自由さも手伝って、義理を欠くこともしばしばです。少しもどかしさを感じているこのごろなのです。

話は変わりますが、私は「生活文化同人」の当初からのメンバーなので、会の由来について少しお話しようと思います。きっかけは今から7、8年前の、吉田桂二氏を団長とする韓国旅行。昼間はガイドもびっくりするほど真面目な韓国民家の視察団、しかし夜になると大酒飲みのただの酔っぱらいの集まりといった感じの珍妙な旅です。帰国してから、桂二さんにもっと教わっちゃおうと、そのときの参加者数人と画策して始めたのがこの会です。当初は中野の飲み屋の2階で勉強会のような飲み会をやっていました。なぜ中野かというと、桂二さんのご自宅にわりあい近かったことと、当時の事務局松井さんや私の知っている飲み屋が中野にはワンサとあったからです。

会の名前の発案者は桂二さんです。ずいぶん古臭い名前ですが、そこがいいということになりました。「世話人」なるものを置いたのは少したってからです。これもずいぶんと前時代的な名前ですが、伝統文化を愛する私としては、この名前もけっこう気にいっています。

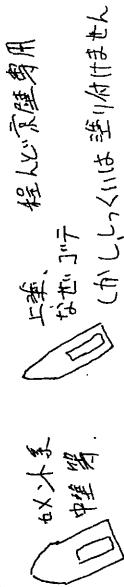


20数年前の私です。以前はこんな顔をしていました。現在は41才、2児の父親になっています。

チャガン 3/3 江原 久紀

朝から来り伊香保の第二記念館も終りました。ロボットは内は雪が降る時車かう…車を外壁は白にト手で全面
内はしつくい、赤壁で塗りました。正面玄関柱はオレが切りました
1/4に~伊香保に行なうとどうでどうか、「黒船館」です。
どうかけて今回には赤壁を塗ることになりました。

コテ塗装の12番



塗装順序

下壁はコテの動きが違う!!

上壁はコテの動きが違う!!

予想外にも真下にコテを動かしても良い

こはたマスター? すこし早く塗ります。

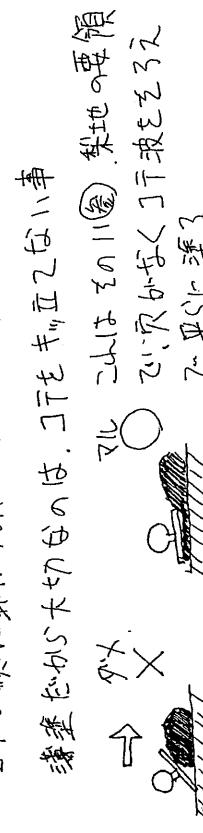
そして塗り付けたが一番上から左から右にコテを

左に回します。これが終りではありません

次回に続く

どうで(よ)今回、感じた今まびしかえ乙

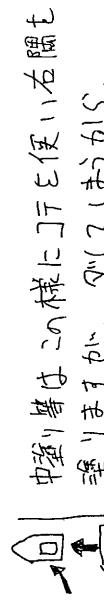
めました。



塗り厚さへ2mm位

塗り厚さが薄すぎると乾いた時はサラサラとして下さい
穴から多数出来てしまう。しかし厚すぎるとグリップして
しまいホーティとした感じにがってしまいます。
もちろん塗り方は2回、おかけ塗り（こけり塗り）とした後すぐ
仕上がり塗りをする）ですが、床壁は乾きが早く、水ぼり
内に仕上げないとサラサラとしてしまいます。失敗に終
り、てしまふ。

ニセコテ塗装

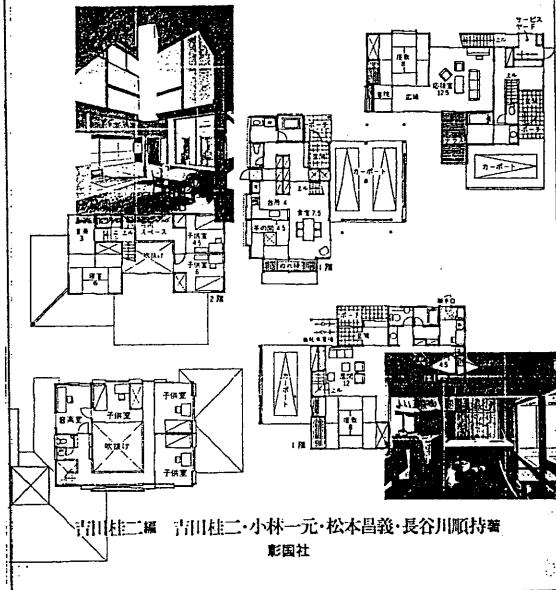


中塗り等はこの様にコテと使い右側を
塗りますか、タコ(て)はうがう。

上塗は自在にコテを
動かし塗り付けします。

上塗り!! 上塗りの早塗りのココ!!

暮らしから描く
快適間取りのつくり方
おすすめプラン120



新刊の案内

同人代表の吉田桂二さん編により、同人のメンバーでもあるその不肖の弟子たちとの共著で間取りの本が出版されました。

『快適間取りのつくり方』
彰国社刊
1995年9月20日発行
吉田桂二編 吉田桂一元・小林昌義・松本義順・長谷川順持共著
定価2575円(本体2500円)

吉田桂二さんの数ある著書のなかで、1980年に発行され、たいへんよく売れている「だれでも描ける 住みよい間取り」という本があります。この本はいまだに版を重ねて、150版をはるかに超え、この種の出版物としては異例の発行部数のようです。

しかし、15年の歳月を経る間に、現在の住まいづくりの考え方や実作と、旧著の内容とに大きな隔たりが生じました。

そこで現在の住まいづくりをふまえ、旧著よりもさらに充実した新たな書籍を出すべく、我々も関わらせていただき、2年半という期間を費やして（何故こんなに時間がかかったか私からはとてもいえません。）このたび出版することができました。

おかげさまで時間をかけたかいがあったのか？評判は悪くないと聞いています。是非ご一読下さい。 (小林 一元)

□ついにできた生活文化同人機関誌創刊号？

待ちに待った、同人の機関誌創刊号ができた。

ン～？準備号？ページをめくる。あれ～ッ。会報の合本だ～ッ。なんで～ッ。
益子編集長の編集前記、なかなかうまいこというなと感心しつつ、宮沢賢治がでてくるところはさすがに詩人益子昇さんと感心。

編集後記、「普遍的な評価を後世にも得られるように生活文化同人も確固とした足跡を刻もう」 ウッ。大きく出たな。「ま、じっくりいきましょうか、皆さん」ということか。益子さんらしい。

会報14号までの合本とはいえ、200ページ弱のボリュームは、ひとえに皆さんの協力のおかげ。感謝！感謝！ 益子さんにも感謝！感謝！

なんといっても、表紙がいい。さらに背表紙があるのがうれしい。書棚に入れておいても様になるのがいい。

「生活文化同人 VOL. 0」 次号「生活文化同人 VOL. 1」を早くも期待したい。（背表紙の番号を揃えるのが好きな私としては）

会報の中身を充実させた毎回の定例会のまとめ。きちんと作り上げることを最初の段階で江原君が手本を見せてくれたことが、その後多くの協力者を得たことにもつながっている。また、その後に協力してくれた田島さん、江原姉弟さん、新井・勝見ご夫妻、石引さん、皆さん忙しい中ありがとうございました。

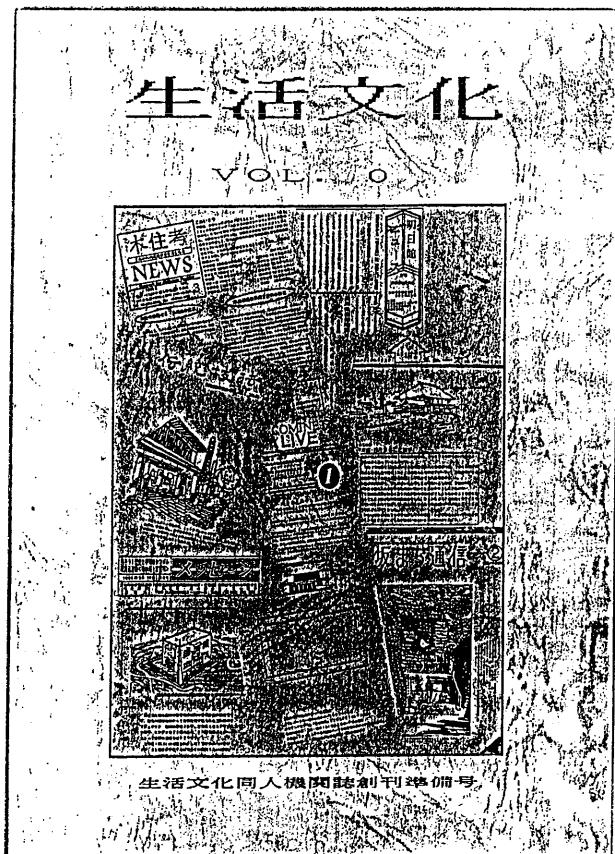
今後も皆さんの協力を得ながら会報の充実をはかりたいと思います。

原稿依頼のFAXが突然ながれてきたら、忙しくともあきらめて原稿宜しくお願ひします。（締め切り厳守…ひとには厳しい？）

FAXが送られてこなくても、もちろんいろいろな情報提供……本が出ます、出ました。買ってください。TV出ます。見てください。こんど見学会やります。などなど。隔月のタイミングに合わなくとも可……お願ひします。

シャガンも長期に好評連載中。今後の進展に乞うご期待！

（会報編集局 宮越喜彦）



■ 1996年会費について

1. 年会員（会費 7,000 円／年）

定例会聴講（5回／年）、機関誌（1回／年予定）会報（6回／年発行）、すべての同人の活動情報を会報以外にも提供する。

2. 会報購読会員（会費 2,000 円／年）

会報（6回／年 発行）は会費に含む。

定例会聴講はそのつど下記聴講費を支払って頂く。

3. 定例会聴講（聴講費 2,000 円／回 学生割引 1,000 円／回）

年会員以外はそのつど聴講費を支払って頂く。

* 年会員・会報購読会員の会費は1月から12月まで1年分とします。中途入会も上記会費でお願いします。

* 定例会等で特別に資料などある場合は別途実費。

* 新規入会の方は以下の表に必要事項を記入の上事務局にFAX、又は郵送して下さい。既に会員の方は必要ありませんが、住所等変更があれば同様にお願いします。

* 会費納入は郵便局にて以下口座にお振り込みお願いします。

総合口座 10010-54101181

生活文化同人代表吉田桂二

* 不明な点は96年事務局にお問い合わせください。

〒202 東京都保谷市ひばりが丘1-4-25メゾン・アルプ201

TEL/FAX 0424-25-1333 木住研 宮越喜彦まで

(CQE02654 @niftyserve.or.jp)

-----切取り線-----

1996年生活文化同人新規入会申し込み書

年 月 日

1. 年会員 2. 会報購読会員 (どちらか○をつけてください)

フリガナ
氏名：

年齢： 歳

勤務先：

自宅住所： 〒

TEL: - - - FAX: - - -

勤務先住所： 〒

TEL: - - - FAX: - - -

会報送付先： 自宅 ・ 会社 (どちらか○をつけてください)

パソコン通信ID：

* 96年事務局へFAX (0424-25-1333)、又は郵送してください。

■世話人会報告

10/06 於：中野「喜久」

出席者：吉田・益子・長谷川・内藤・斎藤・宮越・岡部・日影・江原・鈴木・吉塚

1. 第2回大平建築宿について

① 基調講演・各分科会のまとめをサボーター、レポートを中心にお願いする。

機関誌に掲載。

② 大平建築宿としての提言…

今後の「大平宿」管理運営などにも触れた要望書を飯田市長に宛てて提出。

吉田先生にお願いする。

③ 吉田先生よりの提案…

大平に大平民家の原形の復原計画、建設を通して、大平建築宿の活動のひとつとして。多数の協同者の参加により実現させたい。

2. 96年会費について…95年会費の一部改定とする。

3. 「機関誌」について 毎年一回の発行を目指し、編集委員会を設けて進める。

→10/25に第一回打合せ会議が開かれました。

4. 12月総会+忘年会について(12/15金) *下記詳細

5. 同人規約の草案は世話人（事務局・吉田・益子・松本・宮越）でまとめる。

6. 96年の同人事務局については以下の各氏にお願いします。

事務局・会報編集：宮越喜彦 会計：衣袋和子さん 機関誌編集長：益子昇さん

■生活文化同人総会

・日 時：12/15（金） 6:00～

・場 所：マルチョウ *○に丁の字

文京区小石川 5-6-9 TEL:03-3943-4101

・会 費：6,000円程度

（申し込み後、連絡なく欠席の場合
は後日徵収させていただきます）

・総 会：・事務局報告：会計報告 95年活動報告

・生活文化同人規約

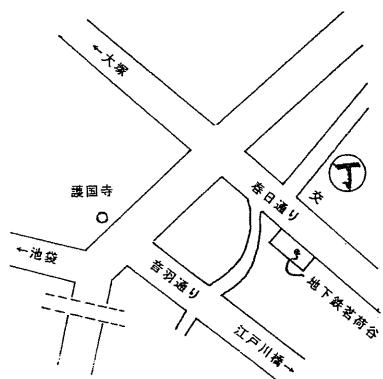
・96年活動方針：定例会の年間テーマ
「第3回大平建築宿」

機関誌についてなど

・忘年会

*多数ご参加ください。ただし、人数の調整がありますので必ず参加

申し込みしてください。 事務局：アトリエUまで FAX 03-3374-1102



*最寄り駅地下鉄丸の内線茗荷谷

-----切取り線-----

1995年生活文化同人総会申し込み

95年 月 日

・総会と忘年会に参加します。（人数： 名）

氏 名：

連絡先：

TEL: - - - FAX: - - -

* 事務局（アトリエU：FAX 03-3374-1102）へFAXしてください。

■お知らせ

吉田桂二先生、毎年恒例の個展が開かれます。

■第12回・吉田桂二個展



絵 吉田 桂二

■同人活動

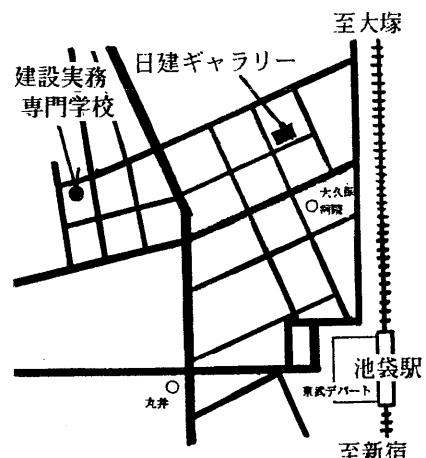
- ・住宅建築10月号 吉田桂二先生：坂本善三美術館・那須の家（野島邸）
益子さん、野島さんも執筆
- ・新刊 暮らしから描く快適間取りのつくり方
吉田先生・小林さん・松本さん・長谷川さん共著

■雑誌

- ・東北発・木のマガジン〔季刊シルバン〕 s y l v a n
木をテーマにした今年春創刊の雑誌です。記事は建築にも触れたものが多く、vol. 3秋号は特集「杉」で、Ms の三澤さんの「林業地と都市を結ぶネットワーク」の記事も掲載されています。書店or定期購読
*問い合わせ：シルバン編集委員会(TEL/FAX 022-229-3901)

□編集局通信

- ・日本シリーズも、ヤクルト優勝で幕を閉じた。
伊藤が古田に押さえられたのが痛かった。見どころは仰木マジックを予感させた、第4戦 0対1から9回同点起死回生の小川の本塁打。延長戦で小林とオマリーの対決は、久々に野球の醍醐味を見た思いだ。それがDJの逆転HRをさそった。
神戸復興の希望を見せてくれた好ゲームだった。
- ・会報原稿、企画宜しくお願ひします。EメールでもOK
- ・毎号原稿締切：奇数月5日
- ・会報編集局：
保谷市ひばりが丘1-4-25 メゾン・アルフ 201(〒202)
木住研 宮越喜彦 TEL/FAX 0424-25-1333
CQE02654 @niftyserve.or.jp



定例会場案内図

事務局：〒151 東京都渋谷区代々木4-19-14 ニューハイツ切り通し202号
ATELIER ゆう内 (鈴木久子・吉塚幸雄)
TEL 03-3376-0392 FAX 03-3374-1102

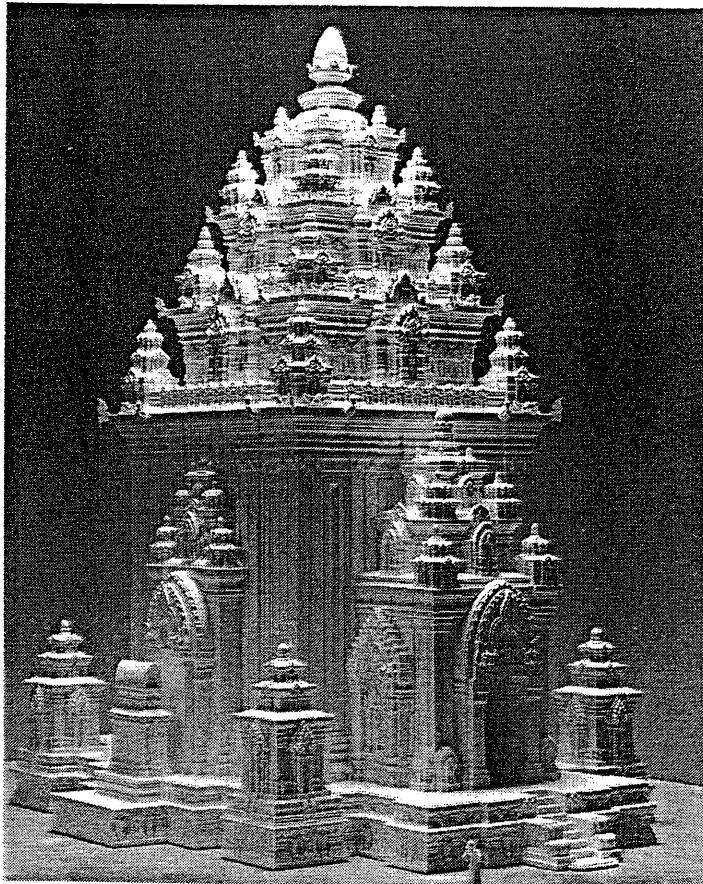
□定例会 96/6/15(土) 今回は2部構成です。

1部：5:00～6:00 十川造形工房（工房見学）TEL:03-3387-6867

2部：6:30～8:00 沼袋地域センター（和室）

石膏模型てどんなもの？

講師：十川 忠久（十川造形工房主宰）



建築模型というと最近ではスチレンやペーパーボード類、またはアクリル板が中心になっていますが、ほんの少し前までは、石膏か木を使った模型が中心でした。

そこで、今回はその石膏による模型づくりを、石膏技法の実演も交えて紹介していただきます。陰影による建築表現を再確認できるはずです。

また、建築模型屋のルーツのひとつに、石膏による建築装飾制作というものもあった、などの裏話も聞かせてもらいましょう。

（世話人：十川百合子）

※参考資料：生活文化No.16(95.11号)

※年会員外 2,000円（学生は半額）

※参加される方は事務局（TEL/FAX 0424-25-1333）までごFAXで連絡下さい。

※会場がいつもの場所と異なりますので注意して下さい。

世話人：岡部知子

住宅の見学は楽しみなものです。

すでに、昨年竣工し、暮らしの始まっているお宅なので器としての建築だけではなく、生活のつまつた器のお話も期待して伺いました。

「各々の立場を尊重するから、口をはさまない などという事はもの作りにはありえない。互いの領域を侵しあい、しかも抱え込まないつながりが“協働”という言葉で言われ始めている」と吉田桂二さんのお話の中に出でてきた言葉がずっと気にかかっています。

私が大平の改修工事に参加させてもらったり、生活文化同人に入会したのは、それを自分が選んできたからだと思っていましたが、“協働”の楽しさを味わってしまったからではないかと。

この味は、いつでもどこでも味わえるわけではなく、時、人……モロモロの条件が整って、ひとつの方向に收れんした時、最高潮に達するのでしょうか。堪能したいものです。

さて、息苦しくなるほどエネルギーに満ちあふれている猿田邸。一家は陶芸を営み、生活も仕事場も一緒という暮らしにあわせた器を求めてこの地に出会いました。埼玉県飯能の南川(ナンセン)。池袋から西武池袋線、秩父線と乗り継ぎ、約1時間半の正丸駅から1Km程の所です。

夫人の実兄の吉田桂二さん設計。施工は地元岡部材木店のネットワークの高橋俊和さん。監理は小林一元さん。

建物は生きて日々手をかけられ、気にかけられてここまで育ってきました。高橋さんと小林さんのやりとりしたFAXや図面、設計図を見せてもらいました。あちらこちらに互いの出番を待つ仕掛けや誘いが見受けられます。玄関廻りのタイル、郵便受、屋根のかざり、浴室の貝殻型タイルや台所の陶板、ショールームの展示壁や棚……。一家の自作の作品で満ちあふれ、引き寄せられてしまいます。桂二さんの思いを越えて、住み手のにおいつけがしっかりと成されているようです。でも、余地はまだまだ有る



かいていた絵のみ
上は丸く下は三角
のマガマガを見つけ
お専用に置かれ

ようで、ご子息の「何か創りたくなる家。内外に使われている杉板が皮膚呼吸の気持ち良さを感じさせてくれるのかも」に、次に行った時にはどんな風に変わっているのか楽しみになります。

報告：島田 真弓

□猿田邸見学の感想など

◎2時間目、廻りは家の景色だの描きはじめた。私も机に向かったものの陶板とにらめっこ。吉田先生の図柄をヒントに中一の美術の時間を思い出し線を引きだした。度々の行きづまりにタイミング良く猿田家のお父さんが助け舟。おかげで無事終了。その日は黒いおヒゲのサンタクロースに見えたご主人でした。 -おかべ ともこ-

◎壇の上に鎮座する陶器の猫やシーサー達。それらに囲まれながら口を開けている土の塊はよく見ると郵便ポスト。これでは郵便屋さんがわからないのではないかと猿田家のご長男にたずねると、「いやー、それが何も言わないので最初からちゃんとここへ入れてくれたんですよ」。この地区の郵便屋さんはシャレのわかる人でよかったです。

次に見つけてギョッとするのは入り口の把手。実物大の人の手で、間接が動くようになっている。木製で妙なあたたかみがあり、この家の人達から、よくいらっしゃいましたと握手をもとめられているようである。

囲炉裏を中心に据えた土間と座敷は作品の焼物であふれんばかり。信楽の土を使っているという器は、ぬくもりがありながら、思いの外、軽く、うすく洗練されたかんじがした。押入の襖にはネパールのパゴタが美しい色の和紙で描かれている。猿田さんがデザインし、高橋さんの奥さんの笠原さんが貼ったものだという。間仕切襖や床の間の壁も全てこの小川町産の和紙であるということ。他にも屋根頂部の鳥、台所のタイル、お風呂の床など、あげていけばきりがないほど猿田一家流のセルフビルドが家中に散らばっている。もちろん、それらはあとからつけましたという類のものではなく、施工前から、あそこはこうしよう、ここにはこれをと、高橋さんと相談しながらすすめていったのであろうことが、出来上がったものを見ただけでも感じられる。

施工契約約款に出てくる甲・乙・丙の立場や役割分担を軽く飛び越えたところでの仕事を見た気がする。こんなふうに臨場感のある家づくりをしていきたいと思った。

- 勝見紀子 -

遠山記念館

見学会に参加して

川越駅から車で行くこと約40分、のどかな田園風景の中にたたずむ遠山記念館。ベテランの左官屋加藤信吾さんとシティ環境建築設計の高橋昌巳さんに案内して頂いた。すると、空間の素晴らしさはもちろんのこと、今まであまり意識せずに見ていた壁や床が面白い。手で磨き光沢をだす、大津壁。釘の頭を塩水につけ、錆させて泥に埋め込み表情を出す、土錆壁。貫や柱の部分と他の部分の土塗り厚の違いが土の鉄錆の出方に影響し、なんとも言えない侘び寂を醸し出している、濃淡のある土物壁。座敷の仕上げは、書院造りなら漆喰壁、数寄屋造りは土壁が多い等々。床の仕上げも人造石あり、敷瓦あり、黒玉石の洗い出しありと、表情豊か。

今回は、本来未公開の2階の見学も出来、感無量。一番の見所、赤い壁のお便所に鍵がかかっていたのが唯一残念でしたが・・・。



また、加藤さんの“自然の流れに合わせて家をつくれば長持ちする。例えば、下地窓に使われる竹も切っていい時期と悪い時期があって、12月～3月に切られた竹ならば60年たっても大丈夫だけど、切って悪い時期に切られたものはすぐに虫がわく”という話もとても印象的でした。

食後のお茶会は、みんな一回目の茶会よりも余裕の面もち。吉田先生がわざわざ京都から仕入れてこられたお茶を、高橋さんの奥様のお手前で頂きました。

加藤さん、高橋さん、奥様、本当にありがとうございました。

たじま みさこ

左官の仕事

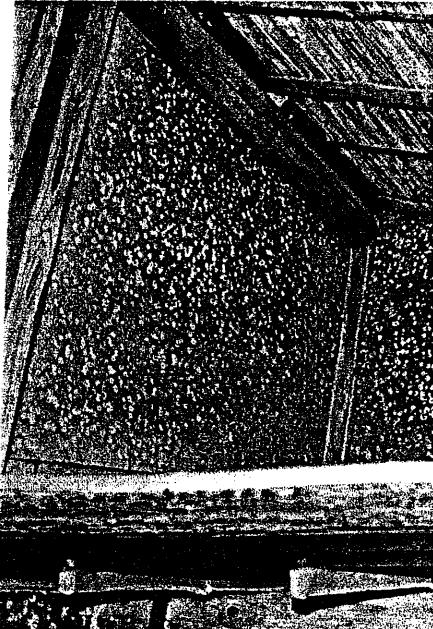
いろいろ



←左；シティの高橋さん

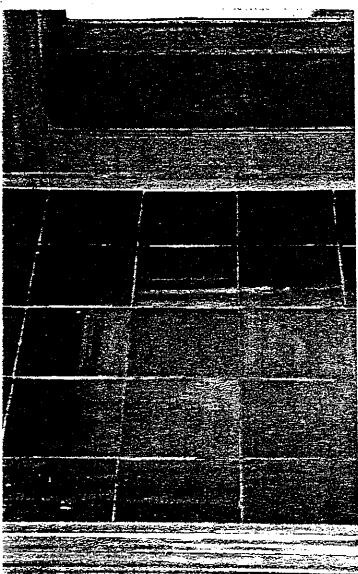
右；左官の加藤さん

加藤さん曰く、“この濃淡は出そうとねらって出せるものじゃない、気合いを入れたときほど出なかったりするものだ”



西棟外壁の土錆壁 →

梅雨時期に塗るといい
表情が出る。乾燥時期
にあたるとほとんど出
ない場合も・・・。
季節やお天気をよむこ
とが大事。



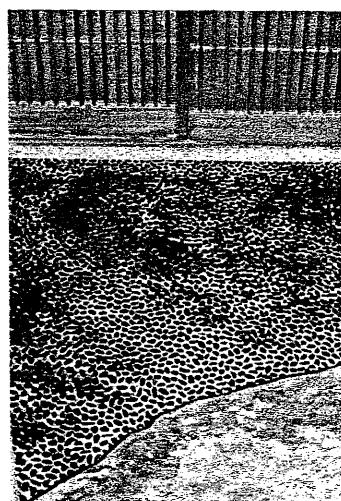
↑ 中棟軒内の敷瓦

一枚、一枚の瓦が真四角で
はなく、微妙にずれている
ところに侘び寂がある。



↑ 東棟玄関の亀甲人造石
研き出し

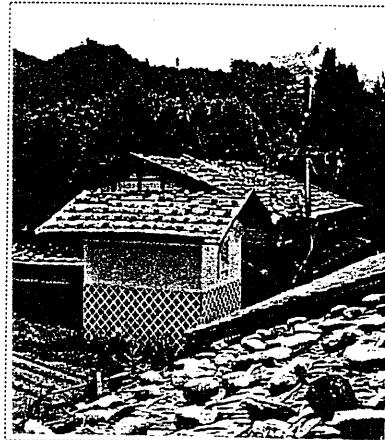
お見事！



↑ 西棟玄関の黒玉石
本物はごく僅かに
残るのみとのこと。

96年8月16日～18日
「歴史的遺産と我々の課題」をテーマとして
**第3回
大平建築宿を開催いたします。**

主催 生活文化同人・共催 歴史環境設計会議



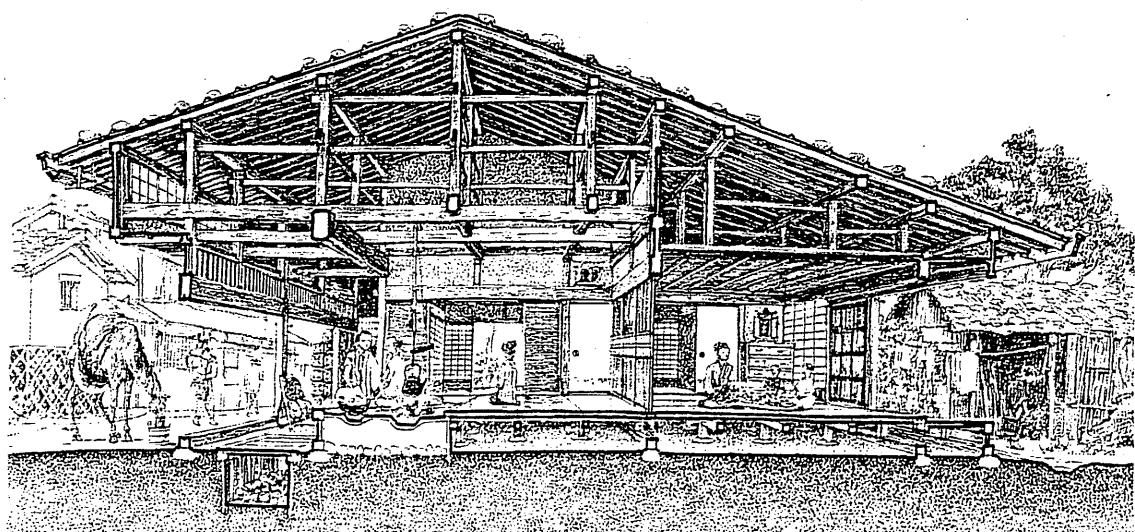
第3回大平建築宿へのお誘い

提供する、或いは提供されるという言葉がある。それを、建築を、或いは住宅を提供する、提供されるというようを使ってみると、現在の建築や住宅のつくられようの矛盾に気付くのではないか。

もしこの言葉の中に矛盾を感じると、事のはじまりは発想の原点にあることに気付くだろう。初めにボタンをかけ違うと最後までおかしなことになってしまう。

大平建築宿に集うことの意味は、発想の原点を確かめあうことだろう。今年の会もそんなことを期待しながら、集まってほしいし、私もそう思いながら行きます。

生活文化同人代表 吉田桂二



△大平民家（満寿屋）断面バース

画=吉田桂二



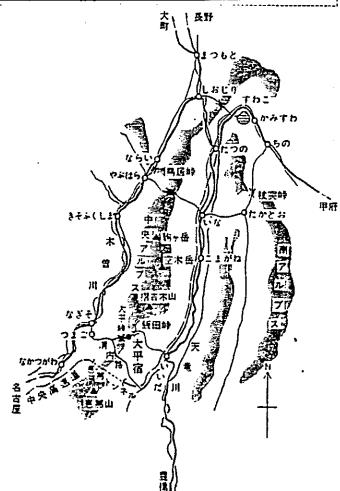
プログラム

16日(金)	① 現地集合・開宿 宿のガイド
	② 「基調講演」 本多勝一(ジャーナリスト) インタビュー：吉田桂二
	③ 炊事・夕食
	④ 「懇親会」
17日(土)	① 起床・朝食
	② 「新築の大平民家について語る」 吉田桂二 益子昇 高橋俊和 岡部隆幸 田原賢
	③ 炊事・昼食
	④ 「分科会」 <ul style="list-style-type: none"> 第1分科会「暮らしと望ましい家のありかた」 レポーター：長谷川順持 第2分科会「伝統技術を明日にいかす」 レポーター：吉田桂二 第3分科会「環境と共棲する家」 レポーター：高橋昌己 第4分科会「生活の道具をつくる」 レポーター：羽場崎清人
18日(日)	⑤ 炊事・夕食
	⑥ 「紙芝居・大平宿の物語」「子供達の唄」 吉田桂二 岡部知子 ※懇親会も同時に行います。
	⑦ 解散

基調講演をお願いするジャーナリスト本多勝一氏は1933年信州伊那谷生まれであります。著書は多数ありますが「そして我が祖国・日本」「貧困なる精神」が特に有名であります。

紙芝居は吉田桂二氏の絵によるもので吉田桂二氏が語ります。紙芝居の絵は絵葉書に印刷して販売する予定です(限定販売)
あわせて待望の機関誌1号も販売されます。

場所	長野県飯田市大平宿 (飯田と木曾を結ぶ大平街道の峠の宿場) 大平宿へのアクセス ・自家用車利用 中央高速道路飯田インターより約45分 ・新宿より高速バス利用 飯田市役所よりマイクロバス送迎
参加費	A 日程(2泊5食) 15,000円(小中学生8,000円) B 日程(1泊3食) 10,000円(小中学生5,000円) ※交通費、寝袋レンタル代(1泊1,000円)含まず
定員	200名
申込方法	次のページをお読み下さい。
参加する方へ...	<ul style="list-style-type: none"> ○交通手段 大平宿への交通手段は以下のとおりです。 ・自家用車利用 中央高速道路飯田インターより約45分 (現地には駐車場があります) ・新宿より高速バス利用 飯田市役所よりマイクロバス送迎 ○食事 食事は宿泊棟ごとに囲炉裏を囲み、ワイワイと自炊をします。材料は実行委員会で用意します。 ○寝具 寝具の用意はないので、寝袋をご持参下さい。 ない方にはお貸し致しますが有料となります。 ○掃除について 大平宿においては整理整頓に留意してください。 ○家族参加 家族参加は大歓迎です! 豊かな自然と楽しい生活体験が 子供達を待っています。 ○酒 夜はお酒をみんなで飲みます。 お酒の好きな方は差入れしてください。



第3回大平建築宿参加申込について

申込用紙に必要事項を記入のうえ、事務局連絡係まで郵便またはファックスにて送付下さい。
また、参加費は、申込時に下記口座へ振込をお願いします。
申込みされた方には、後日パンフレットを郵送します。

- 振込先 郵便貯金総合口座 10020 59169111 大平建築宿事務局 鈴木久子
○応募締め切り 7月16日
○お振り込み後のキャンセルは、原則として致しかねますのでご了承下さい。

この用紙をコピーして申込書として下さい

参加申込書 (実行委員会連絡係まで郵便もしくはFAXにて送付してください)

ふりがな

◆参加者 氏名 年齢 性別 男 女

住所 〒

電話 FAX
勤務先 〒
(校名)

電話 FAX

◆家族参加者・氏名・年齢・性別 (幼稚園児以下は無料です)

■
■
■

◆参加日程 (いずれかに○)

- ・A日程 (全日程参加)
- ・B日程 8月16日～17日 8月17日～18日

◆参加希望分科会 (いずれかに○)

- ・第1分科会 暮らしと望ましい家のありかた
- ・第2分科会 伝統技術を明日にいかす
- ・第3分科会 環境と共に棲む家
- ・第4分科会 生活の道具をつくる

◆寝袋 (いずれかに○)

- ・レンタルします (・1泊 1000円 ・2泊 2000円)
支払いは現地でお願い致します
- ・持参します。

◆交通手段 (いずれかに○)

- ・自家用車利用：東京周辺～飯田～大平
・席に余裕があるので誰かを便乗できます
- ・高速バス利用： 飯田～大平～ タクシー分乗
- ・マイクロバス希望

◆申込みの送付先

郵便もしくはFAXの送付
先は実行委員会の連絡部
までお願いします。

大平茂男
〒359
埼玉県所沢市上山口
2066-21
順設計事務所
TEL・FAX
0429-28-8046

◆参加を申し込みされた方は、・A日程は1万5千円、B日程は1万円をすみやかに上記の口座へお振り込み下さい。

大平宿については、住宅建築1994年5月号に詳しく掲載されております。ぜひ一読下さい。

△焼失地帯の復元バース（吉田桂二）



第3回大平建築宿実行委員会のスタッフ（●印は各担当のリーダーを示します）

委員長　日影良孝　連絡先　（株）エアクリエイティブ　電話　03-5466-9277

□会計担当	●鈴木 久子 吉塚 幸雄	□参加者連絡部	●大平 茂男 大平 秀和 宮越 喜彦
□食事担当	●石引 浩子 田島美沙子 佐藤 基 大久保 歩 迫田 英也	□生活担当	●西岡麻里子 島田 真弓
□広報担当	●松本 昌義 森山 ゆき 日影 良孝	□懇親会担当	●新井 聰 勝見 紀子
□カメラ担当	●伊藤 秀夫	□機材備品担当	●佐藤 基 大久保 歩 迫田 英也
		□交通運搬担当	●内藤敬介

米国のティンバーフレーム工法についてーその7ー

(有) 宮坂建築事務所 宮坂 公啓

◇木造異文化交流の必要性と提案

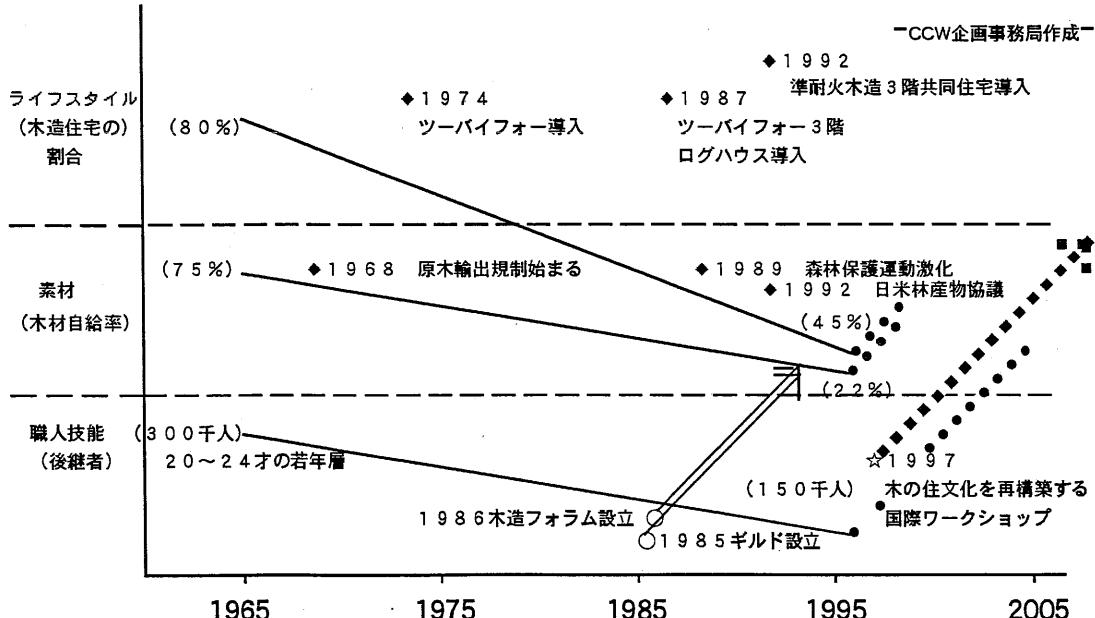
今まで6回にわたり、ティンバーフレーム工法について「誰が」、「何を」、「いつ」、「どこで」、「どのように」、「なぜ」などを紹介してきたが、最後にティンバーフレーマーズ・ギルドと日本の木造建築に携わる人々との交流を提案することで、まとめたい。

この交流は、現在、木造建築研究フォラムにおいて「木の住文化を再構築する国際ワークショップ－持続可能な木造建築に向けて－：Cross Cultural Workshop for Sustainable Wood Architecture（略称；CCW）」と名づけ、来年度以降の公開フォラムとして企画中のものである。下の図はその必要性を、右の図は交流内容を表わしたものである。

この交流の目的を一言で言えば、「日本と米国の軸組木造の復興と、森林保全のための相互理解の促進」である。なぜならば、両国とも、近世において確立した軸組木造による木の住文化をもちらながら、近代化の過程でその発展はなされず、ともに衰退した歴史をもち、この四半世紀の両国の森林資源の利用は次にのべるように軸組木造と密接な関係があるからである。

すなわち、米国では豊富な森林資源を背景にした製材機の改良と、丸釘の量産によってツーバイフォーが盛んになる1830年以降、軸組木造は建設効率の低さゆえに、約100年間とだえ、20年前に自然回復運動の中で復活した。一方、日本では戦後の職人の徒弟制度の崩壊と共に、製造業を中心とした技術革新と高度経済成長の中で住宅は耐久消費財と扱われ、軸組木造は衰退の一途をたどってきている。その結果、日本は'94年現在、国産材自給率が2割強に落ち込む一方、カナダを含めた北米地域の林産物への依存は高まり、丸太、製品だけでみても国産材とほぼ同じ全消費量の2割強、チップ・パルプを含めると4割弱となつ

日米両国の過去四半世紀の木の住文化をとりまく要因の変遷と今後の展望



各統計数値は「木と建築展」'95・2展示パネル集（住木センター・日本建築センター共催）より

ている。この北米依存の木材の消費は左下の図に示すように木造住宅が減り、次代の木の住文化にならう若い職人がいなくなればなるほど増えるという悪循環をこの30年間くりかえしており、歯止めになっているのは、北米側の原木丸太の輸出規制とマダラフクロウの生態の危惧にはじまった森林保護の運動ぐらいで、積極的な打開策は今のところない。

「適材適所」という木材利用の知恵にもとづけば、日本側は、まず製紙原料となるパルプやチップの消費量を減らすと同時に、国産材の本来の使い方である軸組木造の柱や梁材としての利用を取り戻すことであろう。だが、周知のように北米の林産物に関しては、円高を容認した'85年プラザ合意以降、絶えず日米経済協議において、日本の対米貿易収支の均衡を図るための政治的交渉材料の役割を担わされ、一朝一夕な解決の見通しは得られていない。

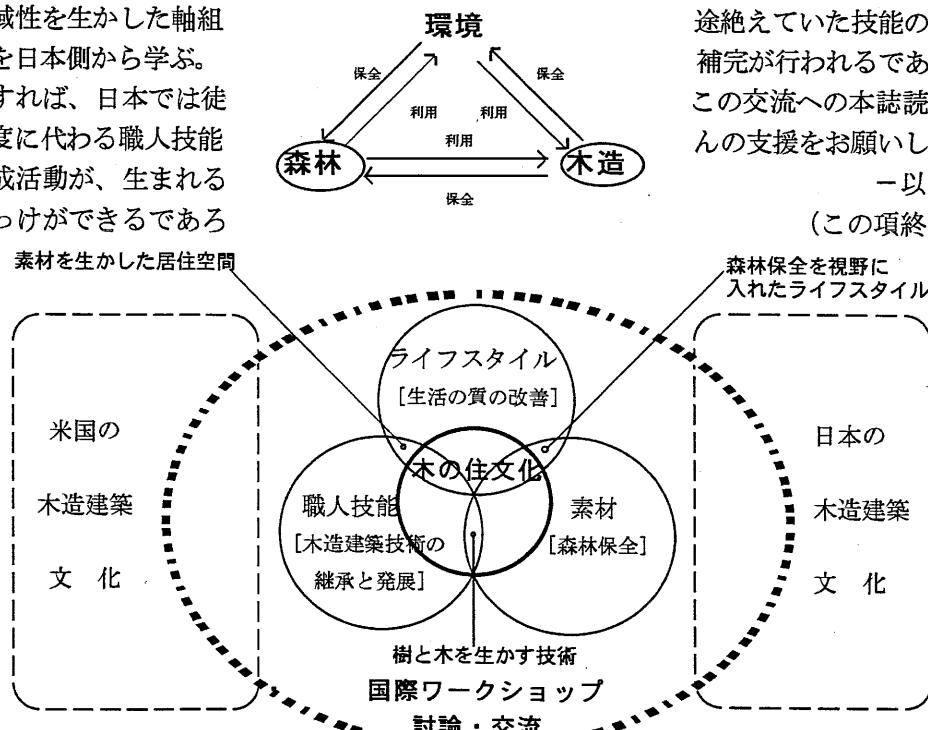
だが、ここに日米間に共通する価値観が生まれたらどうであろう。つまり、本来の軸組木造がもつ耐久性が、森林保全に果たす役割への認識である。単純計算では、森林を破壊する大規模な自然災害や気候異変が起きない限り、木造の建物は使われる木材の樹齢と同じくらい長持ちすれば、森林資源は減少しない。このような生産と消費のバランスの上に適切な森林管理がなされれば森林は保全される。やや楽観的ではあるが、このような認識が両国の社会的合意として広がれば、日米の森林資源は必然的に等価値をもつことになる。日本の樹を使わないということは北米その他の樹を使うことであり、いずれの樹も、使う以上は樹齢以上に木を長持ちさせる使い方をしないと、その影響はいずれかの森林に及ぶことになる、という認識である。ここに現状を開拓する出発点の一つがあると思うが、いかがであろう。

この交流では、日本側は米国側からギルドが行なっているワークショップとよぶ大工技能養成のための非営利活動の方法を学ぶ。一方、米国は衰退してきたとはいえ、まだ日本の全国各地に残る、それぞれ

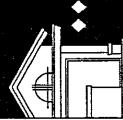
の地域性を生かした軸組木造を日本側から学ぶ。そうすれば、日本では徒弟制度に代わる職人技能の養成活動が、生まれるきっかけができるであろ

うし、米国では、100年間途絶えていた技能の伝承の補完が行われるであろう。この交流への本誌読者皆さんへの支援をお願いしたい。

-以上-
(この項終わり)



CCW企画事務局ではこの企画の実施運営に協力していただける個人および団体を探しています。情報提供をお願いします。連絡先：電話：03-3228-4691 FAX：03-3228-4695 宮坂建築事務所 宮坂



住み継ぎの仲間たち

住み継ぎネットワークのメンバーからの寄稿その2

ある女たちの風景

北原泰邦

彼女たちは余り広くない仕事場に居た。薄いスノコの板に厚手の座蒲団を敷き、斜めにした片膝のあいだから腕をまわして頻に庖丁を動かして居る。昼過ぎたといふのに、仕事場はそれ程明るくなかった。ただ、何本かの蛍光灯と、高窓から差し込む光だけがその空間をぼんやり照らして居た。

宇田川さんと渡辺さんは僕を見るなり、ちょっと驚いた風であったが、豊田さんの名を出すと、ああそうかね、元気かねと言つて話しだしてくれた。豊田さんといふのはここに来る前に寄つて来たムキ屋で話してくれたムキコである。豊田さんの居た仕事場は魚の工場といった感じで、種々な魚貝類がそこでは加工されている。彼女はその一角で十数人の仲間と共に貝を剥いていたが、その手さばきは、素人の僕が見ても「名人」と呼ぶにふさわしいものであった。大正生れの豊田さんは浦安でも最も古いムキコの内の一人だったのだ。僕は彼女から色々の事を聞くことができた。

その豊田さんが以前に居たのが、この小さな仕事場であった。

実際、ここは前の大工場と比べると小規模なものである。僕は仕事場に彼女たち一人しか居ないのを不思議に思つて、普段もお一人でやられているのを尋ねると、宇田川さんは首に掛けたタオルで汗拭いながら、貝を剥くのも、それを冷蔵庫へ運ぶのも、貝殻を業者に受け渡すのも、すべて自分たちでするのだ、と応えた。

全盛期には家屋の軒先で剝き作業をした位である。女一人だけ仕事をすること自体驚きはしなかつたが、冷蔵庫から10kg程ある浅蜊の袋を運搬することは容易ならぬ作業の様に思えた。

隣に居る渡辺さんも、貝の殻を集め業者は何時にやつて来るのだと、一日の生活の様子はこんなだとか話して呉れた。彼女によれば、仕事の

ある日は忙い、毎日五時半頃起きて朝食の仕度を済ませ、最後に子供を学校に出てからムキ場にやって来る。そして築地からの荷入れが済む。八時半頃から貝を剝き始めるというのである。

こんなムキコたちの一日の生活リズムは、時こそ移れど、それ程かわってはない。少くとも數十年前迄は、浦安の女たちの殆どがこんな生活を送っていたのである。彼女たちは子供の頃から親に連れられムキ場に入りし、母親の腕を見ながら、庖丁を使う事に慣れた。そして成人する頃には一人前の浦安の女として、貝を生活の糧に変えてゆく。

今、僕の前に居るのは、こうして時代を知る最後の女たちになってしまった。

彼女たちは昔を振り返つて語り始める。昔の仕事場の様子は僕も写真で見たことはあるが、やはり写真だけでは判らぬものだ。例えばこのムキミ屋の造りも、今ではコンクリートの防壁で固めているが、昔は草葺きの屋根を掛けた、隙間風も這入り込む様なものであった。貝剝きで最も忙しいのは冬期である。女たちは七輪に炭を入れて暖をしのぎ、その傍で肩を寄せ合う様に庖丁を動かしていたという。僕はそんな光景を思い浮かべてみたけれど、すぐに止めてしまった。下卑たことだと思った。いくらその情況を想像しようとも、その風景は断片をはり合せただけの空虚なものになりそうだったからだ。僕は無性に恥かしい思いがして下を向いた。そこには肉を剥られた浅蜊の殻が海水を滴らせてころがっていた。僕はアビッケを使ってそれをザルに移してみた。何回も移している内に、底の方から独特の臭いが鼻を突いた。

そんなことせんでも良いのにと言う宇田川さん
に、いえ何事も経験ですからと厭の分からぬいこ
とを答えた僕は、少し判った気がした。

それから宇田川さんは、正月の初荷の時の様子
を話してくれた。何でも正月五日に初めての荷を
築地に売りに行つた帰りには、トラックに青や黄
色の旗をたてて威を示しながら帰つて来るとい
う。詳しい事は聽けなかつたが、こんなことをや
つていたのはこのムキ場だけではあるまい。浦安
中の魚問屋たちも含めて、そのトラックの数が道
をうめつくす姿は想像するに難くないだらう。

そうしたやりとりを続けてゆく内に、二人の前
にあつた貝がすべて剝かれた。彼女たちは殻を集
め終ると、再び冷蔵庫にある浅蜊の袋を取りに立
つた。僕も立つてそれを手伝つた。持つてみると
やはりなかなか重いもので、女たちは半分、地に
引きずりながら、それを仕事場へ運んだ。彼女た
ちはここで働くようになつてからもう二十五年経
つという。歳月と共にムキ場の様子も変わり、様
々な貝を扱つてきたこのムキ場も、一・三年前か
ら浅蜊専門になつた。こんなもんは浦安の女なら
誰でも出来るだ、という女たちの威勢の良い声も
聞かなくなつて久しくなる。

けれどもここに居る一人の女性は、そんな古き
良き昔日の思いに耽つてばかりはいられないだろ
う。今日も彼女たちの前には無数の貝の塊が置か
れ、彼女たちはそれに庖丁を入れてゆく。そんな
光景だけは、昔も今も決して変わるはずもないの
だから。

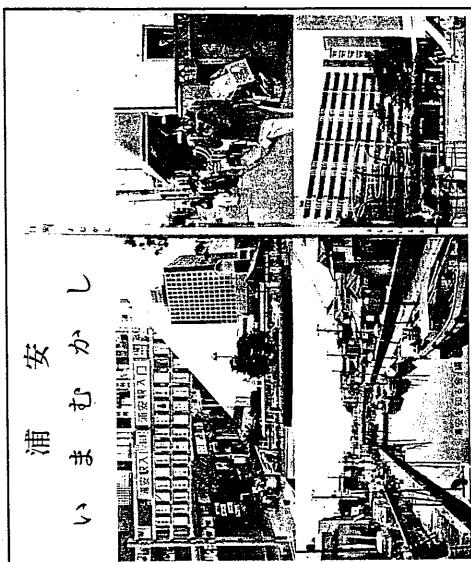
(北原 泰邦)



カイムキのおばさん（当代店）

ムキコ

漁師が採つてきた貝から、むきみ包丁を使
つてムキミを取り出す職業。ムキコは漁師の
オッカア（奥さん）たちが小遣い稼ぎとして
行うことが多く、男の子が漁師の仕事を覚え
るように、浦安に生まれた女性たちは学校に
上がりぬうちから見よう見まねでこの仕事を
覚えた。あさり・はまぐり・あおやぎ（ば
かなど、貝の種類によってむきみ包丁を使
い分ける。ムキコはむきみ屋のムキ場へ出掛
けて貝むきをする者と、むきみ屋から貝を自
宅に運んできてむく者とがいた。熟練者にな
ると一日に大バイスケ（二斗五升入るザル）
に入つた貝を十五杯はむいたとい。むいた
貝の量を小バイスケ（一斗入るザル）で量
り、一杯いくらで賃金をもらつた。賃金は三
日あるいは四日に一度支払われた。



浦安むかし いまむかし

北原氏のエッセイはこの本からの転載です。
「浦安いまむかし」　浦安を知る会編

同人紹介：衣袋 和子（いぶくろ かずこ）

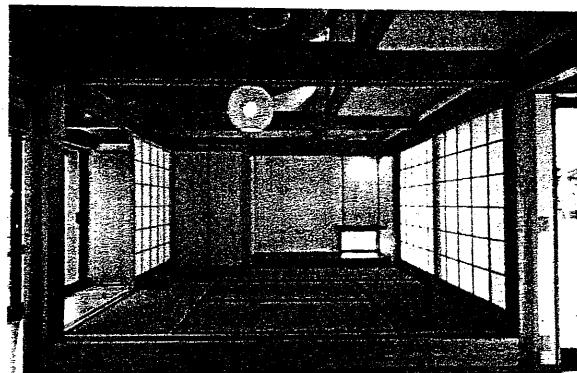
1988年7月：松井郁夫建築設計事務所入社

この入社が私の同人との係わりの始まりです。最初は中野の「じんじん」という飲み屋の2階でした。その後もしばらくは、場所は変わっても小さな飲み屋の2階というパターンは殆ど変わらず、その小さな部屋でお酒を飲みながら、みんなが熱くなつて建築についてのあれこれを語り合っていました。今でもわからないことがいっぱい（もうそんなことを言ってはいけない）ですが、当時はほんと何もわからず聞いているだけの状態で、ただただその熱意に圧倒させられました。それまで何となく仕事をしていた私にとってそれはとてもショックな光景でした。でも、あのときはあんなにショックを受けたのに、それまでの〇年間を「ただ何となく」という生活をしていた人間が、そうすぐにきびきび動けるわけもなく、あつという間に7年が過ぎ、今つくづくその歳月の重さを実感しています。

入社時はとても贅沢な時間を過しました。朝の1時間、デッサンの時間があったのです。ポーションを捉える眼を持つことが大切だと。先生はもちろん所長、1対1で指導してもらえたんですよ、ほんとなんて贅沢な！ああ、でもそれも過ぎ去つてわかること、当時はとても苦痛な時間でした。だって緊張が先にたつて、とても苦手な授業だったんです。所員一人なので、入社当時からいろんなことさせてもらいました。図面はもちろん模型作成、実測の手伝い、etc.でも、入社して3年目ぐらいから（それまではちょっと勘違いをしていて結構できると自我自賛してたのでした、ばかですねえ）、何にもわからないで図面をかいてることに気づき、それから仕事のペースがどんどん遅くなつて、そしてそれは少しも留まることなく益々エスカレートするばかり。よくもまあこんな私のスローペースに付き合つてくれるものだと所長に感謝しつつ、甘えてそのペースを今も守つておられる私です。

こんな風に自分を振り返るといついつい後悔録になつてしまふので、ここでちょっと最近の仕事のことを書きます。私は去年2つの現場を担当させてもらいました。一つは住宅、もう一つは病院の院内保育所です。住宅の方は、前に一度一緒に仕事をさせてもらった大工さん・渡辺棟梁と下山さんとだったので、「納まらない図面書いちやだめだよ！」といわれながら、それでもここが違う、ここはこうした方がいいと随分教えてもらいました。ここは上棟の時からわくわくするような現場でした。しっかりした木組、大きなゆったりした空間、建てている時からご近所の人が犬の散歩がてら回り道して見学して行くなんということもありました。その住宅もこの4月の終わりに完成、若い夫婦が小さな子と一緒に連休中に引っ越してきました。先日久しぶりに行ってきましたが、とても快適に過ごしているというので素直に嬉しかったです。

院内保育所の方は、リグショップ方式で進めた建物です。保母さんや看護婦さんたちが間取りゲームをやるなどして必要な部屋や設備を決めました。大きな鉄塔をさけるようなRの形、200φの太い丸柱、枝のようにのびる方杖。でも現場が始まると私としてはとても大



▲住宅：食堂から座敷



▲住宅：食堂から廊下・玄関へ

変な現場でした。大きな現場なので直接大工さんと話すのでなく、定例会等で現場監督と打合せをして仕事がすむというのは、何とももどかしい感じでした。自分で仕事の段取りやスケジュールを把握できていないととても大変なことになってしまうというのがつくづくわかった現場です。

完成して子供達が丸い大きな柱にしがみついて泣きたい時の拠り所にしているとか、庭で泥んこになりながら思い切り遊んでいるなどという保母さんたちの話を聞くと、そんな現場

に係ることができてよかったです。こうしたいろんな経験がしっかり身につくことが目下の私の目標です。じゃないと、今日できる仕事を明日にまわして図面を待ってくれる大工さんに申し訳がない。

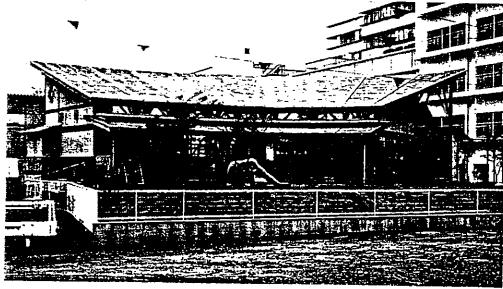
担当の現場だけでなく、事務所の他の仕事でもいろんなことを経験しました。その一つに福島の民家の再生がありました。お施主さんに言わせると誰からも見放された民家だったところに、小林一元さんと益子昇さんと所長の三人で実測し出かけました。約3年前です。そして、一人ごつごつやる大工さん・宍戸さんと出逢い、現場が始まりました。週1で現場に出かける所長の写真を見せてもらしながら本物を見るのをまち遠しく思っていました。壁を全部とりはらった骨組だけの家、きっとこの時はお施主さんも不安だったに違いありません。それでも段々出来上がってくる家をみて見放していたご近所のおじいさん達もこりやたいしたもんだと感心し、今度は茅場を提供してくれる協力者に変わっていました。自分達で茅を刈るお施主さん、そのお施主さんの人柄や珍しさも加わってそれは茅刈り体験ツアーとしてたくさんの人の参加をみるとなりました。私も去年3回目のツアーに参加しました。地元のテレビ局も追いかけていて、その夜のニュースに出た時は皆で拍手をしました。そしてそれは今年も催され、今回はグシ部分の葺き替えのため、最後の日はグシ祭りもやったそうです。参加できなくて残念でした。

その民家が松下電気の『健康な住まい』コンテストに入選しました。

第1次の書類審査では、設計者側の主旨として大きな民家を生かして夏の部屋（イロリの間）と冬の部屋（コタツの部屋）に使い分けたこと、現代生活を考慮しつつ昔の生活の形態を生かした家、本来の素材（土壁、無垢の木）に健康の源を期待した家であることを述べれば、お施主さんはイロリの火を絶やさぬよう毎日牧割りに勤しんでいることなど家のための仕事が多い家と嘆きながらも、最後にはかえって健康にはいいかも知れないと締めくくっていました。でも本当にそうではないかと思います。本来、建ったら終わりではなく、自分達が快適に過ごすためには家を大切に、メンテナンスを人に任せのではなく自分達です、それは昔当たり前にしていたことだったように思います。民家の再生は建物だけでなく、そこに住む人達をも本来の家との関りに戻してくれたように思います。この結果は日経アーキテクチャーに載るそうなので、みなさんご覧になって下さい。

では最後に同人の会計担当として一言。

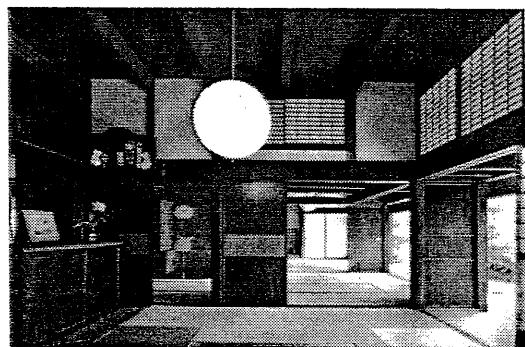
皆さん、会費をお忘れなく！



▲保育所、庭側の外観



▲夏の部屋から台所をのぞむ



▲民家の再生：冬の部屋と続きの畳の部屋

■女技会「吉田学校」がおわって

※「吉田学校」の感想やこれから設計に携わっていくときの気持ちなどを寄せいただきました。
これは女技会の会報「定木」に掲載されたものですが、同人会報編集局の方で再構成しました。

◇ 「吉田塾」卒業話

石引 浩子

昨年の初春「吉田学校」をきっかけに、女技会の会員になりました。時のたつのは早いもので年6回という貴重な講習を終え、今感謝の気持ちと共に若輩者ならでは（？）の感想を添えさせていただきます。

まだ、肌寒い日、私などが？恐る恐る参加したのを思い出します。そこではご多忙中にもかかわらず先生は我々の希望、願いを受けていただき、勉強会の方針、すばらしい企画が用意されていて、その先生の姿勢を拝見して自分が恥ずかしくなりました。それと同時に私の分岐点でもあった一年の扉が開いたように思いました。

学校を卒業して間もない私はいろいろな意味でショックを受けたと思います。まず、木造架構の手法（伝統構法）が教育の中に歴史や風土を含めて伝承されているのか？なぜか「古い」、「昔の」という言葉でまとめられているように感じていました。しかし、吉田先生の授業はそのようなことを超えた上でいつも新しいことに希望を生みだしている。架構の合理性をふまえた自由さ、開放感、そして木造架構の奥深さ、楽しさを教えていただきました。そして、良い意味で、その内容を理解するまでに至らない自分を知りました。そこで理解度のバランスも考慮されてか、授業形態はスライドと図解コメント、口頭でフォローしながら、いろいろなエピソード等盛り込みつつ分かり易くご講義頂き、先生の出版されている活字の中で見られないような少々くずした話なども聞けました。あたりまえのようだがあらためて設計は楽しいという最も簡単で難しいことを知らされました。そして何より今の私が講習で得たことは、基本的なことですが、見る目を生み、持ち、育てるということのこのような気がします。限りは無く架構の勉強は続くと思いますが、いろいろな目を見開いて手を動かす！！

最後に、風景の中に生活の中に息づく家を立場を越え人と人、自然とのつながりの中で楽しい生活文化を生み出し、設計の仕事に携わっていきたいと思いました。若輩者の感想で少々熱っぽくなってしまいましたが……。

◇ 木造架構の勉強会と四国旅行に参加して

新見美枝子

木造架構の設計勉強会が終わりました。そして卒業旅行として四国まで行ってきました。この回はいつからか「吉田学校」と呼ばれるようになりましたが、吉田先生と女技会有志の人達で企画された勉強会です。どんな内容のものになるかわかりませんでしたが、女技会の人達と木造の勉強ができる。これからは創ることに共通のする言葉がもてるのではないか、ということと、今までの経験で木造の家をつくってきましたが、木造を体系だって考えたことがなかったので、是非参加したいと思いました。

この学校では、吉田先生の木造架構の手法を学ぶばかりでなく、課題が出されました。その課題で3週間位悩まされました。それをやることでずい分訓練され、グリットプランのつくり方が分かってきました。採点され、赤入されて戻ってくる図面を見て、一喜一憂したものです。始めの頃は、細かいところにこだわった複雑な間取りも、架構から入ると大分すっきりしてきました。頭の中が整理されたようです。

架構をデザインとして考え、間取りと架構と空間に整合性をもたせる、これがテーマでした。参加者のプランも手元にありますが、これがまた大切な資料になっています。一方的に授業をうけるのではなく生徒も提案する、皆が参加する相互創造の場だったように思います。

四国旅行は、かつては手づくりロウソクで栄えた街、内子が中心でした。最近では、大江健三郎さんの出身地として知られた所です。

この街は、昭和57年に、重要伝統的建造物群保存地区に指定されました。街道の両側には、瓦屋根に白しっくいと黄土の壁の家並みが深々と庇を出していました。風土に合った建物がそこにもありました。

この地で、吉田先生は民家の再生もしています。その民家「石だたみの宿」に泊りました。地域の婦人達のもてなしで、美味しい食事をいただいた後、囲炉裏を囲み、吉田先生始め、内子街づくりの仕掛け人である岡田さん、地元の建築家永見さんを交えて内子の街づくり、村おこしの話を聞くことができました。

ここでは「地域資源」の充実をはかり、景観と自然を資源として、環境保全を大切にしているということです。満天の星、さわやかな風、ゆったりとした生活、人との温かいふれあい、水源豊かな森や山、そこに暮らす人々が共に働き地域をつくる。人々のつながりが街づくりにつながることを感じました。

街の中に内子座があります。内子座は大正天皇の誕生を祝ってできた歌舞伎劇場です。一時、倉庫や映画館に変わったこともありましたが、今は桟敷も復元して、りっぱな芝居小屋になっています。一拝4人に入る桟敷席に座ってみると、舞台も花道も非常に近いです。演者と観客が一体になり、私でも思わず声をかけてしまう光景が目に浮かびました。

吉田先生まるごとに触れたくて、ずっと参加しつづけた私には吉田学校と内子座が二重映しになっています。我々をひきつけ、そして巻き込み我々にも演じさせるのです。奥にのれたのかどうかは皆各々ですが、この勉強会がとても楽しい会だったことを報告します。

この様な授業はどこでも受けられるものではありません。もう二度とない勉強会でした。わからない事、聞きのがしてしまったこともあります、これからは毎日の仕事の中でためしていこうと思います。

吉田桂二先生には、我々のために大切な時間をとって下さいましてありがとうございました。そしてこの会の世話役になって下さいました皆様にも感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

◇ 木造架構の勉強会に参加して

木村真理子

プランニングは間取りだけでなく空間で考え、室内気候も機械設備に頼るのではなく、空間のつながりを利用して、ローテックな仕掛けを楽しみたい……。そんな気持ちで計画を進めていくと、できるだけのびやかで広がりのある空間が創りたくなります。

作りたい空間のイメージ通りに架構を組み立てることは、やろうと思えば出来てしまうけれどども、果たして本当に大丈夫なのだろうか？基準となるべき架構と木造の本来のありかたは？平面剛性に仕口はどの程度あてに出来るの？材の欠損や強度は架構を考え方にどの程度影響するのか？？？etc. ……。わからないことだらけ……。

特殊な金物を使ったり、構造計算をしないで、木造を納得して計画できるようになるために、木造を学びたいと常に思っていました。そこへ、今回の勉強会の企画！本当にタイミングでうれしい企画でした。

木造を知り尽くした吉田先生の講義と事例説明を通して、判断のよりどころと出来る基準のようなものがわかってきたように思っています。また、たくさんの良い事例を調べることの大しさ、過去、現在、将来とひとつのラインで体系的にものを見ることの大しさを改めて考えさせられました。

そして、何より不安が減って反対に空間のかたちやつながりに架構をプラスしてデザインする楽しみが出来ました。（まだ、複合的な力の流れや、水平材の扱いに私のインテリアイメージが追いつかず今のところは苦しみですが……。）

また、出席を重ねる毎に“架構をグリットプランニングの意味”（架構と空間を整合させるというだけでなく経済性、合理性、ひいては汎用性を目指した方法論ということでしょうか？）も理解できたように思います。

ほとんどの施主は、一生に一度か二度持てるかどうかの家づくりの機会を一設計者にまかせてきているのですから、勉強したことを見た者それが、それなりに咀嚼をして、日々の実務のかえしていくことが、我々の仕事だと思っています。

吉田先生と勉強会の準備に動いて下さった方たちへ本当に貴重なチャンスを与えていたお礼の気持ちにかえて、（やっぱり）つたない感想を書かせていただきました。どうもありがとうございます。

◇ 吉田学校に参加して

廣田 文子

“仕事やめた方がいいんじゃない点”が付いて二度と立ち上がれなくなったらどうしよう。数々の住宅を設計されてきた方々の中に混じって講義を受け宿題を提出するのは、毎回緊張の連続でした。が、先生はキャリアに沿った添削をして下さり、カラカラと振れば鈍い音のする頭に活をいれながらやっと、最後まで提出することができました。有り難うございました。

私と木造架構グリッド工法との最初の出会いは、以前お世話になった事務所での上棟の折、尺梁と登り梁がオングリッドで組まれた姿がそれだけで造形的な美しさを持ち、壁で包みこんでしまうのは不自然と感じた時でした。当時は木造架構グリッド工法という名称は知らず、ここまで架構をシンプルにまとめるこの難しさだけを感じていたものでした。その後、グリッドに捕らわれることを悪しとする教、ゼロの空間への憧、直線は罪であると言い切るファンデルトバッサーの論、曲線の持つ確かな快、こだわることから捕らわれることへと固まってしまう頭の中で何を基本とすれば良いのか曖昧になってきていました。そんな時にこの学校で、架構をグリッドで押えて空間を造るという手法と再び出会い、混沌とした頭の中を整える手段として学ぶことが出来ればと。木造建築の本来ありたい姿は、空間を造るにあたって基本的なことは何か。これらをふまえたうえで広げて行けばよいのであって、伝来の木造建築は水平と垂直の美を造りだす場面が用意されており、屋根が勾配をとることでリズムも生まれる、これを意匠として活かさない事の方が罪ではないだろうか。‘住まい’という人々の生活を包む空間の構造体（木）が把握できることの視覚からくる安心感は必要不可欠のものとして掲げて置きたい等と思うに至りました。また、外周は細かく内部は大らかにという手法の特徴は、将来の改造においてもメリットと成り得、車イスへの対応等自由度の大きいものとなるのでもあります。

一年間の講義を通じてのクラスメイトの皆さんとの出会いはとても大切にしたいものとなりました。この機に多くの方々のプランニングを拝見することができ、その人というものが現れる素清らしさを感じ、また同時に怖さも感じ、哲学なんて避けて通りたいものだと思っておりましたが、人がどう生活して行くか重点の置き方、家族との交わり方など自然とプランに現れるものだと痛感いたしました。そうは問屋が卸さないってことですね。また、内子の研修旅行がとっても楽しかったことも皆さん緊張感ある講義を終えてからのことだったからでしょう。石畳の宿の天井の低いづし2階で寝てみたかった私は睡眠時間を削る覚悟でチャレンジ！

教訓－やはりいびきは甘く見てはいけません。

さて、最終日に“普遍性のある独自の作風”という恐しい課題が出されました。〆切がないのをいいことに遊び呆けて居る自分にちゃんと活を入れて日々精進したいと思います。が……。

◆◆◆「韓国旅行」のお知らせ◆◆◆

以下の内容にて韓国旅行を企画いたしました。

- 講 師 吉田桂二
- 期 日 平成8年11月1日～4日
- 場 所 おまかせコース
慶州・ソウルなど民俗村を巡る
- 費 用 100,000円
- 定 員 20名
- 参加資格 生活文化同人96年年会員のみ

8月に勉強会を行う予定にしています。締め切りはその日までとしますが定員になり次第締め切らせていただきます。
※年会員は会費7,000円を納めていただいている方です。

資料その他協力：石川正子

世話人：益子 昇 勝見紀子
松本昌義 岡部知子

○申込・問い合わせ先

FAX: 0429-77-2491
おかげともこ

※問い合わせもFAXにてお願ひいたします。



• 写真はイメージでコースとは関係ありません。

-----キリトリ-----

申込書

○韓国旅行に申し込みいたします。

平成8年 月 日

名前：

連絡先住所：

T E L :

F A X :

超 101人 Camp!

とにかく楽しもう！

カタイコトは抜き！

みんなでアイデアをいっぱいにして手と頭を使って遊ぼう！

わりばしファイサーもあるよ！

自然の中でこそできることしよう！

自然の中で宝探し！早めにくればいいコトもいっぱい！

仲間をふやして元気をつけよう！

参加者がみんなでつくる集いに！

足柄森林公園丸太の森

日時：1996年6月1日(土)～2日(日)

場所：足柄森林公園 Tel 0465-74-4510

受付時間：PM2:00～

会費 1人：6000円 (学生5000円中学生以下3000円)

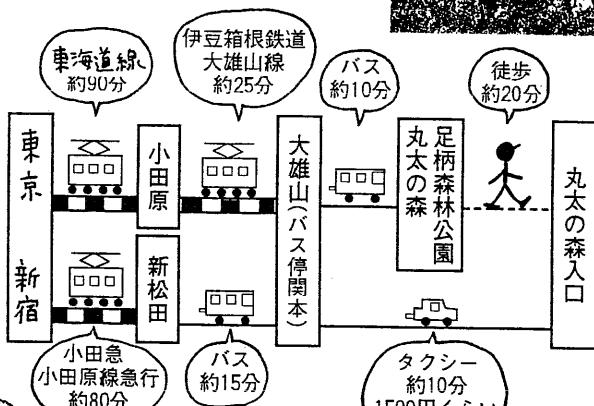
(交通費は含まれません。酒代は多くても1000円です。)

申込み・問合わせ先：

地域建築空間研究所 黒崎 03-5976-6771

象地域設計 江国 03-3601-6841

申込み〆切：5月27日（月）



申し込み方法（銀行振り込みです）

振込先

富士銀行目白支店 普通2310 533645

新建築家技術者集団 東京支部

学生5,000円、中学生以下は3,000円、6才以下は無料です。

※複数の場合は代表者の氏名を記入して下さい。



◆後日、領収書と簡単な案内、パンフレットをお送りしますので
裏の用紙に記入のうえFAXか郵送で事務局までお送り下さい。

※申込みの締切りは5月27日（月）まで

なおキャンセルは5月27日までに連絡があれば、半額（3,000円）
返金します。

新建築家技術者集団 東京支部

〒151 東京都渋谷区代々木2-26-1 第一桑野ビル5階C

TEL 03-5351-2198 FAX 03-5351-2166

みなさんお久しぶりです。前回休ませてもらいました

しそ、更は今、自宅の改装工事も三ヶ月に渡りや

つこまして、忙しいから、日曜日も仕事をしてゐる
やうで、すみませんでした。このことは次回から

もう書こうかと思つています。今度は引き続

ぎでチリ拭くです。この作業はシヤカニ屋の基

礎として、しかももしかいのです。また道具です

がみなさんし、このとおりチリほうきとチリハケ

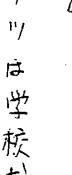
みす



者ではチリハケを自作したりし

この下か図の様なやつをです！現在は市販の千

リハケ



チリほうきとしこ使つて

います。ハケツは学校など掃除の時に使うカネの

ハケツで、これに水を一升以上位の量入れ、

うと、まずチリほうきを



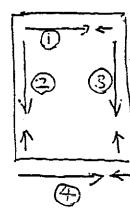
図の様に持ち、

ハケツの水にチリホウキの毛を半分程入れて毛を洗

い。ハケツのヘリで叩いて水をきるだけです。3回程叩いています。これにも個性があり、親元は、パンパンと左右に3回、兄弟子はパン、ともたけ

パンパンですよ。この音で三人が見えない所で仕事をしてても、だいたい二で何をしにいるかわかる

子供です。で、実際に拭く段ですが、図の様な



順序で拭ってきます。

大切なのは、最初と終わりにして

最初は、チリほうきを小刻みにし、トメの余分を不
タを取り、あとはひとあめに息を吐きながら真

すぐに拭く段です。左から右のチリは下から上に
10cm程変えしき拭く段ですが、その時は水はいつも
より多めにさり足りと、拭いても水が垂れる段です。

といふ段で、チリは拭けた段ですね！

大事な所で、チリを拭く時の注意点は、又次回と
言う事で、次回にコウエキタイ

■同人活動

- ・益子 昇 日経アキテクチュア(0408号)
現代のすご腕 “現場の知恵袋”として奔走する
- ・鈴木久子 日経アキテクチュア(0422号)
住宅再生の経済学 民家の移築再生「那須の家」
- ・宮坂公啓 住宅建築4月号 人と作品 「浜田山の家」
- ・高橋昌巳 住宅建築5月号 土の可能性・「大泉の家」



※今回は会報編集局の知る範囲でも同人の活動の紹介記事等が多く掲載されました。

特に日経の益子さんの記事は、普段お酒を飲んでカラオケでマイクを握って赤城圭一郎や千春になりきっている姿しか実をいうとしらなかった私にとって、その姿（写真は製図板に向かっている益子さん）は新鮮でありました。・移築前の痛んだ写真からは想像もできないような姿にみごとに再生した「那須の家」鈴木さんの苦労話も伺いたいところです。・この会報にティンバーフレーム連載の宮坂さんの「浜田山の住宅」は竣工間際に見学させて頂きました。直営でいろいろご苦労があったと聞いています。・いつもながらの高橋さんの「土」へのこだわり毎度毎度の脱帽です。個人的な感想として垂木のRの削り出しが現場はつらかったと思うのですが……。（喜）

※各出版物、TVなど同人の活動を紹介したいと思います。情報を寄せ下さい。

■書籍

- ・機関誌：生活文化(VOL.0) 会報No14までの合本 ¥2,000
- ・機関誌創刊号：生活文化(VOL.1)

※創刊号は年会員の同人に手渡しもしくは郵送させていただいたと思いますが、まだお手元に無い方は事務局までご連絡下さい。複数部数（1部¥2,000円）が必要な方も同様ご連絡下さい。

■事務局より

- ・第3回大平建築宿へ向けての事務作業がスタートしました。同人の皆さんにも宜しくご協力お願ひいたします。今年の企画も盛りだくさんで、夏が楽しみです。問い合わせは第3回大平建築宿事務局(P6-P9)まで。
- ・さらに今年は韓国への旅行も企画され、秋も楽しみです。参加資格は年会員の同人に絞らせていただいているので注意下さい。(P19)

□編集局通信

- ・連休明け早々に原稿をお寄せいただきました同人の皆さんありがとうございました。WGは楽しく過ごされましたでしょうか。4月中に自宅を引越し、その片付けで終わってしまった今年のGWでした。周辺はまだ茶畠の多い所で、新芽の淡い緑色が今がちょうどきれいなころです。だんだん都心に出るのがおっくうになるほど西へ移りましたが、その分緑の量が増えて、なぜか安心している今日この頃です。
- ・会報原稿、企画宜しくお願ひします。EメールでもOK
- ・毎号原稿締切：奇数月5日
- ・会報編集局：生活文化同人事務局内

京王バス
江古田
4丁目

新青梅街道

メイゾン

丸山2F

【十川造形工房】

第一勧銀

至田無

西武新宿線

至新宿

沼袋地域

センター

沼袋

※西武新宿線「沼袋駅」下車、または

※JR中野駅南口より練馬行バス
「江古田4丁目」下車

定例会々場案内図

96年事務局：〒202 東京都保谷市ひばりが丘1-4-25

メゾン・アルプ201

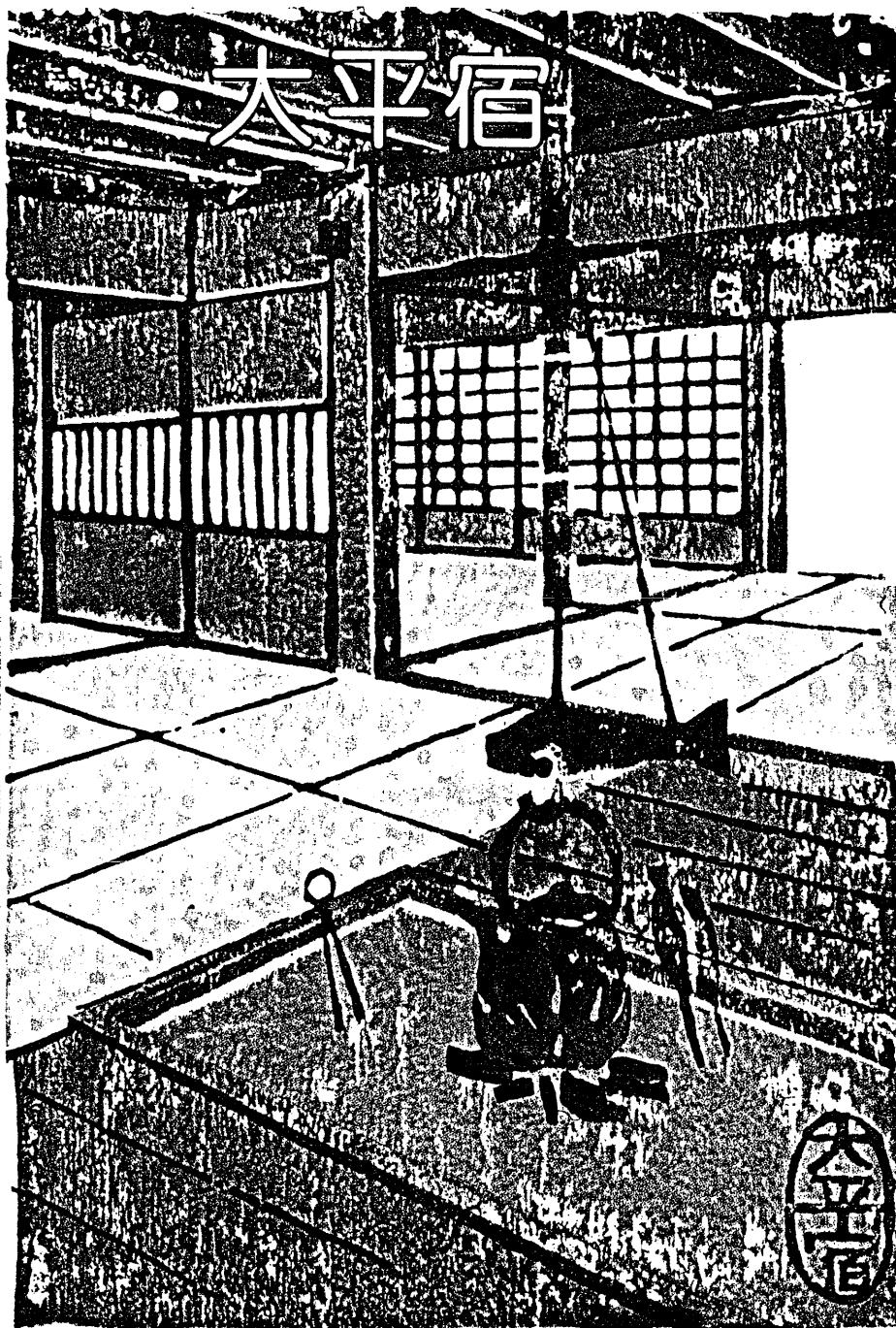
木住研内 生活文化同人事務局

宮越 喜彦

TEL/FAX 0424-25-1333

CQE02654 @niftyserve.or.jp

96今年も大平に人々は集つた……



トラスト*
ブックシリーズ
14 表紙より

……来年の大平での再会を楽しみにそれぞれのまちへ

※4頁より大平の感想などをまとめました。

講師：吉澤 政巳 信濃建築史研究室

世話人：益子 昇

◇民家・町並み調査

奈良井宿の調査・修理には昭和55年から6年間関わり、初めの3年間は恩師一色先生の（株）建築文化振興研究所所員として、後の3年間は楳川村教育委員会に所属して携わった。

現在は長野県白馬村青鬼（あおに）の15戸の民家を調査している。明治40年に大火がありほとんどがそれ以後の建物だが、焼け残った築200年の民家がある。この地域の民家の特徴は低い2階のある養蚕農家型の茅葺きで小屋組に興味深いものもあり、いずれ紹介したい。

◇町並み保存

町並み保存には「修理」と「修景」の2つの事業区分がある。修理とは明治以前の古い伝統的な建物の補修を意味し、修景とは比較的新しい建物を景観に合わせて新築・改修することをいう。

町並み保存の改修する場合9割方はいかに人間関係を築き上げていくかに掛かっている。時には施主がやっている野球チームに参加するなど、できるかぎり外堀を埋める努力をしている。説得する場合は昔の写真を使うなどその民家の良さをよく説明する。かつては保存運動の盛り上がりがあったが最近は世代交代があり説得も難しくなってきてている。古い民家では暗い・寒いなどに対して建築的に解決しなければならないが、アイデアをコンペなどで募るとよいと思う。

改修工事では昔の大工技術の水準の高さを実感することがよくある。現在の若い職人にとっても改修工事を通して学ぶことは多いと思う。わからなければ古い民家を実際に見て参考にするぐらいの姿勢があるといい。

かつてのように町場の大工が新築する場合には修景を考えた変更は比較的容易であったが、現在のハウスメーカーが新築する場合は修景は困難である。

町並み保存に携わっているなかで、修景は建物がきれいになるだけでなく住む人の生活も一新するということを実感した。

◇奈良井宿の民家の特徴

奈良井宿は木曽川と奈良井川の分水嶺である鳥居峠の麓にある中山道の宿場町で伝建地区に指定されている。宿場は上町、中町、下町に区分され、上町と中町の間は見通しが利

かのように「鍵の手」になっている。所々に防火帯を兼ねる水路があり、5カ所の水場は整備され、飲料水として利用されている。

奈良井宿の民家の特徴は①2階が1階より迫り出している出梁造、②猿頭（さるがしら）と呼ばれる繰り形のある棟を付けた小屋根、③1階柱より1間位出た深い軒、④3枚仕立ての蔀、建て込み方により手摺り（下1枚建て込み）、通風（下2枚）、全面開放などの使い分けができる、などである。

◇信州の民家の特色

養蚕が盛んだったことが本棟造を代表とする信州の民家の形態に大きく影響している。茅葺民家の軸組の形式には信州では古くからある上屋柱と側柱の高さが同じものと、上屋柱と下屋柱の高さが違うものとがあり、前者は天竜川流域に分布し、後者は千曲川流域に分布する。

柱間寸法の特色の1つは、柱間真々を6.2尺とするか、6尺×3尺の畳の大きさを基準にする中京間である。もう1つには、居間の間口寸法が、座敷や土間が3尺の整数倍を基準としているのに対して、3尺の整数倍に1～2尺広い寸法となっている。この理由は現在のところ定かにはなっていないので他の人にも研究してもらいたい。

信州の民家で気を付けなければならないのは平面が直角になっていないことである。敷地に対して道路が斜めになっている場合それに沿って建てられているので登記の時など間違えることが多い。

◇職人の育成

伝統的な建物を残すには材料と技術をもった職人が必要である。かつて一緒に作業していた茅葺き職人が板金屋に転職しているのを聞くと仕事の創出を考えなければと思う。例えば1組の茅葺き職人が生きていくためには年間あたり丸葺き10棟分の仕事が必要である。文化財の指定を少しでも早めることは多少とも有効である。

そのようなこともあり現在建築職人を中心に会員約100名の信州伝統的建築物保存研究会（信伝研）を組織している。今後は会費を安くして主婦など一般の人の参加を促したいと考えている。

まとめ 江原 幸壱

■第三回大平宿に参加して（96.08.16～18）

※参加された皆さんのが感想や思い、そして運営上の問題点へのご指摘などを寄せいただきました。事務局としては今後の参考にさせていただきます。挿し絵は吉田先生の紙芝居の一部と、お寄せ頂いたものを使わせていただきました。順不同。 9608夏に皆さんは何を考えたか……



●私は今回初めてこの合宿に参加しましたが、この三日間ずっと考えていました事が一つあります。それは、私の祖父と、彼の暮らしている集落のことです。

場所は山形県の戸沢村の最上峡という所です。集落は最上川をはさんで、国道の対岸にあり、祖父の家に行くには舟（筏舟のようなものに、船外機をつけている）で渡るしかない所です。昭和初期まで70～80人程いましたが、現在は祖父を含めて人口2人の過疎集落となってしまいました。

私は大学の卒業研究でこの最上峡の集落の歴史と現状を調査しましたが、人々の村外や、本村への移住の原因を探っていくと、今回聞いた大平のそれに非常によく似ています。ただ、最上峡の集落群には、大平に見るような民家がもう残っていません。それと、もし何らかの形でそこでの生活を保つのであれば、架橋か渡船かという交通の問題等、様々な問題があるのです。

しかし、そうであっても、私は大平にそのヒントを少しずつ得手ゆきたいと思っています。

今回は第二分科会に参加させていただきましたが、吉田さんの柔らかい発想には大変驚かされました。私も様々な観点で最上峡の集落群をとらえなおし、これからどうすべきかを考えた上で、何らかの形でその未来に対し人力したいと思います。

…加藤 英司（筑波大学）

●食事におわれた合宿だった。昔の生活をとことん経験するのがメインならばもうすこし「時間」を忘れて、一日家事を体験してもよかったです。9:00～とか1:00～の勉強会は、皆ねむい目をこすってまでも参加していた。そのわりに夜は盛り上がったなど聞くと、日中はのんびり、夜は激論でも楽しいと思った。逆に勉強会を充実するのだったら、この人数では、少しむりとも思えた。それは家事の分担ができず、一部のお母様にまかせっきりになってしまったからだ。私も学生でいい話はなんでも聞きたいと欲張ると、ついあと片付けがおろそかになってしまった。この矛盾は本当はもっと突き詰めていっていい問題のはずだろう。そういう意味ではとてもよい経験ができたと思う。以下は私の考えをまとめて述べたいと思う。

家事で女性の手がとられる。女は家にいるべき。やりたいことや女にできることを考えるひまもなくなる。考えはいかに家をきりもりするかにとらわれる。当然、世の中はえらそうな男の人しか出てこなくなる。すると、男性の目から見た物事のとらわれ方しかできなくなる。

でも、水道、ガス、電気が普及して、女性もだいぶ家の仕事から開放されて、いろいろ考える機会もできた。しかし、まだまだ、子育てや、日常のこまごましたことは

沢山ある。やっぱり、男の人が闊歩する。

私は、できればもっと、女性や子供の自ら見た住宅、家族も考えたいし、エコロジーを言うなら、あまたの食べ物も、あまらせてしまふと思つていて。同じ家で寝泊まりしていたが、いまいち「ぐっ」とみんなの思いが固まるような雰囲気は味わえなかつた気がした。私も人一倍そうだけど、自己中心に過ごしてしまつた。大勢で暮らすというのはなかなか気の使うものだ。まとまらないけどこの経験は大事に生かして過ごしたいと思う。

…高村 幸絵（筑波大学4年）

●この大平建築宿には初めてよせていただきました。飯田から大平宿までの道のりを考えると、昔の人はすごいなというのが、まず一番最初に感じた事でした。我々は、ほぼキャンプ感覚で、この3日間ここで寝泊まりしたのですが、実際生活するとなるとなかなか想像がつきにくい、いや本当に想像しかできないかなと思います。

人間の社会の変化のスピードは著しく、ともすれば人間自身が本質的に変わってしまったのかのように感じてしまいがちですが、世の中は変わっても、自然を愛するだとか、人間関係、つきあいとか、人間自身はそうそう変わるものではないよう思います。

民家の問題でも当然、社会、世の中に合わせて変わらなければならぬ面はあります、だからといって新しいものに全部とりかえてしまえというのではなく、様々な弊害が生じてくるのではないかと思う。実際、私にはそれが色々な形で吹き出しているように感じます。

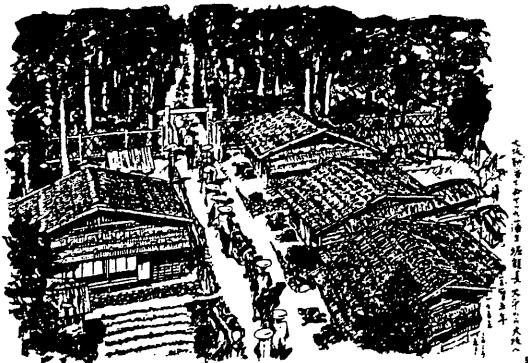
よい所はどこがどうよいのか、悪い所、今にあっていない所はどこなのか、としっかり理解したうえで、悪い所、今にあわない所はほうむらなければならないのではないかと思う。

…佐伯 寛（筑波大学）

●日本の風土に根ざした民家で、設計者だけでなく作る側の人、写真家などさまざまな人とのふれあい、語ることができるこの集まりはとても価値あるものだと思い、楽しむことができました。

3日間過ごし1つぜひとも来年やってほしいと思うことは障子の張り替えや、室内の清掃を行うなかで民家にふれ合えたらいいと思います。

…金子 幸司（芝浦工業大学M2）



うなすばらしい木組みは見ることができません。しかも今回は、たいへん木造に精通しておられる人達に説明していただき、いくつもありました疑問点も解決することができました。

周辺の自然もすばらしいものでした。山、森林、溪流、そしてゆるやかな変化のあ

●伝統的木造架構の民家が残る集落、大平。期待通りのすばらしいところでした。とにかく集落として残っているところが、当時の住民達の生活が目に見えるように感じられよかったです。やはり建築は人々の生活が感じられなければ死んでしまいます。今後も何とかこのような状態で生き続けていってほしいと思います。当然のことながら、個々の建物もすばらしいものでした。現在日本の木造建築のレベルはたいへん低くなっています。特に私が生活している東京では、この大平のよ

る地形の中に井戸川をともなって集落が形成されています。やはりたいへんよいところを選んで人々は住むものです。

講演会は、テーマが絞り込むことが難しかったからでしょうか、少々散漫になってしまったように感じられましたが、数々のすばらしいスライドを見られたことは、思わぬ収穫でした。特によかったと感じられたのは分科会でした。やはりテーマを絞り込めるためか、内容の濃いものでした。運営の方々はたいへんかもしれません、次回はこの分科会をもう少し増やしていただけたらばと思います。

事務局の皆さん3日間お疲れさまでした。ありがとうございます。

…志村 秀明（小沢設計計画室）

●古い日本の心の生家に戻ってこられたという安堵感が満足の一つとなりました。

残しておきたい日本人の人の知恵

生活－共同生活－思いやり 等 学ぶべきところが沢山ありました。

事務局の方に心から感謝申し上げるとともに、また来年も参加させて頂きます。

感謝！

…西村 智（ソニー生命）

●2泊3日の生活体験により、昔は家族の絆が強かったのだと痛感しました。それは、皆で協力しなければ生活ができないからです。

炊事、風呂の一つ一つがそれぞれの役割で成り立っているのですね。現代の希薄なコミュニケーションを感じます。

満天の夜空の星にも感動しました。子供にも大変よかったです。ありがとうございます。 ……西村 純子（P&P）



●ごはんがおいしかった。いろいろなイベントがあってたのしかった。

…西村 智慧（東小学校）

●昔のくらしそんぶたのしかった。

…西村 大志（緑小学校）

●今度の建築宿では、本多勝一さんというすばらしいゲストに会え、初日より楽しく過ごすことができました。

しかし、2泊3日の間、運動量が少ない為か2泊目の夕食は、あまり食べられず体重が増えたように思います。

やはり、2日目の午前中くらいは自由時間を作り、ハイキングなどが必要ではないかと存じます。

昨年は雨で残念でしたが、大平の自然を楽しむ時間は大切です。

来年もできる限り出席したいと考えております。役員の方々には大変お世話になり、誠に有難うございます。

…加藤 真理（つづらや工房）



●懇親会の中にいてふと思った事：

ひと昔前の田舎にワープ。冠婚葬祭、いずれかの二次会でこんな風に人々が集まり、酒を呑み、語り合う。夜中までワイワイ、ガヤガヤ、そしてそれぞれ暗い夜道を帰っていく……。

- ・食事について考えた事〔ゴミがあまりにも多く出たのは心苦しい事でした〕：

昔の食事を参考にした献立が一食分はあってもいいと思う。

(その土地の家を見るとき、食も忘れてはいけないとことだと思うので)

伝統的な食事をひとつのテーマにしてみるのもおもしろいと思うのですが、

無理であれば、たとえば手づくり豆腐をつくってみるとか……。

- ・普段の生活とかけはなれた時間のすごし方：

東京にいるとき時も、大平でも感じたことは

“不便でなく、便利すぎなく、人間が暮らすちょうど良い環境はどんなものだろう” という事です。 ……新免 敦子

●参加は今回が初めてになります。この大平建築宿へ参加して感じたことは、思っていたより多くの人達が伝統的な構法や材料に関心を持っているということです。

私は伝統構法に興味があります。特にどの部分が面白いかというと、戦前までの我が国の木造建築というのは、そうであることが当たり前であり、特に民家はその時代時代に様々な変化を遂げている。そんな中で白川の合掌造りや信州の本棟造り等の現在有名な独特の形態を持つ建築が出現した。ここで注目すべきは、これらの形は意味を持っているということである。合掌造りは、養蚕の過程で発達した形であり、構造的には非常にシンプルで簡単なものであるが、養蚕を行うにおいて多くの面積が必要となり、その屋根裏利用を非常に端的に提示した形態である。本棟に対してもこれとは別であるが、多くの意味がある。これら以外にも日本には様々な地方による独特の形を持った民家は多く存在する。これらも当然意味を持っている。

ここで面白いといっておきながらの理由を述べてみたい。それは、ある構法の昔の民家（日本だけでなく）を調べてみると必ずそれには多くの歴史があり、意味があり、当時の人々がどのように考え、それを解消していったのかに触れることができるということである。

話が別の方へ行ってしまったのでこの大平宿へ戻るが、今回は本多勝一さん、吉田桂二さんをはじめとして、様々な方のお話を聞かせていただきました。そこで感じたことは、その考えが単に金儲けや慈善でなく、真剣に自分の人生を投げうつてもいいくらいの気持ちで物事に取り組んでいらっしゃるということでした。私などはとかく物事を軽く見てしまいがちなのですが、今回のこの大平宿へ参加させていただいて、それではいけないかなとも感じ、大きな刺激となりました。また機会があれば参加したいと思います。 ……曾我部知明（筑波大学）

●お忙しい中準備及びお世話していただきました皆様方に大変感謝しております。板の間（ヒロマ）や縁側での大の字になって休む時の気持ち良さは何とも言えない快感でした。里、自然が与えてくれるものを感じました。（流れ星も美しかった。）又、このような仕掛けをつくり出していることにも感謝します。

講演の時には横に寝ころんで聞くこと（講演者にとっては大変失礼なことです）が許していただけたら……。聞く側としては最高です。

分科会は、第三分科会に参加しました。高橋さんのこだわりに感心しました。懇親会における風景のスライドも良かったです。 ……五十嵐純一（（有）形象社）



●吉田さんと本多さんの対談を楽しみに参加しました。

対談の中で「木地師には大蔵性が多いですね」、「そういえばこの地方には大蔵さんは多いです」、そして「何故でしょうね」

という事で帰ってから大蔵さんについて調べてみました。

国庫をあずかる大蔵省という言葉は千数百年の歴史があり、大化の改新の前から使われていたという。その時代から国庫を意味し、そこで財源を司っていた人が大蔵を性とした。

また、大蔵の所在地は地方にもあり、その近くの居住者がやはり大蔵性を用いたといふ。(日本の苗字読み解き事典:丹羽基二著)

これから推理するに、昔は「木一本首一つ」という時代もあるほど、木は重要な財源だったから、この山の木を伐り、加工する木地師は人間的にも信頼され、信望の厚い人がなった。そして、その財源が大蔵の任も木地師は兼ねて、大蔵さんの性になつた。

大平宿にはおおくらや、大蔵屋さんと2軒あるが、この地の税務関係をしたと想像しますがいかがでしょう。

大平建築宿は建築ばかりでなく、まるで分野の違う事も考えさせてくれる楽しい合宿でした。

…岸 宏祐(日本N C R K K.)

●初めて大平建築宿に参加しました。私の生まれ育った家も南信州の甲州街道沿いの金沢宿の同じような家だったので非常に興味がありました。

明治の初期に建てられた旅籠屋で100坪程ありますが、今は誰も住んでいません。何とかしたいとは思っていますが。大平宿も江戸から明治期にかけての建物ということで吉田桂二先生の紙芝居を見ながらその時代の人達の思いや生活の一部にふれる事ができました。

あそこで夏の何日かだけ過ごす事は出来ても、今の文明社会で、一生あそこで過ごす事はやはり無理だと思います。TVも電話もない。あるのは自然(山と草花と川と風と……)と満天に輝く星空と、済んだ空気と、囲炉裏で燃える炎と暗闇と、すいこまれそうな静けさと、……。

都会で失われた物を求めて、そこに身を置くという事はある意味ではゼイタクかもしれない。そこでの生活がエネルギーとなって日常の生活がリフレッシュされるならすばらしい事と思います。

大平宿はそんな人間の心のふる里として、多くの人に利用されれば、建物も生きてくれると思います。

大平宿復興のために力を出していただいた方達に感謝すると共に、末永い人間とのかかわりを期待します。

…露木 洋子(設計工房 風)

●学生時代、私が部活の夏合宿で妙高高原の小さな民宿に泊まった時のこと。午前中の涼しい時間帯に練習をすまし、宿にもどり待ちに待ったお昼時、メインはカレーライス、そしてその横には、特大の皿にめいいっぱいに積まれた真っ赤にさいたトマトがいた。そして、なすびのぬか漬け、とおもろこし、キャベツ。それらの「どおだ、俺たちを食べてくれ」とまるで言っているかのようなツヤツヤ、プリプリした食物達は、宿のおばさんによって次々と食卓に追加されてきた。「ご近所さんの畑でとれたもので、ついさっきたくさんいただいたんですよ。どおぞ、どおぞ。」と畑でとれた

かのような笑顔で私達にすすめてくれました。もちろん、味はいうまでもなく、最高の一言。ひと口、ひと口、ほおばるたびに宿のおばさんの笑顔が頭に浮かび、そして、土地に吹く風に乗って、土や緑の香りが胸をいっぱいにしてくれました。残さずにたいらげた皆の顔は、おばさんのような太陽の笑顔になっていました。

この夏、初めて大平宿に足をはこび、3日間にわたり滞在させていただいたわけですが、ゆるりでの食事、皆さんのお話し、等々。全てが都会生まれ、都会育ちの私にとって、刺激的であり、稀少な体験がありました。それと同時に、どこか寂しそおな民家達、山達を「どおしたんだろう」と気にかける自分自身もそこに在りました。そこで生活をする人がいてこそ、その土地の自然と民家をつなぎ一つの風景にするものであることをこの旅で実感しました。

この先、どのような形であっても、学生の時、妙高高原で見たような「太陽と土の笑顔」が大平に咲くことを祈りつつ、今回の旅に感謝するある夏の日の午後がありました。クーラーの下にて。

……井出 泰平（フリー）



想像を絶するもので、柱、梁と見上げた顔が暫し止まったままの状態になってしまいました。

——この時代の人たちが、この場所にどうやって造ったのだろう——
ただ、ただ、不思議に思うばかりでした。

講演、シンポは不熱心だったので反省しているところですが、分科会では一緒に参加した息子が、他の子ども達と一緒に、囲炉裏の‘自在鉤’をつくるために木を切り倒し、皮をむいて、魚の部分を作ったり、竹を切ったりと色々できることと“すごいもの”を作ったという満足感ができたようです。

残った時間で、竹の箸も作ることができ、いいおみやげになりました。縁あって大平建築宿に参加できたわけですが、今回の体験は短いながらも貴重な時間だったと思います。家の中にたくさんの虫がいても、また夜の電気が暗くても、むしろその方が自然なのだと強く感じました。そして、人間が独り、突っ走ることなく、周囲の自然と溶け合うようにして暮らしている……。現代の異常に改めて気付いた大平の3日間でした。

……村山 恵美

●大平宿という名も知らなかった私が、知人からの紹介でこちらのことを知り、わけもわからず参加させていただきました。木造住宅に興味のある私ですが、設計の仕事をしているわけでもないので、集まってきた多くのプロの方々に圧倒されてしまいました。これだけの人が共通の意を抱いて大平に集うということが、何というか不思議なほどの驚きでした。

民家に泊まるのは勿論のこと、入るのも初めての経験でしたが、来る前にイメージしていたものと違うものではありませんでした。特に、講演の行われた紙屋は、その規模が

●私の祖母の家は北九州の若松というところにあるのですが、その家も大平のように昔のままの姿というわけではありませんが、100年位前に建てられた古い日本家屋です。

小さい頃夏休みになると、親につれられて遊びに行ったのですが、私はあの家に行くのはきらいでした。食事は床に座ってとらなくてはいけないし、水は井戸から汲み上げなければならないし、寝るときには蚊帳をつるという、とんでもなくめんどうくさいをしなければならないし、とにかく何をするのもめんどうくさいことだらけで嫌でした。それが今、大平宿というもっと様々な設備のない、食事はいろいろで、冷蔵庫替わりになるのは小川の水で、という超めんどうくさいはずの合宿に参加して、なぜか楽しく過ごしました。

もちろん、こんな生活がずっと続くと考えると、ここに住んでいた若い人たちが、もっと便利な生活を求めてどんどん都会へ行ってしまうのもよくわかる気がします。でも、いろいろに火をおこしたり、広々とした畳の間でゴロゴロしたりするのは、昔を懐かしむという理由だけではない、とても心地の良い時間でした。大平の人達の昔の生活を、少しだけでも感じられたような気がします。でも、板の間に何時間も座ってお話を聞くのは、さすがにおしりが痛くなってしまいましたが・・・。

昔からあるものが、そのままの形で残るというわけにはなかなかいかないところがあるのでしょうが、残って当たり前という吉田桂二さんのお話も領けました。今は一時の宿という形で残っている大平宿ですが、この先も、例え利用される方法は変わったとしても、ずっと残していくべきだといいなと思いました。また、来年も訪れてみたいと思いました。

……萩尾 恵子（アブル総合計画事務所）

●今回の基調講演に本多勝一氏を招くと聞いてから興奮していた。かつて1度だけ講演を聴きにいったことがあったが、今回は直に話が聴けるので是非尋ねたい質問を用意していた。実は本多氏の素顔を拝見するのも密かな楽しみでもあったが。

基調講演の後、本多氏を囲んで自由討論を期待していたのだが叶わず仕舞だった。本多氏への質問は氏にとっても長年のテーマである「アイヌ民族・文化の絶滅」についてであった。アイヌ民族のことを知るにつれ、1つの民族・文化が滅びるとはどの次元（状況）のことを示すのかわからなくなってきた。そのことがわからないと滅びつつある（滅ぼしつつある）状況に対して和人としてのなす術を判断しかねるのである。

今年度は「アイヌ新法」が制定するか否かの左右する大事な年である。一人でも多くの人に感心をもってもらいたい。

……江原 幸壱（木の建築設計）

●初日の吉田桂二さんと本多勝一さんとのお話をの中。

「ここは家の周りにいろんな木が植わっているが、このような家が木に囲まれておるのはおかしい。ふつうは隣の家から火が出たときに燃え移るのを防ぐため、家の周りに木を植えたりしないものです。」「そうですね。昔はもっと広々とした感じのところに家が建っていて、周りは自分たちが食べるだけのちょっとした畠でした。村を離れる時にみんな自分の家の周りに木を植えていってしまうんですね。」



広々とした大平を思い描いてみると、なかなか難しい。

夜はいっもの懇親会。初対面でも、町並みや伝統木造建築、木材、そして木や森といったものに興味を持っているもの同士、お酒も手伝ってあちこちで咲く会話の花。

私の所では、去年まで木曽の営林署に勤めていたT氏。一年ぶりの再会ながら、話はすぐに森や樹木へ。

「さっき吉田桂二さんが言ってたでしょう。村を離れるときに畑作していたところに木を植えていっちゃうって。でも僕、その人達の気持ちわかる気がするんです。離れてもお墓参りに来たときなんかに、自分の家の周りが草ボーボーになっているのを見るのはどうしても忍びないから、せめて木を植えていこう、っていう気持ちが。」
さらに日本全体の森林の話をしている中でも、

「日本は国土の約70%が森林だとかっていうでしょう？ あれは富士山の山頂も森林だっていうんだからかなり適当なものなんだけど、最近はそれが増える傾向にあるんです。それはやっぱり過疎の村で村を離れていくときに、自分が耕していたたんぼや畑に木を植えていくからなんです。だから段々になったところが林になってる、なんてこともあるんです。やっぱり同じで、草ボーボーになってしまふのは、あんまりに忍びない、ということだと思うんですが。」

私にとっては、今年の大平で一番印象的な話であった。山に暮らした人から、山に暮らす人への眼差しは深い。この建築宿で、いろんな形で語られた、大平の人達の自分の土地に対する愛情が、再び伝わってくるような気がしてくる。大平は、みんなの力で、今のような形で保存されることとなったが、日本中で、こんなやり場のない、密やかな、自分の土地への愛情が、多くの人に見過ごされているのだ。

畑さんや近清さんのスライドにあった日本中の素晴らしい美しい風景が、眼に焼き付いている。

今回は予習を（！）と、思って読んでいった本多勝一さんの「そして我が祖国 日本」で告発されているような形で、日本の風景が変わっていくことも、頭をよぎる。

今年もまた、大きな宿題を、いつの間にやら手にしてしまい、大平を後にしました。

……赤桐 雅子（飯田善彦建築工房）

● 3回目の参加ということもあって、大平に対する見方が別の角度からみれるようになってきました。「消えた峠の村」という本を読んで、大平を去らなければならなくなつた人々の気持ちを考えてしまいました。大平分校の先生と子供達の目を通して書かれています。

昭和45年11月30日、大平村では離散式が行われました。この日は大平分校の最後の日でもありました。答辞を読んだ麦島和彦君は今38歳。私と同じような時代をすごしてきました。その当時の分校の子供達、先生、村の人々はどんな思いでこの

日を迎えたのでしょうか。長い歴史のあった大平村が、この日を境にして消滅してしまう。大平に住んでいた人々の暮らしを知り、離散式を最後に消えてしまった大平村のことを子供達に伝えたいと思いました。

子供の協力が得られれば高学年の子供を中心にして、吉田先生の紙芝居にならい、子供達の作る「大平のおはなし」なるものの発表ができればなどと構想は練っていたのですが子供達を集めて作りあげていく時間がとれず、私の押しつけ発表になってしまったことが残念でした。が、今回新たにこのような機会を



設けていただきました岡部さんをはじめ事務局の方々に感謝いたします。

ともあれ、私の気持ちとは裏腹に、我がわんぱく坊主達は関西弁とは違う言葉を話すお友達がたくさんいてにぎやかに楽しんだようでした。

おおくらやでいっしょだったJリーグのお兄さん（我が家ではそう呼んでいます）、貴重な時間を割いて、わんぱく坊主達を魚釣りに連れて行って下さりありがとうございました。あれ以来、子供が魚釣りのとりこになりました。

第4分科会の方々、子供達を中心に道具を使わせて下さりありがとうございました。木を切り倒したことはびっくりする体験となりました。

今年も大切な思い出が、この大平できました。

お世話役の方々はじめ、参加された皆さま、今年もありがとうございました。

…盛口 尚子

●大平建築宿も3回を迎え、参加者も増え頼もしい限りです。今回の講演、本多さんの話も良かったし、吉田先生の紙芝居も楽しかったし、畠さんのスライドも見ごたえがありました。分科会は第4分科会（生活の道具をつくる）に参加。子供達と地元の羽場崎さんの指導のもと、竹とんぼ等を作り、メインは自在鉤作り。にぎやかに3台を作り上げ、その内の1台を△大蔵屋に取り付け、“大平宿”的彫り込みも水々しく、全員で記念撮影、楽しい分科会でした。来年、再来年とまっ黒になっていくのを見るのが大平へ行く楽しみの一つになりそうです。また、取り外した自在鉤を頂き、持ち帰り、短くして磨き、玄関のかざりにすべく只今再生中。残りの竹で小物作り。ペーパーナイフ、カッターの柄、ヘラを試作。永年のスス、油がしみ込んだ竹を磨き上げると渋い風合いの小物ができました。大平のいろいろの匂いがかすかに残る小物類を作ってみようと思っています。

今後の大平宿への提案

- ・障子を全部貼り替えたい（2時間位は時間がほしい）
- ・スピーカー音が非常に悪い（音がこもって聞きづらい）ので機材を考えてほしい（第1回～第3回）。
- ・5月頃に開宿して大平周辺で採れた山菜類を食するというのはいかがでしょうか？
※△大蔵屋へ置いてきた一斗缶で作ったチリ取りが好評でしたので次回には何個か作って持参しようかと思っています。

…寺本 雅男（てらもと工房）

●3日間、大変お世話になりました。ありがとうございました。天気にも恵まれ、楽しい時を過ごせました。

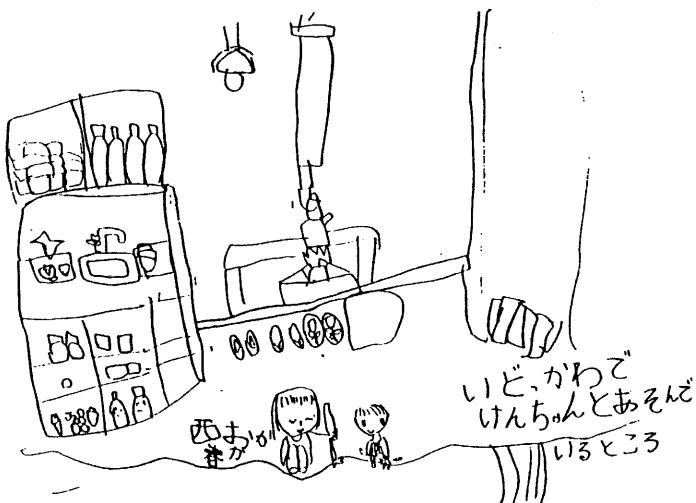
今回が2回目の大平ですが、先回の時（オープニングの時）は、中村屋に宿泊し、美しい部屋で、居心地が良かったのですが、今回はお風呂が使えず、トイレも今いちで、よその家を借りていました。。少し残念でした。

講演は、期待していただけに残念でした。もう少し中味のあることが聞けると思ったのですが、とりとめのない内容でした。

分科会は①のグループで、スライドも見せて下さり良かったと思います。

来年は参加しないと思ったのは、結局食事作りは女性中心になってしまって、いつも食事作りをしているようで、男性は動く人は動きますが、待ちの姿勢でおもしろくなかった感じが残っています。年齢的な組み合わせも考慮していただかないと、若い人がいないので活気がなく盛り上がらないグループでした。

…福田由紀子（三井デザインテック）



ンサートもあたたかい拍手ではげまして下さり、子どもも参加したという満足感があったようです。「また、来年もあおうね」とさいごの日に声をかけあって、西と東に別れていく子どもたちを見て、大人とはちがう子どもたちの大平があるのかな、とうれしく感じました。

もう一つ印象に残ったのは、子どものコンサートの時の「消えた峠の村」の朗読です。大平の離散式の時の小学6年生の男の子の答辞を、同じ年頃の盛口将悟くんが読むと、ビールやおつまみや笑い声にあふれた1996年の下紙屋に突然23年前の吹雪の離散式がまぼろしのように立ちあらわれたような迫力を感じました。涙とともにこの地を去っていった大平の人々の気持ちにほんの少しだけふれたような気がして心がしんとしたひとときがわすれられません。

まくらな夜の道と頭上の雄大な銀河。
大きな岩がゴロゴロの松川の清流。来る
たびに大平のたのしみがふえるようす。
来年をたのしみに……。

親の知らないところで、娘はいろんな方にお世話になったようです。この場をかりてお礼を申し上げます。

PS/食材を配達して下さった飯田の大西商店さんには大変お世話になりました。
飯田の人たちの人柄のあたたかさを感じました。ありがとうございました。

....西岡真理子（アトリエ・楽）

●今回はじめて準備スタッフになり、少しながらお手伝いすることができ、いつもにもまして参加したぞーという実感が残りました。スタッフ以外の参加者の方々も障子貼りや、まきわり、食事つくりなど誰もが楽しそうによく働いたように思います。

子どもたちが楽しめる催しをたくさん用意して下さったのも、子連れ参加者としてはありがたいことでした。

分科会では、小1の娘は「生活道具をつくる」、私は「暮らしと望ましい家のありかた」と、別々の会に参加し、それぞれ充実した時をすごさせていただきました。夜の子どもたちのコ

ンサートもあたたかい拍手ではげまして下さり、子どもも参加したという満足感があつたようです。「また、来年もあおうね」とさいごの日に声をかけあって、西と東に別れていく子どもたちを見て、大人とはちがう子どもたちの大平があるのかな、とうれしく感じました。



●大平宿に泊まって

15日に友人と南木曾から自転車で大平宿へ到着、1泊しました。17日に急用があり、建築宿の催しには初日の講演しか参加できませんでした。あれから夜の部や分科会で本多氏と吉田氏の語らいに触発された熱い談義が交わされたであろうと想像すると、映画の予告編だけを見て帰ってきた気分で非常に残念です。そんなわけで、私の感想は建築宿の催しからは少しまずれます。

15日午後3時に到着、八丁屋に宿泊したのは大学時代の友人4名。慣れない手つきで火をおこし、食事が一息ついたところで、食料調達係（自動車で参加）が日本酒

をとりだしてきました。いわく、「ワインがいいかなとも思ったんだけど、やっぱりこっちのほうがふさわしいと思って。」一同納得。

大平宿にはなにがふさわしいか。なにがふさわしくないか。これはその晩のちょっとしたテーマでした。

大平宿が民家の保存から一歩抜け出して、真に生きられたまちを形成するにはそこを拠点として暮らす人々の存在が不可欠だと私は考えます。実現の可能性はさておいて、どんな人が住むでしょうか。住めるでしょうか。そして、どんな人が住むのが「ふさわしい」のでしょうか。

というのも、今の世の中、FAX・でんわ・インターネットなどの環境が整っていれば都会に住む必要のない人が増えてきました。コンピュータ関係、文筆業に携わるひとびとは電線さえあれば大平でも仕事上の不自由はありません。そんなひとびとが集まって成される大平の再生は、はたしてふさわしいのだろうか？

と、ここまで夢想を広げてからやっぱりワインと日本酒のギャップのような妙な違和感を覚えます。

これは、大平の現在のたたずまいから往時をしのんで勝手なノスタルジーに浸っている私たちに問題があるのだと思います。誰もが納得する「ふさわしさ」のイメージは、結局大平宿を過去のある時代に閉じこめてしまって、新たな脱皮を妨害する危険があります。

そうはいっても、建築宿の夜の部では、ワインも日本酒も、世界のありとあらゆる美酒が飛び交っていたのだろうなあと想像し、ひとり悔しがっています。

……大村 紋子（郵政省施設部建築業務課）

●これで大平に来たのは3回目です。いつも楽しかったけど今年はお友だちがたくさんいて良かった。夜、星がよく見えた。天の川がきれいだった。

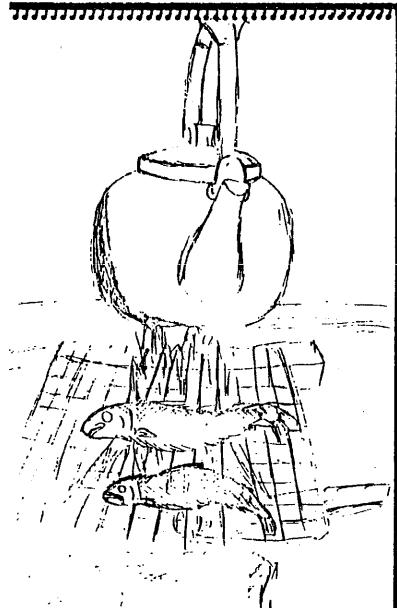
おまわりさんもみぞに落ちるんだね、みんながいてよかったです、モモおいしかったよ。来年もまた行きます。

……おかべゆうこ

●皆んなありがとう

「この忙しい時期3日間も行けないよ」、「だって行くって言ったじゃない、申し込みもしたよ」という会話を出発の日までに何回しただろうか。まあ、なんとか朝4時、越生の高橋さんと車2台で出発することが出来た。早かったせいか9時前には飯田に着く、この前テレビで紹介されていたばかりの温泉でゆっくりしていると携帯電話が鳴った。松本氏からだ、バスが遅れるから市役所に12時に行って連絡を取って欲しいという。12時には大平に着いていなくてはと思いながら連絡係を済ませて宿に着くとすでに本多さんの話は始まっていた。

話はそこそこに準備を手伝えなかった穴埋めと食事班に混じり食料を分ける仕事に参加。しかし、分けながらも夜の子供のコンサートが頭をよぎる。何人参加してくれるのだろうか。各宿を廻るとそこそこには集まってくれた。しかし、思っていたのとはあまりに違う沢山の見物人、でもみんな頑張ってくれた。大阪の盛口さんの奥様には次の日の駄菓子を使っての遊びも含め大変な御協力をいただいた。



海に行きたがっている娘を連れての参加ということもあり、子供達の小さな胸に楽しい思い出を沢山残してやりたかった。他の子供達にとってもテレビもゲームもない所でみんなと遊べたこと、大勢の前で何かができたこと、学校以外の遠くの友達ができること。これは何事にも変えがたい体験だったと思うし、また来年もここに来たいなという子供の声が聞けたのは、うれしかった。

紙芝居の販売と本も通りがかりの人も含めおかげ様で沢山買っていただけだ。夜は明るく十二一重を着ても入れるようなお気に入りの大きなトイレのある唐松屋に泊まることができたし、紙芝居とコンサートで頭の一杯の私はただ食べるだけで（前日夜中までかかって作った煮物にめんじてお許しを）、同じ材料なのに名コックさんがいたせいか一番豪華なメニューと評判の食事をさせていただきました。

同じ部屋の皆さん御世話になりました。そして子供達、夜のコンサート来年も皆さんで何かやろうね。本当に皆様有り難うございました。

PS/ 行くことを渋っていた割には、喋る、飯む、釣りをすると人の三倍楽しんでいたねと某氏に言われ頭をかいていた我が亭主でした。 ……おかべともこ

● 2年ぶりの大平。今回はお盆ということもあってどの程度の参加者があるのだろうかと気にかかっていたが、150名を超える多くの仲間の参加を得て、取り越し苦労であった。台風12号の過ぎ去った跡も峠道には見られたが、天気は文句なし。大平の夏を満喫でき、日常のストレスも浄化できた。

初日のシンポに関しては、著名なジャーナリストを招いて、どういった話が展開するのかを楽しみにしていた。我々の準備不足で不完全燃焼であったのではなかっただろうか。開始時間が遅れたこと也有って時間が足りなかったこともあったが、何を聞いたかったか私自身あらかじめ用意すべきものがあったと反省している。後悔先に立たず。

夜の部は、今まで以上に充実していたのではないか。生活の中に当然いる子供達も参加し、全員が楽しめたのといえるだろう。語り吉田先生の「大平ものがたり」の紙芝居は固い内容であったもののテレビっ子の現代の子供達も見入っていたことには驚いた。用意されていた水飴のせいばかりではなさそうだ。来年は幼稚園のわが子も参加させたいと思った。

絵は人間業と思えないスピードで書かれた吉田先生のオリジナル（先生には「人間業だよ」といわれた）。絵のケースは建具師新井さんの作。絵はがきまで用意されていて準備も完璧であった。

この晩はちょっと飲み過ぎた。ビールとワインのチャンポンが完全に脳味噌を麻痺させた。若い人に説教じみたことを言ったような言わないような……？。翌朝は炊事のザワメキで目をさます。前夜の鍋は味がこなれ、さらにおいしい朝食であった。食事担当の桜井さんの指示のもとカマドでご飯もみごとに炊きあがった。桜井さんおよび同宿（下紙屋）のみなさんありがとう。

あわただしく朝食後の午前のシンポは、それぞれポジションの異なる5名のパネラーによるバトルの展開を予想したが、時間不足でジャブも出ないままリングアナウンスで終わってしまった。次回へ持ち越し。印象に残った言葉は、詩人益子さんの「僕には残らないが、心に残る仕事」。なるほど……さすがスゴ腕。機関誌でのまとめも



楽しみにしたい。

今回は1泊の参加となりなごりおしかったが、大平を下すこととなった。名古屋まで出る必要があり、帰路は八木先生の車に田原さんと同乗させていただき、中津川まで。途中、南木曾で温泉に寄り一息つく。車で参加の方には絶好の帰路コースではないか。次回には是非、木曾檜の露天風呂（ジャグジーもあり）に入るされることをお勧めしたい。実は初日も開宿前に南木曾まで降りて緑に囲まれた露天風呂（※1）に入ったのだが…。

今回の印象は学生さんなど若い世代の多くの参加が目に付いた、世代を超えた時間の共有が、私にもいい刺激となっている。（まだ、そんなオジンではないゾっと）

感想とも反省とも、とりとめないが、早くも再び第4回建築大平宿での再会と出会いが楽しみだ。今回は楽しませてもらうだけだったが、次回は何かやるゾ。

最後に、今回の運営で事務局をはじめそれをサポートされた皆さん、特に、生活文化同人のメンバーでない方々も協力してくれたことは大平の広がりを感じます。本当にご苦労様でした。

※1：床波荘 峠を南木曾方面に下り、国道256を右折、橋の手前を右折、道なりにすぐ。（約40分） 入湯料550円

…宮越 喜彦（木住研・'96生活文化同人事務局）



これで「峠の村のものがたり、大平宿二四五年の歴史」のお話はおしまいです。

え？ お話をこれからどうなるって？ そんなことは誰にも分かりません。逆に言うなら、どうするのかが答えでしょ。うね。そう。あなたはどうするのか、したいのかが本当の答えだと思いますよ。

それを皆さん的一人一人に託しながら、この紙芝居を終えることができたら、絵と文の作者としては本望なのです。

一九九六年八月十六日

吉田桂二

■お知らせ

古民家再生工房の矢吹さんより情報をお寄せいただきました。

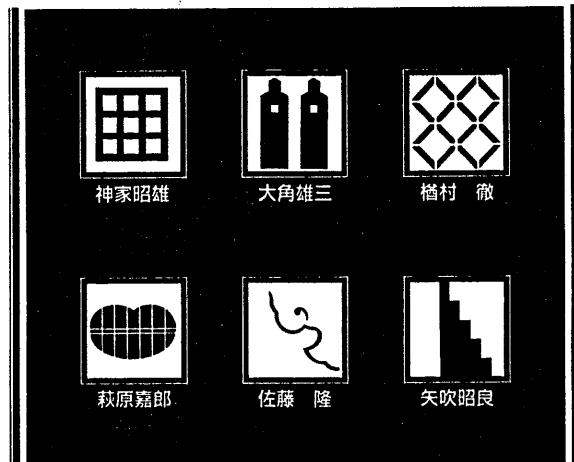
甦える民家

「古民家再生術」出版記念写真展

●写真展
日時：96年9月28日(木)～10月1日(火)
AM9:00～PM6:00(水曜日休館)
会場：早島町「いかしの舎」
電話：088-483-1243

●講演会
講題：「古民家再生術」
日時：96年9月28日(木) PM1:00～3:00
会場：早島町「いかしの舎」主屋2階大広間

●相談会
日時：96年9月28日(木)・29日(金) 随時
お問い合わせ：古民家再生工房事務局 088-482-4550(〒701-03 郡山市早島町2349)



■お知らせ

木造建築研究フォラム 研究集会小国

「民家再生 一坂本善三美術館をめぐってー」

民家は日本の文化遺産であると同時に質の高い社会的資産である。にもかかわらず多くの民家がその寿命に余裕を残しながら次々と壊されているのが現状である。民家に住み続けることが難しいのは、ひとこといえば現代の生活に合わないということであるが、その背景には急変する農村社会の問題がある。住む人がいなくなつて放置され壊れゆく民家も少なくないのはその端的な例といえる。一方で古民家を現代の施設として再利用する動きも目立ってきた。従来の民家を復元して使う民俗資料館など他に、音楽や演劇や美術などの現代芸術の場として使われる例が増えているのが特徴だ。民家の持つ堅牢でシンプルな構造が軽用に耐えることにくわえ、その独自な空間が創作活動を刺激するからだ。それはまた民家空間の新しい可能性を引き出す試みともいえる。

坂本善三美術館は現代美術の作家の展示を目的としつつ、郷土の作家を記念して小国町の原風景を再生する意欲的な取り組みである。いわゆる民家の再利用をこえた深い意図がこめられている。この研究集会ではその意図するところを探り、民家空間の新たな可能性について考えたい。

問い合わせ

◎宿泊等の予約について
近畿日本ツーリスト㈱ 熊本支店
TEL 096-325-4891
FAX 096-322-6661
担当 黒村

◎公開フォラムの内容について
木造建築研究フォラム事務センター
TEL 03-3503-1080
FAX 03-3592-1141
担当 佐藤

主 催：小国町・木造建築研究フォラム

後援(予定)：熊本県・(財)日本ナショナルトラスト

日 時：1996年11月30日(土)

場 所：小国町家畜市場 熊本県阿蘇郡小国町

参 加 費：無料

プログラム

09:00 見 学

坂本善三美術館

解説：吉田桂二（連合設計市ヶ谷事務所）

坂本 寧（坂本善三美術館長）

西里小学校、小国ドーム、木魂館、他見学

12:00 見学終了

14:00 研究集会

挨拶

内田祥哉（木造建築研究フォラム会長）

宮崎暢俊（小国町長）

討論

「民家再生 一坂本善三美術館をめぐってー」

パネラー

吉田桂二（連合設計市ヶ谷事務所）

坂本 寧（坂本善三美術館長）

司 会

立松久昌（建築思潮研究所顧問）

副 司 会

安藤邦廣（筑波大学芸術学系助教授）

17:00 閉会

懇親会

恒例により懇親会を開催いたします。同封の申込書で、事前に御予約下さい。

日時：1996年11月30日(土)

場所：木魂館

会費：¥5,000／人

キ、雨押え等はしゃくいの挽き物ですよな!!

実際に石膏置き挽きやったんびその時のことを少し書きます。まあ必要なのは作業台が高さはヘソの高さが理想な人ですかね。この高さは石膏を一気に、

素早く挽くのに無理な力が入らず素直に挽ける好みたまご……しかも真っ平らでなくこれは挽きモノも真っ直にはなりないです。こ次に挽き型の製作です。

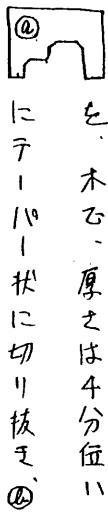
外、材料はステンレス板で1mm厚位のたんひすかね。これをハサミで大体に切り、ヤスリかけひ仕上げます。②のヤスリかけが相手がステン板だけに根

が必要なんですよ!! え、なぜステン板か? て、材料

が石膏だとすぐサビるんですよ。ちなみに壁に塗る時もステンレスのユテで塗るんですか、それは違うといふかね。大体

にテーピー状に切り抜き、④ステン板⑤を釘で張りつけます。

ステン板④を釘で張りつけます。



断面図
前 板 ④
石膏板 ⑤

左側に木で右側の様に直角に、狂わない様に筋違い



を入れて作ります。これをシャカンで言う所の匂

挽き型の人ですね。で、実際に挽く前に、挽き台

の上に一間程の走り足木(真っ直な物)を固定し、挽きモノの下にはプラスチック板をします。この

走り足木はAの部分を足木にならって、こすりながら走りせしむため走り凸と言います。現場挽きひも使いますよ。で、ニのプラスチック板です。

巾は挽きモノよりやや広めで長さは走り足木より少し短めに確定し、たれみなく固定、これが優れ物ひして、挽きモノをハクリする時素直にハクリ出来ます人ですよ。木の上をヒ剝れたりすみ人で、さあたひへんカラスも調子よさそうですね!! つづく

ちなみに、文中の「チリとなせる」は、「はでる」と思りますよね。でも、これがシャカ用語で、「はでる」と言うんですね。

ちなみに、これが用語は群馬弁です

シャカン 三の16

江原 久紀

今年の夏は二度目の暑さでしたね。昨年、一昨年に位では、過しやすかったこと、雨降りずに仕事は進みましたか、水不足では困りますがね？で今回は、ヨカリ拭く日の注意点をいたか、一回休みでみなさんも忘れてますね、え、自分でですか？

す、かり忘れて違うことを書く所でしたよ。…

ヨカリ拭くと一言と言つても、上塗りしかも聚樂なども塗、た場合ネタが柔かい内にヨカリ拭くわけがしかも塗り厚も薄いためヨリボウキをネタに食い込ませ過ぎるとヨカリを壊、こしまいヨカリを押す（ヨリ隙を出せよ）時ネタは無く、しかもヨリボウキを真正にならなくなります。かと言、こネタの余分な所、汚い所だけ拭こうと思うと、ヨカリ切れが悪くなる壁と柱がすつきりしない事）が、こしまい壁にしては見るに耐え難くなってしまい、いくら壁をま、平らに塗つてもヨリ曲がり、ヨリ、ヨリの切れが

悪かっせりすると仕事として劣つてしまふわけですね！え、オレひすか？… 二度にしどりでください、最後まで気も抜けず目も最大限に使い、すればやく一枚、一枚仕上げていくと言つかけ世人ですね。

シャカン 三の17

江原 久紀

いや、今まで2回休んでした。たので今回は少し多くを書こうかと、別に今ヒヌなわけではない人ですよ、念のため。そう言えば6月に久しぶりに足例会に出席させて頂き、「現在の仕事の合理化、乾式工法の増大の波は二人ほどの所に」と思ひ十川さんには見聞かせてもらひ職人として仕事への思いを共感しました。とまあ少し固いことを言つてしまつて…エメンナサイ 実はシャカンも「石膏置き挽き」と言ふ人です。ここではセメント物に「置き」が付くかと言うと、作業台の上で挽くやり方して、シャカンが言う挽き物は現場挽きになる人です。歳のハチマ

■同人活動

- ・岡部知子・住宅と木材 7,8,9月号 コラム：木びと・家びと
「大洲のおばあちゃんへ」、「100円ライターと家づくり」…
- ・日本住宅新聞(7/25・8/5) 対談：材木店・建材店と工務店との共存共栄を探る
- ・松井郁夫・日経アーキテクチア(96.0909) 特集：震災後の家づくり
- ・三澤康彦(Ms) 同上

※最近、岡部さんの活躍がいろいろなメディアで目にすることが多くなった。山からの情報発信によく多くの人が注目し出したのだろう。地道に夫婦2人3脚、いやいや弟の馨さんも含めた3人4脚で実績を積み上げてきた成果といえる。NIFTY-Serveの中でも岡部材木のことは話題に上がったことあった。とにかくあの行動力には脱帽である。住宅新聞の対談の中で気にかかったには、出席された工務店の方の発言は設計者への不信感であった。何処ですれ違いが起こってしまったのか。共にものづくりをしようとする姿勢は同じはずなのに。家づくりにとって最も足下の重大な問題と思われます。（喜）

※各出版物、TVなど同人の活動を紹介したいと思います。情報を寄せ下さい。

■書籍

- ・機関誌：生活文化(VOL.0) 会報No14までの合本 ¥2,000
- ・機関誌創刊号：生活文化(VOL.1) ¥2,000
- ・紙芝居「峠の村のものがたり」 絵・文：吉田桂二 ¥2,000

※複数部数が必要な方は事務局までご連絡下さい。

■事務局より

- ・7月の定例会、8月の「大平建築宿」と企画が立て続きでしたので9月の定例会はありません。11月に今年5回目の定例会を予定します。
- ・今年もあと1/3です。来年に向けての企画等をそろそろ考えなければなりません。同人の皆さんからの提案など事務局までお願いします。

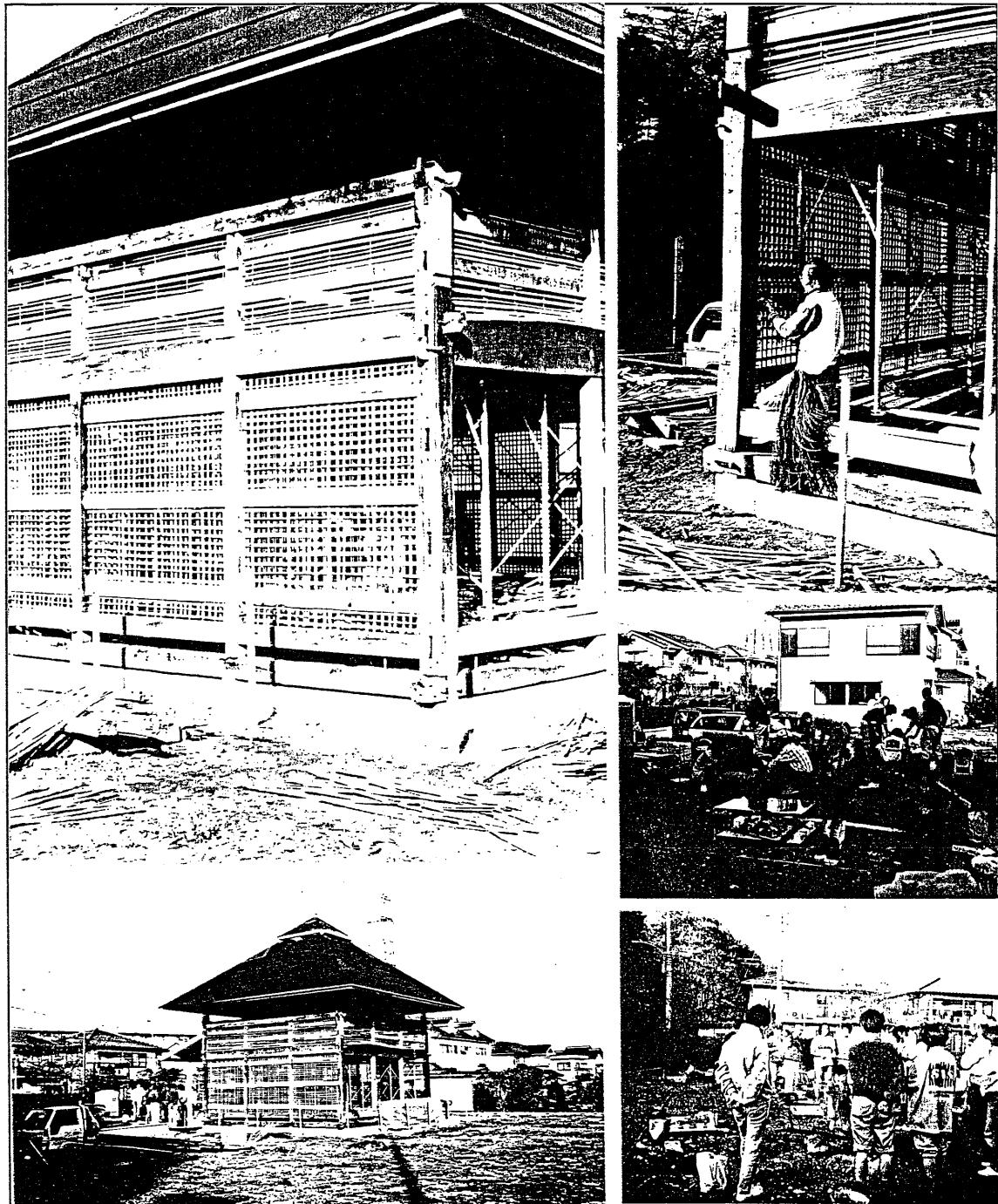
□編集局通信

- ・この夏はいろいろありました。日本がブレジルを破る奇跡を起こし。金確實と思われたヤワラちゃんが、伏兵に破れ惜しくも銀。突如出現のロバさんが金。笑顔の有森は見事に銅の五輪連続の快挙。などなど…。同人の皆さんにも思い出多い夏でしたでしょうか。
- ・大平に参加の皆さんから多くの感想やご意見をお送りいただきました。ありがとうございます。今回の会報を、読んでいただくことで記憶も膨らむのではないでしょうか。
- ・会報原稿、企画宜しくお願ひします。EメールでもOK
- ・毎号原稿締切：奇数月5日
- ・会報編集局：生活文化同人事務局内

- ・年内の同人の今後の予定
11月中旬 定例会
12月中旬 総会
(11月会報でお知らせ)

- ・次号より新連載が始まります。
「夢屋ものがたり」
作：大庭 桂
お楽しみに！

96年事務局：〒202 東京都保谷市ひばりが丘1-4-25 メゾン・アルプ201
木住研内 生活文化同人事務局 宮越喜彦
TEL/FAX 0424-25-1333 CQE02654 @niftyserve.or.jp



設計者のための塗壁に関する研究会（東大の坂本研内）による土塗壁の体験ワークショップが鶴ヶ島の木土タウンでが11/24(日)に行われました。

今後も同様の企画がこの場所で計画されています。

写真の物件についての問い合わせはシティ環境の土壁の高橋さん(03-3978-0604)まで

講師：鈴木 光明 (有)寿々木塗装店・アトリエベル 世話人：岡部 知子

◇塗装が何故山を守るのか

現在、日本の山には伐採可能な木材資源が豊富にあるが、林業を取り巻く環境は非常に厳しい。今後、国産材の需要を増やし、山を守らなくてはいけない。そのために一般の人に安全で手軽な塗装の仕方を知ってもらい、国産材の無垢材をどんどん使ってもらうようにしたい。無垢材を日常的に使用することが国産材の需要拡大の第一歩。

◇塗装とは

塗装とは、物体の保護と美観を与えることなどを目的とし、その物体の表面に塗料を塗り広げる作業をいう。保護・美観以外の目的の特殊塗装には、半導電・導電、電気絶縁、磁気、防汚、長期防食、耐薬品、耐油などの塗装がある。

寿々木塗装店は現在で4代目、約100年続く塗装店で、家具の塗装からプラントのフッ素塗装に到る塗装全般を手掛けている。長期的な保護・美観の維持にはやはり化学塗料が不可欠である。塗装によって耐久物を保護することの経済性と安全性を天秤に掛けてみると必然的に選択肢は決まる。

◇住宅の塗装

住宅の塗装には自然素材の塗料があるのでそれを勧めている。AURORALIVOIS・OSMO（いずれもドイツ製）と国産のファスティングオイルの4社の製品を扱っている。屋内・屋外用製品があり、色も豊富である。自然素材の塗料は耐久性は低い。できれば年1回は塗り替えるとよい。また、使用頻度の多いところ、擦れやすいところは他の場所より多く塗り替える。石油系の製品は耐久性を向上させるために用いるようになったのだから、自然素材のものより持つのは当然の話である。

テーブルの天板や床板には塗料の上に天然蜜蠟ワックスを塗る。蜜蠟は蜂蜜の成分の一つで蜂の巣の界壁や、口紅の原料に使われている。蜂蜜をなめていると最後まで残る白いもの。ワックスは蜜蠟をエタノールで溶いたもの。

蜜蠟の他に薬用カプセルの原料であるラック虫も用いられる。通常、セラック・アカラックは石油系溶剤を使用しており有害があるので、自然塗料製品と指定して購入すると良い。

◇エコロジー塗装の実習

今回は実際に手を動かして、素人でもできる自然素材の塗料による塗装を行った。鈴木氏によってあらかじめ用意されたシナベニア（サンプル用）に以下の工程で塗装した。

- ①素地調整のため#280ペーパーをかける。
- ②ファスニングオイル半艶標準1回塗り。オイルは木綿たんぼ（染み込まないよう芯の上にラップを重ねる）で塗る。
- ③素地調整#400ペーパーをかける。
- ④再びファスニングオイル半艶標準塗り仕上げ。ワックスを掛けない場合はここで完了。
- ⑤素地調整#600ペーパーをかける。
- ⑥天然蜜蠟ワックス仕上げ。ワックスは木綿たんぼで塗る。

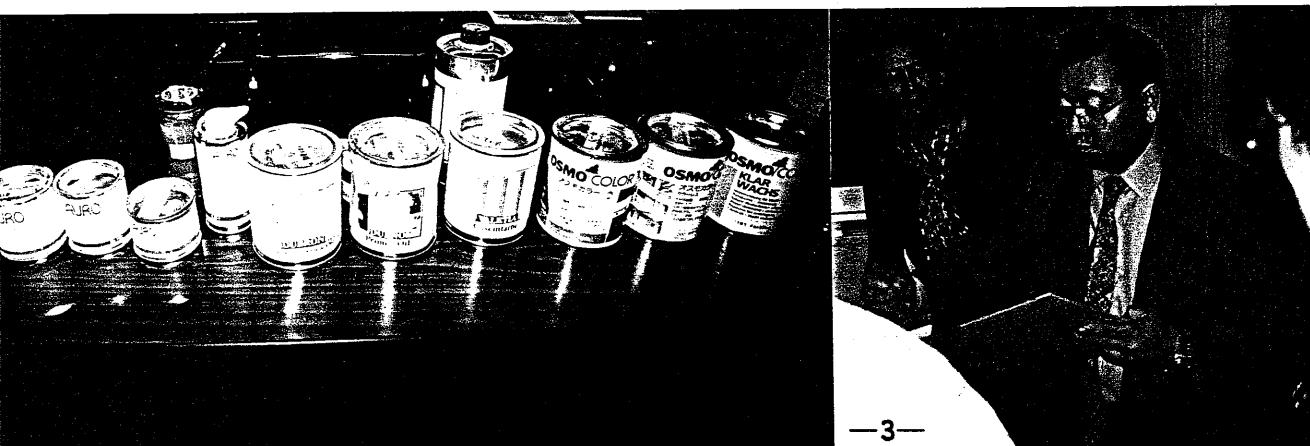
思った以上に簡単で、想像以上の出来映えである。

◇塗装にまつわるあれこれ

- ・杉などは水に対して強く、もともと耐久性があるので、新築の場合、木部の塗装は5年間はしなくてもよい。自然素材の外部用塗料の効果は1年間ほどであるが、オイルステインでもそれほど長いわけではない。
- ・柿渋は外部では半年ほどしか持たない。黒堀は柿渋を松煙で保護したもの。
- ・オイルステインの上からラックは塗れないので注意する。
- ・オイルステインの上に1液性のウレタンを塗ることはできる。
- ・オイルステインの上に2液性のウレタンを塗る場合はガン吹きになる。
- ・ログハウスの外部に塗る防腐剤は雨で溶けだし、有害である。

※塗装の詳細についてや自然素材の塗料の注文は(有)寿々木塗装店 03-3729-4046
に問い合わせてください。

まとめ 江原 幸壱



塩沢湖のペイネ美術館をウォッチング

おかべともこ

塩沢湖・・・タリアセンの中にレイモンドが設計したアトリエがペイネ美術館として公開されている。我が家の人三人(私、夫、弟)とも別々にここの写真を見て、それぞれが魅せられて、いつかは見たいと思っていた建物だ。

ここは西武の持ち物らしくまず駐車料金、入場料を取られ、おまけに美術館その他に入るのにもそれぞれ料金を支払う。お金を出しながらなぜレイモンドのものがあるのにタリアセンなのか?不勉強な私の疑問も中にある説明を読んで納得、またひとつお利口さんになったぞ・・えっ?常識だって・・失礼シマツ移築後赤茶に塗られた外壁を眺めながらぐるっと廻って玄関に入る。

日本人ではない設計なのに何と異和感のない空間なんだろう。和風、洋風どちらでもあるようで、どちらでもない。昭和8年の物なのに昔風でもなく、今風でもない。

材木屋の目つい見てみると何と木だらけの家・・いいぞ、いいぞ。

しかし、岡部材木店ではペケ板つまり等級外品レベルの板が堂々と使われている。抜け節あり、割れあり、隙間ありだ。これがOKでは物作りにこだわりを持っている材木屋としてはちょっと困ってしまうのだが、何とおおらかな素材の使い方だろう。

レーモンドはきっと近くの材木屋に行ってそこにある材を見て設計に折り込んだのではないかと思える使い方をしていた。雨戸一つを見ても約7尺ある雨戸は既成の6尺しかない2分3の板を利用し上に横桟を入れつなぐデザインされていた。そしてそれがグーなのである。

普通は設計されたあと材料を探す、もし2分3の7尺物をそこに使うとなるととても高いものになってくるはずだ。数ある建築家グループの勉強会等で材木屋の提案として「材料はこう使うといいですよ。」的な言葉を発すると「何故材木屋が設計に口だしするんだ。」というような言葉が返ってくることがある。「オットさっき予算があると言



ったでしょう、少ない予算と言ったでしょう、だったらどうして安く揃う良い材料を応用していかないんだろう。」そんな思いが、頭をよぎる。

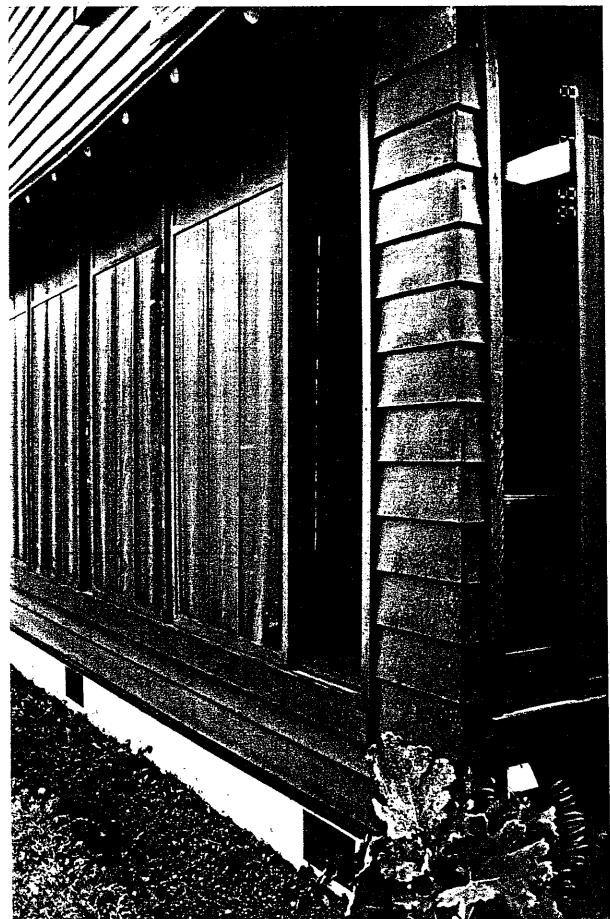
住宅建築にかかわるもの第一の喜びは施主となる人が喜んでくれること。これを頭において、木のことは材木屋に、建具は建具屋に、屋根は屋根屋に聞きそれをコーデネイトし決められた予算で最大限、良い家を作っていたのがまずは自分のために作ったものではあるかもしれないが、このアトリエなのではないかと思ってしまった。

特別に斬新な事をしているようではなく、といって決して保守的なままでないと思うが、これがレーモンドの設計なしで、大工さんが予算と目的を達するためにのみ作っていたら“アトリエなのか豚小屋なのか”というものになっていたかもしれないが、レーモンドは日本の技法と大工と材料を用いデザインはモダニズムに仕上げた。自分の思いをただ通すのではなく、そこにあるものを取り入れた。柱のない分、それを保護するように雨戸が柱の外に入れられ、ガラス戸は柱の内側に入れて全解放できるようにしている。そして、ガラス戸と雨戸の30cm位の間は縁側のようにも見えた。

すべてが今も新鮮に感じられることに感動した。

写真ではすっごく大きく感じた柱やスロープだったが、これっきりという位小さくそれを不動資産として表現しそれ以上のものを作ってしまうレーモンド。日本人がモダニズムを表現するとき、きっとコンクリートに、ガラスと金属というのが多いと思うが、レーモンドは日本らしいもので自分を表現しているように思う。一世紀近くたって今も古いと感じられないこのペイネ美術館。なにがいいのか良く考えてみた。・・どう表現すればいいのか、ただいい。

デザイン的に見るだけでなく、材料の方からもウォッチングしてみてほしいと思います。ここの廻りには有島武朗、野上弥江子などの別荘も移築されています。皆さん是非一度遊びに行って見て下さい



韓国研修旅行の報告

11月1日から3泊4日同人メンバー16名、慶州、安東、ソウルと無事行ってまいりました。11月の韓国は建物や土の壠にきれいな紅が映えとてもきれいでした。昼間も夜も色々なハプニングがありましたが、団長の吉田先生、現地で合流した神奈川大学の韓国通の先生の御陰で充実した4日間でした。次回の会報には報告とそれぞれの感想を載せたいと思います。

感想と言うより感謝の言葉

今、顔にファンデーションを塗りたくる以外ものを塗るという行為は、ほとんどしない。しかしムクの板材を使った場合に何かを塗る時の安全性、価格面、美しさ等のことで質問を受けることが多いので、塗装、塗料のことを調べている時知り合いの設計士さんを通じて鈴木さんを紹介されました。早速電話をするとゆっくり時間を作つていらっしゃいと言われ、昼食後早めにおじゃまさせていただいた。約4時間たっぷり話していただいたが、かなり専門的な分野にも入り、もったいない話だが全部を理解することは難かしかった。

塗料について知りたがっている人は素人の施主ばかりではないので何かの機会に鈴木さんに話を聞いていただきたい、と思っていたのが今回の例会に実現することができうれしかった。車一杯のサンプルから資料まで持って来られ、その準備だけでもそれは大変だっただろうと頭が下がりました。そして、実際に塗装するという貴重な体験までさせていただきました。

健康住宅ということが話題になることが多い現在ですがそのことだけを考えていたもちろん良い家になるとは思えませんが、使っていく素材というものをきちんと考えていくということは、とても大事なことだと思います。

「住宅において塗装はしないほうか一番いい。汚れてきたなくなったら塗ればいいんです。」という言葉が印象的でした。

おかべ ともこ

■ 1997年会費について

1. 年会員（会費 7,000 円／年）

定例会聴講（5回／年）、機関誌（1回／年予定）会報（6回／年発行）
すべての同人の活動情報を会報以外にも提供する。

2. 会報購読会員（会費 2,000 円／年）

会報（6回／年発行）は会費に含む。

定例会聴講はそのつど下記聴講費を支払って頂く。

3. 定例会聴講（聴講費 2,000 円／回 学生割引 1,000 円／回）

年会員以外はそのつど聴講費を支払って頂く。

* 年会員・会報購読会員の会費は1月から12月まで1年分とします。中途入会も上記会費でお願いします。

* 定例会等で特別に資料などある場合は別途実費。

* 新規入会、会員変更等の方は以下の表に必要事項を記入の上事務局にFAX、又は郵送して下さい。事務手続きの上早めにお知らせ下さい。

* 会費納入は郵便局にて以下口座にお振り込みお願いします。

総合口座 10010-54101181

生活文化同人代表吉田桂二

* 不明な点は97年事務局にお問い合わせください。（注：事務局は変更しています）

〒273 千葉県船橋市西船橋 5-7-2-201

生活文化同人事務局 松本 昌義

TEL/FAX 0473-32-4413

-----切取り線-----

生活文化同人事務局 松本 昌義 行

年 月 日

■1997年生活文化同人新規入会申し込み、および会員更新・変更届け

※会員数等の把握、名簿整理のため96年会員の方もお送り下さい。

新規入会 1. 年会員 2. 会報購読会員 （どちらか○をつけてください）

会員更新 1. 継続 2. 年会員に変更 3. 会報購読会員に変更 4. 退会する

フリガナ

氏 名：

年齢： 歳

※新規入会および住所等変更がある場合に以下ご記入下さい。

自宅住所： 〒

TEL: - - FAX: - -

勤務先：

勤務先住所： 〒

TEL: - - FAX: - -

会報送付先： 自宅 ・ 会社 （どちらか○をつけてください）

パソコン通信ID：

*97年事務局へFAX（0473-32-4413）、又は郵送してください。

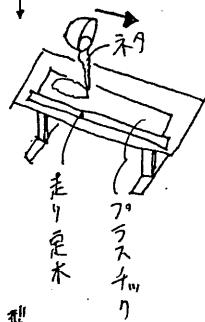
させます。二のネタを、トロトロ^ンアラ板の上の
挽く所にたゞして行き。
一回目を挽きます。
の注意としては、挽さず
部分へとの17参照)を走りと下のアラ板にひったり
しあてア遠く、同じ速度で一気に挽くニシです。かね
せらるん丁寧にひすう!!もうもうこの時に挽モモン
の厚さがある時はヒーンロードを二、三本入れて
挽きます。もうひなと台から取る時、ハキン・物、
エリエバッキンなんニヒカニ^{はあ}強度自体なりが
飞すかね、で2回、3回目を挽^ル行きます。大体
挽モモンの角か立つて
木々の硬化加初ます。



アラ板

走り足木

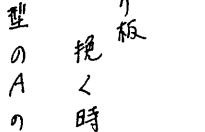
手



アラ板

走り足木

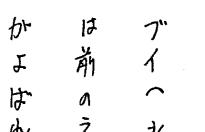
手



アラ板

走り足木

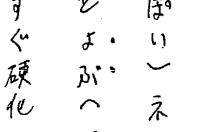
手



アラ板

走り足木

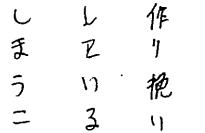
手



アラ板

走り足木

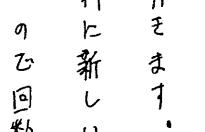
手



アラ板

走り足木

手



アラ板

走り足木

手

次^ルのネタを作りますか。今度は前回よりシヤ
ブイヘ水^{ボリ}一^ルネタを作り挽りを行います。石膏
は前のネタもよがへ硬化して^リ林料に新し^ルネタ
かよばれこすぐ硬化してしま^ルニシの回数を増
すごとにシャブ^レくして行くんひすぬ。それで何回も
挽りて、ネタを作り加え、挽モモンが移よく、角
もビック^レ立、こ来たら最後に本当にシャブイ^{マス}
飞水^{ミタ}になネタで仕上げ挽きをします。石膏独特
な光沢はこうして出して行きます。
挽き物はよく口力^スか出るほじへたせんた^ルと言わ
れますか。云ふはなせ!!思りますよぬ。ネタ配りの
カンが重要な回数二母^{シマ}ないシが人せん^スぬ。青
とガス加挽き型に多く付くヒ挽モモンのネタを力^ス
が余分に力を取つてしま^ル凹凸^ルにな、こしま^ル真
直ぐな挽き物でなくな、こしまうんひすぬ。
キヒ奇麗に拭き、挽き返します。この力^スはネタに
入れ子と硬化が速ま、こしま^ルの飞捨^スましょう!
熟練になるのはむつかしいです^スよぬ
では来年につけます。

よいお年を!!

秋雨の時季ひすぬ。11月は連休か2回あるがたひひすか。3、4日は仕事をしてしまいました。

え、「お出か」て、金土が雨で仕事出来ない、たん
て連休かたれたからです。今、ウチは丁度内内仕事
がないんで一日降りやると仕事は……ちよつと、
現場によく言われるこしひすが、田大工殺すに刃物
はいらぬ、雨の三日も降ればいい。凸とね!!昔の人は
よく言、た物ひ、左官屋ひ、しよひすよぬ。で、
今回、引き続きの石膏置き挽き四ひすぬ。

前回はと言うと挽き型を作り作業台の上にプラス
チック板、走りを固定しました。ちなみにこのプラス
チック板、ウチの親方の考え方で可けど。それと固
定方法を書ひてしませんひしたが、兩方にもワキヒ
レられました。長さは五尺長くても六尺位ひすかね。
一気に挽くには限界があり、五尺でも長い位ひじま
たが。自分のう手ひはひすけど、



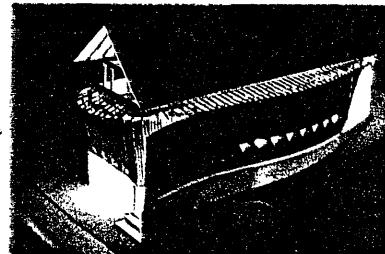
ま、コネ子と言うよりも、くりくり回して練ん

ひすぬ。ここで重要なのは水分量ひして、固めに練
ねば硬さ時間は速くなってしまい、何回もかき回せ
ばやはり速くなります。ひすなは出来上がりました

ね。一回目のひすなは様子見ひして、石膏の状態、硬
化時間、水分量による変化やら、石膏自体がハカに
なり、こなひかを観察したりして仕用せず捨ててしま
ります。で、二回戦、一番最初ひすなは挽きモノの大
体の形を作りだけひすので硬りに練り、硬化を速め

■ 同人活動

- ・松井郁夫 越谷市景観賞
- ・日影良孝 住宅建築別冊44
- ・高橋昌巳 SDレビュー朝倉賞（土の自由皮膜）→
- ・宮越喜彦 千葉ふるさと住宅コンペ入賞
- ・宮坂公啓 千葉ふるさと住宅コンペ入賞
- ・同人多数 木のデザイン図鑑のムック化



※編集局で知る範囲でも同人の活躍が多数見受けられました。まだまだほんの一部のようです。それぞれの方の感想なども、新編集局の方へお寄せいただければ幸いです。

※来春発売予定の書籍にも多数同人が参加されていることを聞いています。決定ではなく予定とか書けないところが・・・。（喜）

■ 書籍

- ・機関誌：生活文化(VOL.0) 会報No14までの合本 ¥2,000
- ・機関誌創刊号：生活文化(VOL.1) ¥2,000
- ・紙芝居「峠の村のものがたり」 絵・文：吉田桂二 ¥2,000

※複数部数が必要な方は事務局までご連絡下さい。

■ 事務局より

- ・96年同人に中途で入会された方には96年機関誌（生活文化VOL.1）をお渡しいでいるかと思いますが、ご連絡下さい。
- ・今年の後半は、忙しさに紛れて事務局の仕事が十分にできませんでした。定例会や総会の案内もハガキになってしまい、勘違いをされて出席忘れの方もいたのではないかと思います。申し訳ありませんでした。
- ・来年の事務局は松本さんにお願いしました。また、3年続けてきた会報の編集もバトンタッチします。総会にて最終確認するとになっています。
- ・来年の第4回大平建築宿の事務局は江原さん（木の建築設計）が担当します。年明けからその準備も始まると思いますので、同人の皆さんにはよろしくご協力お願いいたします。
- ・機関誌VOL.2の発行予定などまだ未定ですが、これも年明けから調整したいと思います。

□ 編集局通信

- ・11月号が12月になってしまいました。あと3ヶ月ほしい。なんていっても96年も、もうカウントダウントラブル状態です。「会報作っているだったら、こっちやってよ」なんて言う声があっちこっちから聞こえてきそうです。こういうのが四面楚歌？事務所の下からはカラオケが聞こえてくるけど。ちなみに、木住研はスナックの上にあります。
- ・97年からは同人の人事改変で編集局が替わりますが詳細な受け継ぎができるかもしれませんので、とりあえず、次号(9701)までの情報は下記までお願いします。
- ・会報原稿、企画宜しくお願ひします。EメールでもOK
- ・毎号原稿締切：奇数月5日

〒202 東京都保谷市ひばりが丘1-4-25 メゾン・アルプ201
木住研内 生活文化同人編集局 宮越 喜彦
TEL/FAX 0424-25-1333 CQE02654 @niftyserve.or.jp

97年事務局：〒273 千葉県船橋市西船橋5-7-2-201 TEL/FAX 0473-32-4413
生活文化同人事務局 松本 昌義

※問い合わせ等はFAXにてお願ひいたします。